

私はただのマサラ人です！

若葉ノ茶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「マサラ人だけどスーパーマサラ人ではないはず」の4年後の世界の物語。

スーパーマサラ人としてフラグを折っていったサトシを兄に持つ妹の「ヒナ」がトレーナーとなりマサラタウンから旅に出た。ポケモンたちがたくさんいる世界で彼女が待ち受けるのは試練か、それともトラブルか……。 「あと私は普通のマサラ人です。兄と比べないでください！」 そんな彼女は普通のマサラ人か？ ◆ 不定期更新で話は一話一話短いです。

目次

- 前作見る時間がない方のための設定
1
- カントー地方の旅路く幼馴染トリオは新人トレーナーく
プロローグくマサラ人の妹は旅に出た
7
- 第一話く最初の旅立ちは皆一緒く
11
- 第二話く新人には見えない3人組く
19
- 第三話くニビジム挑戦と始まりく
19
- 第四話くジム戦と、それからく
30
- 第五話く旅の始まりはいつも同じく
49
- 第六話くそのポケモン、バグではない
64
- 第七話くハナダシティにて現れたく
76
- 第八話くそれは、伝説と皆は言うく
90
- 第九話く水の少女く
103
- 第十話く一歩間違えば負けるく
116

130	第十一話	少女はただ驚愕する	
144	第十二話	地下通路の再会	158
168	第十三話	Aブロック 前半戦	
184	第十四話	Aブロック 後半戦	
197	第十五話	Bブロック 決勝戦	
	第十六話	準決勝戦	212
	第十七話	決勝戦	224
	第十八話	クチバシテイにてやるべき	

	第十九話	機嫌が悪いのがいけない	239
	第二十話	聖・アンヌ号	254
	第二十一話	思わぬ再会	262
	第二十二話	これは訓練ではないよ	274
	第二十三話	未来への筋道	291
	第二十四話	闇色に染まる	303
	第二十五話	これからのこと	319
331	第二十六話	厄介なる依頼人	
345			

第二十七話	く	開始までもう少し	363
第二十八話	く	押してはいけないスイツ	376
とあるタロー日記	――		400
第二十九話	く	決着?	415
第三十話	く	腐れ縁は酷なもの	432
第三十一話	く	影響力は劣らない	447
第三十二話	く	奇妙なきっかけ	482
第三十三話	く	変異と改変	499
第三十四話	く	暗躍とフラグと	519
ユウキ君とアチャモたん	――		533
第三十五話	く	謎は謎を呼ぶ	544
カントー地方攻防戦	く	味方は敵に敵は味	
方に	く		
第三十六話	く	プロローグの終わり	555
第三十七話	く	開戦の狼煙は上がらない	569
第三十八話	く	集団に勝るものはない	590
第三十九話	く	愛に勝るものはない	

604

第四十話く現状確認をしようか

622

第四十一話く現状は悪化中

635

ユウキ君とワカシヤモちゃん

650

第四十二話く反撃への第一歩

659

第四十三話く別に嫌いなんかじゃない

んだからね!

674

第四十四話くその頃、ある悪党たちは

691

前作見る時間がない方のための設定

ヒナ（相棒は色違いリザードン）

初期能力

- ・波動
- ・ポケモンの懐きやすさ

今作の主人公。前作メインキャラであった「サトシ」の妹。

初期ポケモンはリザードンとピチュー。リザードンは子供のころにミュウから貰ったたまごが孵化したときに出会った。ピチューはイツシユ地方で捨てられていたところにいた。スーパーマサラ人としての力は無自覚。アローンの弟子でもあるため、波動の力は軽く使える。ヒビキやシルバーと一緒に抱えて歩くことぐらい簡単にできる程度の力の持ち主。

相棒であるリザードンは頼れる姉的な存在。そしてピチューはたまにツツコミ役で

いろいろと苦労したりフォローしたりできる器用貧乏。

前作にて、アクロマの作り出した双子にいろんな意味でトラウマを刻まれている。そのため、リザードンやピチューは仲間や家族を傷つけるために攻撃したくない。守る意味で強くなりたいと誓っている。そしてこの事件が原因で、悪党は許すことができない。だが攻撃を仕掛ける前にシルバーがいた場合、先に彼が暴走してしまうのではないかと心配してしまうぐらいは心に余裕があるはず。

ヒビキ（相棒はゾロアーク）

初期能力

・ ツツコミ

・ 苦労人

今作のライバル。前作では憧れであったサトシの妹であるヒナにちよっかいを出したり苛めたりしていたせいでヒナの相棒でもあるリザードンの進化を促してしまった。その一件はある意味黒歴史。気になる子をいじめちゃう小学生的な思考だっただけのこと。

相棒であるゾロアークはイリュージョンを駆使したいたずらっ子。ジョウト地方時

代、ヒビキを落とし穴に落とすのは当たり前。

一応マサラ人だが、トレーナーになるまでの四年間ジョウト地方にいたせい、たまに別地方から来たトレーナーだと思われることもある。ツツコミと苦労人なのは主にシルバーが鍛えてくれたせいでもある。イリュージョンでヒナたちのフォローに回ったり、事件を解決するために手伝ったりと、何かとお人好しな面もある。

シルバー（相棒はチルタリス）

初期能力

・ポケモン知識

・暴走の破壊人

今作のライバル。前作ではジョウト地方の学校にてヒナやヒビキと出会った。ポケモンの知識はかなり持っているため、育成やバトル戦略に優れた行動をする。だがそのせいでチルタリスに過剰な攻撃能力を与えてしまったため、彼のポケモンによる「はかいこうせん」は文字通り破壊光線。前作にて大きな船が沈んだこともあるぐらい力は強い。ある意味サトシと似ている部分もある。

相棒であるチルタリスはシルバーと同じくポケ。はかいこうせんで何が起きても気にしない。勝てばいいんだ勝てば。

父親が元悪党の集団であったロケット団のボス。だが前作にてサトシが金儲けとポケモン収集を別の形で昇華させてしまったため、大発展した企業に変化した。そのせいで悪を望む新生ロケット団が誕生してしまった。シルバーはロケット団に悪しきイメージを植え付ける新生ロケット団を憎んでいる。そのため奴らが目の前で悪事を働いていたら問答無用ではかいこうせん。全部吹っ飛ばす勢いで攻撃を仕掛けるそれはまさに疾風怒濤。

サトシ（相棒はピカチュウ）

初期能力

・ポケモンマスター

・最強ではない最恐

今作ではボスの存在。いろいろな地方を駆け巡る忙しい人。一応シロガネ山を家として過ごしてはいる。

前作にて、伝説ポケモンに対してポケモンではなく自分の拳で一撃必殺しちゃった経歴の持ち主。もはやこいつ自身が伝説ポケモンなのではないかと皆が疑っている。

様々なポケモンを育てて強くしているが、正直まだまだ限界が見えていない。新しい

技があれば試して、自身でも新しく製作したりする。ポケモンマスターになつたけど、トレーナーとして未熟な部分がたくさんあるのだと考えてはいるが、それはどうなのだろうかと妹たちは思っている。そしてポケモンマスターであるサトシには嫁と娘がい
るらしいけど……???
いろいろと謎が多いトレーナーでもある……はず。

ティナ（通称、ギラティナ）

初期能力

・変人

・伝説だけど伝説と言えない

今作では人間にもポケモンにもなるいつも通り変わらない変人な伝説ポケモン。と
いうか出番はあまりないかもしれない。

サトシやヒナと同じポケモンがゲームやアニメ媒体だった世界から転生した。人間

だった頃の記憶は忘れることはないけれど、サトシのせいでフラグがぶつ壊れることが多々あったため意味はない。

アーロンとは悪友。でもいつだって殴られる。ヒカリやポッチャマには呆れられ、シエイミとルカリオにはツッコミ入れられること多し。ヒナと共に旅をしていた時期も似たような感じだった。変人だけど孤独を嫌うため、わざとやることもしばしば。

昔、ポケモンとしての存在意義を突っぱねたことによつて反転世界が崩壊しかけたことがトラウマとなっているため、世界崩壊の危機やディアルガやパールキアの喧嘩のせいで反転世界が汚れることを嫌う。というか激怒すること間違いなし。

まあつまり、伝説とは言えない伝説ポケモンである。

カントー地方の旅路く幼馴染トリオは新人トレーナーく
プロローグくマサラ人の妹は旅に出たく

マサラタウンにはいろんなポケモンたちが生息する。それは誰もが遭遇するポツポ
だったり、コラツタだったり…そしてとても貴重だと言われている存在の伝説のポケモ
ンだったりと様々だ。伝説であるポケモンたちはオーキド博士やケンジさんに姿を見
せることはめつたにない。それでも一目見ることさえ一生に一度あるかないかと言わ
れるポケモンがたくさんいるこの森はとてもすごいと博士達はよく言っている。

凄いと思う博士たちがいる一方で、私としては毎回毎回やって来るポケモンたちに暇
なのかと言いたいこともあった。

私に会うぐらいなら研究したいというオーキド博士たちに会ったらどうなのか…。
それにこのマサラタウンには現在いない兄にも会いに行っているようで、いつも通り暴
れているという話を聞くと少しだけ複雑な気持ちになる。

だがそれよりも、オーキド博士は滅多に会うことができな彼らに不満を抱くことなく：そして、伝説のポケモンたちが研究所にやって来ることを世間に何も言わないし伝えようともしなかった。そこが凄いと私は思う。四年前にマサラタウンを出た時に感じたのは、トレーナー達は伝説を見たという情報を心底羨ましがったり、自慢したりするのが多いと思ったからだ。だからこそ、ポケモン博士と世界で有名なオーキド博士が何もしないことに私は一番驚いた。

まあ、それでも実際伝説のことを言ってしまったらポケモンたちが怒って襲撃するか、逃げてしまうか：いや、どっちも行う可能性はあるかもしれないから止めて正解だとは思うけれど…。

でも、オーキド博士が兄に助けを求めたらポケモンたちを止めることはするかもしれないが、それでもやはり言った方が悪いとばかりに兄の相棒であるピカチュウから電撃ぐらいはもらうかもしれない。

妹の私としてはあまり見たくない光景だ。

「ヒナちゃん。本当にこの帽子でいいの？」

「うん。お兄ちゃんが初めて旅に出た時の帽子だから使いたいんだ」

「そう…分かったわ」

でも今はそんな想像でしかない考えを持たずに旅に出ようかと思う。

何年も前から決めていた決意。私はまだ兄のようになれるのかどうかさえ分からないし、これからもつともつと強くなるのかどうかも分からないけれど、それでも旅をしたいという気持ちは強かった。

少しだけ重たいリュックを背負い、師匠から貰った波動の石をはめ込んだリストバンドを着け、走りやすい服を着て部屋から出る。

——そして、母から貰った兄の帽子をかぶり、玄関の扉を開けた。

扉を開けた瞬間、外から入ってきた空気が私の髪を撫でるかのように風となつて動く。その風を一身に受けて思わず目を細めた。春の暖かさのような風がまるで始まりの合図とでも言うかのように心地良いと感じたのだ。

もしかしたら兄もこんな気分で旅に出たのかなと思えたぐらいには、とても気持ち良い風。

懐にある2つのボールがゆらゆらと揺らめく。それはまるで私が楽しいという感情を感じ取り、同じ気持ちだよと伝えているようにも思え、小さく笑ってしまったほどだ。

私は今まで住んでいた家に…そして母やバリアードの方を振り向き、帽子を深くかぶり直してから声をかけた。

「行つてきます」

第一話〈最初の旅立ちは皆一緒〉

歩いていく速度はゆっくりと……でも少しだけ早く行きたいという気持ちを押さえて向かうのはオーキド研究所。

私は幼い頃から一緒だったリザードンとピチューがいるからポケモンは貰うことはできないけれど、オーキド博士にポケモン図鑑を渡される約束をもらっていたから旅の第一歩として向かっていた。

一歩一歩歩き、たまに立ち止まって小さなポケモンたちが私の前を通り過ぎるのを微笑ましく眺めながら……ようやくたどり着いたのは大きな建物の前。

その近くに立っていたのは、私にとって懐かしい姿。

「よおヒナ！ やつと来たか！」

「遅い」

「ヒビキにシルバー…？ もうカントー地方に帰って来てたの!？」

「当たり前だろ!! 前に約束したよな？ 次に会う時はトレーナーとしてだつて!!」

「…ヒビキがそういつて聞かなくてな。予定よりも早くマサラタウンに来たんだ」

「そっか…：なんか待たせたみたいでごめんね」

ヒビキ達はカントー地方に来るのはもう少しだけ遅いという連絡を貰っていたから、まだ会えないと思っていた。最悪、来るとしたらジョウト地方に旅に出る時かなという気持ちもあったのだ。

だが、ヒビキとシルバーは四年前よりも少しだけ成長した姿で現れた。身長は伸びて私よりも上の位置だけれど、ヒビキは帽子とゴーグルをつけた姿は変わらず、そしてシルバーはその不機嫌そうな表情が変わらず…：なんだか四年前のジョウト地方を思い出して私は笑ってしまった。

私が笑ったことにヒビキも思わずつられて笑っていて、シルバーは何も言わずに私たちを見ていた。

「ヒビキとシルバーはもう研究所に入ったの？」

「いやまだだ」

「どうせならヒナやシルバーと一緒に入ろうって思ってたんだ！早く行こうぜ
！」

「え、ちよつと……」

「お邪魔しまーす！」

ヒビキが私やシルバーの腕を掴んでオーキド研究所の扉を開いた。オーキド研究所はいつもなら扉は閉まっていてインターホンを押さないといけないのだが、本日は旅に出るトレーナーが数多く集まると言うことで鍵はしまつてはいない。

そしてそんな私たちを迎えてくれたのは、兄のポケモンではないフシギダネ達。

フシギダネ達はどうかやら私たちがトレーナーとして自分を選ぶためにやって来たのだらうと思ひ込んでいるらしい。後ろからやって来たオーキド博士とケンジさんが困ったように苦笑していた。

『ダネー！』

『カゲエ！』

『ゼニゼニイ！』

「これこれ…彼女達はお前さんらを選ぶために来たわけじゃないぞ…」

「オーキド博士」

「ヒナ…それにヒビキ君にシルバー君か。もう君たちがトレーナーとなる日が来るとは
のう…」

「オーキド博士…感慨深いのは分かりますが、早く凶鑑を渡してあげないと可哀想です
よ」

「おお！そうじゃったな！」

オーキド博士がようやく思い出したかのような声を出して他の部屋に入っていく。
それを見ながら私たちは未だにこちらに近づいてくるフシギダネ達と戯れた。彼らは
おそらく次にやって来るであろう新人トレーナーに選ばれて旅に出る。ヒビキやシル
バーがフシギダネ達を観察したり遊んだりする間に、次に向かう町はどうするのか話し
ていた。

「次の町…やっぱりニビジムだろ？サトシさんが最初に挑戦したジムだし。トキワジム

は最後に挑戦した方が良かったって言う噂があるくらいだし…」

「噂っていうより…トキワジムはあまりジムとして機能してないみたいだから、やるんなら最後にした方が良かったって聞いたことがあるよ？待っている時間が長いからその無駄な時間を過ごすよりも違うジムにいった方が良かったって…」

「ならニビジムだ。今年行われるリーグは今までよりも開催時期が早まっているから…バッチを集めるのはなるべく早い方が良い」

「よっしゃー！じゃあニビジムに決定だな！そこまでは一緒に行こうぜ！その後は別れて旅しようー！」

「俺はそれで構わないが…ヒビキ、貴様ちゃんとリーグ開催日までにジムバッチを集めろ。お前のことだから何か大切な時に間違つてドジをやらかすかもしれないからな」

「やらかさねえよ！やるとしたらお前だろアホシルバー!!」
「喧嘩はしない!!」

「フグオツ!!」

「ははっ…さ、サトシに似てきたねヒナちゃん…」

「そんなことないですよケンジさん。私は兄のようにはなれないです」

ヒビキとシルバーが懐からモンスターボールを取り出して室内でポケモンバトルをやリそうな雰囲気になったため、仲裁するために私は二人の頭上から拳を落とした。頭を殴られたことよつてか、彼らは四年前と変わらずすぐに地面に倒れてしまつたけれど、軽く殴つたからしばらくしたら起き上がるだろうと私はヒビキ達を放置して机に出されたお茶を飲む。

そんな私たちにケンジさんは頬を引き攣りながら声をかけてきたけれど、私は首を傾けてそんなことないと笑顔で言つた。兄に似てきたとしたらそれはヒューマン型ポケモンとして有名になれるだろうから私は違うと思う。

フシギダネ達は私を見て何故か目を輝かせていたけれど、それはたぶん騒々しいヒビキ達を見て元気いっばいのトレーナーに選ばれたいなという気持ちが強いからだろうと思ひ微笑んだ。

そんなことをしている間に、ヒビキ達は頭を押さえつつ起き上がりこちらを睨んできたため、私は師匠がいつもやっているように、につこりと笑みを浮かべて喧嘩するなど注意しておく。そしたら何も言わなくなつたから良かったと思つた。

こんな大事な初日にトラブルを起こしたくはないのだから少しは落ち着いて待つて

いてほしい。願いが通じて良かったと思ったものだ。

.....

「すまん…待ったか!」

「いえ、大丈夫です」

「ポケモン図鑑…!」

「……………」

オーキド博士が3つのポケモン図鑑を持ってやって来た。そのポケモン図鑑は今まで兄が旅して遭遇したポケモンのデータが入っている最新版であり、新しいポケモンを探するための役割も持っている。

トレーナーとなった誰もが持つその図鑑を、私たちはオーキド博士から貰い受けることができた。

そしてポケモン図鑑と共に小さな箱も貰い…その中には6個のモンスターボールも入っていた。

「ポケモン図鑑とモンスターボールじゃ。気をつけて旅に挑むのじゃぞ」

「はい。ありがとうございますオーキド博士！」

「ありがとうございます！」

「大事に使わせていただきます…」

オーキド博士やケンジさんだけでなく、フシギダネ達も一緒に見送ってくれた。

図鑑を見てヒビキはわくわくしたように笑う。シルバーはこれからどう行こうかマップを見て確認している。2人とも性格が違って…これからどんな旅になるのだろうかとニビジム以降の彼らの旅路を想像しつつ、私はトキワの森へ向かって歩き出した。もちろんヒビキ達も一緒に歩き出す。

そんな私たちの頭上で、ホウオウが輝かしく空を飛びながら見送っているとも知らずに…。

第二話く新人には見えない3人組く

「もつとゆつくり行こうって言ったよな!？」

そんなヒビキの叫び声が聞こえてきたのは、ニビシティの入り口前。

その声はとても凄まじく、数体ものポツポが驚愕して空から落ちてきたぐらいだ。でもヒナはそんなことは知らず、ただヒビキの声を聞いて苦笑しているだけだった。

ヒビキはマサラタウンからニビシティまでの道のりをゆつくりと楽しんでいこうと考えていた。

それは、最初の旅の始まりだからこそその気持ちを十分かみしめていきたいと言う新人トレーナーとしての考えであり、これから新しい仲間を見つけて捕まえ、強くしていきたいという気持ちもあった。だがそれをシルバーがチルタリスをボールから出してヒビキをくちばしで捕まえつつ空を飛んでしまったため無意味に終わる。もちろんヒナはシルバーに慌ててついていくためにリザードンを出して空へ飛んだため問題はなかった。…だが、チルタリスのくちばしで服を掴まれて不安定に空を飛ぶ気持ち悪い感覚とゆつくり味わえなかった旅の気持ちよさにヒビキは怒っていたのだ。

そして不満げなヒビキに鼻で笑って答えるのは事の原因を作ったシルバーだ。

「どうせ後でまたトキワジムに挑戦するんだ。その時じっくりと歩けばいいだろう馬鹿が。リーグ挑戦までの時間短縮のために飛んだだけだろう馬鹿が」

「馬鹿じゃねえよアホシルバー!!」

「ああもう…四年前とあまり変わらない喧嘩…あんたたちいい加減にしなさい!!!」

思わず殴ろうかというヒナの怒鳴り声によってヒビキとシルバーの口喧嘩は収まりお互いが顔を背けてニビジムへ歩き出す。その歩調は楽しげにマサラタウンから飛び

出してきた今までと変わらず、ただ喧嘩するほど仲が良いという雰囲気をもとわせながら歩いてるように感じてヒナは思わず笑っていた。懐にある2つのボールの内1つだけゆらゆらとヒナに同調するかのように動いた。もう1つのボールは呆れるかのようになんか揺られてそれ以降は何も反応はなかったが、それでもヒナと同じ気持ちなのは確かだと感じていた。

「行くぞヒナ！早くジム戦終わらせてシルバーとバトルしてやる!!」

「フンっそれはこっちの台詞だ。秒殺してやろうか…!」

「ああはいはい…喧嘩しないでニビジムに行くわよー」

このまま待つていたらまた喧嘩を始めてしまいそうな雰囲気ヒナは苦笑して彼らの間に入り、すぐにニビジムへ向けて歩き始めた。

もちろん、これ以上喧嘩するならば師匠がやって来たように物理的にでもとめようと思いつながら…。

.....

「ちわーっす！ジム挑戦に来ました！よろしくお願いします!!」

ニビジムの大きな扉を開けて、薄暗い中をヒナたちは進む。何も見えないその室内はニビジムがあるようには見えない。だが一瞬で明かりが付き、岩タイプ専用のバトルフィールドがヒナたちの目の前に広がる。それを見て嬉しそうに目を輝かせるのは真っ先にジムに入っていたヒビキ。そしてシルバーは周りを見て好戦的な目でどうバトルしようか考え、ヒナは近づいてきたジムリーダーでもあるジロウを見て笑みを浮かべた。

「ようこそニビジムへ!...そして久しぶりだね、ヒナちゃん」

「はい、お久しぶりです。約束を果たしに来ました」

「そうか...もうそんなに時間が経ったのか...」

ジロウはとても懐かしげにヒナを見て眩く。あのバトルの後から随分と時が過ぎたのだと四年前の出来事を思い出しつつ…ヒビキ達の方を見てにっこりと笑った。

「ヒナちゃんだけじゃない…君たちもよく来たね。さあ、誰から挑戦する？」

「はいはい!!俺がやります!!ヒナやシルバーのポケモン飛び疲れているだろうから休ませる意味で先に俺からやる!」

ヒナやシルバーよりも先に手を上げて叫んだのはキラキラと待ちきれないかのよう
に目を輝かせるヒビキだ。ジム戦を誰から挑戦するのかという言葉が出るのをずっと
待っていたかのように叫ぶその声にヒナは苦笑し、シルバーはため息をついてヒビキに
譲った。

チルタリスやリザードンが飛んで疲れているという言葉は少々言い訳に近い内容だ
ろう。

4年もの年月によってチルタリスやリザードンは成長し、ベテランのトレーナーが持
つポケモンのように強くなっているのだから…。

そのヒビキの言葉に少々疑問に思ったジロウが声をかけてきた。

「飛び疲れている…というの？」

「時間短縮のためにマサラタウンからニビシティまで飛んでもらっただけです」

「なっ…?!」

ヒナ達は知らない。シルバーがジロウに向かって答えた内容は、普通の新人トレーナーは真似ができず、ベテランにならないとできないことだというのを…。ヒナだけならまだしも、シルバーまでもがポケモンの力によってマサラタウンからニビシティまでの長い距離を飛んだのだということに、ジロウは驚いたのだ。しかもヒナと一緒に来た彼らは新人トレーナーだ。ヒビキと呼ばれた少年以外の2人のポケモンたちがその空を飛んだ。しかも人を乗せて飛んだのだ。

その言葉にジロウはぐるぐると思考を巡らせていた。ヒナがトレーナーになる日は今日ではなかったか？こんなに早い時間でマサラタウンまで飛んできたのか？

「…なるほど、分かったよ」

——君たちが通常とは違うトレーナーなんだと…理解したよ。

ジロウは声に出さずそう呟いた。

ヒナ達は単純に、マサラタウンから空を飛んでやって来たと言う言葉に納得してくれたのだろうと考えてヒビキに無茶するんじゃないとアドバイスのような激励を込めた応援をしている。その言葉にヒビキは任せとけと頷き、ボールを取り出して今か今かと待つ。

ジロウは笑って、小さく頷いた。

「歓迎しよう挑戦者。俺はニビジムのジムリーダージロウ！岩タイプの威力、とくと味わうがいい!!」

.....

「えーそれでは、ジムリーダージロウ対挑戦者ヒビキによるジム戦を行います。ジムリーダーの使用するポケモンは2体。挑戦者のポケモンがすべて戦闘不能になるまでバトル続行します…それでは、バトル開始！」

「行け、ハガネール!!」

『イワアアアア!!』

「よし…行ってこい、ゾロアーク!!」

『ガアアアアア!!』

ハガネールとゾロアークがボールから出てきて睨み合い、牽制し始める。その奇妙な姿を見てヒナは観戦席から首を傾けて隣に座るシルバーに向かって言う。

「……ねえ、ゾロアークのあれって反則にならない？」

「リーグ戦やポケモンの特性でなかったらアウトだったろうな…だがあれはゾロアークのイリュージョンだ。ポケモンの技ならば問題はないだろう。まあさすがにバトルフィールド全体を変えるようなイリュージョンは禁止されると思うがな」

ヒナが疑問に思ったのはゾロアークの周りで水が発生しているように「見える」光景だった。まるで噴水のようにゾロアークの足元からあふれ出てきている水にハガネールは困惑し、ジロウを見てどうすればいいのか指示を待っている。

ゾロアークは悪戯に成功した時のように悪い笑みを浮かべて爪を研ぐような仕草をしてヒビキの指示を待つ。

その光景に、ジロウは冷や汗をかきながら笑っていた。

「なるほど…ゾロアークの幻影か。新人だというのに凄いな…ハガネール、それは錯覚だ！水はそこにはない！！」

『イ、イワアアアアア！！』

「おっとすぐに抜けさせるつもりはねえよ！ゾロアーク、あくのはどう！！」

『ガアアアアア！！』

ハガネールがあくのはどうにぶち当たり、あふれ出ているように見える水に沈む。ハガネールはじたばたとその水からはい出ようとしますが、なかなか思うようにいかない。ジロウはそれを見てヒビキがいつものようにやって来る挑戦者とは違うのだと実感し、バトルスタイルを改めて変えていく。

水に溺れているように「見える」ハガネールの姿に、ヒナは苦笑しつつも口を開いた。

「なんか…イリユージョンができるゾロアークって結構チートよね…?」

「いや、そんなことはない。イリユージョンはただの幻影…攻撃を食らっていると錯覚し、ハガネール自身がゾロアークのイリユージョンに嵌り、ダメージを食らうように見せかけているだけだ」

「え…それだとヒビキとゾロアークがやってることは意味ないってこと?」

「そうだ…イリユージョンによってただの「思い込み」でダメージを食らうが…それは逆に幻影だと分かれば食らったはずのダメージはなくなる…イリユージョンはやり方によつては便利な技だが、バトルによつてはただ自身を疲れさせる不利な技にもなり得るな…」

その言葉をシルバーから聞いた瞬間、ハガネールが咆哮した。

地面をビリビリと揺れ動かし、照明をチカチカと点灯させるような強暴な咆哮によってゾロアークが一瞬怯み、イリユージュンが解けてしまう。

そして先程まで弱っているように見えたハガネールは元気に跳ね、ゾロアークを威嚇し跳ねた威力で転ばせていた。

それを見たヒビキは先ほどのジロウのように冷や汗を流し、好戦的に笑う。

「楽しくなりそうだなゾロアーク…」

『ガアアア』

第三話～ニビジム挑戦と始まり～

「ハガネール、叩きつけろ!!」

『イワアアアア!!!』

「ゾロアーク、そのままひきつけとけよ…!」

『ガアアア!』

大きく飛び上がったハガネールを見上げ、ゾロアークはヒビキの言うとおり何もせずそのまま立ち止まってハガネールを睨みつけていた。

ヒナはこのままだとハガネールの巨体に押しつぶされてしまうのではと思われたが、ヒビキがニヤリと笑ったことによってその考えは変わる。

…行くぞゴローニャー！」

『ゴロオオオオ!!』

「……ゾロアークの【あれ】って無意識？」

「いや、おそらく意識してやっていることだろうな。ヒビキもバトルで有利に戦うための方法をよくゾロアークに教えていたから…【つめとぎ】もバトルの合間だが癖のように行っている」

「もしも審判とかが知ったら不正だって言われるんじゃないかな…」

「イリユージョンを含め、それも覚悟して行っているぞあいつは…だから馬鹿なんだ」

「ああ……」

ヒナとシルバーは観戦席からゾロアークが軽くつめとぎという技を行っていたことに対して話し合っていた。つめとぎという技はゾロアークの攻撃と命中率を一段階上げるものだが、ゾロアークはハガネールと睨み合った時、威嚇する方法として使うこともあり、ポケモンの技のようには【見せていない】。

まさにゾロアークのイリユージョンのように意識して見なければ分からない行動だ。しかもそれをヒビキは許容し、公式なジム戦でも行っている。ちよつと不正になるん

じゃないかとヒナは心配しているが、シルバーはそうなるのであればイリユージョンを初っ端から行わないだろうと苦笑いだ。だから馬鹿なんだと言う言葉に、ヒナは苦笑しつつこれからのヒビキのバトルスタイルがどうなるのか少々心配になったのだった。そんな話し合いをしているうちにジロウはゴローニヤを出してバトルを始める。

「それでは、ゴローニヤ対ゾロアークの試合開始！」

「ゴローニヤ、じしんだ!!」

『ゴロオオオオオ!!』

「くっ…ゾロアーク、いちやもんとつじぎり!あと飛び上がれ!!」

『ガアアアツ!!』

じしんの威力は観戦席にも届き、ヒナたちはそれぞれ観戦席にある取っ手に掴まって揺れから逃れようとする。取っ手に掴まりながらもバトルフィールドを見ると、岩がじしんによって抉られ、割れているのが見える。ゾロアークはそのじしんによるダメージを負ったようだが、それでもまだジャンプしながらいちやもんとつじぎりをするという技の二重ができたようだ。つじぎりによってゴローニヤにダメージを負わせることに

成功したが、ゾロアーク自身もゴローニヤの技を受けてしまう。

ヒビキが行ったゾロアークの指示を聞いて、じしんの技がかなり大ダメージを負う可能性があるからこそいちゃもんをしたのかもしれないという考えと、飛び上がりながらつじぎりといちゃもんする少々サトシに似た強引なやり方にジロウは感心したかのようには笑い、そして飛び上がっているゾロアークを指差して言う。

「隙だらけだ！ゴローニヤ、ストーンエッジ!!」

『ゴロオオオツ!!』

「うっそまじかよ!!?」

『ガアアアアツ!?!』

ストーンエッジは突った岩を相手に突き刺して行うという技。通常は地面に立つ相手に行う攻撃技なのだが、さすがはジムリーダーといったところか、ストーンエッジによつて突った岩と岩が高く飛び上がったゾロアークに向かって伸びていき、折り重なるかのようにゾロアークに向かってぶつかる。ジャンプしたせいで躲すことができないゾロアークはそのストーンエッジの技をもろに受けてしまった。だが折り重なった岩からすぐに抜け出し、少々辛そうな息を吐くが、すぐに大丈夫だとヒビキに向かって鳴き

声を上げ、次の指示を待つ。

「ゴローニヤ、じしんだ！」

『ゴロオオオ!!』

「クツ…ゾロアーク、もう一度ナイトバースト!!!」

『ガアアアアア!!!』

じしんによって地面が抉れ、それを吹き飛ばすかのようにナイトバーストが周りに巻き起こる。まるで砂嵐かのように思えるその技と技のぶつかり合いは、しばらくした後収まり…そしてゾロアークが倒れたことによって終了の意味を持った。

「ゾロアーク戦闘不能！」

『ガアウ』

「…サンキューなゾロアーク」

『ガウ』

「…え、もしかしてヒビキこれで終了？ゴローニヤふらふらなのにもつたない…！」

「いや、そんなことはない。まだ一体いるからな」

「え…？」

ボールに戻されたヒビキのゾロアークを見て、ヒナはこのバトルはヒビキの負けで終わりなのかと言う。ゴローニヤは今にも倒れそうなくらいフラフラになってこれでバトル終了するのはヒビキにとって惜しいとヒナが言うのだが、シルバーが隣でそれを聞いて違うと首を横に振る。だが、シルバーがあと一体いるという言葉にヒナは首を傾けた。

何時の間にポケモンを一体捕まえたのだろうかと疑問に思ったヒナだったが、ヒビキが出したポケモンによってそれは解決する。

「お前にとっては何バトルだ…頑張れよ、ヒノアラシ!!」

『ヒ…ヒノッ!』

「ヒノアラシか…ゴローニヤはかなり不利なポケモンだと思うが…どう戦うのか楽しみだ！」

『…ゴロオオ!!』

「ヒノアラシ…!?!」

「ジョウト地方のウツギ博士から学校卒業の祝いに貰った3体のポケモンの中の1体だ」

「え、卒業の祝い?…ってことはシルバーも貰ったの?」

「ああまあ…後でジム戦で見せる」

「そっか。楽しみにしてるね」

「ヒノアラシ!お前なら大丈夫だ…できるぞ!!」

『ヒノオ…!』

「あと…あのヒノアラシって臆病な性格なのかな」

「ああそうだ。だが臆病な性格のせいか、素早さが通常よりも上回っているんだ…それ

にあのヒノアラシは今はバトルには向かないかもしれないが育て方によっては化ける可能性もある。素早さ特化したポケモンはサトシさんのポケモンやバトルスタイルを見れば有利に戦えることもできると知っているが、ダメージを与えることができなければスピードは無力に等しいかもしれん…だがあのヒノアラシは——」

「——ああはいはい。ほらシルバー！観察してないでバトル見ようってば!!」

「…そうだな」

ヒノアラシにとってゴローニヤがゾロアークとの戦いによってふらふらしていることが幸いなのか、あと一撃さえ与えれば倒れそうになっている。だがヒノアラシは身体をぶるぶると震えさせ、ヒビキの背に抱きついて隠れたいというかのようにしきりに後ろを振り返ってヒビキを見ている。それを見たヒビキは大丈夫だとヒノアラシに激励し、その声を聞いたヒノアラシは頑張るとでもいうかのように少々目を釣り上げた。

それでも迫力十分のゴローニヤを見たらまた怯えたように身体を震えさせているが…逃げようとはしない根性はあるのかとヒナは笑みを浮かべる。

「ゴローニヤ、ストーンエッジ……………何ッ?!」

『ゴオオオオツツ?!?』

「たいあたり!!」

『ヒノオオオオオオツツ!!!』

ゴローニヤが繰り出したストーンエッジを見事に躲しつつ、素早い動きでゴローニヤの懐までやって来たヒノアラシは、ヒビキの声を聞いてその速さのままたいあたりをする。

だが、ヒノアラシは泣き顔のまま怯えつつさつさとバトルを終わらせようとしているのか：ロケットはずつきのように大きく飛び上がってぶつかつたため、ヒノアラシも頭を押さえつつ痛そうに泣いている。

もちろんそんなヒノアラシの技はゾロアークの技によって大ダメージを負っていたゴローニヤが耐えることなく倒れてしまった。

そしてヒノアラシは相手が倒れたのを見て我慢せずとヒビキに駆け寄り、ジャンプしてヒビキの顔に抱きついた。

それを見てジロウは笑い、試合終了の合図を出してからバッチをヒビキに渡したの

だった…。

.....

「うおおおジムバッチだああああ!!!」

「喧しいぞヒビキ!!」

「うるさい!」

「ブフオツ!」

ヒビキはヒノアラシに向かってお疲れと礼を言った後ボールに戻し…そしてジムバッチを手にした喜びを叫んでいた。その声を聞いてシルバーとヒナによって頭を殴られ撃沈したが…それでも喜びからか反撃することはなく笑っていたのだった。

ジロウはヒナとシルバーを見て次はどうするか聞く。

「シルバーが先でいいよ」

「いいの…?」

「うん。シルバーが貰ったっていうジョウト地方のポケモンも見たいし!」

ヒナは笑ってシルバーに次のバトルを譲った。ヒナはヒビキがヒノアラシを出したのを観戦し、シルバーが仲間として迎えたポケモンをバトルで見たいと思ったことを正直に話す。ピチューやリザードンはやる気十分というかのようにはボールをゆらゆらと揺らしているが、ジョウト地方のポケモンを見たいと言うヒナの言葉にその揺れは収まり、ボールごしに観戦しようと思えたらいい。シルバーやヒビキとはいつか戦う相手だからかもしれないが…それでもバトルできないという不満を言うことはなく、ヒナたちはシルバーに譲ることができた。

それを見たジロウは頷いて、シルバーに今から行おうかと声をかけたのだった。

.....

「それでは、ジムリーダージロウと挑戦者シルバーによるバトルを始めさせていただきます」

ます。ジムリーダーの使用するポケモンは2体！挑戦者は使用ポケモンが戦闘不能になるまでバトルを続けられます…それでは、バトル開始!!」

「行くぞ、カブトプス！」

『カブウウウ!!』

「…バトル開始だワニノコ」

『ワニイ』

「へえ…シルバーはワニノコを貰ったんだ」

「おいシルバーアア!!何やってんだカブトプスにはみずタイプのポケモンは効果抜群にならねえぞアホシルバー!!」

「喧しいぞヒビキ!!!」

「ほらヒビキ、バトルの邪魔になるから叫ばない！シルバーも怒ってるし…それに大丈夫でしょ」

「馬鹿ヒナ…あいつのことだから絶対にやらかすだろ…」

「……え、あ……でも…」

「4年前の惨劇を思い出せ」

「……………うん」

ヒナが不安そうな顔をしている一方で、ヒビキは絶対にやらかすとばかりに遠い目をしてバトルを観戦していた。先程までバッチを手にしたこと喜びが嘘のように空気が重い。

そんな観戦席とは違って、バトルフィールドでは冷静にカブトプスを観察し、ワニノコは静かにシルバーの指示を待つ。

まるで冷たい水のような空気を纏う彼らに、ジロウは熱く燃えるように少々計画を考えず戦うヒビキとは違ったタイプだと考えて口を開く。

「カブトプス、シザークロスだ！」

『ガブウウ!!』

「…ワニノコ、避ける」

『ワニ』

ワニノコは一步横にジャンプしてカブトプスのシザークロスを避ける。その行動はまさに熟練されたかのように動き、とても冷静に技を躲していった。通常のバトルでは

避けろと言われてもポケモンはどう避ければいいのか分からず右往左往して結果ダメージを食らうのが一般的だが…シルバーのワニノコはどう避ければいいのか、何をすればいいのかまるで分かっているかのように動いているのだ。

「面白いね君のワニノコは…でもレベルがまだ足りないな！カブトプス、いわなだれだ…！」

『ガブウウウ!!』

「ワニノコ、みずでっぼう」

『ワニツワツツ!?!』

ワニノコはみずでっぼうでいわなだれを防ごうとするが、まだ十分育てきっていないためかいわなだれを抑えきれずにダメージを負い、フラフラとして一度は立ち上がろうとしたがすぐに倒れてしまった。それを見てシルバーは悔しそうな顔を見せず、ただワニノコに近づいて抱き上げ、頭を撫でた。

「まだお前を仲間に迎えたばかりだが…よくやった」

『ワ…ワニ』

「これからよろしくな」

『ワニワニ…』

ワニノコはバトルに負けて悔しそうだが、シルバーの優しい笑みを見て何も言わずに微笑んだ。シルバーならば己を鍛えてくれると思っただろうか…トレーナーとしての才能があるように見えるシルバーを見てワニノコは将来強くなるだろうなどとジロウは考えつつも、シルバーがバトルフィールドから下がり、先程まで立っていた位置へ戻ってからワニノコをボールに戻す。

そしてシルバーがポケモンを出したことによってバトルは開始する。

「終わらせるぞチルタリス」

『チルウウ!』

「かなり強いなああのチルタリスは…気をつけろカブトプス!」

『カブウウ!!』

「それでは、カブトプス対チルタリス…バトル開始!!」

「はかいこうせん」

バトル開始の合図とともに、シルバーは静かにチルタリスに指示を出す。その声に反応したのは幼馴染でもあるヒナとヒビキだった。

「えっちよつと待つつつ!!?」

「やべえヒナ伏せろ!!」

『チルウウウウ!!!』

.....

バトルフィールドが一部焦げて破壊されてしまった箇所が目立つのが見える。ジムリーダーや審判が引き攣った表情を見せるのが分かる。

チルタリスはあの後はいこうせんによる無双を行い、まるでバトルとは言えない壮絶な行動をして見せた。

それはまさしく、ジロウが先程考えた水のような冷静なバトルスタイルという言葉で前言撤回させるほどの威力。そしてジムリーダーのポケモンを2体とも倒すほどの強さを見せてくれたのだ。

「しよ、勝者……挑戦者の、し、シルバー!!」

審判の引き攣った声を聞いて、観戦席の2人が我に返ったかのように叫ぶ。

「シルバーてめえこの馬鹿野郎がああああ!!!」

「ちゃんとバトルしなさいよこの馬鹿ああああああ!!!」

「喧しい!!ちゃんとバトルしただろうがっ!!」

「そんなわけあるかッ!!!」

少々微妙な空気のまま、ジロウはシルバーに勝者の証としてジムバッチを渡したのだった。

第四話くジム戦と、それからく

「やりすぎなんだよお前は!!」

「そんなわけないだろう…これでも手加減したが」

『チルウ』

「手加減したのツ?!」

「んなわけあるか!!シルバーお前手加減なんて言葉はバトルじゃ使わねえだろ!!」

「何事にも本気で戦うのが俺のバトルスタイルだが…チルタリスのはかいこうせんはこんなもんじゃ済まないぞ」

『チルルウ!』

「はかいこうせんを極め過ぎよシルバー!!」

「やりすぎたらいけないって博士に言われただろ!! もう少し考えて行動しろよ!!」

「ハハハ…ヒナちゃん達、喧嘩しちやいけないよ」

やらかしたことの重大さに気づかない無自覚なシルバーにヒナとヒビキが怒鳴り声を上げて怒る。だがそれを見て喧嘩に発展すると感じたジロウが苦笑しつつも3人を仲裁し、ヒナを見つめた。

それを見たヒナはシルバーを見てまだ言い足りないというような表情を一度したがすぐに改め、そしてジロウを見て好戦的な瞳で見つめる。

「よろしくお願いします」

「ああ、こちらこそよろしく」

面白いバトルを期待しているよと言葉に出さなくてもジロウはそう言っているのだと、ヒナはそう感じた。

.....

「お前後で覚えてろよ」

「フンツ上等だ。返り討ちにしてやるから覚悟している」

「はいはいヒビキとシルバーそこで喧嘩しない！バトルの邪魔になったら燃やすからね！」

「ハハツ…じゃあ、これよりジムリーダージロウ対挑戦者ヒナの試合を始めます。使用ポケモンは2体…それでは試合開始！」

観戦席から聞こえてくる口喧嘩にヒナはバトルフィールド越しから怒鳴り声を上げて喧嘩は止めろと叫ぶ。その声には何かやらかしたら燃やしてやると有言実行しそう

な色を含んでおり…ヒビキとシルバーは少々不満そうにしていながらも口を閉ざしてバトルを観戦することにした。

それを見たジムリーダーのジロウや審判のサブロウが苦笑しつつもバトルを始めるために顔を引き締める。それを見たヒナも気持ちを切り替えてバトル開始を待つ。

「よし行くぞ…プテラ!」

『ギャアオオオオオツツ!!』

「プテラね…じゃあこっちは…いくよピチュー!」

『ピツチュウ!!』

レベルが高く、とても強そうなプテラが出てきたことにヒナは笑みを浮かべて帽子をしつかりと目深に被り直し、懐からボールを手にとってバトルフィールドに向けて投げた。ボールから出てきたのはいかにも気合十分なピチューであり、電撃をバチバチと地面に向かって放ちながら空を飛ぶプテラを睨みつけた。

睨みつけられたプテラも同じように威嚇する。その瞳はとても凶暴に見え、四年前のあの日バトルにいたならば絶対に怯えていたであろうピチューはものともしない。もちろんヒナも同じようにただ相手を見据えて勝ちに行くのを狙っているようだ。ジロ

ウは感じていた。

——そしてしばらく沈黙の後、両者が口を開く。

「プテラ！いわなだれだ！」

『ギャアアアアアツツ!!』

「全部躲してプテラに10まんボルト！」

『ピチュー!!』

「回転して避ける！」

『ギャアオオオオ!!!!』

地面のバトルフィールドが奇妙な形で抉れ、すべてがいわなだれとなってピチューに襲いかかる。それを見てヒナが指示を出し、ピチューはその通りに動く。

素早く動き、岩を避けつつプテラに急接近したピチューはすぐさま強暴な10まんボルトを放つ。だがそれは力強いプテラの竜巻にも似た回転によって避けられ、風圧を避けて大きな岩に潜り込むことによってピチューはダメージを防いだ。

ジロウが本気で来ていることにヒナも気づいていた。そしてピチューもプテラが手加減なくこちらに向かって勝つ気であることに気づいていた。だからこそヒナはピ

チューーを見て口を開く。

「ピチュー、でんこうせっかで接近！」

『ピチュー！』

「プテラ！接近したところを狙え！もう一度いわなだれ！」

『ギャアオオオ!!』

「させないわ！ピチュー、てんしのキッス！」

『ピツチュ！』

『ギャツ…！』

「なにつ…!？」

「…ん？なあシルバー、てんしのキッスって何だっけ？」

「相手を混乱状態にする技だそれくらい覚えとけ」

「お前説明の後にいちいち一言余計なんだよ！」

「騒ぐなヒナがキレるぞ」

「マジ後で覚えとけ…！」

急接近してきたピチューに向かって攻撃を仕掛けようとしたプテラだったが、それをすべて素早く避けたことよって不発に終わり、そして逆に可愛らしいピチューに頬をキスされたことよって混乱状態に陥ってしまう。ぬいぐるみのような可愛らしさを表現してなのか、ピチューはそのてんしのキッスに何故かメロメロを発動させる時のようにウインクをしてプテラを混乱させた。もしもプテラが雌だったならピチューの可愛さよってメロメロ状態にもなっていただろうなとシルバーは考える。

ヒナもシルバーと同じようなことを考えたのか頬をかいてメロメロを覚えさせたつもりはないんだけどなと呟き声を上げていた。
だがヒナはすぐに気持ちいを切り替えて叫ぶ。

「ピチュー、あなたのショーを見せてあげて！」

『ピツチュウ！』

「なっ…これはボルテッカー!?!」

『ギャツ…ギャウ！』

「プテラっ!!」

「ピチュー、そのままでんげきは！」

『ピチューウウ!!』

ピチューが走る方向に電撃の跡ができる。ピチューの身体全体が黄色く光り輝き、尻尾からはキラキラとした光が降り注ぐ。もしもここが薄暗く、そしてピチューが大きく空に向かってジャンプしたならば星空のように降り注いだらうと考えるほど、煌びやかに駆け巡る。

それを見たジロウは混乱した。プテラを何とか躲してもらおうとしたが混乱が解けていない。プテラはそのままピチューに突撃され、もろに電撃を浴びて倒れてしまったところにヒナは欠かさず追撃を指示する。

その声を聞いたピチューはでんげきはをバトルフィールド全体に向かって行い、プテラを倒すことに成功したのだった。

「プテラ戦闘不能！」

「ありがとうプテラ……うん、本当に強くなったなヒナちゃんは」

『ギャアウ…』

「よしやったよピチューー！」

『ピツチュウー！』

ハイタッチをして喜び合うヒナ達を見てジロウは懐かしげに彼女たちを見て、そして腰につけてあるボールをバトルフィールドに向かって投げる。

プテラを出したのはジロウにとつての強いポケモンであり、どんな戦い方をするのかという期待で出したのはポケモンだ。もちろん勝つ気はあったが、それでも負けたとしても喜びの方が強く感じられた。あの時とは違って本当に強くなったのだと、そう感じたのだ。

「行くぞ、バンギラス」

『バンギャアアアアツツ!!』

「バンギラス…か…よし、ピチュー戻って」

『ピチュツ…！』

「トレーナーになって初のジム戦だしリザードンも気合十分だから…お願い」

『ピチュキュウ…ピチュウ!』

「ありがとうピチュウ…行くよ、リザードン!」

『グオオオオオオ!!!』

ピチュウがまだ戦えるよと気合十分にヒナに向かって鳴き声を上げるが、その声を聞いてヒナは申し訳ないような表情でピチュウに向かってお願いを言った。ニビジムで戦いたいと思うのはピチュウだけじゃないと言うこと、ずっと懐でボールがぐらぐらと動いてバトルしたいと言っているのだと話す。その声にピチュウは納得し、分かったと声を出してボールに戻っていった。

そして現れたのは漆黒の身体をもち、頑丈そうな翼を優雅に広げて大きく咆哮するリザードンだ。

その声を聞いてバンギラスは強い奴が現れたと笑い、ジロウも同じくつられて笑みを浮かべた。

「それでは…試合開始!」

「バンギラス、かみなりパンチ！」

『バンギヤアアア!!!』

「そうはいかない！リザードン、かえんほうしゃ！」

『グオオオオオ!!!』

かみなりパンチを繰り出そうとしたバンギラスは向かってきた力強いかえんほうしゃを見て技を繰り出すのを止めてすぐに避ける。避けられた炎は岩にぶつかり、熱を持って岩が赤く燃えた。それを見たジロウはジムリーダーとして戦っているという意識を一瞬だけ忘れ、気分を高揚させつつバンギラスに向かって指示を出した。

「バンギラス、ストーンエッジ！」

『バンギヤアアア!』

「リザードン避けて！」

『グオオオオオ!!!』

バンギラスのストーンエッジはまるでヒビキと戦ったゴローニヤが繰り出したかのように空を飛びリザードンに向かって真つすぐ…そして大きく抉られて向かう。それ

を見たリザードンは翼を大きく広げて宙を旋回し、避けていく。だがいつまでたつてもストーンエッジは止まず、避け続けていることに少々苛ついたリザードンの尻尾によるアイアンテールによって砕くことでバンギラスに向かつて叩き落とした。それをバンギラスはストーンエッジによって防ぎ、リザードンを睨みつけた。

「さっきのチルタリスのようにちよつと暴れてみようか…バンギラス、はかいこうせん！」

『バンギヤアアアアア!!』

「はかいこうせんなら…こっちは真つ向勝負よ！フレアドライブ!!」

『グオオオオオオ!!』

「おいおい何やってんだヒナの奴!!」

「サトシさんのように…ポケモンにとつて苦手なタイプの技を真つ向から受けて反撃し、見事逆転することに成功したことがあるが…まあヒナなら平気だろうな」

「リザードンなら平気ってか!?!んな無茶な…」

「現に4年前、俺のチルタリスのはかいこうせんをリザードンはお前とヒナを背中に乗

せながら防いだことがあったぞ」

「おいはいこうせんぶつ放して俺たちに当たったかもしれない自覚ありかこの野郎
!!」

「煩いぞヒビキ、試合の邪魔だ」

「はあ…お前まじ空気読め」

はいかいこうせんに向かってリザードンは炎をまとわせながらぶつかっていく、そして口から吐いた炎を破壊こうせんに向けて放ち、翼をたたくのでそのままの勢いでバンギラスに向かって突撃していった。

巨大な炎の塊となったりザードンに、バンギラスはなすすべもなく倒れてしまったのだった。

「バンギラス戦闘不能…勝者、挑戦者ヒナ！」

「やった！ありがとうリザードン！」

『グオオオ！』

バンギラスが目を回して倒れたことに対し、ヒナは喜んでリザードンに抱きついてあげがとうと礼を言う。その声にリザードンは笑顔でヒナにすり寄って勝ったことを喜び合った。

そんな彼女たちを見て、ジロウはバンギラスを労わってからヒナに近づいて言った。

「ヒナちゃん、4年前に渡したあのバッチを持つてる？」

「はい…これです」

「それは貰うよ…君にはこれを渡そう…グレーバッチだ」

「ありがとうございます…ジロウさん！」

『グオオ…！』

少々古ぼけたグレーバッチをジロウに見せると、ジロウはヒナの手からそれを受け取り、そして新品のグレーバッチを渡した。小さな箱に入っているバッチを手にしたヒナはリザードンと顔を見合わせてから笑みを浮かべて…そしてジロウに向かってお礼を言ったのだった。

「グ
レー
バッ
チ、
ゲ
ツ
ト
よ
!!」
『グ
オ
オ
オ
!!』

第五話く旅の始まりはいつも同じく

「よつしニビジムに挑戦してバッチゲットしたし…おいシルバー！ポケモンバトルするぞ!!」

「ここではできるわけないだろうが馬鹿が…ポケモンセンターへ行くぞ」

「うるせえ分かかってるよアホシルバー！さっさと行くぞこの野郎!!」

「アハハ…ありがとうございましたジロウさんにサブロウさん」

「いや、気にしなくていいよヒナちゃん」

「妹達が会いたがっていたけど…またこっちに戻ってくるんだらう？」

「はいもちろんです！それじゃあまた——」

「——あ、ちよつと待つて！」

ニビジムから駆け出し、ポケモンセンターへ向かつて競い合うように走つて行くシルバーとヒビキに苦笑して後を追いかけようとするヒナだったが、ジロウは小さく声をかけて引きとめた。

「ヒナちゃん、タケシ兄ちゃんの事なんだが…今ニビシティには留守でいないけど、今度おこなわれるリーグ戦にはポケモンドクターとして仕事で行くのが決定してるって話を聞いたんだ。タケシ兄ちゃんからの伝言だよ。【ポケモンリーグで待つてる】だって…」

「そう…ですか…分かりました！【リーグ戦に必ず出てみせます！】ってタケシさんに伝えてください！」

「ああ、分かった」

もう一度礼を言つて、ヒナはポケモンセンターは向かつてしまったヒビキ達の後を追つて走り出す。その後ろ姿をジロウ達は懐かしそうに見つめていたのだった。

.....

ヒナがジロウ達と話をしている間に、ヒビキ達はとつくにポケモンセンターへ向かって行つたらしく、走っていった後ろ姿は歩き出したヒナからは見えない。

だからヒナはヒビキ達が暴れていないことを願って急いでポケモンセンターへ向かったのだが、その出入り口にヒビキとシルバーが不機嫌そうな表情で立ち止まっていたため何かあったのかと首を傾けたのだった。

「どうしたの?」

「バトルフィールドがついさつき来たトレーナー達のバトルでぶつ壊されて使用禁止だつてよ」

「ニビシテイで使用できるバトルフィールドはここしかないからな…わざわざ他の場所でするぐらいならここで何もせず別れた方が良さだろうということにした」

「シルバーがな!」

「ヒビキは不満そうだが…ヒナはそれでいいか？」

「まあ私はどっちでもいいけど…ヒビキは大丈夫なの？」

「まあ俺が不満なのってどっちかっていうとシルバーが勝手に決めたことだし…それに、もっと強くなってからヒナやシルバーと戦いたいから別にいい」

シルバーはバトルできないことに関して不満そうだったが、わざわざ町はずれに行つてバトルを行うよりはこのまま別れて次に会った時にすればいいと話す。その声にヒビキは勝手に決めるなど少々不機嫌になっていたが、それでもシルバーの考えには同意していて、ヒナを待っていたのだ。

このまま三人で別れて、旅をしようということをして――。

ヒナは少しだけ寂しそうにしながらも、分かったと頷いてヒビキ達を見た。

「そつか…じゃあここでお別れだね」

「おう！次会ったときはバトルしようぜ!!」

「その前にバッチは集めておけ。リーグ戦の時期が大幅に短縮しているからな」

「分かってるよアホシルバー！」

「アホは貴様だろうこの馬鹿が」

「はいはい喧嘩しない！…じゃあ、またね」

「おう！またな！」

「…フン」

シルバーたちはそれぞれ行きたい方へと歩き出した。どのみち三人とも次の町であるハナダシティに向けておつきみやまには行かなければならないが、それでもヒナ達にはヒナ達のペースというものがある。

シルバーはニビシティで物資を調達してからチルタリスによって動くか…おつきみやまで修行をするかしたり、ヒビキはそのままおつきみやまに行くためゾロアークのイリュージョンによってウィンディに変化した姿の背に乗って超特急で向かったり…そしてヒナはというと、自分のペースでゆっくりとおつきみやまに登っていたのだった。

.....

「トレーナー初の野宿って感じかな？」

『ピチュー！』

『ガウウ…』

おつきみやまの中間地点まで登ったヒナたちはそろそろ夜になるため、これ以上進むのは危険だと判断し、キャンプをするためそれぞれが動いていた。リザードンは火元を準備して小枝を集めて薪にしたり、ピチューはきのみや果物を集めてヒナに渡したり、そしてヒナは母直伝の料理やポケモンフーズを家でリュックに入れて準備した簡易調理器で作ってリザードン達と一緒に食べていた。そんな彼女たちに近づくのは、食べ物の良い匂いに釣られてやって来た野生のポケモン達。

お腹空いたーと警戒なくこちらに近づいて頂戴！とねだるその姿にヒナは苦笑しつつ、リザードンとピチューに頼んで葉っぱで作ったお皿でごはんを渡していた。

そのうち野生ポケモンたちがヒナの周りに増え、お腹がいっぱいになったピチューは通常よりも小さなサンドたちと一緒に遊んでいた。

『ピツチュウウ!』

『ギユウウ』

「ピチュウー! あんまり遠くに行つちや駄目だよ!」

『グオオオオ!!』

『ピチュウウ!』

『ガウガウ!』

『ギユウウ!』

『パイ!』

『ピツパイ!』

『ゴルバツ!』

「はいはい、おかわりできるほどの分はないけど焦らなくても大丈夫だよ」

『パイ…ツ!』

「文句は言わないの。パイはもうご飯食べたでしょう?…そんなに食べたいんならきのみ集めたら作るけど?」

『パイイ!』

『ピツパイ!』

『バンギヤア!』

「え、ちよつと待った野生のバンギラスっておつきみやまにいたっけっ?」

『バンギイ?』

『グオオ…』

野生のポケモンたちがヒナが言った言葉に反応してきのみを集めに向かう。その喜んだ姿の中には何故かおつきみやまには生息していないはずのバンギラスまでいてヒナは驚愕していたのだった。

リザードンはため息をついて見たことのあるバンギラスに頭を抱えた。ここで野生化しちやつたのねと呟く声は、ヒナには届かない。そんななかヒナはきのみを持ってきたピイたちの要望を聞くためにもバンギラスがこのおつきみやまにいますという事実を驚くのを止めて料理を作ることを決める。

「ご飯だけじゃなくってどうせならお菓子もいいよね」

『グオオ』

『ピイ?』

「ピイは食べたことないかな。いろんな味ができる美味しいお菓子。…ポフレの方が良

いかな……ちよつと待つてね」

『ピィィ！』

『ピツピィ！』

『ゴルバアア!!』

『バンギヤアアア!!!』

「ねえリザードン…バンギラスが小さいピィたちと一緒にいても違和感がないっていうの、おかしいかな？」

『グオオオ…』

「うんそうだね。考えるのはやめておこう…」

お菓子を作りながらも後ろで楽しそうに待つバンギラスたちの姿にヒナは隣にいるリザードンに向かって声をかけた。

バンギラスの頭に乗ったピィが楽しそうにまだかなと真下の頭を叩いて待つているのだ。そのピィの行動にバンギラスは怒ることなくむしろ一緒に楽しげに笑っている。そしてそんな彼の近くには他のピィたちやピツピ達…そして尻尾の先にはゴルバットやズバットが仲良く座っているかのように翼を折りたたんでるのが見える。

強暴だと恐れられることがあるバンギラスが小さいピィたちと一緒にいる光景は違

和感がなく…それどころかむしろ可愛いとさえ感じる姿にヒナは遠い目をして思わずリザードンに声をかけてしまったのだった。

リザードンは静かに首を横に振ってから小さく鳴き声を上げる。相棒の声を聞いたヒナは分かったと声を出し、すぐに思考を料理やお菓子作りに移したのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

集まってきていたポケモンたちのお腹が十分満足し、ヒナたちの周りで眠ろうとしていた状態の中、数体のポケモンたちがヒナ達に向かって帰って来たのだった。

「ピチュー遅かったね。もうちよつとしたら迎えに行こうと思ってたよ」

『グオオ』

『ピチュウ…』

『ガウガウ…』

『ギユウウ…』

「どうしたの?」

『グオオオ?』

『ピイ?』

『ピツピイ?』

『ギャウウ?』

ピチュー達の様子がおかしいことに気づいたヒナとりザードンはお互いの顔を見合わせてから優しく彼らに向かつて声をかけた。ご飯を食べて眠そうにしていた他の野生のポケモンたちもどうかしたのかと声をかける。するとピチューは決心したかのよう^うにヒナに近づいた。

暗闇の中で見えたのはピチューの尻尾だけだった。波動や気配でピチュー達が帰ってきたのを知ったヒナ達が見えたのはピチュー達の声のみ。だからこそ、気まづげにいう鳴き声にヒナたちは大丈夫だよと声をかけて：怪我をしていたらすぐに治療しようかとリュックを開いて待つていたのだ。

そして決心したかのようにやくやく姿を見せたピチューに、ヒナたちは火の明かりによつて何故こちらに近づいてこなかったのかを理解した。

『ピチュウ…』

「……えつと…たまご？え、ポケモンのたまご!？」

『グオオオオ!!』

ピチュウが持っていたたまごは、ピチュウよりも少しだけ小さくて、それでも元気そうにゆらゆらと動くポケモンのたまごだった。

第六話くそのポケモン、バグではないく

ゆらゆらと揺らめくたまごにヒナたちは驚愕し、そして困惑していた。

野生のポケモンたちの誰もが知らないと言を傾けるからだ。その反応と目の前にあるポケモンのたまごにヒナとリザードンは真剣な表情で眩く。

「もしかしてトレーナーが持ってたたまご…なのかな…?」

『グオオオ…』

『ピチュウ?』

「とうか…すつごく揺れてるんだけどもしかして生まれる?！」

『グオオ…!』

『ピ?!ピチュウ!!』

たまごがゆらゆらどころではなくグラグラと揺れ始めてきて、なにか音が聞こえるような気がするヒナは首を傾けて眩いた。その声にリザードンとピチューは反応してすぐにたまごを温めようと近づく。そしてそんなリザードン達を見た野生のポケモンであるピィたちも一緒になってたまごの周りに集まって来た。

「大丈夫だよ。生まれておいで…」

『グオオ』

『ピチュウ!』

グラグラと揺れ光り始めるその動きに、ヒナたちは本当に生まれるのだと分かり、たまごを撫でた。外の世界は怖くないよという気持ちを含めて…大丈夫だよと優しく言う。そしてリザードンが寒くないように尻尾の火を近づけた、瞬間だった――。

「うっ…わっツ!!」

『グオオツ!!』

『ピチュウ!!』

『ナツゾオ…?』

小さなナゾノクサが元気よくたまごから生まれてきた。

ちよこんと座って身体を傾けているナゾノクサがゆっくりと目を開けてヒナを見た。その幼い瞳にヒナたちは笑みを浮かべる。

ヒナは頭を撫でて、口を開いた。

「生まれてきてくれてありがとうナゾノクサ」

『ナゾ…ナツゾオ』

もじもじと身体を揺らめかせながらヒナの手にすり寄るその姿は何処かかつてのヒトカゲの姿を思い浮かべた。

「ナゾノクサ……ここで会ったのも何かの縁だし、まだ赤ん坊だし……私と一緒に旅しない？」

『ナゾオ……？』

「もちろん、野生のままでもいいならここかナゾノクサが棲める場所でお別れするけど……」

『ナゾ……ナゾオオ！』

「そっか……ありがとう、そしてこれからもよろしくね」

『グオオ！』

『ピチュウ！』

まだ生まれたばかりで育ててくれる親らしきポケモンがいないため、ここに置いていくのは微妙かなとヒナは考えていた。もしも野生がいいのならばおつきみやまのポケモンたちに育ててほしいと頼み込むか、兄に頼んでナゾノクサが野生として暮らせる最

適な場所へ送ろうと考えながらも…。

でもナゾノクサはそれらを選ばなかった。ヒナ達と傍にいて、仲間になることを選んだのだ。

だからヒナは笑みを浮かべ、リザードン達は笑って歓迎した。ヒナは一つのボールを手に取り、ナゾノクサに優しく当てながらも…。

そして捕まえたというボールの合図とともに飛び出したナゾノクサはヒナの膝の上によじのぼり、ヒナを見てからよろしくねと言うかのように一声鳴いたのだった。

.....

(ううむ…これは問題が多いかなあ…)

生まれてからすぐにナゾノクサはヒナに懐いた。おそらく目を開けて最初に見たのがヒナだからという理由があるのだろうと考え、そしておつきみやまにナゾノクサはいなかったような気がする。ヒナは遠い目をして考えていた。

たまごから生まれたナゾノクサはまだ赤ん坊で、育ててくれるはずの親がいない状態なのだ。ナゾノクサがいないと言うことは、やはりトレーナーがたまごを置いていったか：それとも捨てていったかのどちらかだろう。このままではいけないとヒナが考えていた時にそれは起きた。

『ピッチユウ！』

「あ、こらピチューー！」

『ナゾ…ナゾオ！』

『ピッチユウ!!!?』

「うわっ…ピチューが宙を飛んだ…!?!」

『グオオ…!』

ピチューがきのみを食べているナゾノクサに近づいて遊ぼうよと抱きつこうとしたら、ナゾノクサがピチューを見て半回転し、回し蹴りのような攻撃をした。

ポケモンの技に回し蹴りなんてなかったはずだよねとヒナは思わずリザードンに聞

いて見るが、リザードンは何も答えずにいる。というよりも、答えられない。

ナゾノクサはオーキド研究所でよく見ていたが、回し蹴りなんて覚えていなかったはずだしピチューとレベル差が激しいのにピチューを一撃でノックダウンさせてしまうだなんてと混乱する頭で考えていたからだ。もちろんそれはヒナも同じく。

「よ、よし…ちよつとナゾノクサのレベルアップのためにも図鑑で技調べなきや…よね？」

『グオオオオ…』

リュックの中から取り出したポケモン図鑑には、手持ちのポケモンの技を確認することができると。新たに仲間となったナゾノクサはまだ生まれただけだからあまり技を覚えていないはずだと思いつつ開いて調べてみた結果。

—— ナゾノクサ くさ、どくタイプ

昼間は根つこの足を地面に埋めて動かないことが多い。夜歩き回ってタネをまく。

技

【すいとる】

【じたばた】

【くすぐる】

「あ、よかった…：回し蹴りなんて技ないよね…：ちよつとお兄ちゃんのパケモンのたまごからナゾノクサが生まれたのかなって思っちゃった…」

『グオオ…』

『ナゾオ?』

『ピ…：チュウ…』

安堵のため息をついてから、ヒナはナゾノクサを抱きしめてそろそろ寝ようかと声を出す。レベルアップはまた明日しようと考えて、夜を過ごしたのだった。

回し蹴りのようなことをやったのは、トレーナーになる前にイツシユ地方で見たズルッグのずつきのようなものかなと考えながらも…。

.....

「このなかでナゾノクサと軽く戦ってくれるポケモンいるー？できれば手加減してくれるポケモンで！」

『ツツ——！！』

朝日が眩しくてとても気持ちのいい朝。

朝食を食べ終えてから野生ポケモンたちにヒナは片手を上げて話しかけた。その声に反応したのはたくさんさんのポケモン達。皆たまごから生まれてきた姿を見てとても嬉しかったのだろう…。でも、バンギラスのような本気で戦うポケモン達にはリザードン達が相手するとして、ナゾノクサにはバトルを覚えてもらうためにまずこうかいまひとつな水タイプから始めようと考えていた。

だからこそ、朝起きたら何故か近くにいたクラブに手を貸してもらってバトルを始め

たのだが…。

「なんでこうなった」

『ナツ…ゾオ……』

『ゴキゴキツツ!?』

「ナゾノクサアアしっかりして!というかクラブのあわに一回当たっただけでやばいって思わなかったごめんなさい!!」

『グ…グオオ…!』

『ナツゾオ…!』

『ピチュウウ!!!』

半泣きの状態でヒナはリュックからきずぐすりを取り出しすぐに怪我を治しにかかる。クラブは生まれたてでも大丈夫なように手加減したぞと右往左往しているが、リザードンとピチューは気づかない。そんななかで、ナゾノクサはふらふらの身体のま

ま、リザードンの尻尾に近づこうとしていて…。

「こら！ナゾノクサは炎タイプが弱点なんだから近づいて触ったら危ないわよ!!」

『グオオオオオ!!!』

『ピツチユウウ!!!』

『ナツゾオ?』

ナゾノクサは怪我の処置をしているヒナ達に可愛らしく身体を傾けていた。疑問に思っているようだと感じたヒナは膝の上にいるナゾノクサに弱点について教えていく。

「きみは草と毒タイプなんだから弱点はリザードンのような炎なんだよ?逆に水タイプは効果いまひとつで全然大丈夫なんだけど…わかった?」

『ナゾ!』

「うん全然分かってないねリザードンナゾノクサに尻尾近づけないでね!」

『グオオオオオ!』

もちろんよ！と元気よく叫んで頷く相棒にヒナは少しだけ良かったと安心し、近くにいたコダツクに誰もいない方を狙ってみずでっぼうしてほしいと頼んだ。その頼みを聞いたコダツクは頷いて水を放つ。

そしてヒナはいまだにリザードンの尻尾に近づこうとしてピチューに身体ごと抱きかかえられて止められる姿に向かって話しかけた。

「ほらナゾノクサ！こっちが君にとって好きな水よ。炎は危ないからね！」

『ナゾ…？』

『ピチュー…』

『グオオ…』

ナゾノクサがヒナの言葉を聞いてピチューから降りてコダツクの放ち続ける水に近づいた。

そして恐る恐る触ろうとして――。

『ナ、ナツゾオオ…』

『グオオ…』

『ピチユウ…』

『ナゾオ?』

ナゾノクサはヒナたちの言葉が分からないようで、ただ小さく鳴いていたのだった。

第七話～ハナダシティにて現れた～

「やあつと…着いたア!!」

『ナツゾオ!』

おつきみやまの頂上にてピツピ達と一緒に遊ぼうよと言うとても魅力的な誘いを断り、ジムバツチ集めのために歩き続けたヒナ。

ナゾノクサがボールから外に出たいと言うためずっとだっこして歩いていたためか少々疲れてはいたが、それでもおつきみやまから下山してハナダシティの近くまでやつ

て来ることができたのだ。ヒナの気分としてはある意味もうハナダシティに到着しているようなもの。

だが、ヒナたちの歩みを止める者たちがいた。

「ハッハア！ここは名物ゴールデンボールブリッジ：はハナダジムのカスミさんの苦情で止めて急遽できた別名【おつきみやまの七人抜き】!!お前達にも挑戦してもらおうぞ！」
「え、強制ですか…？」

『ナゾオ…？』

「当たり前だろう！そうでなければハナダジムに挑戦することは不可能！もう一度おつきみやまに戻るんだな！ハッハッハ!!!」

「はあ…」

『ナゾ？』

テンション高く叫ぶ青年にヒナはため息をついて面倒そうに7人のトレーナーである彼らを見た。ゴールデンボールブリッジなんて名物があつたのかさえヒナは知らないし、カスミから聞いたことがないためなんか妙だなと辛気臭そうに見ていたのだ。いきなりできたと言うのならわかるが、それでも名物と彼らが言うため、嘘でなければ

少々おかしいとヒナは考える。そんなヒナに抱きしめられているナゾノクサは彼女の顔を見上げてから身体を少々傾けて可愛らしく鳴き声を上げたのだった。

そしてヒナが何を考えているか知らない彼らはただただ早くバトルするのかしないのか決めろ！と叫んでいて、バトルをしなければ通すつもりはないのだなと分かり、仕方なく懐からボールを手に取った。

『ナゾ?』

「ナゾノクサはここで見ててね?…よし行くよ、ピチューー!」

『ピツチュウ!』

ボールからピチューを出して電撃を軽く放ちながらも好戦的に彼らを見ることにより、試合開始の合図となった。

.....

「おめでとー!!」

「おめでとー!見事僕たち7人に打ち勝つことができたね!」

「はあ…」

『ナゾツ!』

『ピチュウ…』

彼らのポケモンを7人連続で相手したピチューが疲れもしないような声を出して苦笑する。ぶっちやけ楽勝すぎでしょとピチューが思わず言いたくなるほど、彼らのポケモンは育ちきつていなかった。

しかもピチューはただ10まんボルトを行っただけで彼らのポケモンたちは倒れていったのだ。まるで倒れるのが当たり前だともいうかのような対応にヒナはますます疑わしい目で彼らを見て、そしてピチューはナゾノクサが何か問題を起こさないように守りつつ、ヒナたちの会話を聞いている。ナゾノクサは何もわからないようでもまだ身体を傾けていた。ただ不穏な空気というのは親でもあるヒナから感じ取っているのか、少々居心地悪そうにしている。

何かトラブルが起きる前に退散した方が良いかもしれないと、ヒナは作り笑顔で彼らを見てから言った。

「あの…もうハナダシティへ行っても良いですか？ちゃんと約束通り7人抜きしましたし…」

「うんそうだね！でもその前に君のポケモンは全て置いていってもらおうか」

「抵抗すればどうなるか分からないぞ？」

「ナゾノクサはいらなくねえか？弱そうだし…」

「いや、ピチューがあそこまで強かったんだ。見た目だけで判断しない方が良い」

「おいまだボール持ってんじゃねえのか早く出せ！」

「嫌です」

『ピッチユウ！』

『ナゾ…？』

彼らの手がヒナに伸びる前に、ピチューの電撃が降り注ぐ。だが彼らも結構やるようで、ピチューの電撃が身体に当たる前にカラカラが電撃を吸い取っていた。

恐らくひらいしんの特性を持っているのだろうとヒナは判断して、ピチューを見る。ピチューも電撃は効かないと理解したのか、小さな尻尾にあるまじき威力で地面に叩き

つけ威嚇し始めた。

そして、やつぱり悪党だったのかとため息とつきながらも、襲ってきたからには捕まえてジュンサーさんに渡さないといけないと考え、すぐに思考をハナダシテイに着くとから切り替える。

襲いかかってきた青年たちはピチュウの強さをバトルを通じて分かったからか、不敵な笑みを浮かべてヒナを見ていた。

「ハッ！お前みたいなのがでてるっていうんだ？」

「帽子は古いが…その新品のリュックといいシューズといい…やつぱまだ新米トレナーなんだろ？そのポケモンは親から譲り受けたのか？」

「ママのポケモン貰っちゃったんだー良いでしょーってか」

「ギャハハハそんな感じなんじゃねえの！」

「ほらほら早く渡した方が良いぜ？俺たちは組織で活動中なんだからな」

「組織？組織ってことはギンガ団とかプラズマ団とかそういう悪党の集まり？」

気色の悪い彼らから気になる言葉を聞いてヒナは思わず聞いていた。組織という言葉には4年前活動していたのを見た彼らのことを思い出したからだ。もつとも、4年前に活動していた組織は全て兄であるサトシの手によつてその組織の在り方を変えたか、叩き潰されたかのどちらかなのだが……。まさか今になつて悪の組織とやらが再びできるとは想像しにくい。特にポケモンに対して乱雑に扱う悪を嫌う兄がいる限り。

だが彼らは【組織】という言葉を使ったのだ。それがヒナは気になつていた。ヒナが聞いた言葉に、青年たちは悪どい笑みを浮かべて口を開いて言う。

「お？何だ知つてんのか？ハツハア！俺たちはその中で最も悪に近い存在ロケット団の集団さア！」

「ロケット団つて…あれは悪党の集まりじゃないわ。ちゃんと国際警察やポケモンレンジャーに協力している立派な組織よ！」

「ギャハハハそんなの知るかよ！」

「そうそう！無駄なおしやべりはここまでにして…さっさと終わらせようぜ！」

7人のトレーナー達が7人抜きでは使わなかつたポケモンを一斉に出して攻撃しようとしてくる。それを見てヒナは懐にあるボールを手にして投げようとした――

そんな時だった。雷鳴が地面に向かって降り注ぎ、襲いかかってくるポケモンたちの行動を停止させてしまうような轟音が響き渡るまでは。

その雷鳴を、ヒナは知っていた。一步一步まるで地獄の門が開くかのようにこちらに向かつて近づく足音の気配を、ヒナは知っていた。

「まさか……」

『ピ……チュウ……』

『ナゾオ?』

「なにやっつてんだ？」
『ピイカッチュウ?』

「「「「「フボオオオツ!!!」」」」」

とたんに聞こえてきたのは、青年たちの痛そうな悲鳴と打撃音。彼らのポケモン達が雷鳴によつて驚いていたが、すぐに乱入してきた人間とポケモンを見て警戒していた。その警戒はすぐ無駄になるのだとヒナは知ってはいたのだが。

「お兄ちゃん何やってるの!?!というか何でハナダシティの近くにいるの!?!」

『ピチュウウ!?!』

『ナゾ?』

「お兄ちゃんにもいろいろあるんだぜヒナ…とりあえず、いろいろ聞きたいことあるからためえら覚悟しろ」

『ピイカア』

「このチビのお兄さんってことか?」

「グツいきなり殴りかかりやがってふぎけんじゃねえぞ！」

「おいお兄さんに世の中の悪つてもんを教えてやろうぜ！」

「ギャハハハ！それ良い案だな！チビのポケモンとあいつのポケモンで一石二鳥つてな
！」

「安心しろよおにーさん？アンタのピカチュウはうまく使つてやるからさア？」

「殴られた分もおかえししねえとな!!」

「チビ痛めつけるだけじゃ済まさねえぜハツハア！」

「ああ？てめえら今なんつた？」

『ピイカ？』

あ、これ死んだ。

若干苛ついていた兄とピカチュウの様子が一変して、いまかなりブチギレてますとでもいうかのような表情になる。青筋を浮かべた額に、思わず土下座したくなるような凄

みの効いたとても低い声。そして極めつけはピカチュウの強い電撃。

ヒナとピチューは思わず真顔になってこれから行うであろう兄とピカチュウの所行を見ないようナゾノクサの視界を覆うことに専念したのだった。

彼らが無事であるよう祈ったところでどうにもならないと知ってはいたからだ。

——
とりあえず、合掌。

.....

ハナダシティの行く途中にある小さな道。そこには異様な集団がいた。

顔のパーツである目や口がまるで埋め込まれているかのように肌が赤く張り上げられ、頭をアフロのようにじりじりに焦がして泣きはらし正座する7人の青年たち。そしてその傍らにはポケモンたちが寄せ合って怯え震えているのも見える。

そんな彼らが見ているのは両腕を組み仁王立ちして笑う青年とピカチュウ。そして

その斜め後ろには顔を引き攣らせてナゾノクサに見せないようにしている少女とピチューの姿。

もしもここに何も知らない通行人が来たのなら、ピカチュウを肩に乗せている青年が加害者なのだと言言できるほどかなり可哀想な光景ができあがっていたのだった。

「す…ずびばせん…グズっ…」

「ちよ、調子になってまじだあ」

「おにいさんがまざかポケモンマズダーだなんてじらなくて…」

「グズ…妹さんとお兄さんに危害をぐわえるようなごどじでずいません」

「俺達だだのバイドで組織でば下っ端の下っ端なんです…」

「もう悪さばしません…」

「ごべんざさい…」

「感情が足りねえ、もう一回」

『ピイカ』

「お兄ちゃんこれ以上は駄目っ!!!」

『ピッチユウ!』

『ナゾ!ナ…ナゾ?』

ヒナとピチューの悲痛な声を真似して叫ぶナゾノクサは、何が起きたのか現状を理解せずヒナに抱きしめられつつも…ただ身体を傾けていたのだった。

第八話くそれは、伝説と皆は言うく

「えつと…お兄ちゃんこの人たちどうするの？」

「……チツ」

「ヒイ?!」

兄が懐から取り出すモノが凶器か何かだと思っただけらしい悪党たちは舌打ちの音によつて緊張が限界突破に陥り、泡を吹いて気絶してしまった。兄は動かなくなった彼等を横目で見ながらも、懐から取り出した最新型のポケナビに連絡を入れていたようだ。ナゾノクサが興味津々で兄のポケナビを見つめているのが見えて私はちよつとだけた

め息をついた。

何コールかの後、女性の声が聞こえてくる。

「おつきみ山のふもとにポケモン盗もうとした連中がいるからジュンサー呼んで来てくれ」

【はあ？いきなり何言ってるの——】

ピツという機械音とともにポケナビの通信機能が閉じられ、女性の怒ったような声は聞こえなくなる。そして縄で縛った悪党たちを置いて私たちに近づいてきた兄に、複雑な表情を向けながらも口を開いた。

「今のつて…カスミさん？」

「ああ、ハナダって言ったらカスミだろ？」

「いや意味わかんないから」

兄の言っていることは知り合ってばかりの人ならば理解できないと思う。

つまり兄は悪党を捕えてそのままにしておくことができず、かといって自分が捕えたと言えば兄の立場から考えて大騒ぎになると分かっているからハナダシテイのジムリーダーであるカスミさんに後のことは頼んだと言ったのだろう。怒りっぽい所があるカスミさんだけでも、それでもちゃんと兄の言う言葉を理解してやってくれるはずだ。それでももう少し言い方つてもものがあつたんじやないかと私は思う。

4年前ならもうちよつと言語力があつたような気がするんだけどもしかしたらそれらは全てバトルの方へと流れていったのかもかもしれない。

「行くぞヒナ」

「行くつてどこに?」

「面白い所」

何処だそこは

場所について聞いて聞いていても兄はちゃんと答えてくれない。ピチューは兄のピカチュ

ウに話しを聞こうとしているけれど、ピカチュウもピカチュウあるまじき表情で苦笑して言葉をはぐらかしているようだ。でも兄が面白い所と言ったら本当に面白い所なんだろうと考えて私は素直に従った。

後ろにいた悪党はそのまま放置で…でも可哀想だから早くカスミさんが来れるようにとピチュウに空に向かって電撃を放ってもらいながらも。

その後、ピチュウをボールにいれた私は兄の横に行く。そしてそのまま…ちよつとだけ静かになる空気になりつつも、私は兄の向かう方向へと歩く。

兄は4年前とは違って喋ることが少なくなつた。イツシユ地方に旅してた時は結構喋っていたのだけれど、カロス地方から戻る頃にはポケモンを見た時の子供っぽさは消えて口数が減っていたのを覚えている。…まあ、怒る時は容赦なく激昂してキレるし、感情とかも表情に表れて言葉も増えるからあまり変わってないようにも感じるけれど、こうして歩いて見ればやっぱり静かになつたなと思う。でもそんな静かな空気は苦手じゃない。森の中で聞こえるポケモンの鳴き声や自然の音を聞きながら私たちは森の中を歩く。静かだからこそ聞こえてくる音に耳を傾ける。

そしてナゾノクサが楽しそうにはっぱをゆらゆらと動かしながら兄やピカチュウを

見ているのに気づいて私は微笑みながら観察する。昔から幼いポケモンの世話をよくしていたピカチュウはナゾノクサの興味が自分に向いているという視線を感じたのか、私の肩に乗って抱きしめているナゾノクサに挨拶をしていた。ピカチュウの声にナゾノクサは反応して笑うように鳴く。ピカチュウ尻尾とナゾノクサのあたまの葉っぱが触れ合って楽しそうだなと思った。

それを見ていた兄が口を開いて私に聞く。

「そのナゾノクサはどうしたんだ？」

「おつきみやまでピチューが拾ってきたたまごから生まれたの」

「生まれたばかりか」

「うん。ちよつと変わってるところもあるけどね」

『ナゾ?』

『ピイカツチュ?』

変わっている所について兄は深く聞かず、ただ小さく頷いてそうかと呟く。ポケモンに個性があるのを兄はよく理解しているからこそその声だなど私は理解しつつも、ちよつ

とだけ複雑な思いのまま兄に向かって言う。

「なんか微妙」

「……何が」

「まだ旅をし始めたばつかなのにいきなりラスボスに会った気分なの」

「だいたい合ってるな」

「…お兄ちゃんなんでこっちに来たの？山にいる皆は？」

「用事があつて来た。山はフシギダネに任せてる」

「用事って？」

「聞くな」

「セレナさんは？」

「ポケモンパフォーマーの仕事」

兄はこの世界のトレーナー達の頂点…ポケモンマスターだ。今はシロガネ山に住んでいるが、それはポケモン達のためだと兄を良く知る皆が理解している。

ポケモンの組織機関によつて話が来た当初、夢が叶つたと兄は笑っていたが、その表情はどこか悲しそうだったのを覚えている。ポケモンマスターはまだ夢への通過点に

過ぎないのだとセレナさんは言っていたし、シゲルさんから聞いた話もよく覚えているからこそ、兄はうまく笑えずにいたと分かった。そんな兄にできることはあるのだろうか。私は思う。まだまだ新米トレーナーだからこそ、私はやるべきことをやらなければいけないのだ。

.....

兄によって連れられた先にいたのは、キラキラと輝く石の塔。

見たことのない造形とハナダシティでそんなモノが作られているだなんて知らない私は驚いた。前にテレビでカロス地方特集でやっていたヒヤッコクシティの日時計に似ていた。形ではなく、色や輝きが似ていたのだ。

日が当たれば、寶石の塔にもなりそうなほど綺麗だと感じた。

「こんなのがあつたなんて」

「綺麗だろ」

「うん」

『ナツゾオ!』

「あ、こらナゾノクサ!!」

『ピイカツチュ』

ナゾノクサが私の腕から飛び降りて石の塔へ向かう。それを見て私は追いかけてようとしたのだけれど、私の肩に乗っていたピカチュウがやれやれと言うかのようにため息をついて、ナゾノクサを追いかけて逸れるのを阻止して立ち止まられてくれたため大丈夫だと判断する。

ピカチュウにお礼を言ってからナゾノクサを抱き上げて、そして兄に向かって聞いた。

「お兄ちゃんこれってなに? ハナダシティの近くにこんなあったらすぐ大騒ぎになると思うんだけど…」

「何だと思う?」

「え?」

「お前には何に見える?」

兄が言っている言葉の真意はつかめない。というよりも、教えてくれる気はないのだろう。兄はいつも何か大事なことはうまく隠す。だから私は石の塔を見上げて兄が聞きたい答えを考えた。教えてくれないのならば、自分で考えて答えを見つけなければいけないから。

石の塔はとても輝いていて宝石のようにキラキラとしている。周りにある樹木が違和感にならないほど綺麗にその場に収まる姿。その雰囲気、私は知っていた。つい最近見たその感情を、私は理解していた。

「ポケモン…というより、ポケモンのたまごみたい」

『ナゾオ?』

「…まあ、及第点だな」

『ピイカ』

兄は小さく頷いて微笑んでくれた。兄の言葉に私とナゾノクサは首を傾げる。ああいや、ナゾノクサは首がないから身体を傾けると言った方が良さだろう。

兄はこちらに近づいて私の横に立ち、石の塔を見上げた。

「これが何なのか知りたかったらシンオウ地方に行ってみる」

「ちよつと遠いけど…分かった」

「行くぞ」

「どこに？」

「ハナダシテイ」

ジム戦あるんだろ？

そう言った兄の声に私は頷いて歩き始めた兄の後を追う。一度だけ後ろを振り返り、石の塔を見てからすぐに前を向いて歩いた。石の塔について兄は何も教えてはくれなかったけれど、シンオウ地方というヒントはくれたから行けばわかるかもしれない。シンオウ地方と言えば師匠は何してるかな。少しだけ懐かしく思いながらも木の葉の揺れる音を感じつつ歩いていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ここからまっすぐ行けばハナダシテイだ」

「え、お兄ちゃん行かないの？」

「用事があるからな」

ハナダシテイの近くで兄はここで別れようと言ってきた。その言葉に私は無理に引き留めようとはせず、分かったと頷く。兄がハナダシテイに行つてトレーナーにでもあつたら大騒ぎになると私は知つているし、兄は兄で用事があると云つてゐるからここから先は別れて行動すると言ふ意味を理解した。

ちよつとさみしくなるけれど、ここから先は私の旅に戻るだけだから仕方ないだろう。そんな私に兄は小さく笑つて近づいた。

その両手には何やら布の小さな袋を持つてゐるのが見える。巾着袋にも見えるそれは、モンスタールボールが一つ入るぐらいの大きさしかない。袋には片方がピカチュウのような黄色い色、そしてもう片方はリザードンのようなオレンジ色で染められていた。

何時の間に両手で持つていたのだらうと首を傾けてゐる私に、兄は口を開く。

「どつちがいい?」

「えつと…」

『ナツゾォ!』

「こつちか…分かつた」

私が戸惑ってどちらの袋を選ぶのか悩んでいたら、抱きしめていたナゾノクサがすぐさまこっちだ！とでも言うかのように鳴き声を上げてオレンジ色の方を選んだ。そのオレンジ色はナゾノクサにとって大好きな炎に似た色だったから選んだのかと私は考え、兄から受け取ったオレンジ色の袋の中身を覗き込んだ。

———
すぐにその袋を閉じて兄を見てから叫ぶ。

「何でこれ入ってるの!？」

『ナゾオ?』

「使いどころ間違えるんじゃないやねえぞヒナ」

『ピツカア』

兄が言った言葉に私は何度も頷いた。これはしばらく出してはいけないものだ。ポケモンたちが触れない場所に置いておいた方が良くと考えてリュツクの奥の奥までしまいこんだ私に、兄は帽子の上から頭を撫でた。

「またな」

『ピイカ』

「……うん、またね」
『ナゾ!』

兄がモンスターボールからポケモンを出して、どこかへ行ってしまうのを見届ける。急にきて急に去って行った兄だけけど、トレーナーとして上を目指していけばまた会えると考えて私はナゾノクサを連れてハナダシティへ走って行ったのだった。

第九話～水の少女～

「待ってたわよヒナちゃん！あの馬鹿どこ!？」

「えっと…お兄ちゃんならもう行っちゃいましたけど」

「畜生逃げやがったってことね!」

「逃げたって言えるのかな」

『ナゾ?』

ハナダシテイに着いてポケモンセンターに向かおうと歩き出す私に向かつて走ってきたハナダシテイのジムリーダーことカスミさんが怒った表情で兄が何処かと叫ぶ。もちろんもう兄はいないのでカスミさんは物凄く激怒していた。たぶん悪党をジュンサーさんに捕まえてもらうという面倒な仕事を押し付けられたせいだろうと私は一歩

カスミさんから離れた。

八つ当たりはしれないと思うけれど、カスミさんが怒ると怖いのはタケシさんや兄を通じて分かっているからだ。

だから私は少しだけ苦笑しながらもカスミさんに質問してみた。

「あの悪党達は捕まりました?」

「ええ…ええ、そうね。捕まったわ。私があいつから意味不明の連絡をもらって直々にね!」

「ご、ごめんなさい」

「あら、ヒナちゃんは気にしなくていいのよ。ハナダの外れで見た空に上がる雷撃ってヒナちゃんのピチューのお陰でしょう? ありがとうね、すぐに見つけることができたわ」

「そう…ですか…」

カスミさんに怒られることはなかつたけど、兄と同様に私もある意味悪党達を捕まえて縛りつけてから放置したままだったので微妙な心境だった。…ま、まあちゃんと捕まったのならいいかと気持ちを入れ替えた。

「あの、カスミさん」

「何、ヒナちゃん」

「バトル：してくれませんか？あの約束を果たすためにも」

「っ！…そっか、そういえばヒナちゃんはトレーナーになったのよね。分かったわ！受けて立つっ!!」

「ありがとうございます!!」

『ナゾ!』

ナゾノクサは私たちが何故気合いを入れた顔で叫んだのか理解していないようで、ただ私を真似して鳴き声をあげていた。

懐のボールがゆらゆらと揺れるのを感じながら、私はカスミさんとハナダジムへ目指して歩いた。

.....

「あああヒナちゃんじゃない！久し振りねえ!!」

「サクラ姉さん、審判お願い」

「ジム戦するの？もうそんなに時が過ぎてしまったのねえ…」

「感慨深い顔してないで、審判してよ！」

「はいはい、カスミつてばせつかちさんなんだから」

「そういうことじゃないでしょう!!」

「ハハハ…」

『ナツゾオ?』

サクラさんはとても綺麗な顔でそんなに時間が経つのが早いなんてと独り言を言っていたが、カスミさんのお陰で審判をし始めてくれた。

サクラさんの声が、ジムにあるプールで響き渡る。

「それでは、ジムリーダーカスミと、挑戦者ヒナちゃんによるバトルを始めたいと思います！勝負は1対1——」

「——2対2よサクラ姉さん」

「あらあら…勝負は2対2で行います。挑戦者の使用ポケモンが戦闘不能になった時点で負け。それでは、ジムリーダーからポケモンを出してください」

「私はもう決めてるわ！いくのよマイステディ!!」

『シユワツツツ!!』

「スターミーか…なら私は——」

『——ナゾ!』

「え?」

『ナツゾオ!!』

プールでスターミーを見たナゾノクサが私の腕の中で激しく揺れ始め、降りたいたいってってきた。だから降ろしてあげたら、なんとプールの足場となる場所に飛び降りたのだ。

どういふ心境の変化なんだろうと思った。ナゾノクサは水が苦手で、プールなんて絶対に飛び込みたいとは思わないはずなのに。

『ナゾナツゾ!』

「もしかして…リザードンやピチューのようにバトルしたいの?」

『ナゾ!』

「中は水だらけだよ?怖くないの?」

『ナツゾ!』

ナゾノクサがやる気充分で答えるから、この場はナゾノクサがやりたいようにやらせてみればいいかなと思った。

ポケモンがやりたいと叫ぶのならば、私は止められそうにないからだ。

サクラさん達もナゾノクサが出ると分かったらしい。審判としての手が上がる。

「えーそれでは、スターミー対ナゾノクサのバトルを始めたいと思いますー試合開始!!」

「スターミー一気に行くわよ!ハイドロポンプ!!」

『ヘアッツツ!!』

「ナゾノクサ、右の足場にジャンプ!」

『ナ、ナゾ!!』

ナゾノクサがスターミーによって大きく発射された水に慌てふためき、右の足場にジャンプしてなんとかかわすことに成功した。

それでもやっぱりレベル差やバトル経験不足からくる動きの拙さは見分けるレベルだ。私はなるべくナゾノクサが水を怖がらないように、そしてトレーナーとして出来

ることをしようと拳を握った。

「ナゾノクサ、落ち着いて足場を見て移動して！スターミーに近づく！」

『ナゾ！』

「どうしたのヒナちゃん？私に勝つっていうのならそんなのんびりしていいのかしら？
スターミー、なみのりよ!!」

『へアツツツ!!!』

『ナア…ナゾオ!!?』

「大丈夫よ落ち着いて！ナゾノクサ、そのまま足場で上に向かって大きく飛んで!!」

『ナツツツオ!!』

ナゾノクサが足場から大きくジャンプしたことによって、すさまじい勢いでやってきた波に巻き込まれずにすんだ。でも空中にいるのは変わらないため、私は慌てずにカスミさんとスターミーを見る。

「空中なら隙だらけよ！スターミー、れいとうビーム!!」

『へアツツツ!!!』

「ナゾノクサ、身体を左側に捻って回転！」

『ナツゾオ!!』

「なっ!?!」

『へアツツツ?!』

空中で慌てずに私の声を聞いたナゾノクサは、れいとうビームを避けることができた。しかもれいとうビームをかわしたことでできた冷たく凍っていく空への道を恐れずにナゾノクサはそれを足場にしてしまう。

あれ、ナゾノクサって何タイプだったっけ？

「悩むのはあとよねっ！ナゾノクサ、そのまま走ってスターミーにすいとる!!」
『ナゾ!』

ナゾノクサが勢いよく氷でできた道を走ってスターミーに【噛みついた】…あれ、すいとるって噛みつく技だったっけ？

カスミさんは微妙そうな顔でそれを見たようで、苦しんでいるスターミーといまだに噛みついてるナゾノクサに舌打ちをした。

『へアアアツツツ?!?』

「…すいとるといふより、まるで【きゆうけつ】ね。スターミーそのまま放電しちゃいなさい！10まんボルト!!」

『へアツツツ!!!』

『ナツツゾオ!!?』

「ナゾノクサ!!!」

すいとるでなんで噛みつくのかとか疑問に思わない方がよかった。ジム戦なのだからしつかりとナゾノクサに指示をしなければならなかった。

10まんボルトを直に浴びたナゾノクサは耐えられるわけもなく、足場でふらついてそのまま倒れたのだった。

サクラさんの声が、プールで響く。

「ナゾノクサ戦闘不能！スターミーの勝ち！」

「ごめんねナゾノクサ…私のせいで痛い思いしちゃったね」

『ナゾ…ナゾオ』

「…ありがとう」

スターミーによって私のもとへ運ばれたナゾノクサにすぐ近寄り抱き上げる。ナゾノクサは文句を言わず、私の言った言葉を聞いて笑っていた。泣かずに笑っていたのだ。大丈夫だといっているようにも感じて、私もちよつとだけ笑ってオレンのみをナゾノクサに食べさせてからボールの中へ入れる。

もう一度だけ、ありがとうとお疲れさまを言ってから、プールを見た。

私は懐からボールを出す。

「やっぱりここは…ピチュー、お願い！」

『ピイツチュウ!!』

「来たわね、ピチュー」

『ヘアツツツ!!』

「それでは、スターミー対ピチュウのバトルを始めたいと思います！試合開始!!」

試合開始の合図と共に、雷撃がプール内を駆け巡る。私のピチュウの10まんボルトと、スターミーの10まんボルトが放ち合いになったからだ。

10まんボルトはそのまま爆発して、黒煙をプールに撒き散らす。

「ピチュウ、ボルテッカー！」

『ピイツチウ!!』

「スターミー、れいとうビーム!!」

『ヘアツツツ!!』

「かわしてからもう一度10まんボルト！」

『ピイチウ!!』

ボルテッカーで近づくピチュウに向かってれいとうビームが放たれることなくぐさまかわされる。そして10まんボルトを放ったピチュウに、スターミーもお返しと10まんボルトを放った。このままだと長期戦になると感じた私は、黒煙があがるのを見てこっそりとピチュウに向かって指示をした。

「スターミー、ハイドロ——つな？いつの間にも!?」

『へアツツツ?!』

ピチューが黒煙から飛び出して近づいたことに気づかなかったカスミさんとスターミーが驚きの声をあげる。

その隙を狙って、私は叫んだ。

「ピチュー、10まんボルト!」

『ピイツチュウ!!』

『へアアアツツツ!』

「スターミー!!」

スターミーはピチューの10まんボルトを浴びてそのままプールに落ちていく。プールが雷撃によって黄色く光った後、浮かんできたのは己の中心を点滅させたスターミーの姿。

サクラさんの声がプールで響いた。

「スターミー戦闘不能！」

「ありがとうスターミー…ゆっくり休んで」

『ヘアツツツ』

「よしピチューありがとう！」

『ピイツチュ!!』

「ふふっ！なんだか四年前に戻ったみたいね…でもあの時のように負けるつもりはないわ！いくわよマイステディ!!」

カスミさんが出したボールからでできた相手に、私とピチューは冷や汗をかいた。

『コツパア?』

なにもわからないですというようにとぼけた顔。ピチューと似た黄色いボディ。

その恐ろしさを、私とピチューはちゃんと理解していた。

「手強いのにきちゃった…」

『ピチュユ…』

このあとのバトルが苦戦するのは嫌にも分かるため、私は気合いを入れるために帽子を深くかぶり直した。

第十話～一步間違えば負ける～

コダックという生き物は、何も知らずに初めて見たトレーナーからだとそのポケモンが強いという印象は感じられない。進化すれば成長は期待されるし強いかもしれないと思う人が増えるが、コダックよりもほかのポケモンを育てたいというトレーナーの方が多いぐらいだ。

黄色いボディにちよつと真面目そうには見えない顔、そしてぼんやりとした性格。とぼけた表情に騙されるトレーナーは数多く存在していることだろう。

そんなコダックを手持ちとして育て上げたカスミさんが恐ろしかった。

『コッパア?!』

『ピイツチユウ』

ピチューがコダックを警戒して睨みあげている。でもコダックはただ首を傾けているだけ。何も知らないトレーナーならただのコダックかと笑うだろうが、それはコダック自身の力を理解していないための事実。

私とピチューはカスミさんのコダックを見てごくりと生唾を飲み込む。サクラさんが両手をあげるのを今か今かと待ちわびた。

「それでは、コダック対ピチューのバトルを始めたいと思います。試合開始!!」

「ピチュー、早く終わらせるよ! 10まんボルト!」

『ピイチュ!!』

「サイコキネシス!」

『コペア』

ピチューの10まんボルトがコダックに向かって一直線に放たれる。

でもカスミさんは何も心配していないという表情でコダックに向かって指示をした。

10まんボルトはコダックにとって弱点となるのに、それは大丈夫だと分かっているか

のように。だがそれは現実となった。

コダツクがサイコキネシスで自身へと向かってきた10まんボルトを操って止めたのだ。10まんボルトとして発せられた電撃の光が空中で止まる。バチバチと鋭い音と細かな光が当たるはずだったコダツクの真上で止まり、そのまま空中を回っていた。

雷撃が呆気なく止められたことに、私とピチューは驚愕する。

「嘘っ!？」

『ピッチュウ?!』

「そのままお返しししちやいなさい!」

『コツパア』

電撃がサイコキネシスによってピチューへと向かって行く。ピチューが慌てて避けようと逃げているのに電撃はピチューの後を追い掛けるかのように動き回る。サイコキネシスによって意志を持って動くその電撃に、このままでは直撃してダメージを食らうと考えて私は口を開いた。

「くっ…でんげきはで躲して!」

『ピイチチュウ!』

ピチュウの放ったでんげきはよつてコダツクが操っていた雷撃に当たり、爆発する。それを見たカスミさんはただ笑つて楽しんでた。私たちはコダツクの脅威に少々焦つているというのに、カスミさんはそれらすべてを楽しんでコダツクに指示をしていた。そういうバトル好きな部分は兄に似ているなど感じながらも、ピチュウに向かって口を開いて叫ぶ。

「ピチュウ、一気に接近してからアイアンテール!」

『ピッチュウ!』

「コダツク、ハイドロポンプ!」

『コペア』

「上にジャンプして回転!」

『ピチュウ!』

ハイドロポンプがピチュウに向かって迫ってきたが、それを躲すために飛び上がる。そのまま回転し、勢いをつけた状態でコダツクの頭上にアイアンテールを放った。

コダックはアイアンテールによってフラフラとしていたが、それでもダメージは少ないようですぐに顔を左右に揺らして意識をはつきりとさせ、一体何が起きたんだというような表情で周りを見ていた。

もちろんカスミさんはそんなコダックに仕方ないわねと言うかのように笑っていた。アイアンテールのダメージを与えられてもまだ大丈夫だとはつきり理解しているようだと分かった。

『コッパア!?!』

「大丈夫よコダック! なみのり!」

「こっちもなみのり!」

『ピチュウ!』

コダックのなみのりとピチュウのなみのりが激突する。プールの水が波によって極限にまで減っていき、そしてピチュウ達が発生させた大波によってぶつかりあいプールからあふれ出ていく。頭上からシャワーとなって降り注いだプールの水が冷たく感じ。でも水浸しになってしまったという思いはなかった。ただ前を向いて叫ぶだけ。

「ピチュー、もう一度でんげきは！」

『ピッチュウ！』

「コダツク、サイコキネシスでお返しよ！」

『コパア』

「でんこうせつかでコダツクの後ろに回り込んで！」

『ピチュー！』

コダツクが電撃に当たらないようにサイコキネシスを使うのは分かっていた。サイコキネシスでピチューに向かって電撃を操ると言うのならコダツクにそれが当たるように後ろに向かえばいいのではないかと思っただけだ。サイコキネシスで電撃を操る方法はかなり難しいのではないか、ピチューの後を追っている電撃に当たらないようにしなくても隙が生まれるのではないかと考えた発想だった。

ピチューがすぐさまコダツクの後ろに回り込んで操られている電撃を待つ。コダツクはこの後どうしたらいいのかカスミさんを見ていた。カスミさんはただ、小さく微笑んでいた。

「甘いわねヒナちゃん！コダツク、爆散させてしまいなさい！」

『コパア』

「えええうっそお!!? ピチュー逃げて!!!」

『ピツチュウウ!!?』

コダックが操っていた電撃を広範囲に広げて爆発を起こさせていた。バチバチと光るプール内に爆発と黒煙が舞いあがる。私はとっさに手で顔を隠して爆発から身を守った。でも近くで起きたコダックにとつてそれは自爆にも等しい行為なのではないかと思っただけけれど、あのカスミさんがやることだから絶対に意味があると思っぴチューに逃げるよう指示をした。ピチューはスピードが速くすぐに逃げることに成功したが、それでもダメージを負ったようであつただけふらついていた。

「大丈夫ピチュー!!?」

『ピ、ピツチュウ!』

『コパア』

ピチューが力強く鳴き声を上げてコダックを見た。そして私もコダックとカスミさんを見た。爆発によってプールにわずかに残された水分が吹っ飛び、黒焦げを残してい

るほどの威力があつたのだと分かるぐらい酷い有様になつていたのに、コダツクの周りには爆発が起きずダメージも通つていないのだと理解できる光景——真つ白な円が刻まれていた。

サイコキネシスを鍛え上げたらここまで強くなるのかと思えるほどの威力だ。

「さてヒナちゃん。ここからどうやって勝つてみせるのかしら？」

「とにかくやって見せますよ!!…ピチュー、痛い思いをすと思うけどそれでも頑張れる?。」

『ピッチュ』

サイコキネシスによる防御と攻撃の鋭さは理解できた。電気技で攻撃しようとするば跳ね返されることも理解した。だからこそこれからやることはピチューにとつて少々ダメージを食らうやり方になる。でもそれしか方法がないと分かったから私は覚悟を決めた。ピチューも私の言葉を聞いて覚悟ができたと頷いた。

「ピチューもう一度でんげきは！」

『ピイツチュウ！』

「何回やっても同じよ！コダック、サイコキネシス！」
『コッパア』

でんげきはコダックのサイコキネシスによつて操られピチューに向かうのが分かった。サイコキネシスを使う間は他の技が使えないと言うことが分かっているから、コダックよりもスピードが速いピチューに向かって指示を飛ばす。

「今よ！コダックに向かってしがみつく！」

『ピチュー！』

「なっ?!」

『コッパア!?』

「そのまま10まんボルト！」

『ピイツチュ！』

『コパアアアア!!!』

「コダツク!!?」

コダツクの腹にしがみついたピチューは10まんボルトを放つ。直接電撃技を食らったコダツクはダメージのせいかサイコネシスで操っていた電撃を避けるようにすることができず、ピチューとコダツクの腹に直撃する。ピチューは己の電撃を食らってしまつたが、それでもまだ平気なよう電撃を放つのを止めない。コダツクは痛みからか涙を流していた。

「コダツク!そのままピチューをひつかいて叩きつけなさい!」

『コパア!』

「ピチュー、耐えて!そのまま10まんボルトよ!」

『ピイツチュウ!』

コダツクは腹にしがみついているピチューに向かって鋭い爪でひつかく。そして痛みからか離れてしまったピチューを水がなくなつたプールの床へ叩きつけた。それでも電撃は止まず、コダツクにダメージを与えることに専念するピチューに頑張つてと私

は叫んだ。

電撃とひっかくたたきつけるによる攻撃はやがて爆発を引き起こして攻撃が止んだ。立ち上った煙が消えていき、見えてきたのはピチユールとコダックが倒れている姿。

「両者引き分け！」

サクラさんの手が上がったのを見て、私は息をゆつくりと吐いた。

.....

コダックの弱点が電気技でなければ倒れることはなかっただろう。ピチユールが頑張って電撃を放ち続けてダメージを蓄積していなければ私たちが負けていたことだろう。ピチユールが勝ちたいと気力を出し続け、コダックに向かって電撃技を放った。そのおかげで引き分けにできた。でも、一步間違えていれば私たちはすぐ負けていただろう。

電気技を受けてもずっと倒れず怯まず攻撃をしたコダツクの姿勢に感嘆するが、引き分けとなったからにはまたジム戦で相手するかもしれないと思った。

ピチューを抱き上げてお疲れさまと言ひ、ボールに入ってもらった。カスミさんやサクラさんに礼をして、ジムから出ようとする。

「ちよつと待ちなさいヒナちゃん！どこいくの？」

「えつと…引き分けになったのでもう一度挑戦するためにちよつと修行しようかなと…」

「そんなのはいらぬわ。まあ、もう一度戦つてみたいって言う気持ちはあるけどね。はいこれ！」

「え!?これって……」

「ブルーバツチよ！ヒナちゃんの持つてる古いバツチと交換しましょう！」

カスミさんが私に渡してくるブルーバツチに、何でという疑問が沸き起こった。ジム戦をして勝つこともできず引き分けになったと言うのに、何故バツチを渡してくるのだろうか。

でもカスミさんはサクラさんと顔を見合わせてから苦笑して口を開いて言ってくる。

「ヒナちゃん、4年前のあの時カスミはあなたに負けたのよ？」

「サクラ姉さんの言うとおりよ。あの時からブルーバッチを持つ資格はもうヒナちゃんにあったの。今回バトルしたのは私の我儘ってところね」

「カスミってばジムリーダーなのに本気で戦うんですもの」

「サクラ姉さんそれ言わないでよ！」

「えっと…」

手に持たせてきた新品のブルーバッチに困惑している私はカスミさんとサクラさんを見る。カスミさんとサクラさんは仲良く口喧嘩のようなことをしていたが、私の視線に気づき喧嘩を止めて言う。

「これはもうヒナちゃんのものよ。古い方のブルーバッチは…そうね、4年前の記念として私がおもらしておくわ」

「ほらヒナちゃん。カスミがそう言ってるんだから受け取りなさい。その資格はあなたにはあるわあ」

「あっ…りがとうございますー！」

じわじわとバッチチを持たせてくれた意味を理解した。ハナダジムに認められてバッチチを渡してくれたんだと分かった。私は次第に笑みを浮かべてバッチチをぎゅつと握る。

ありがとうと叫んだら、カスミさんとサクラさんは笑ってくれたのだった。

第十一話く少女はただ驚愕するく

ポケモンセンターにて人が来なさそうなバトルフィールドを借り、懐にあるボールから3体の元気いっぱいなポケモンを出した。もちろんそれは、誰か相手のトレーナーがいてバトルをするというためではない。

「ナゾノクサができる技と弱点について知っておかないとね…」

「ここはポケモンセンターだから多少の無茶は大丈夫だし、何かあればすぐに中止することもできる。」

とりあえずやるべきことは、ナゾノクサの弱点について知ることと、どのような技を使うのかについてトレーナーである私が理解しなければいけないということだ。

ポケモン図鑑に表記されていた技は「すいとる」と「じたばた」と「くすぐる」という一般的なもの。でもジム戦ではすいとるが何故か「きゆうけつ」のような行動にでたため、動揺してしまった。だからこそ、ナゾノクサを傷つけないためにも知らなければならぬと思うのだ。

リザードンにはナゾノクサの相手をしてもらって。ピチユーにはすぐ危険だと分かれば突入し、怪我を治せるようにと私の持つてるリュックごとありったけのきのみやきずぐすりを渡しておいた。必要になったらすぐにバトルフィールドに飛び出してもらって治療するためだ。

「よしやるよナゾノクサ！」

『ナツゾオ！』

ナゾノクサは笑って気合十分にジャンプしていたのだった。

.....

まずは炎が大好きだというナゾノクサに、本当に身体にも影響はないのか確かめてみる。水についても、今はできないが克服できるのかについて挑戦しなければならぬだろう。カスミさんとのジム戦はナゾノクサがやりたいと言っていたからやったが、あの時は本当に怖かった。水嫌いなのにプールの足場に飛び込んだ度胸は凄いと感心したけれど。でも度胸だけで勝つことはできない。

ナゾノクサは何が楽しいのか、時々ジャンプをしたりリザードンの周りをうろちよろしたりして遊んでいる。リザードンは炎の尻尾がナゾノクサに当たらないよう注意しているが、怒ったりはしない。むしろ慈愛に満ちた表情でナゾノクサを見ていた。

このまま眺めていたい気持ちにはなるけれど、早く終わらせてハナダシテイから出発しなければいけない。

「リザードン、ナゾノクサに向かって小さく炎を吐いて」

『グオオ!!』

「大丈夫よ！危険だと分かっただけに止めていいから」

『……グオオ』

『ナゾノクサ！』

リザードンは私の言葉を聞いてナゾノクサに向かってひのこよりも威力が弱そうな炎を吐いた。おそらくひのこや尻尾の炎と比べれば物凄く小さな火だとは思っただけれど、それでもナゾノクサが炎に耐えられるか見るためには充分の出来。

リザードンはナゾノクサが傷つくのを恐れているみたいだけれど、本当に弱点が水なのか試さないとこの先のバトルが不安になるから仕方ないこと。私だってナゾノクサを傷つけるのは嫌だけれど、トレーナーとして水と炎の弱点が逆なのかどうか試さないといけないのだから。

そしてナゾノクサはそんな私たちの思いは知らずに、放たれた炎に自ら飛び込んでいった。

「無傷なだけじゃなくご機嫌？」

『ピッチュ？』

『グオオ…』

『ナツゾオ!!』

ナゾノクサは炎の周りでヒヤッハーしているように見えるぐらいご機嫌だ。しかも火傷を負わず炎のダメージを負わず、むしろ絶好調と喋っていいかもしれない。リザードンは複雑な表情を浮かべていて、ピッチュは怪我がないことに首を傾けている。

やっぱりちよっとおかしいけど、バトルの時には有利に働きそうだと思えた。この調子だとやっぱりナゾノクサは水が弱点になるのだろう。でもバトルする際相手のトリーナーは皆ナゾノクサの弱点が炎だと認識するだろうから弱点なしに見させることができるかもしれない。

まあバトルについては今後の課題として考えていこうかな。

「よしありがとうりザードン！次はナゾノクサの技について見ていかないとね」
『グオオ』

『ピツチュ』

『ナゾオ?』

ナゾノクサは放たれなくなった炎に、もうやめちゃうの?というようなつぶらな瞳でこちらを見たがすぐにリザードンの尻尾の炎に突撃して行つたため問題ないと思いたい。リザードンは嫌そうな顔もせずナゾノクサの好きにさせてるし——うん大丈夫。

「まだ最初だからリザードンは技の回避。ナゾノクサ、リザードンに向かつてすいとる」

『グオオオ』

『ナツゾオ!』

リザードンは翼を広げて飛び、尻尾の炎を浴びるナゾノクサから離れた。ナゾノクサは私の指示を聞いて、小さな口を大きく開けてリザードンに向かつて走って行く。その様子はやっぱりジム戦で見た時と同じような「きゆうけつ」に似た行動。もういいよというまでナゾノクサは飛んでいるリザードンにジャンプして噛みつこうとしていた。

つまり、ナゾノクサのすいとるは嘯みつかなければできない行動だと知ることができた。

「よし！じゃあ次はリザードンは避けちや駄目だよ。ナゾノクサ、くすぐる」

『ナゾ！』

『グオオオオ……！』

リザードンが地面に降り立ったのを見てナゾノクサは意気揚々とくすぐりに向かった。くすぐるは相手の攻撃や防御を一段階下げるといふもの。攻撃技ではないからリザードンも傷つかないため、わざと当たってもらったのだ。そしてナゾノクサがやったのは、頭の草を使ってリザードンをくすぐらせるやり方。これはくすぐると同じような感じがするから大丈夫かな。リザードンも笑いそうになってるし。

「よしオツケー！じゃあ次は——」

「——おい見ろ！リザードンがいるぞ!!」

「うわすっげえ!!」

「始めて見た!!色違いのリザードン!!!」

「トレーナーってあんたか?!」

ポケモンセンターから走ってくる声が聞こえる。トレーナーが遠慮なくバトルフィールドに入るのが見える。

マサラタウンでたまに見かける光景が広がったことに、私とリザードンとピチューはため息をついた。ナゾノクサは何が起きたのか分からず身体を傾けていたけれど。

「来ちやったかああ」

『グオオオオ…』

『ピチユウ…』

『ナゾ?』

こんな状況になるかもしれないと思って、ポケモンセンターで人が来なさそうなバトルフィールドをわざわざ借りたと言うのに、面倒なことになった。

.....

——色違いのポケモンとは、その名の通り通常のポケモンよりも色が違うのが特徴。あるトレーナーはそんなの気にすることは無いと言い、ある人間は一種の個性だねと笑い、そしてある悪党どもにとっては金儲けとして利用されてしまうポケモン。

金儲けとして考えたりするだけでなく、大抵のトレーナーは色違いを見ればそれを欲してしまるのが特徴。ポケモン自身が弱いだけの強いだの強いだのは関係なく、まず色の違う見た目が素晴らしいと叫ぶトレーナー達が多いのだ。

もちろんマサラタウンにいた時、誰かに守ってもらった時もそうだった。色違いだからという理由で狙う連中が多いうることに私たちは知っていたし、そんな奴等根絶やしにしてやろうかと思えるぐらい苛立っているのも現状。

「なあ俺のポケモンと交換してくれよ！」

「何ってんのよ！ほら私のニョロトノと交換して！」

「狡いよ君たちっ!!僕が先だったんだからね!!」

「それよりもこっちだろ！」

「リザードンの色が黒いだなんて始めて見た！しゃ、写真撮らないと!!」

「触り心地はリザードンと変わらないのね」

「黒いリザードンつてとつても素敵！ねえ交換しましょう!!」

「待て待て待て！俺が先だつて言ってるだろ!!」

「ほら交換！ちよつと聞いているの!？」

「自分のポケモンを安易に交換に出すつてやつらはまずシルバーのチルタリスのはかい
こうせん受ける」

『ピチュウ』

『グオオ』

『……ナゾオ』

色違いのリザードンを見ただけで今まで仲間として育ててきたポケモンを交換に出す連中は許さなれないと思えるのはこういうった連中がいるせいだ。

いや、交換に出すことを嫌っているわけじゃない。兄のブイゼルのようにポケモン自

身がそうしたいと思えるのならば交換に出しても構わないし、その方がポケモン自身の幸せになるのなら是非ともやってほしいと思う。

でも今やっていることはただリザードンの身体の色が通常とは違って真っ黒だという理由でポケモンたちを交換しようとする連中がいること。たぶんヒビキやシルバーもこのトレーナー達の反応を見れば嫌そうな顔で見るとは思えないかな。最悪自ら殴りかかったりするかもしれない。そのぐらいのことを、トレーナー達はやっている。

リザードンはトレーナー達に遠慮なく触られていて不機嫌になっていた。炎を吐いて触るなど言いたいのだろうけど、自分のポケモンを色違いと交換したいというトレーナーたちなのだからたぶん怪我をさせたらいろいろと面倒なことになるとは思っている。分かっていた。だからピチューがリザードンの頭の上に乗っていて、落ち着いてと慰めている。

私の周りにも交換してくれというトレーナー達が集まっていて、このままじゃいけないと理解していた。

『ナゾ…ナツゾオ!!』

そんな時に聞こえてきたのは地響きとナゾノクサの怒ったような声。トレーナー達の悲鳴も聞こえてきて、まさかナゾノクサに危害を加えているのではと振り向いてみた。

見えてきたのは、ナゾノクサの足元が何か物凄い威力で割れたかのようにぐると円を描いてへこんでいる。そしてナゾノクサが足踏みをしているごとに円は深く、大きく広がっていった。まだ指示していなかった「じたばた」だと私は気づいてしまった。おそらくナゾノクサはトレーナー達が気に入らないのだろう。そして私たちに危害を加えそうになっているトレーナー達を見て、怒っているのだ。それが、地面の割れた現状に繋がった。

だから、思わず叫んだのは仕方ないこと。

「タケシさんとこのハピナスかッ!？」

タケシさんの手持ちであるハピナス。通称「怪力の申し子」

誰が名前つけたのか知らないけど、怪力に関しては納得できる。ピンプク時代からの

怪力を自由に使い、ある時は一人では持ちきれない大木を軽々と抱え、ある時は自分よりも大きなポケモンを振り回して投げ飛ばし、またある時はカビゴンの背中が見たいと言うタケシさんの言葉を聞いて転がしたことがあるポケモン。ハッピの時も凄かったけれど、ハピナスになったことで怪力はより力強くなったと聞いた。

え、もしかしてこのナゾノクサってそのハピナスに似たポケモン？怪力使えたりする？

「な、何だあのナゾノクサ!？」

「おいそこ行くな危ねえぞ!!!」

「くそ、ナゾノクサの近くにリザードンがいるから近づけねえ…!!」

「はっ!」

そうだ。これはチャンスだ。今トレーナー達は皆ナゾノクサに集中している。だから私はピチューとリザードンに合図してすぐさま行動を開始した。ピチューはリュックを手に取り、リザードンはリュックを持ったピチューごと背中にのせる。そして私は不機嫌なナゾノクサを抱き上げてリザードンの背中に乗った。

誰かが待て!と叫ぶのが聞こえる。トレーナー達が手を伸ばすのが見える。でもそんなの構ってられない。

「飛んで!」

『グオオオ!!』

リザードンは翼を広げて空へ飛び立ってくれたおかげで、無事に脱出することができた。でもここで降りても意味がないような気がする。おそらく、色違いを交換してくれると叫んだトレーナー達が追ってくる可能性があるだろうからちよつと遠くまで行こうかな。

第十二話く地下通路の再会く

ハナダからクチバへ行くには、通常は地下通路で行く人が多い。リザードンで空を飛んで一気に行った方が早いかもしれないけれど、トレーナーとしての旅だから地下通路から行こうと決めた。トレーナー達もそこまで追ってきてはいないようで、リザードンも飛び疲れてはいけなからさっさと行こう。ボールからでも外の景色は見えるみたいだし大丈夫。

そう思っって私は地下通路を歩いた。

「フェスティバル？」

「そう！地下通路が開通した…えっと、10年だか100年だかのお祝いなんだって！」

「へ、へえ…そうなんだ」

「ええ！だからあなたも楽しんで！」

「うん。ありがとう」

10年や100年と大雑把に言われたけれど、つまり地下通路開通記念のお祭りということだ。

ハナダシティからクチバシティまでの道のりは長く、ただの通路として作られていたのだが、まさか私たちが来た時にトレーナー達が集うお祭りを開催していたとは思わなかった。

通路には屋台が広がっており、小さな子供から大きなトレーナーたちまでたくさんいる大きな道として機能していた。

屋台には食べ物がたくさん並んでいて、お菓子からごはんまで置いてある。美味しそうな匂いがしたと思ったらナゾノクサがボールから出てきて私の腕に乗り、食べたいとねだってきた。赤ん坊だからまだ物事の善悪や甘え方についてよく分からない部分があるため、本当ならここで厳しく育てるのならば我儘言っちゃ駄目ということを教えな

ければいけないのだが、ナゾノクサの瞳を見たら無理だなと悟る。

『ナツゾ！』

「しようがない。ジム戦頑張ってくれたし…今回だけだよ？」

『ナゾ！』

屋台に置いてある食べ物に突撃しようとしたため私はそれを止めてちゃんと屋台でわたあめを買ってナゾノクサの口に近づけた。ナゾノクサはわたあめに警戒することなく口の中に入れてもぐもぐとさせている。それを可愛いなと思いつつも、後でピチューとリザードンにも何か買って一緒に食べようと決心して懐のボールを小さく叩く。

幼い時からずっと一緒にいるリザードン達ならば自らが入っているボールを小さく叩いたことで欲しいものがあればすぐに言ってしまう意味で私のいいことを理解する。だから屋台の前でゆっくりと歩いて行って、ケチャップのついたオムライスがあればピチューのボールがぐらぐら盛大に揺れたり、きのみケーキの前でリザードンが小さくボールを揺らしたりするのを見て笑いながらあとで外に出る時に買おうと覚えておく。

ナゾノクサもあれが買いたい！これなあに？と私に向かつて鳴き声をあげていて、ちよつと楽しいと思えた。

そんな時だった。

【さあーやつてきましたまいりました!!地下通路記念のポケモンバトル大会イイイ!!参加したいトレーナーはどしどし中央受付前で応募してくれよ!!】

「ポケモンバトル…ねえ？」

『ナゾ?』

地下通路の端から端まで響き渡る大きな声にトレーナー達は反応した。あるトレーナーは自慢したいポケモンがいることをアピールするために参加したり、あるブリーダーは育てたポケモンがどのくらい強さを発揮するのかを確かめてみたいと挑戦したり——そんなトレーナー達が大勢この地下通路にはいた。

地下通路はポケモンバトルをしても頑丈でポケモンをたくさん出しても隙間があるほど大きい空間でできている。だから大会が開かれたのだろう。

ちよつとだけ、面白そうだと思つた。

「ナゾノクサ、バトルしてみたい?」

『ナゾ?...ナツゾオ!!』

ナゾノクサは大きな声で答えてくれる。そして私に向かって笑いかけ、頷いてくれた。リザードン達も、ボールをゆらゆらと揺らしてやってみたいと答えてくれる。

もちろん私も、バトルしたい。

「よし行こっか!ポケモンバトル大会!」

『ナツゾ!』

中央受付まではちよつとだけ遠いけど、でもまあ屋台でも見ながら行けばいいかと考えて私は歩いていった。ナゾノクサは私の腕の中で楽しそうに頭の草をゆらゆらと揺らしていた。

.....

「お名前とポケモン図鑑をお願いします」

「はい！マサラタウンのヒナです！お願いします！」

『ナゾ！』

「——登録完了しました。あなたはAブロックでの参加となります」

「分かりました」

『ナゾ？』

ポケモンバトル大会では、どうやらAからCまでのブロックごとに分かれてバトルを始めるらしい。まるでリーグ戦のような方式で——かなり大勢の参加者が集まった大会ということなのだろう。

Aの札を渡された私は係りの人に呼ばれるまでどこかで時間潰そうかと思つて歩き始めた。

「あれ、ヒナ？」

「ヒビキ？ヒビキもここにいたんだ！」

「おう！地下通路でポケモンバトル大会があるって話をマサキさんから聞いたからな
！」

「マサキさん？」

「ポケモンを預けたり引き取ったりする通信機能を作り上げた人だぜ！」

「へえ凄い！」

「クチバシティに向かうって言ってたから、もしかしたら会うかもしれないな！」

「そっか。クチバシティかあ…」

『ナゾ!!』

「ナゾノクサ？新しいポケモンゲットしたのか。俺はヒビキだ。よろしく！」

『ナゾナゾ!』

ヒビキはお祭りを楽しんでるようで、帽子の上にヒノアラシのお面をつけ、手にはオレンチョコを持っている。でもすぐに手に持っている食べ物を食べてからナゾノクサの頭の草を優しく掴んで挨拶したら、ナゾノクサは楽しそうに笑って笑顔でよろしくと鳴いていた。

どうやらヒビキもバトル大会に参加するみたいで、結構上機嫌そうだ。

そんなヒビキの背後から、見覚えのある赤髪が見えたため私はすぐに叫ぶ。

「あ、シルバー！」

「え、シルバー!? お前もここに来たのか!!!」

『ナゾオ?』

私たちがシルバーの名を叫ぶと、彼はすぐに私たちに気づいたようでこちらに近づいてきた。不機嫌そうな表情だけど、雰囲気はいつもより楽しそうだから大丈夫かと判断して再会を喜んだ。道のだ真ん中で話をするといけないからちよつとだけ移動して屋台がない道の端へ行く。

そしてヒビキはシルバーに向かって口を開いて言った。

「なあシルバー、お前もバトル大会に参加するのか?」

「ああ。このバトル大会では優秀なトレーナーが数多く参加すると聞いたからな。全国から優秀なトレーナー達がこの地下通路へ来ているらしいぞ」

「全国?! それは凄い」

『ナゾ!』

「それはともかく…ヒナ、ナゾノクサを手に入れたのか? ナゾノクサはラフレシアとキレイハナの二つの進化ができるポケモンだ。見たところそのナゾノクサはまだちゃん

と育成していないな？ならばラフレシアとキレイハナのどちらかの進化を選ぶのかな
ゾノクサに聞いてさっさと育成方針を決める。ピチューのように進化したくないと言
うのならナゾノクサとして強く育つきのみを使え。きのみは持っているか？ああそ
うだ簡易きのみプランターというものを父上から貰ったからやろう。おいヒビキお前も
だ。ナゾノクサは草タイプだが、育成によつてはフェアリータイプの技も覚えること
ができる。ドラゴンタイプにも力強い味方となるからそういう技も——」

「——あああはいはい分かった！大丈夫よまかせて!!それにプランターあり
がとうねシルバー!!」

「プランターありがとうな！大切にする！それよりシルバーはどのブロックに参加す
るんだよ!」

「俺はBブロックだが」

「おっしや俺もBブロック!!ニビシティでできなかったバトルしようぜシルバー!」

「ふん。どのくらい強くなったのか見定めてやろう」

「ヒナはBブロックか?」

「いや私はAブロック。もしもヒビキやシルバーとバトルするんなら決勝でかなあ:」

「それに俺かヒビキのどちらかが負けなければ決勝でヒナとバトルできないということ
か。面白い」

「まあ何とかなるだろ！大会楽しんでお互い勝とうぜ！！」

「いいわよー！」

「フン…」

ヒビキが私とシルバーの片手を取り、地下通路の天井に向かって上げた。シルバーは不機嫌そうだがヒビキの手を振り払うようなことはしない。もちろん私もしない。Aブロックで勝ち抜いて決勝にいけるよう頑張らないと思いつつも、私たちは気合いを出していったのだった。

「…あ、シルバーお前ニビジムの時のようにはかいこうせんぶつ放して終わらせるんじゃないぞぞ!!」

「確かにそうね。シルバーのチルタリスのはかいこうせん地下通路が埋まるから本気出してやつちや駄目だからね！」

「…チツ、わかった」

第十三話～Aブロック 前半戦～

ポケモンバトル大会は、AブロックとBブロック、そしてCブロックの戦いに分けられる。Aブロックの参加者は勝ち抜いたトレーナーは次にCブロックで勝ち抜いたものと戦い、そして次に決勝となるBブロックで勝ち抜いたトレーナーと戦うことになる。

つまり、AブロックとCブロックに参加する者にとつては最も厳しい戦いになるのだ。Bブロックも一つのブロックで勝ち抜いたトレーナーとしか戦わないから若干難易度は下がると思われるかもしれないが、そんなことはない。シルバーの話だと戦歴があるトレーナーがAやCに比べてBブロックの方が多いう。つまり、どのブロックも難易度は同じということらしい。

そして始まったのが、中央の通路が大きく開けられたバトルフィールドとトレーナー達の戦い。

「それではアアやつてきましたまいりました！ポケモンバトル大会Aブロックの挑戦だアア!!!」

観客たちが司会進行者にあわせて歓声を上げる。その声を聞いてトレーナー達はそれぞれ手を上げて応える。私はそういうのはちよつと恥ずかしいからただ頭を下げるだけしておいた。

.....

「それではあポケモンバトル大会Aブロックの挑戦だ！今から呼ぶ挑戦者はバトルフィールドに集まってくれえ！」

そんな司会者の声が私の名を呼び、バトルフィールドのトレーナーの立ち位置までやって来る。ナゾノクサはボールに入りたくないとは拒否しているのももちろん抱き上げたまま。

そして観戦している人の中にはヒビキとシルバーがそれぞれ焼きそばやりんご飴を手にして心から楽しんでいるようだと分かった。

「むぐ…頑張れよヒナ！グツゲホツツ！」

「汚いぞヒビキ。口の中にあるものを食べてから喋れ馬鹿が」

「うるせえよアホシルバー！」

「ほらそこ喧嘩しない！」

『ナゾオ？』

【おおっとヒナ選手、観戦席にいる少年たちと諍いを起こしているが大丈夫かああ!?!】

「大丈夫です問題なく！」

『ナゾ』

「ふふふッ僕と戦うんだ。その余裕なくしてみせるよ!! いくよブーバー!!」
『ブウウウウ!!』

『ナゾッ!!』

「あ、ちよつとナゾノクサ!？」

「おおつとメル選手の出したブーバーに対してヒナ選手はナゾノクサを選択ウウウ!!」

ナゾノクサがブーバーの炎に引き寄せられて私の腕から飛び出し、バトルフィールドの中央に行つてしまった。その行動はバトルする意味で行つたわけじゃなく、ナゾノクサが単に炎を浴びたいから飛び出しただけであつて…でもそんなこと観客や相手選手は聞いちゃいけないことだろうからもういいや。

「ナゾノクサ。バトルすることになるけど大丈夫? カスミさんとのジム戦みたいに痛い思いしても平気?」

『ナゾゾオ!!』

「よし分かつた。じゃあ頑張ろうねナゾノクサ!」

『ナゾッ!』

「ふっナゾノクサを選んだことを後悔させてやるよ！」
『ブウウウウ!!』

ナゾノクサはブーバーの放つ炎を見てまるで楽しい遊具か美味しそうな食べ物か目の前に広がっているかのように目を輝かせている。でも相手選手やブーバーはナゾノクサが上機嫌な意味を知らない。それどころか好戦的なナゾノクサだと認識してバトルをしてナゾノクサを叩きのめしてやろうという余裕さえあるようだ。

ナゾノクサはまだまだ幼い子供でバトルに関してはやる気十分なようだがまあ何とかしてやっていくしかないと考える。とにかく、ナゾノクサが傷つかないように気を付けて行動しないとね。

「それではアア!!ブーバー対ナゾノクサの試合を開始するうう!!」

「ブーバー、一撃で終わらせるぞ!かえんほうしやだ!!」

『ブウウウウ!!』

『ナツゾオ!!』

「あっちゃあ…」

【おおつと?!これはどうしたことかッ!ナゾノクサが自らブルーバーの炎の中に飛び込んでいつてしまったぞおお!!】

「おい何をしているヒナ!ナゾノクサには炎は弱点!しかもまだ育成しきっていないだろうが!!!奴の言うとおり一撃でしとめられる可能性の方が高いぞ!!!」

「シルバーお前汚ねえ!!口の中のりんご飴全部食い切つてから言えよ!!」

「喧しいぞヒビキ!ヒナがここで負けてもいいのか!？」

「いや負けてほしくねえに決まってるだろ?!でもここで俺たちが慌てても仕方ねえだろうが!!」

「正論だが苛立つ!この馬鹿が!!!」

「八つ当たりすんな!アホシルバー!!!」

観戦席が物凄く煩い。できればあいつらの近くに行つて頭を殴りにいきたい。

でも集中できないからという言い訳はできない。リーグ戦に挑む目標をもっているのならなおさらだ。それにナゾノクサは炎を浴び続けているが、楽しそうに鳴き声を上げている。草タイプだからという考えを持っているシルバーたちから見れば、今現在

ブーバーが放つかえんほうしやによつてナゾノクサは痛い鳴き声を上げて叫んでいると思つているんだろう。観戦席からはやくやめてあげてと言うような声も聞こえてくる。草タイプは炎に弱いから。しかもまだ進化していないナゾノクサだから。そんな先入観さえなければこんなにナゾノクサは楽しそうに揺らめいていると言うのに。

相手選手はシルバーたちと同じように思ったらしい。満足そうな声を出してブーバーに向かつて言う。

「よしブーバー止めてやれ…さすがにナゾノクサが黒焦げの炭になるのは可哀想……つ何!」

『ブウウウウツ?!』

「ナゾノクサ、楽しかった?」

『ナツゾオ!』

【おおつとこれは凄い!!ナゾノクサ無傷!無傷のまま生還!!しかも何やら楽しそうだアア!!!】

「うわすげえ!ナゾノクサが無傷だ!」

「どういうことだ…？ナゾノクサは草タイプのポケモン。力強いかえんほうしゃには一撃でやられてしまう可能性の方が強いはず。それにヒナは指示を出してはいなかった。ナゾノクサも何か変な行動はしてはいない。いや、炎にむかって突っ込むと言う無茶な行動はしていたがそれだけだ。まさかみがわりか？いやみがわりならばかえんほうしゃを一度でもかすればナゾノクサのレベルだとすぐに壊れるはず、まもるも同じ意味を持つだろうな…なのになにに何故——」

「おーいシルバーさあん！聞こえてますかああ!？」

「いやナゾノクサはまもるも使っていないなかった。技を使っている。ならば特性か？だが炎を無力にする技などもらいびしかなければ…ナゾノクサがそんな特性を…まさか新しい特性か？いやだがナゾノクサの生態についてはウツギ博士とオーキド博士の共同研究によって発表されたばかりだ。そんな大事な発表を覆す新種がいるなど——」

「だーめだこりゃ」

シルバーは長考に入ってしまったようでヒビキが耳元で叫んでも聞いていない。シルバーを呆れたような表情で見て肩をすくめてこちらを向く。でも私たちのやるべきことは変わらない。

「ナゾノクサ、ブーバーの動きを集中して見て!!」

『ナゾッ!』

「クツ炎をどうやって躲したのか知らないが、これならどうだ!ほのおのパンチ!」

『ブブウウウウ!!!』

「ジャンプして躲す!」

『ナツゾオ!』

ナゾノクサが私の指示を聞いてブーバーの動きをよく見て炎の拳を躲すように高くジャンプする。ブーバーがジャンプしたナゾノクサを追うように炎の拳を上上げる。だが、ナゾノクサがブーバーの顔面に着地して拳の振り下げた位置を調節し、自滅させてブーバーから離れていく。

その炎の拳をちよつとだけ舐めていたナゾノクサに苦笑しながらも、私は口を開いた。

「ブーバー?!」

『ブウウウウ?!』

「よしよしよくやったねナゾノクサ！」

『ナツゾオ!』

「でも敵なんだから好きな炎でも舐めたりしちや駄目だよ? お菓子じゃないんだからね?」

『……ナゾ』

「クツ炎が好き? 意味が分からないことを言うな! ブーバー! だいもんじ!!」

『ブウウウウ!!』

【大】の文字を書いた力強い炎がナゾノクサに向かって飛び出してくる。その炎はナゾノクサにとって攻撃の意味を持たず、むしろナゾノクサ自身の機嫌を上げるぐらいなので相手選手にちゃんと伝えた方が良かったかもしれないと思いつつも、私は口を開いた。

「ナゾノクサ! じたばたよ!」

『ナツゾオ!』

『ブウウウウ!!』

「ブーバー!!!」

ナゾノクサはわざと炎の中に飛び込みながらもブーバーに向かって直進し、その頭に向かつてじたばたを発動させた。ポケモンセンターのバトルフィールドの地面にヒビを入れるほどの威力を持つナゾノクサのじたばたはブーバーを頭から地面へめり込ませる攻撃力をもっているように——それこそ、一撃でしとめてしまったのだった。

バトルスタイルに関してはナゾノクサはかくとうタイプだと思っただ方が良いかもしれない。ぶつちやけ「すいとる」よりも攻撃性が高いと感じてしまった私は一瞬でそう考えた。この先のナゾノクサの成長によつては一体どんな風になるのだろうか。と楽しみに思いながらも。

その後、ナゾノクサの一撃に周りが時を止めたかのように静かになる。そしてバトルが終了したのを認識し、爆発したかのような歓声が沸き起こった。

「なんとということだ?! 炎にも負けない草が勝ってしまったぞ!! 勝者アア!! ヒナ選手とナゾノクサアア!!」

「頑張ったねナゾノクサ! ありがとう!!」

『ナツゾオオ!!』

「ブーバー、お疲れ様…いやまいったよまさか君が一撃で僕のブーバーをしとめるだなんてね…僕に勝ったんだから、優勝ぐらいいは目指してくれよ」

「ええ、もちろんよ!」

「…応援してる。頑張ってくれ」

「ありがとう」

私たちは拍手して第一試合を終わらせたのだった。

.....

「勝者アア!!進化してないのにポケモンが強いヒナアア!!」

「進化してないとか余計な一言よね」

『ピッチユウ』

私たちはその後、無事に第二第三と試合に勝利していった。ピチューがほとんどバトルに出ている、リザードンが不満げにボールを揺らしているのでそろそろ出した方がいいのかなと思ったAブロックの決勝戦。

向かい合った相手トレーナーの表情は何か怒っているよう。そして視線はシルバーに向けられていた。

「あいさつなんて必要はない!私はただこの男に勝つためにここまでやって来た!!」

指差した先にいるのは予想通りのシルバーの姿。

その様子に私とヒビキは焦った。次の決勝は私が出なければいけないのについて観戦

者がいるところまでやって来て問い詰めてしまうほど。まさか相手トレーナーはシルバーの犠牲者ってことなのだろうか。

「ちよつとシルバー何をやったの?!」

「そうだけシルバー!!お前まさかついに犯罪でも犯したのか!？」

「おいまして貴様等。俺はあの悪党で屑で雑魚な偽ロケット団のように犯罪などやってはいないー!」

「じゃあ何であいつお前の事怒ってんだよ!!?」

「何か無意識でやらかしたとかないの?」

「知るか!!!」

「知るか…だと?私はお前を倒すその時を夢見てきたというのに!お前は忘れただと?!」

なんかすつごく怒ってる。

シルバーは本当に何をやらかしたんだろうかとジョウト地方でずっと一緒にいたヒビキが頑張ってる思い出そうとしている。でも呟き声にはシルバー含めてヒビキ自身で

もやらかしたことがある事実がいっぱいあったようで、私の肩に乗るピチューが呆れていた。

「忘れたと言うのなら思い出させてやる!! シルバー! 私はお前に復讐するために旅に出たんだ!!!」

相手トレーナーは、怒り顔よりも笑った顔の方が似合いそうな可愛らしい少女。でも霧囲気が怒気に包まれていて恐ろしくなっていた。般若とかになれそうな鋭い怒りを、シルバーにだけ向けていた。当のシルバーはお前なんぞ知るかとはかりにヒメリビスケツトを口にしていているんだが、その様子にも怒っているみたいだ。シルバーと少女の間にいる私やヒビキが逆におろおろと慌ててしまうぐらい、温度差が激しかった。

少女は熱く燃えたぎる火山のようで、シルバーは冷たい氷が浮かぶ深海の海のようにだと思えた。

シルバーに向かって指を指す少女は、大きな声で叫んだ。

「私はクリス！私はお前を、決して許しはしないっ!!!」

第十四話～Aブロック 後半戦～

復讐をしたいと望む少女：いや、クリスはただシルバーだけを睨みつけていた。

憤怒と言えるようなオーラを放つ少女は、シルバーの前に立つ私やヒビキが邪魔だとこちらにも鋭い視線を向ける。それを見てヒビキが一瞬肩を揺らしていたけれど、すぐに取り繕い話しかける。

「クリス…だっけ？お前何でシルバーの事怒ってんだよ」

「うんうん。いきなり許さないって言われても私たちにはよく分からないし、それにシルバーもなんかどうでもいいって感じだし」

「……そうか。シルバー、貴様は関心がなかったということか。私のプライドを粉々にへし折った貴様にとって覚えなくてもいい程度のことだとそう言いたいのかッ!!」

クリスの燃えている復讐心に油を注いだような気がするけど、シルバーは本当にどうでもいいように私たちの後ろで新たに買ったオレンパイを食べている。

なんか無関心気味なシルバーを守るかのようにして立っているのに、その関心のなさに苛立つてきた。ヒビキもクリスの苛立ちがよく分からないが、シルバーの表情を見てあいつ一回だけ殴られてもいいんじゃないかねえのと独り言を呟いている。私もちよつとはわかるような気がする。

でもクリスはそのことを知らない。気持ちが高ぶっているのか、こちらに向かって指差してから叫ぶ。

「いいだろう！教えてやろう。その男が私に何をやったのかをっ!!」

.....

——それは、ジョウト地方のワカバタウンで起きたこと。

ワカバタウンに生まれたクリスはウツギ博士の娘であった。いずれは父の手伝いができる優秀なトレーナーになろうと決心したクリスは学校に行き勉強していた。ポケモンのことをよく学んで答えをすべて言い当てていった。でもそれはウツギ博士が父親だから小さい頃にいろんな勉強をしたのだからと皆に誤解されてしまった。お前なら当たり前の事だろうと言われてしまった。できないことがあれば「ウツギ博士の娘なのに」という理由で馬鹿にされた。だからクリスは必死に勉強した。ウツギ博士の娘としてではなく、ただのトレーナーの卵として生きるため、勉強していった。

七光りだと思われたくない。私は皆と同じトレーナーの卵なんだ！

クリスはこのままではいけないと分かっていた。博士の娘として生きることになれば皆自分自身を見てくれないと分かっていた。ただの「クリス」として見てもらう、そのためには実績が必要になる。博士の娘ならば難しい質問にも答えられるだろうと言われているんなポケモンのタイプの弱点を答えさせられたことがある。きのみはどの

フーズに一番効果的なのか宿題を出された時もノート一冊を使って書いて提出したことがある。人よりも数倍努力した。トレーナーとして学ぶべき答えをたくさん出していった。

成績を上げて「ウツギ博士の娘だから」優秀なのだという言葉撤回させようとした。

—— そんな時に、ある課題が出されたことがある。

「…課題?」

「そうだ! ポケモンを一匹預かり、育成させるという学校の卒業に必要な課題だ!」

「ああー思い出した! 確かあの時俺メリープ育てたんだっけな!」

「あ、もしかしてヒビキが育てたメリープってあのもふもふメリープ?」

「そうそう! 課題って言ってもある程度の強さがあれば十分卒業できるんだけどな。それで、シルバーは確かキャタピーだったっけ?」

「…ああ、だがキャタピーは早々に成長するポケモンだからな。育成に時間はかからない」

「そうだ。貴様はキャタピーをすぐバタフリーへと進化させ課題を終わらせた! その後

の悪夢を私は忘れたことはない!!!」

クリスは課題にてホーホーを渡された。ホーホーは昼はよく眠り、夜に活動する夜行性なポケモン。夜行性にはどう育成すればいいのか図書館で本を借りてじっくりと育てようとした。まだ時間はあると考えてホーホーをポケモン広場に預けておいた。そして本を何冊も読みこれからやるぞという時にそれは起きた――。

「――貴様は、バタフリーだけじゃなく私のホーホーを育ててしまったんだ！ホーホーはヨルノズクに進化し、私の評価になってしまった。わたしは…私は自分自身の力で評価を勝ち取ったかったんだ！だが貴様は暇つぶしという理由でホーホーを育てたツ！挙句の果てには貴様が育てたと豪語せず私が育てたということになっていたんだ!!なぜっ…何故あの時事実を言わなかった?!私は何度も育ててないと言ったのに…シルバー貴様がそれを否定した!!!私が謙遜しているだけだと皆に言われた!!私はその事実が許せないツ!!」

「…あー」

『…ピチュ』

「それはシルバーが悪いな」

「どうか、何でホーホーを育てたの？」

「ヨルノズクの進化を目の前で見たかっただけだ」

「じゃあ何で否定したんだ？」

「面倒だろうが」

「なっ?!面倒だとっ?!!! 貴様アアアッ
!!!!!!」

まさしく電光石火の勢い。トレーナーフィールドからぶっ飛んできたクリスが私たちを巻き込んでシルバーに掴みかかる勢いで殴りかかった。

私の肩に乗っていたピチュューがクリスにぶつかりもみくちやにされる。電撃を放つたりするけれど、クリスは止まらない。それどころか私たちが被害を受けダメージが重なる。シルバーが何気なく私たちを壁に置いて、やっぱり殴られるべきだと思っってしまった。でも勢いは止まらない。

「ちよつ痛つ！お、落ち着いてクリスさん!!」

『ピチュウウウ!!』

「ブツフオいつてええ!!おい落ち着けて!!」

【あーあーその選手たち。猛烈なシヨは後でにしてさつさとバトルを始められるかい？そこにいるボーイたち含めて棄権扱いになっちゃうよ】

「猛烈なシヨじゃないから!!」

「おいクリスとやら。お前が暴れていると試合ができなくなる。やるのならバトルで」

「その言葉待っていたぞ!!貴様をバトルで叩きのめす!!その前にお前を倒す!!」

「ヒッ!」

『チュウツ』

鋭い眼光がこちらに向く。ピチューがこわいかおされた時のように縮み上がり私の頭に抱きつく。私はピチューの身体を撫でながらもバクバクいう心臓を落ち着かせ、バトルフィールドにゆっくりと向かった。

.....

私たちの行動はどうやら一種のパフォーマンスのような扱いで見られていたらしい。野次馬のような人たちが見ていたり煽ったりしていたのに気づかなかったけど、いつの間にか結構見る人が増えたなど思った。バトル大会以外にも向こう側ではコンテストバトルを繰り広げていたり、パフォーマンス大会をしていたりといういろいろやっているから観客は少ないと思っていたのに…。

「まあ、仕方ないか…」

『ピチュウ?』

【さあちよつとしたトラブルという名の騒動もあつたようだけど無事にAブロック決勝戦始まるよオオオ!!】

「シルバーに勝つ!あいつのプライドへし折る!!やるぞ、チコリータ!!」

『チッコオオ!』

「とりあえず勝ちに行こう。ピチューやるよ」

『ピチュー』

クリスが出したチコリータは可愛い外見とは裏腹にかなり興奮している様子だと見てとれた。ピチューは一瞬でチコリータがクリスのために勝ちにいこうとしているからやる気があるのだと分かって私を見た。でも私はため息をつけてどうしようか考えてとりあえずピチューを出す。

この試合で勝っても負けても面倒な反応が来るのは分かっているからだ。

勝てばクリスがこちらに向かって来るかもしれないと予想するが、負ければシルバーやヒビキがキレてくる可能性もある。ヒビキはさきほどクリスが向かってきたときに勢いで殴られたことに苛立っているようだと分かったからだ。シルバーの頭を叩いてから応援するために叫ぶ彼らを見てため息をついた。シルバーは殴られた頭を手でおさえ、ヒビキに突っ掛かっている。…まあ、何とかなるか。

【それではああAブロック決勝戦チコリータ対ピチューの試合を始めさせていただきます!! 試合開始!!】

「チコリータたいあたり!」

『チコ!』

「でんこうせっかよ!」

『ピッチュー!』

チコリータが勢いよくピチューに向かってたいあたりを仕掛けてくる。でもピチューはすぐに私の指示を聞いてでんこうせっかでチコリータの後ろにいき激突した。ピチューに物凄い衝撃でぶつかったチコリータは地面にバウンドして倒れるが、やる気があるのか根性が凄いのか立ち上がる。だがクリスの表情はすぐれない。

「クツ…まだレベルが足りないか。育成途中なのが壁となったか…いやそれでもやれ! どくこのこだ!」

『チイツコ!』

「ピチュー、でんじはでどくのこなを飛ばして！」

『ピッチュ！』

「こうこうせいにはつぱカッター！」

『チコリ！』

ピチューがどくのこなをでんじはで吹っ飛ばしている間にチコリータはこうこうせいで体力を回復させた。でもここは太陽の届かない地下通路。そのせいか体力は少ししか回復していないように見え、そのふらつく身体を頑張って動かしたのはつぱカッターでピチューに向かって行動した。

全力で向かってくる相手には全力で返せ。それがトレーナーとして私のできる礼儀だろう。

「ピチュー、ボルテッカー」

『ピイツチュウウ！』

『チッコオオオツ!!?』

「チコリータ?! くっ…私の負け…か」

【チコリータ戦闘不能ウウ！勝者はヒナ選手だああ!!】

試合が終わった後、ピチューに礼を言ってからボールに戻る。

クリスの方を見ると、彼女もチコリータによく頑張ったたと労りの言葉をかけてからボールに戻っていた。そしてこちらを鋭く睨み近づいてくる。

「お前…確かヒナといったな」

「ヒツ…はい」

クリスはこちらに手を伸ばして握手を求めた。鋭い眼光はそのままに、でも怒りや苛立ちは込められていない瞳で私を見る。

「私のチコリータはここまで頑張ってきたパートナーだ。でもお前のピチューは私のチコリータよりも圧倒的にレベルが上だった。優勝できるような強さにはまだ達してはいなかったと分かった。…ヒナ、それでもお前は私に全力で勝負をしてくれた。ありが

とう」

「え、いや…トレーナーとして当然のことをやったまでだよ」

「当然のことができないあのむかつくクソ野郎よりはましだ。ヒナ、私と友達になつてくれ」

「えっと…」

「いや、むしろ私と友達になれッ！」

「アッハイ」

拒否権ない感じですか。

微妙な心境で返事をしつつも、私たちは握手をしてAブロックの決勝を終了させたのだった。

第十五話〈Bブロック決勝戦〉

「えっと、クリスさん」

「クリスでいい。それに敬語はやめろ」

「あ、うん。クリス…あの、それ止めない？」

「拒否する」

「そ、そう……」

ギリギリギリギリとポケモンバトル大会の参加賞であるピツピにんぎょうという名のぬいぐるみを小さな塊にしてやる勢いで握りしめるクリスにヒナは一步だけ引きながら言う。クリスは嫌そうな表情でシルバーを睨み続け、苛立ちと八つ当たり気味に

ピツピにんぎょうを壊す勢いでぎゅっと握っていた。

もはや別ポケレベルにまで達している顔面崩壊のぬいぐるみにヒナは苦笑しつつ、観戦席からBブロックの戦いを見続けていた。

【勝者アアシルバー選手ウウウ!!!】

「フン。この程度か」

『チルウ』

「チツ、腹立つなああの顔は。だが実力があるのが現実…チツ！」

「アハハ…」

盛大に舌打ちするクリスはシルバーがチルタリスで勝利したバトルを見てついにピツピにんぎょうの中身の綿を飛びださせるほどの勢いで引きちぎってしまった。

それを見た周りの人やポケモンたちが悲鳴を上げてクリスから離れていく。Bブロックでシルバーが勝ちに行くことに舌打ちや憤怒のオーラをにじませるので少々居心地が悪い。でもシルバーがこの試合で勝利したことで次がBブロックの決勝となる

ためちよつとだけ楽しみだ。

「ヒナ！応援するぞ！！ヒビキには是非とも勝ってもらわないとなー！」

「そのボンボンどつから出したの?!！」

クリスがいっつの間にか取り出した黄色のボンボンと鉢巻を私に渡して来る。クリス自身もボンボンと鉢巻を装着して応援する気満々だった。

.....

【さあさあ始めましたBブロック決勝戦ンンツツ!!】

司会進行役の男性が喋るとともに、観客たちから歓声が聞こえてくる。もちろん勝ち進んでいくごとに試合を応援してくれたクリスやヒナがこちらを見ている。何故かボ

ンボンや鉢巻を身につけていて全力で応援していくためにまず形から入ったのかは知らないが。

それらを一身に受けたヒビキはボールを手に持ち対戦相手であるシルバーを見た。

「フン。俺が勝つ」

「何言ってるんだ！俺が勝つ!!」

「Bブロックもなかなか熱い試合になりそうだねエ！さあさ！両者一斉にポケモンを出してバトル開始と行くよ！」

「優勝するぞアリゲイツ」

『アリゲエエイツ！』

「よし勝とうぜヒノアラシ!!」

『ヒ、ヒノ』

ボールから出されたシルバーのアリゲイツは気合十分で歯をがちがちと鳴らして小

さく威嚇していた。威嚇されたヒビキのヒノアラシは身体を震えさせて怯えている。でもヒビキのために頑張ろうと試合放棄しようとはしない。頑張つて勝つためにバトルフィールドで身体を震えさせながらも覚悟を決めていた。

両者が立つて司会進行役の合図を待つ。一瞬の緊張感の後、それは放たれた。

「それではああアリゲイツ対ヒノアラシの対戦を始めさせていただきますくうううう!!!」

「アリゲイツ、みずでっぼう」

『アリゲエエイ!!』

「ヒノアラシ避ける! えんまくだ!!」

『ヒ、ヒノオオオ!!』

アリゲイツがみずでっぼうを放つたのと同時に、えんまくがヒノアラシの周辺に盛大に撒かれる。黒煙がヒノアラシの身体を隠し、周りがちやんと見えなくなる。アリゲイツは周りが煙だらけになつても慌てずシルバーの指示を待つ。シルバーは何も言わず、ただ黒煙で見えなくなった場所をじつと見つめていた。

ヒビキが笑つて口を開く。

「今だ！かえんぐるま!!」

『ヒノオオ!!』

誰かが息をのむ。熱いせいで観客席から一步後ろに下がる。そんな観戦者たちがいた。

ヒノアラシのかえんぐるまは周りにも炎を放ち、バトルフィールドを火の海にしてしまふような勢いでアリゲイツに向かって直進している。怯えなんて見せず、凄まじい速度でアリゲイツの腹めがけて炎の塊としてぶつかろうとする。

それを見たシルバーがアリゲイツに指示を出す。

「止めろ」

『アアリゲエエイ!!』

『ヒノツ?!』

「なっ?!?」

ヒノアラシが炎の塊になろうともアリゲイツは何の問題もないと言うかのようにその身体を掴み、腹で受け止めた。

ズウウウンという衝撃音がバトルフィールドに響き渡っても、アリゲイツが少しだけ後ろへ退くぐらいの威力があつたとしても、アリゲイツは涼しげな顔だ。

それを見たヒノアラシは怯え、掴まれたアリゲイツから逃げようと身体を振りもがき始める。

「逃げろヒノアラシ!!」

『ヒ…ヒノっ』

「無駄だ、みずでっぼう」

『アアリゲエエエイ!!!』

「ヒノアラシ!!」

『ヒノオオオオオオオ!!!?!!』

アリゲイツから近距離でみずでっぼうを食らわされ、ヒノアラシはヒビキの近くまで吹っ飛ばされ地面に横たわる。審判が倒れたかと判断しようと思った瞬間に、ヒノアラシはフラフラな身体を気丈にも立たせようとしていた。

それをみたヒビキが拳を握りしめて必死にヒノアラシに向かって叫ぶ。

「大丈夫だおまえならやれる！俺を信じろ!!」

『ヒノっ…ヒノオオオオオオ!!』

「ほう。面白いな」

『アアリゲエエイ』

——ヒノアラシの身体が光り始める。

進化が始まったのだと分かった観客たちは一気に大きな声を出し、歓声が沸く。シルバーはアリゲイツを下げ大人しくその進化を見守った。

光りの中で見える影にいるヒノアラシは…身体が大きくなり、炎が広がり、そしてマグマラシへと進化を遂げていた。

大きくなりくりくりとした目がヒビキの方へ向けられる。にっこりと笑って背中の炎を燃やした。

「…マグ…マラシ」

『マアグ!』

「つよし!行くぞマグマラシ!!大きくひのこを放て!!」

『マアグウウ!!』

「進化したことに對しての賞賛はしよう。だがバトルは別だ!アリゲイツ、マグマラシに向かつてみずでつぼう!!」

『アアリゲエイツ!!!』

マグマラシが広範囲で炎を放つのに比べ、アリゲイツは一点集中でマグマラシに向かつて水を放射した。

炎と水はぶつかり合い、水蒸気を生む。だが、先程こうかはいまひとつつかえんぐるまを腹に受けたアリゲイツとは違い、マグマラシは近距離でみずでつぼうを受けた。その衝撃はダメージとして残り、元氣いっぱいなアリゲイツの攻撃と比べ、進化したがフラフラなマグマラシの攻撃はやがて水に圧されアリゲイツの攻撃にぶつかり地面へと転がってしまう。

「マグマラシ!!」

『マ…マアグウウ』

こうかはぼつぐんなみずでっぼうによって、マグマラシは目を回し、倒れてしまった。アリゲイツは一度だけガチンツと歯を鳴らし、勝利は決したとシルバーが審判を見た。審判はすぐ手を上げて大きな声で試合終了の合図を司会進行役に向けて行う。司会進行役の男は頷き、マイクに向かって声を出して言った。

【勝者はあああシルバー選手だああ!!!】

「よくやったなアリゲイツ」

『アアリゲエエイツ!』

「俺の力は…まだ足りねえのか…」

『マアグ…』

「マグマラシのせいじゃねえよ。進化してまで頑張ってくれたんだ。俺の力がないせいでお前を負けさせちまった……ごめんな」

『マグツ！マアグ!!』

「ああ、今度は負けねえ！」

両者とも、ポケモンを労り合う。そしてヒビキとシルバーはお互い握手をして、Bブ
ロツクの決勝を終わらせたのだった。

.....

ここは地下通路の端っこに位置する場所。ポケモンバトル大会が開かれている場所より少しだけ離れている。

そこで響き渡ったのは少女の怒声。

「きいいさまあ!!!何故シルバーに負けたああああ!!!!!!」

「うおツ?! いやいや俺もマグマラシも頑張ったから!! お前だってヒナに負けてるくせに文句言うなよ!!」

「くそ正論だが腹立つ!! チコリータ!!」

『チッコ!』

「痛っ! おいやめろ葉っぱで攻撃すんな! というかシルバーもクリスも似た者同士かよ?!」

「[ど]が[つ]!」

仲良く声をそろえた事に対し、シルバーは少々面倒そうな顔でクリスを見て、クリスは苛立ったような顔でシルバーを見た。ヒナが慌てたように両者の間に立って喧嘩しないように忠告するが、シルバーが舌打ちをしたことでクリスがチコリータを突撃させた。だがシルバーがヒビキを壁として後ろに下がったことでチコリータの攻撃をまた受けてしまう。

「ぐふあつ! お前等いい加減にしろ!!!」

「そうだよ! 喧嘩はしないの!!」

「ヒナ、こいつを完膚なきまでに叩きのめせ! バトルで良いからプライドを折れ!」

「フン！望むところだ」

「あーあーもう！」

—— わあああああつ！

「………何だ？」

ポケモンバトル大会の観客席から大きな歓声が湧き立つ。今まで以上の興奮した声
が聞こえてくる。ここからだ観客たちが邪魔でバトルフィールドは見えないため、何
が起きているのかは分からない。

だが声だけは聞こえてきた。

「なあ聞いたか?!ポケモンバトル大会の決勝戦！バトルする順番を変えるらしいぜ?!」

「ああ聞いたよ。確か最初にAブロックの優勝者とBブロックの優勝者が戦うんだろ
?」

「ああ！その後にCブロックとの戦い!!Cブロックのトレーナーの中にすげえのがいる

んだって!!」

「すげえのってだれが？」

「Cブロックの優勝候補者！」

「…ほう、なら俺とヒナのバトルはすぐに始まるということになるな」

「なんか先行きがすつごく不安なんだけど……」

「よしヒナ！その不安を全部シルバーに向かってやれ！シルバーなんて目じゃないぞ
!!」

「いちいちヒナをけしかけんよ！」

「煩いぞ敗者」

「喧しい！敗者め！」

「うるせええ!!誰が敗者だこの野郎!!!それにクリスお前も敗者だろうが!!!
いなか仲良いな?」

「誰がだ!!」

「アハハ…はあ」

ヒナはため息をついてCブロックの優勝者が出るまでクリスたちの喧嘩を止めることに専念し、これからのバトルに不安を感じているのだった。

第十六話～準決勝戦～

「さあさあやってきましたまいりました!! AブロックとBブロックの準決勝戦ンンンッ!!」

「頑張れよヒナ! シルバー! つつ痛ってええっ!!!」

「馬鹿を言うな! シルバーを応援するぐらいならヒナを応援しろ!!!」
「おま…お前いきなり頭殴んな!!!」

歓声が大きく聞こえてくる。ヒビキとクリスの声が聞こえてくる。

ヒナとシルバーはただ前を向き、お互いの顔を見た。これからやるバトルを全力で楽しみ、そして勝ちに行くという気概を二人はちゃんと持っていた。

ふと思いついたかのように、シルバーは声を出して言う。

「ヒナ、俺はチルタリスを選択する」

「え？」

「だからお前はへあいつ〜を出せ。俺ははかいこうせんを出しても構わないぐらい全力で行くぞ」

「……うん、分かった。でもはかいこうせんやるんなら一応地下通路が壊れない程度には手加減してよ？」

「その時の状況による」

「はは……そうだね。シルバーとバトルするのって初めてだからいいかな……」

ヒナは笑って懐にあるボールを取り出した。シルバーが全力で戦いたいと望む強者を……相棒を選択したのだ。

チルタリスではかいこうせんを撃つたとしても大丈夫だと分かるそんな相手をシルバーは望んだ。だからヒナもその声に応える。

「いくぞ、チルタリス」

『チルウ！』

「バトルに出せないでいてごめんね…やるよりザードン！」

『グオオオオオオ!!』

両者のポケモンの——純白と漆黒の翼が大きく開かれた。

.....

「おいあのリザードン…もしかして色違いか？」

「すげえ俺初めて見た！」

「リザードンの色違いって黒色なのね…欲しいわ…！」

「強そうだな…さすがAブロック優勝者ってか？」

観客たちの声が聞こえてくる。その声にはヒナとリザードンが顔を歪めた。色違いだからという理由でこちらを見つめる視線と声はどうにも嫌悪しか湧いてこないからだ。もちろんシルバーとチルタリスも色違いという言葉とその観客たちの声には嫌そうな顔を隠そうともしない。不機嫌なまま睨み付けバトルの邪魔をするようならば潰すという雰囲気醸し出している。

もちろん観客席で聞いているヒビキもそうだ。奴らの声を聞いて文句を言おうと口を開いた…その時だった。

「喧しい！色違いなんてただ色が違うだけだろう!!そんなに欲しいなら自分のポケモン

に絵の具かペンキでも塗りたくれ!!」

『チココ!!』

「いや待て待て絵の具かペンキ塗ったらポケモンに悪影響なんじゃ……」

「ならポケモンではなくトレーナー自身が塗りたくって人間の色違いにでもなればいい!!」

『チコリ!』

「それはそれでどうなんだ?!」

クリスが周りにいる連中に向かって怒声を上げ、頭上にいるチコリータが葉っぱをぶんぶん揺らして威嚇する。色違いだと騒いでいた観客たちがクリスの声を聞いて居心地悪そうにして静かになる。その姿にヒナとリザードンは思わず笑って、シルバーとチルタリスは鼻を鳴らした。

そして司会進行役の男が満足そうになつこりと笑みを浮かべてマイクを手に取り口を開く。

【それではああ準決勝戦を始めさせていただくウウウ!!】

「リザードン、ねっぷう！」

『グオオオ!!』

「チルタリス、りゆうのはどう！」

『チルルウ!!』

炎と波動がぶつかり、激突した。

大きな衝撃波となって炎と波動が消し飛び、白煙を起こさせる。その威力は凄まじく、リザードンとチルタリスを一步だけ後ろへ退けさせるぐらいだった。

ヒナとシルバーはお互い口を開けて叫ぶ。

「きりさくー！」

『グオオー!』

「とっしんだー！」

『チル!』

大きな身体がぶつかり合い、切り裂く。チルタリスはりザードンによって身体を少しだけ切り裂かれ、赤く染まる。そしてりザードンは腹にとっしんを受けて身体が後ろに下がり、両手で衝撃を受けた腹を押しえてにやりと笑う。

どちらも同じくらいのダメージを与え、そして楽しんでいた。

「はかいこうせん!!」

『チウウウウ!!』

「かえんほうしゃ!」

『グオオオオオ!!』

白い閃光と赤い火炎が激突し、爆発する。その威力は地響きを伴い、ポケモンバトルに適した環境を整えた地下通路に小さな影響を与えるぐらいだ。爆発による熱風が周りに発生し、黒煙を発生させる。だがそれらを消し飛ばすかのようにチルタリスとりザードンがお互いの身体をぶつけあう。

大きな身体から発せられる雰囲気は呑まれ、一種の緊張感があたりに包まれた。赤い

色が飛び交い、2体の咆哮が空気をビリビリと揺らす。

だが、トレーナーはその空気に怯えることはない。か弱いポケモンたちが悲鳴をあげようとも、集中力は途切れない。

「フレアドライブ!!」

『グオオオオオオツツ!!!』

「ドラゴンダイブ!!」

『チルルウウウツツ!!!』

リザードンの身体が赤く燃え上がり、チルタリスの身体が青く燃え上がる。

二つの炎がぶつかり、そしてリザードンとチルタリスはお互いの攻撃によって吹っ飛ばされた。地面をバウンドしてもリザードンとチルタリスはゆっくりと立ち上がる。その身体にダメージを受けていても、傷だらけになってもまってもしっかりと起き上がった。

だが、何かに気づいたシルバーが小さくため息をついて手を上げ、口を開いた。

「俺の負けだ」

『チル…』

シルバーが言った瞬間、チルタリスは地面に倒れ、目をまわしていた。一度は立ち上がったチルタリスだったが、それは気合いを入れていただけのこと。実際は戦闘不能な状態だったということだとシルバーは悟り、早々に試合放棄を決めていたのだ。

最初から最後まで緊張感のある戦いだったためか、周りは静寂に包まれていた。口を開かなかった誰もがその興奮を静かにかみしめている。

「ヒナがシルバーに勝ったぞおお!!」

『チイコオオオ!!』

クリスが一度大きく手を上げて叫び、それをきっかけにして歓声が沸き上がったのだった。

.....

「チルタリス、よく頑張ったな」

『チルウ』

「リザードン、頑張ってくれてありがとう」

『グオオ』

チルタリスは負けたことに関して少々悔しそうに顔を歪めていたが、すぐに気合いを入れてシルバーを見て頷く。そしてシルバーも頷き、チルタリスをボールの中へ入れたのだった。ヒナも同じく礼を言ってからリザードンをボールに入れる。

リザードンが勝つたことに対してヒナの周りに一度観衆がやって来る。あわよくば、色違いのリザードンに触れるかもしれないという考えを持った連中や、純粹に応援したいというトレーナー達がいた。だが、とっしんの勢いで突撃してきたクリスとヒビキによつて吹っ飛ばされる。そしてその喜びの声とテンションが上がっている彼女たちによつて人々は冷静になり、苦笑しながら居心地悪そうにゆっくりとヒナから離れていっ

たのだった。

「よく頑張ったなヒナ！ざまあみろだシルバー！！」

「…その台詞はお前が俺に勝った時に言ったらどうだ負け犬」

「貴様っ！」

「ああはいはい喧嘩はやめろって！！」

「とりあえずここにいるも邪魔になるから離れようよ！」

「いやその前にヒナお前もう次が決勝だろ！！頑張れよ！！」

「そうだヒナ。私やシルバーを負かしたんだからそのまま優勝しとけ！！」

「手加減なんてするなよ。俺みたいにな」

「お前はちったあ手加減つてもんを知れよアホシルバー！！」

「アホはアホだからな！もっと言ってやれヒビキ！」

「馬鹿共が」

「誰が馬鹿だ！！」

「ハハ…まあうん、頑張るよ」

賑やかに言い合いし始めるヒビキ達を見ながらも、ヒナは司会進行役の男によつて呼び出され、バトルフィールドへ戻つていったのだった。

もちろん、ポケモンを回復させてからだが。

【さあさあ次はアアいよいよ決勝戦だあああつっ!!!】

——そろそろ終わりはやってくる。

第十七話～決勝戦～

【この一戦で優勝者が決まる!! 決勝戦だあああ!!!】

大きな歓声が湧き立つ。人々の興奮が高まっていく。その中心にヒナはいた。決勝戦だからか、観客たちは数多く集まる。トレーナー達が連れているポケモンたちもこちらを興味津々で見つめている。そして、天井からぶら下がっている設置されたライトによって派手にヒナ達を照らしていく。いろんな色で照らされた決勝戦のバトルフィールドに、観客たちは集まっていた。

「おい押すなよ！」

「煩い。ヒナを応援できないだろうが！チコリータ、チヨコポフレ食べる？」

『チコ！』

「つたく…」

「決勝戦はおそらくリザードンで勝負を決めるだろうな…リザードンは先ほどのバトルで疲労が溜まっているかもしれないが、それでもレベルは強い。一般的なトレーナーならば勝てるはずだ」

「でもよ、さつきCブロックに強敵いたって言わなかったか？観客が凄くて見れなかったけどよお」

「それが不確定要素ともいえるな。まあなんにせよ、これで優勝は決する…あと、今までと同じシングルバトルになるかどうか分からないがな」

「シングルじゃなかったら…ダブルバトルか？」

「ポケモンバトル大会の詳細を知らないのか。決勝戦はどのバトルになってもおかしくないと言っていたぞ。シングルでもダブルでもトリプルでも…もしかしたら6対6もありえたかもしれない」

「いやいや無理だろ。ヒナってそんなに手持ち居たっけ？」

「いないな。だからやるとしたらシングルかダブルか…もしくはトリプルだろう」

「まあそうなるよなあ」

「ヒナ頑張れ!!」

『チコリ!!』

「お前等は相変わらずだな」

「喧しい! ほらちゃんと応援しろ!!!」

『チッコオ!』

ヒビキ達も集まって観客たちと同じように決勝戦を見ている。いまだ始まらない決勝戦だが、これからどうなるのか楽しみだと言うかのように話し合っていた。

.....

【それではあああ決勝戦の対戦相手の登場だあああ!!!】

「……………」

「…うわあ」

———
なんか怪しい人がいる。

バトルフィールドに上がったヒナは相手トレーナーを見て一瞬動きを止めてまじまじとその姿を見つめてしまった。目深に被った黒いマント。そしてサングラスに偽物のような白髭。マントは身体全体を覆い隠し、体格がはつきりと分らないようになっていた。分かるのはマントからはみ出しているちよつとだけ長い黒髪だろう。白髭とは見事にあつておらず、それが余計に怪しさを引き出していた。

視認による波動はヒナは特定の人を探し当てることにしか教わっていないため、ルカリオやアローンのようにはできず、彼がどんな姿をしているのかさえ分からない。でもはつきりと怪しい人物だとは分かってしまった。

「最終戦はダブルバトル!!それですべての勝利が決まるよおおお!さあ両者ともにポケモンを出してくれ!」

「ダブルバトルね…よし、リザードンにピチューお願い!」

『グオオオオ!』

『ピイツチュウ!』

「……フシギダネ、ゼニガメ頼んだ」

『フツシイ!』

『ゼニゼエニ!!』

ポケモンを出した瞬間——ヒナはその違和感に気づいた。

声だけを聴くとヒナよりも年上のような青年の声。でも少々声を誤魔化しているのかわざと低く声を出しているような感覚。そんな、違和感が彼にはあった。

「あの…どこかでお会いしましたか？」

「うおっほんゴホン…君のようなトレーナーには会ったことありませんなあ！」

「はあ…」

わざとらしい、けれど何処か知っているような感じ。波動がぶれてよく見えない。マントで顔を隠して声まで変に誤魔化している。怪しさ満点なトレーナーなのに、居心地の悪さは感じない。でも、やっぱり変な感じがある。

違和感だらけのトレーナーだと、ヒナは思った。

『グオオオオ…』

『ダネダネ』

『ピツチュウ？』

『ゼニイ！』

『ピチュ…ピチュウ!?!』

『ダネフシ!!』

『グオオオオウ…』

ヒナ達とは違って、ポケモンたちは決勝戦で対戦相手だと言うのに何故か緊張感なく仲良く話をしているようだ。だが何故ゼニガメはフシギダネに蔓で叩かれているのだろうか。そしてリザードンは何故頭を抱えてため息をついているのだろうか。ピチューだけはやる気十分という感じみたいだ。でも、フシギダネやゼニガメもどこかで見たことがある気がする…。というより、なんだか誰かさんのフシギダネとゼニガメに見えるんだけどマントの人は違うかな？ いやもしかして？ やっぱりよく分からない。ヒナは首を傾けた。

——— マントを着た対戦相手が小さく微笑んだような気がした。

「それではああリザードンとピチュー対フシギダネとゼニガメのダブルバトルを始めさせていただくうう!!! 試合開始!!!」

.....

「まずは先手必勝よ！リザードンかえんほうしゃ！ピチューは10まんボルト!!」

『グオオオ!!』

『ピチューウ!!』

「ゼニガメ、てつべき。フシギダネ、ゼニガメの前に出てまもる」

『ゼニー!!』

『ダネフシ』

リザードンの大きな炎とピチューの電撃をフシギダネのまもるによって躲される。観戦者は「あのフシギダネまもる覚えているんだ」や「レベルが同じくらいつてことか？いやそれよりも強いなあいつら」という声が溢れる。

ゼニガメがてつべきをしているため、すぐにヒナは攻撃を切り替える。

「リザードン、きりさく！ピチューはてんしのキッス！」

『グオオオオオ！』

『ピチュウ！』

リザードンとピチューがまもるを解除したフシギダネとゼニガメに近づいてくる。このままだと攻撃を受けてしまうかもしれないというのに、彼らは余裕でマントのトレーナーを見た。

「ゼニガメ、フシギダネ。いばる」

『ゼーニイ!!』

『フツシイ!』

『グオオオオツ?!』

『ピイツチュウ?!』

「嘘お?!リザードン!ピチュー!」

ゼニガメとフシギダネが接近した瞬間に同時にいばるを発動させた。いばるの攻撃によって混乱したりザードンとピチューはお互いポケモンではなく地面などを攻撃し

てしまっている。それに気づいたヒナが彼らの目を覚まそうとするが、混乱は続く。

「フシギダネ、せいちよう」

『ダネダネ!』

『ゼニ!』

「ヒナは負けるかもしれない」

「ど、どういう意味だよ?!」

「おいシルバー! 貴様ヒナを愚弄する気か!! こんな時に…っ」

『チッコオ!』

「いや、ヒナもよくやってはいるが、マントの男の方が凄まじい。ちゃんとポケモンの技について熟知して攻撃している。攻撃だけじゃないな…ダブルバトルのメリットを最大限活かして行っているんだ」

「何だよそれ?」

「ゼニガメが防御力を上げている間にフシギダネが攻撃を防ぎ、今は混乱に乗じてフシギダネがこうげきとくこうを上げている。両方とも通常よりも強い力を出せる状態

だ。しかも混乱しているリザードン達は分が悪い」

「つまり、対戦相手の戦略が上手だということか？」

『チイコ？』

「ヒナ……！」

フシギダネがせいちようを発動し、ゼニガメがマントの男が何も言っていないにもかかわらずつべきを行う。それらを見てシルバーは息をのむ。ヒビキの背に冷や汗が流れる。ボンボンを持ったクリスがチコリータと共に頑張れと応援する。

「リザードン目を覚まして!!ピチュー頑張つて!!」

『グオオ…オオ!!』

『ピイツチュウ…!!』

「おつといけない。フシギダネ、ねむりごな」

『ダネ』

「リザードン!!!ピチュー…!!」

「フシギダネ、発動準備」

『フツシイ』

フシギダネがリザードンとピチューに向かってねむりごなを派手に落とさせたせいで、彼らは眠ってしまった。ちゃんとヒナの声を聴いて混乱から覚めようとしたと言うのにすぐに眠ってしまった、ちゃんとした攻撃ができなくなってしまう。その事実にはヒナは焦っていた。このままではいけないと。

——だが、現実というのは無慈悲なもの。

「起きて皆!!!リザードン!!!ピチュー!!」

「フシギダネ、ソーラービーム。ゼニガメ、ハイドロポンプ」

『ダネダネダネ…フツシイイイ!!!』

『ゼエニユウウ!!!』

フシギダネの黄緑色の閃光とゼニガメの水の放射がリザードンとピチューめがけて放たれる。リザードンとピチューはヒナの声も届かず、眠ったまま攻撃を受けた事により、受け身もとれずに倒れていった。

何が起きたのかヒナにはよく分からなかった。周りの観客も、進化していないポケモンだと言うのに何故あそこまで戦えるのか分かってはいない。

審判がゆつくりと手を上げてマントの男の勝利を示した。優勝したと言うのに、観客たちは静かなまま。司会進行役も異様な戦い方に何も言えないまま——ただ、彼だけが動いていた。

マントの男がゼニガメとフシギダネに礼を言ってボールに戻す。そしてリザードンとピチューに駆け寄って彼らを強く抱きしめるヒナに近づいた。

「いつまでもレベル差でこり押しできると思うな。バトルはそんなに甘くない」

その声は、ヒナにしか届かないぐらいの音量だった。

.....

「ヒナ、元氣出せ！あれは仕方ない!!」

「あんなにも強い戦い方がある。状況によつては何もできずに戦える」

「シルバーお前ヒナに対して何かいうことはないのかよ……」

「ああ、お疲れ」

「それだけか!!?」

「いいのいいの……私は大丈夫だから」

ヒナは苦笑しながらクリスたちに向かって言った。そして準優勝者の商品であるゴージャスボールを手にとってぎゅつと握りしめた。中には何も入つてはいないが、ヒナはボールを握りしめて決勝での戦いを思い出していた。

何もできなかったわけじゃなかった。

あの時、最初の攻撃の時点で彼らは手加減をしていたのだ。本気になれば攻撃をする余裕なんてない。そんな気迫をヒナは感じていた。

「まだまだ遠いなあ……」

懐の中にあるモンスターボールがヒナの声を聴いてゆらゆらと揺れる。ボールは2つ、悔しいと言いたいような感じで揺れていた。ヒナはため息をついてクリスタちと共に歩き出していた。これからどうすればいいのか考えながら。

クチバシテイへと向かって歩き出していた。

第十八話 くちバシテイにてやるべきことく

「ナゾノクサを育成します」

『ガウウ』

『ピチユウ』

『ナゾオ?』

クチバシテイに着いてヒビキ達と別れたヒナは、町はずれにある森の中でボールからポケモンを出して言う。決勝戦で戦った試合を通してバトルの指示の仕方がちゃんとなっていないかった事やバトルスタイルが攻撃特化になっていたこと——つまり、色々改善点があることが分かったからだ。

変化球を加えた戦い方をしていたあの決勝戦を見て、もっとバトルの仕方を変えてみ

たいとヒナは思ったのだった。

そして、ナゾノクサを育成していきたいと言う気持ちもあつた。いつまでもリザードンとピチューだけに頼ってはいられない。

「ナゾノクサ、これからバトルになるけど大丈夫？」

『ナゾ…ナツゾォ！』

ナゾノクサはやる気十分といった感じで笑っていた。その声にヒナは元氣よく頷く。リザードンとピチューはそんな元氣いっぱいなナゾノクサに微笑んでいた。

「というわけで、リザードンとピチューにお願いしてもいいかな？」

『グオオ？』

『ピイツチュウ？』

『ナツゾ！』

「ナゾノクサとバトルしてほしいんだけど——」

『グオオオ…』

『ピチュウ!?』

「あ、もしかして嫌?」

『グオオウ』

『ピチュ』

『ナゾオ?』

リザードンとピチューが嫌そうな顔でナゾノクサを見た。おそらくはたまごから生まれたばかりのポケモンだからバトルをしたくはないのだろう。

そういえば、リザードンは前も炎を出すのが嫌そうだったし…よし止めよう。レベル差がありすぎるのも困りものつてことで。それに嫌々やっても何も得することはない。リザードンとピチューのバトルによってナゾノクサが成長するならいいかもしれないが、やりたくないことをしても意味はないし、時間の無駄だ。

(まあ、あんなことあつたらやりたくないのはわかるけどね…)

リザードンとピチューはナゾノクサが成長するならそれは良いと思っっているけれど、

自分の技で攻撃して重症になってほしくないのだろう。以前操られた時にヒナに向かつて攻撃してしまったことがまだトラウマになっているリザードンやピチューのことを思えば、先程のお願いはしない方が良くかもしれない。

——でも、私たちはもう大丈夫だから、ゆつくりと傷を治していこう。トラウマのせいで仲間とのバトルを嫌がっているのは、前に進めないのだから。

でも無理やりではなく、いつかナゾノクサとでもバトルの練習ができるようになるまで、ゆつくりと待っていこうとヒナは決めた。

「やるべきことは……ポケモンバトルかな……」

『ナゾナゾ?』

.....

「よし!野生のポケモン10連勝!」

『ナツゾオ!』

『グオオオ…』

『ピチュウ!!』

野性のポケモンが私に向かって近づいてきたところをナゾノクサが攻撃していく方法を行った。

ナゾノクサが飛び出してきた野生のポケモンに噛みついたり頭上から地面に沈めたりをしていくうちにレベルが上がっているのだろう——最初は何度か攻撃しなければいけないかったが、そのうち一撃で倒せるようになってきた。

しかも吸血もどきのすいとるによって体力も回復するため、ナゾノクサは元気いっぱいだ。そして周りの状況も酷い。もはや惨状と言ってもいいかもしれない。

ナゾノクサが攻撃することに地面が沈没する。ナゾノクサが走り出すと、地面が割れる。そして激突したポケモンは気絶し、木々は折れていく。

ちよつとした自然破壊みたいになってきたせいで、野生のポケモンたちがナゾノクサを恐れて逃げていく状況にリザードンは引き攣った笑みを浮かべていた。ピチュウは笑って凄く凄くと言ったりしているようだったけれど。

「よし、よく頑張ったねナゾノクサ！」

『ナツゾ!』

周りの惨状を見て、喜んでいるナゾノクサに向かって私はにつこりと笑って言う。

「じゃあ逃げるか!」

『ナゾ?』

『グオオ…』

『ピチュウ…』

この状況を誰かに見られたらジュンサーさんに通報され、すぐに説教されるだろう。というか間違はなくされる。ポケモントレーナーがバトルに熱中しすぎたせいで周りの建物や自然が破壊された場合、そのトレーナーの注意不足としていろいろと大変なことになるのは分かっているからだ。もちろんこの状況にするつもりはなかったけれど、ナゾノクサは手加減というものがよく分かってはいなかった。そして本気にならなければ一撃で倒せることはなかった。

つまり、まだまだ力不足だからこそ、こんな惨状になってしまったのだ。それに嘆くべきか笑うべきかは逃げてからにしよう。

苦笑するリザードンの背に乗り、私たちはクチバシティの町はずれ——でもここよりも別の場所を目指して行つた。

「よしいこうりザードン！そしてごめんねここに住んでるポケモン達!!いつか絶対直しに来るからね!!」

『グオオウ…』

『ピチュウ…』

『ナゾ?』

今の私たちには森を元通りにするような力はない。ポケモンたちを癒すことはしたが、それ以外のことは無力だ。だからこそ今度直しに来ると叫んでしまったが、一日もすれば野生のポケモンたちによって自然は復活するということを忘れていた。

今更だだけどポケモンの生存力って凄い。

.....

「よおヒナ！リザードンに乗ってどうしたんだ？」

『マグ！』

「ヒビキ…いやちよつとナゾノクサのトレーニンングしてたんだ」

『グオオ』

『ピチュウ…』

『ナゾナゾ！』

「ふーんそつか！そーいやあこのナゾノクサつて炎に強かったよな？何やったらそうなるんだ？」

『マグウ』

「ハハハ…私にもよくわからないや」

『ナゾナゾ！』

リザードンが着地した場所には、ヒビキが近くにいた。ヒビキはちよつと不機嫌そうな顔で私に近づく。

「…そーいえばシルバーはどうしたの？」

「あいつならジム戦！すぐ終わるつつて先に行きやがったんだ!!」

「そっか、マチスさんとのバトルかあ。アリゲイツだとでんきタイプに弱いし……負け
ない……よね？」

「大丈夫だろあいつなら」

「ああうん。まあ根拠のない安心感はあるかな」

「むしろチルタリスのあのはかいこうせん見たら安心しかねえわ。バッチ取れなかった
ら鼻で笑ってやる」

そう言ったヒビキは、どうやらこの近くにいるポケモンをゲットしようとしてやって
来ているようだ。マグマラシをボールから出してポケモンを探すヒビキはナゾノクサ
に興味津々といった様子で見つめていた。そんなナゾノクサはマグマラシの背中が気
になっている様子。

私はリザードンとピチューに礼を言ってボールに戻し、ナゾノクサだけ出したままヒ
ビキやマグマラシと向かい合う。

「あ、そうだ！ヒビキ、バトルしない？」

「バトル？」

「そう！私のナゾノクサの相手してほしいんだ！いいかな？」

てみたい！」

「いやナゾノクサ生まれた時からこうだったんだけど……」

「それでもだ！ いいだろうヒナ!!」

「あ……ヒビキ？」

「俺は構わねえよ。でも観戦するぐらいなら審判ぐらいはやれよな！」

「了解した！」

というわけで、クリスが審判をつとめるバトルとなった。

マグマラシが気合いを出した炎を見せたらナゾノクサが目を輝かせていて、それを興味深そうに見るクリスとヒビキ。

そして始まったバトル。

「それでは！ マグマラシ対ナゾノクサの試合を始める！ 試合開始!!」

「マグマラシ、ひのこ!!」

『マアグ!』

「直進!」

『ナゾ!』

「え、ちよつ…やっぱりか!!!?
『マグツ?』」

「炎を好む草タイプか。本当に珍しいな」

ナゾノクサがわざとぶつかりに行つたのを見てヒビキ達は驚愕する。地下通路での戦いでも見せたその行動に信じられなさそうな表情だ。それでもマグマラシが見せた背中への炎に向かってぶつかり、炎を楽しそうに浴びているのを見れば信じざるをえないだろう。

ナゾノクサが背中に乗っているのを見てマグマラシは戸惑い、ちよつと泣きそうだが進化しても臆病なのは変わらないのかな。

一時的にバトルを中断し、私はヒビキ達に向かってナゾノクサのことを説明した。

「この子、何故か炎が好きみたいなの。それで反対に水が苦手なんだ」

「何だそれ?! 炎タイプかよ!!」

「弱点が反対になっているってこと? ならナゾノクサにとって弱点となる…氷なんかはどうだ?」

「よく分からないんだ。一応、カスミさんとのバトルで氷の道を難なく歩いたのは見たけど…」

「おい氷の道を平気で歩くナゾノクサって見たことねえぞ」

「嫌がることなく歩いたというのなら、氷も平気ということになる…のか？」

「うんもしかしたら…後でシルバーに確認してもらおうかなって思ってたところなんだ」

「まあその方が良いかもな。あいつポケモンの事ならいろいろ知ってるしツツグホオオっう!!!」

「クソ！シルバーの野郎!!ムカつく!!!」

「八つ当たりで俺殴んな!!!」

「ハハハ…」

『マアグ…!!』

『ナゾ!!!』

『マア…マグウ!!』

『ナゾオオオ!!』

マグマラシとナゾノクサが戯れているように見えるが、ナゾノクサの行動にマグマラ

シが泣く一歩手前まで来てしまっていた。これはヤバいと思って私はナゾノクサを抱き上げる。すると、ようやく解放されたマグマラシはヒビキに向かって突撃した。腹にマグマラシがとっしんの勢いでやってきたことにヒビキはうめき声を上げていたが、ちやんと受け止めて頭を撫でた。

クリスは、草むらから飛び出してきたポケモンに向かってチコリータを出して八つ当たり気味にバトルしている。

「ナゾノクサ、炎が好きなのはわかるけどやり過ぎは駄目よ」

『ナゾ！ナゾナゾ！』

「炎が好きならちやんと欲しいって言うてから行動すること。突撃しちやマグマラシが可哀想でしょ」

『……ナゾ』

「わかったらマグマラシに謝る。ヒビキもごめんね」

「いや俺は平気。マグマラシも大丈夫だよな？」

『……マグ』

『ナゾ！』

『マアグ』

この様子だとバトルはできないよね。まあ仕方ないか。

第十九話く機嫌が悪いのがいけないく

この日、イーブイは本当に不幸だった。そして機嫌がとても悪かった。

まず、親であるマサキが寝坊したため慌てて食事する羽目になり、満足に食べる事ができなかった。船でたくさん食べようと思っていたイーブイはマサキに早くしろと急かした。だが、クチバシテイに着いた瞬間、船に乗るためのチケットを忘れ、わざわざ戻らなければならない事態が発生。機嫌が急降下していった。

戻ることでもまた時間がかかってしまった。しかも地下通路がお祭り騒ぎなため行くこともままならず、地上からハナダシテイへ戻らなければいけない。それにも時間がかかる。クチバに戻ってきた時、もうお昼になる頃だった。でもようやくこれでご飯が食べられる。イーブイはそう信じていた。そうしたら、今度はバックをひったくられていた。イーブイのモンスターボールが入った、バックを全部。

「ハハハハツ！全部いただいていくぜえ!!」

「悪党ううう!!!」

『…ブイ』

この日、イーブイは最悪な出来事が続いていた。だから不機嫌かつ怒りが頂点に達していたのだった。

.....

森の中で聞こえてきた叫び声、その先にいた光景を見てすぐ追いかけはじめた。

走る走る——木の枝を避け、動く足から逃げるポケモンたちを避け、逃げていく悪党を追い続ける。

黒服の男を見つけた瞬間、奴がロケット団だと分かったから私たちは走り続けているのだ。

ヒビキが走ることで乱れる息を懸命に整えながらも、悪態について叫んだ。

「もおおおお我慢ならん！マグマラシ、ひのこ!!!」

『マアグ!』

「ぐっペルシアン防げ!」

『にゃあん!』

ペルシアンが鋭い爪で炎を消し去り、そのまま奴らは逃げていく。

それを見て、このままだと逃げられてしまうと私は思った。だから奴らを止めるために懐からボールを取り出す。

ボールは熱く、ぐらぐらと揺れていた。

「ヒビキ、クリス！このまま追い続けて！私は上空から回り込んで捕まえるよ！！」
「おうわかった！気をつけるよ！！」

「囹は任せろ！」

私は逃げ続ける男と追いかけるヒビキたちから大きく横に逸れ、男に見られないよう走ったままボールを投げる。

「リザードンお願い！」

『グオオオオ！！』

リザードンに飛び乗り、翼を広げて大空へはばたく。そして黒服の男の目の前に炎を吐いて足止めし、着地した。男は逃げられないと思ったのか、バックを遠くの方へ投げて逃げようとする。

「男は任せろ！！ヒナ、お前は荷物をたのむ！！」

「わかった！リザードンお願い！」

『グオオ！！』

高く空へ飛んで行ったバックが地面に衝撃を受ける前に、リザードンの背中に乗ったまま荷物を掴むことに成功する。だが、荷物のチャックが開いていたのか一つのボールが放りだされた。ボールには何かポケモンが入っていると感じた。だから地面に落ちる前に掴まなければいけない。空を飛んでいるため後ろの方へ落ちていくボールに向

かって私は叫んだ。

「リザードン！」

『グオオ！』

リザードンが空中で回転し、猛スピードでボールの方へ向かう。背中にしがみついたままボールを求めて手を伸ばし、掴んだ。

「あつぶないッ!!!」

『グオオ』

片手でキャッチしたボールを見てため息をついた私は、いつの間にか押ししてしまったようだった。そのボールの開口ボタンを…

リザードンの背中の上で小さな光が湧き上がる。そして私の膝の上に現れたのは小さな茶色のポケモン。

「え、イー…ブイ？」

『ブイイ……ブイイイイ!!!』

目を鋭く尖らせたイーブイは、私を見た瞬間苛立ったように青筋らしきものを浮かべて——嘔みついた。

「いったあああああつ!!!」

『グオオオ?!』

ポケモンが嘔みついたのは初めてだった。頭の方をガジガジと嘔まれ、血が滲んでいるように感じる。というか痛い!リザードンが異変に気付いたのかすぐに地面に着地したけれどイーブイは嘔みつくのをやめない。むしろ痛みでリザードンの背中から転がり落ちても嘔むのをやめない。

「やめてやめて痛い痛い!!」

『グオオオ!!』

『ブイイイ!!』

「おい悪党捕まえたぞおおお?!!何やってんだよヒナ!というかなんでイーブイがいるんだよ?!」

「ほう、珍しいな…イーブイがここにいるとは…野生か?」

「クリスお前は冷静に言ってるんじゃないやねえよ！」

「ねえお願い言い合しないで助けてってばああ!!」

『ブイイイ!!!』

『グオオオ!!!』

リザードンがイーブイを私から離そうとして掴んで引つ張るのだけれど力強く噛みついていてはいるせいかな離れない。むしろ血が派手に出てきそうで痛い。事の重大さに気づいたのかヒビキとクリスもやってきてイーブイを離そうとしてくれている。

『ブイイイ!!!』

「こりゃあ相当キレてる…というか珍しいな。ヒナがポケモンに懐かれていないだなんてさ」

「感心してる場合?!」

「む…これはダメージを入れるしかないか…チョコリータ!」

『チツコ!』

「待ってやめて私の方が重傷になるから!」

『グオオオ!!!』

『ブイイイイイイ！！！！』

——結局、その後バックを取られてしまった被害者が来るまで嘯むのをやめな
かった。

「シルバーでもいいからこの状況どうにかしてよおおお!!!」
『ブイブイイイイイイ!!!』

第二十話～聖・アンヌ号～

「いやあ助かったで！ほんまおおきに！」

「ええ、まあ…あの…お願ひしますこの頭の上で噛みついてるイーブイをどうにかしてください痛い痛い!!」

『ブイイ!』

「あ、すまんなあ！こらイーブイいい加減にせえ！」

『ブイイ!!!』

イーブイの怒りは収まっていない。なんでイーブイが怒っているのかは知らないが、無理やり私の頭から引きはがしてくれただおかげで痛みから逃れることはできた。噛みつかれたせいでまだひりひりと鈍い痛みはあるけれど、それでも先程よりはマシ。

イーブイが男——マサキさんの方に突撃し、腕に噛みついている。でもマサキさんは気にしていないようだ。むしろ苦笑しながらも、私たちを見て口を開く。

「ありがとう！ 姉ちゃんらのおかげでポケモンもチケットも無事に戻ってきてよかったわ！」

「はあ……」

『グオオ……』

「そのリザードン格好ええな……せや！ せっかくやから姉ちゃんらも一緒に来る？」

「え？ どこに？」

「何の話だ」

「……ってか、マサキさん俺のこと覚えてる？」

クリスと私が首を傾けている中、ヒビキは引き攣った顔を見せつつマサキさんに話しかける。マサキさんは目をぱちぱちと瞬きをしてヒビキを直視し、ようやく誰なのか気付いたかのように笑いかけた。

「ああ！なんやあの時助けてくれた少年やんか！ひっさしぶりやなあ！」

「助けて…くれた？」

「ああ、マサキさんの家に向かったらいろいろと事件が起きてな…」

「事件とは何のことだ？」

「聞くなクリス…ポケモンが信じられなくなるぞ」

「本当に何があったの?!」

『グオオ…』

ヒビキが遠い目をしつつ宙を睨みつけている。その瞳には何も映ってはいない。いや、おそらくマサキさんと出会った時のことを思い出しているのだろう。何があったのか地下通路では話してはくれなかったし、今も話す気はないようだ。そんなヒビキのことや私たちに気づくことなく、マサキさんはイーブイを宥めつつ前へ歩き始めた。

「ほんならさっさと行こう！船に遅刻したら間に合わなくなる！」

『ブイイ…』

「ふ…ね？え、船え!？」

『グオオ?』

『ブイブイ』

「機嫌治しいやイーブイ。船にいたらたつくさん美味しいの食べさせたるからな！」

『……ブイ』

マサキさんがずんずん進む。私達が一緒に来てくれないと分かると、イーブイをボールに入れてからヒビキとクリスの手を掴んで引っ張っていく。私も仕方なくリザードンをボールの中に入れてからついて行くことにした。

船、ということはどういうことなのだろうか。クチバシテイに船があるのは知っているけれど、それは限定でしか入ることはできないプレミアものではないのか？

クリスが怪訝そうな目でマサキさんを見た。

「クチバで船…ということは、あのサント・アンヌ号か？」

「惜しいな姉ちゃん！これから行くのは新しくできた聖・アンヌ号や！」

「えっと…私たちがその船に乗っても大丈夫…：…なんですか？」

「当たり前やで！むしろ助けてくれた恩は返さんと気持ち悪くなる！それに、聖・アンヌ号はポケモンバトルや育成が主流の船やで！ワイの開発したシステムも取り入れてる画期的な船や！」

「ポケモンバトルや育成が…！」

「それはむしろ行く意味があるな！よしヒナ行くぞ!!」

「まあ…拒否権はない…よね？」

「ないだろ！つてか行くしかねえって！行くぞヒナ!!」

「よっしゃあ！進むで！」

——まあ、ナゾノクサの育成に役立てることができるとは何かなるかな。

ヒナは頭の中でそう考えながらも、彼らと共に歩いていった。船に乗った後に、ジム戦に行こうと思いながらも。

.....

聖・アンヌ号というのはポケモンバトルと育成を主に取り扱うトレーナーにとつて娯楽の船である。船にはポケモン専用の機材がそろつており、修行してレベルを上げるもよし、スキンシップをとつて仲を深めるもよし。ポケモンのバトル大会やコーデイネーターによるパフォーマンス大会、そして交換やたまご交換会など実に様々なことが楽しめるようだとは分かった。

船にはバトル専用のフィールドが完備されているのもあれば、人とポケモンがある程度一緒に過ごせられる部屋を個室で用意されている。

どうやら私達はそこで一泊することになったらしく、マサキさんの計らいによつてそれぞれ専用の部屋に案内してくれた。その部屋はポケモンセンターで普段泊まる部屋とは違って大きくてきれいなものだけけれど、どこか落ち着かない部分もある場所だった。

今現在は船のホールにいるのだけれど、そこにいたのは見慣れた赤髪。

「なんでシルバーがここにいるの!？」

「それはこちらの台詞だ。俺は父上の代理で来たからだが：お前たちは何故ここに
いる」

「マサキさんを助けたお礼に決まっているだろうクソシルバーめ!!」

「貴様には聞いていない」

「なんだと!？」

「おい喧嘩すん——グツホオ!?!おい八つ当たりでチコリータ突撃させんなよ!!」

『チツコ!』

「あーもう：ほらみんな喧嘩は止めなさい!!」

「なんや賑やかやなあ!」

「賑やかってもんじやないですよ：ってというか、目立ってるし」

「というかシルバー：ジム戦は？」

「勝ったに決まっているだろう。ほら、バッチだ」

「うわ本当だ：マチスさんに勝ったんだね。おめでとう」

「ああ」

「くっそ：そのドヤ顔が腹立つ！チコリータあ!!」

『チコリ!』

「いつでええ!!やめろクリス!!」

ヒビキの痛そうな悲鳴が上がり、チコリータのやる気満々な声が聞こえてくる。

それのため息をつく私と、呆れたような目で見つめるシルバー。面白そうな顔でチコリータを見ているマサキさんがいた。

ホールではパーティーが行われているらしく、マサキさんに勧められて船で貸し借り可能な黒服ドレスを着てから参加している。

本当なら参加しなくてもいいが、まあこれも恩を返すというマサキさんの声に断れなかったのと、ヒビキたちが楽しそうだという雰囲気壊したくなかったから。パーティーは誰でも参加可能だし、ドレスも無料で貸し借り可能だから良いかな。

「おい貴様。パーティーが終わった後俺とバトルしろ」

「ふん!望むところだ!お前を叩き潰してそのプライドを粉々にしてやる!!」

「そうできるといいな?むしろ俺に負けて逆上するような恥ずかしいことするんじゃないぞ」

「誰がするかだれが!くそ…チコリータ!」

『チッコ!』

「ぶふお!…だから俺に八つ当たりすんなって言ってるだろ!!!」

「うんうん!元気なのはええことやで!」

「あはは…はあ」

ホールに来ているシルバーもヒビキと似たようなタキシードを着てこちらを——
というか、クリスを睨みつけていた。リボンが多くつけられている赤服ドレスを着ているクリスもシルバーを睨みつけており、やっぱり喧嘩するほど仲が良いという言葉が似合う二人だと実感する。

——そんな時だった。

【ポケモンパフォーマンスバトル大会!参加者全員には進化の石を一つプレゼント!そしてええ優勝賞品にはなんとマスターボールを一つプレゼントだああ!】

ホールに設置されたアナウンスから大きな声が鳴り響く。その声を聞いたのはホールにいるトレーナー全員だ。

「進化の石かあ…ナゾノクサのために〔たいようのいし〕か〔リーフのいし〕は欲しいところ…かな」

パフォーマンスバトル大会ということは、ピチューが活躍し、楽しめる場に違いない。だから参加するのは確かだろう。参加すれば進化の石はもらえるから、無理に優勝しなくてもいいだろうし。ナゾノクサも進化したいという時が来るのを想定して念のために持っておくだけの話だし。

——でも、ヒビキたちはそんなこと思っただけじゃなかった。

「マスターボール…だと!?」

「え、あの…みんな?」

「マスターボールがあれば捕まえることが不可能なポケモンを捕まえるのが可能だ…伝説が捕まえられるのなら徳はあるが…自然の摂理を乱さない程度のポケモンならあるいは…」

「すつげー強いポケモンに戦ってから捕まえる!」

「シルバーに勝てるポケモンだ。奴に余裕で勝てるポケモンを捕まえてやる!!」

『チツココオ!』

「あんたたち自分のことしか考えてないの!?!」

ちよつと呆れた。マスターボールに入れられたくないポケモンがいたらどうするつもりなんだか。というか、マスターボールだなんてものあっても意味ないと思う。ポケモンと人間の絆が必要なバトルにおいて、無理やり捕まえてきたポケモンだと勝つことは不可能に近いから。伝説だって無理やりバトルされたら抵抗するだろうし、最悪死に近い事件がおきるかもしれない。だから私はマスターボールは使いたくない。

トレーナーにとって最上級のボールと言えるのは、ただのモンスターボールなんじゃないのかなと思うけれど、まあみんながみんなそうとは言えないよね。

「ヒビキたちがポケモンに嫌がる行為をするってわけじゃないのは知ってるけど…無理やり捕まえるのは駄目よ」

「分かってる！でもマスターボールってなんかかつけーだろ！」

「ふん…マスターボールさえあれば父上に貢献できること間違いなしだ。ヒナが心配するようないことはしないが、欲しいものは欲しいだけの話だ」

「あれは私がもらう！シルバーなんかに取りらせてたまるか!!がんばるぞチコリーター！」
『チッコ！』

チコリーターがぶんぶん葉っぱを振り回しつつ、みんなが気合十分な声をあげてきた。

そんな声を聞きながら懐でボールがゆらゆらと揺れるのが感じる。特にピチュウのボールがガタガタとうるさく揺れている。だから、これから大会でどんな目に遭うのか不安が込み上げてきたのだった。

第二十一話～思わぬ再会～

「さあやってきましたまいりました！ポケモンパフォーマンス大会の時間だああ！審査員も含めて優勝を狙えるのはどこの誰だ！」

司会進行役の人の叫ぶ声がホール内に轟く。そして、照明が急に消え、三つのライトが点灯された。その場に座っているのは三人の審査員だ。

「元氣いっぱいなのポケモンたちがいたのしそうですね」

「いやー好きですねー」

「どんなポケモンに会えるのかわくわくします」

ホール内の様子が変わっていく。それはいろんな意味で魔法のようだと感じる変化だった。

『ブイイ！』

「あ、こらイーブイ！勝手に出てきて悪い子やな!!」

『ブイブイ！』

「しやあないなあ……」

机の隅に食べ物が設置されていたせいとか、マサキさんの手に持っていたはずのボールからイーブイが飛び出してきた。その様子に呆れたマサキさんが私たちから離れたつ、ホールを中心部分を見ている。もちろん私たちもその様子を見て、驚いていた。

ホールの足場が小さく崩れ、中央が大きく開いてバトルフィールドが展開されている。壁が一気にバトル用の画面に変わっていく。照明が様々な色に変わり、壮大な音楽が聞こえてくる。ポケモンたちが注目していた。人間たちも注目していた。新しい船の機能を見て、皆が驚いていた。

まるでそのホールすべてがパズルのように、一度崩れてまた再生し、大きなホールがポケモンジムのような彩りへ変化したのだ。

「なにこれ……すごいっ……!」

「これは凄まじいな……さすが聖・アンヌ号といったところか……!」

「ふむ……ポケモンのための休憩どころを隅に用意し、食事や飲み物、木の実を壁際に設置されている。天井もバンギラス程度なら余裕で入るぐらい……か。はかいこうせんぐらいなら受け止めそうだな」

「ふざけんなあほシルバー! また船を沈める気かよ!!?」

「あの時とは違うんだから絶対にやめてよシルバー…あのチルタリスのはかいこうせんは普通とは違うんだからね！」

「……チツ」

「舌打ちすんな!!」

シルバーがやけに不機嫌そうな顔で私とヒビキを見つめている。でもそんな顔をして私たちは絶対に前言撤回なんてしない。はかいこうせんが沈んだあの悲惨な事件を繰り返したくないし、四年も経っているからこそチルタリスの攻撃力は上がっているのだと理解しているからだ。

そんな私たちを見ていたクリスが首を傾けた。

「なんだ？チルタリスのはかいこうせんがどうかしたのか？」

「奴のはかいこうせんはもはや破壊兵器だ」

「文字通りの破壊光線だからね…船が吹っ飛ばのが目に見えるかもしれない…」

「ほう！ならばそれを受けてたつ！私はシルバーより強いはかいこうせんを覚えてみせるぞ!!」

「やめろ！破壊神は二人もいらねえんだよ!!」

「ねえお願いこれ以上スーパーマサラ人の悲劇を起こさないで!!?」

「おいヒナ。あいつはマサラ人じゃないぞ」

「分かってるわよシルバー! クリスはスーパーマサラ人じゃないけど…違うけど似たようなこと起こさないでよ!!」

大会どころじゃないような怒鳴り合いに発展してしまっただが、クリスもシルバーも私たちの考えをちゃんとわかってくれてはいない。そういうところが似た者同士だと思っただけでも…それを言ったら怒られそうだから言葉を飲み込もう。

ヒナは「のみこむ」を覚えた!——とかどつかのステータスに出てたらやだなあ。

【さあさあポケモン参加者はホール内の船員に話しかけてくれ! すぐにエントリーを行うからね!!】

そんな言葉を聞いて、私たちが速攻でエントリーするためにはどのトレーナーよりも動いたのは仕方ないかもしれない。

.....

【さー始まったポケモンパフォーマンスバトル！バトル形式は二つ行われる！バトルの勝敗はポケモン同士の勝ち負けとパフォーマンス力！トレーナーの力とポケモンの絆を発揮しなければ優勝は無理だぞお!!】

トレーナーとして集まった参加者は20人くらいだろう。少ないとは思いますが、この船に集まっているのはかなり優れている人たちだと思おうから警戒は怠れはしない。

司会者の男の人がまた叫ぶ。

【さてさて第一ステージはバトルだ！その後大きなフリーパフォーマンスに移ってもらおう!!まず第一試合、シルバー対クリス！】

———その言葉にある悲鳴が響き渡る。

「キタアアアアアツツ!!! 私の時代だツ!!!」

「喧しいぞ貴様!」

「うわーあの二人つて…ええー…」

「まもるか何かやつておいた方がい絶対」

「ゾロアークつてまもる覚えてたつけ…?」

「覚えられるけど覚えてねーんだよなあ…この船に技マシンとかあつたつけ…」

「覚える時間ないと思うしやめとこう…悲劇が怒らないようにアルセウスにお願いしておけばなんとかなる…と思う」

「…なあヒナ、全知全能の神だとしてもこの状況を何とかしてくれる願いを叶えてくれると思うか?」

「ぜんっぜん思わないね」

私とヒビキはため息をつき、いまだに騒いでいる二人に視線を注いだ。でもクリスもヒビキも早くバトルをしたいのかももうバトルフィールドのトレーナーが立つ位置まで来ていた。

司会進行役がそれを見て叫ぶ。

「このバトルでの勝敗は勝ち負けとパフォーマンズ力！さー軍配が上がるのはどちらか！！？試合開始だああ！！」

「行くぞチルタリス。優勝してマスターボールを手にする」

『チルウウ！』

「ふざけるな！あれは私の物だ！！プリン、すべてを蹴散らしてみせろ！」

『プウリ！』

「あれ…プリンだ」

「あいつプリンなんてポケモン持ってたのか…まあ、チルタリスがドラゴンタイプなら、フェアリータイプが混ざってるプリンの方が有利……だよな…う？」

「それを覆すのがシルバーですよヒビキくん」

「マジであるチルタリスが難関…っすねヒナさん」

「とりあえず…頑張ろうね」

「……おう」

このカントー地方で手ごわいライバルになるのはシルバーだろう。シルバーのポケ

モン知識と、その豊富なポケモン道具。シルバーの父がポケモンに関してシルバーに手を貸していること。そしてその知識を活かした育成が私たちにとって難関である。特にあのチルタリスは厄介すぎてつらい。

シルバーから貰ったきのみプランターがとても使いやすくて感謝してるぐらいだ。

おそらくクリスのプリンもそれを感じているのだろう。また育成途中なのがよくわかるし、圧倒的な強者に怯えているが頑張つて見栄を張っているのも理解できる。

「前に進めプリン！チャームボイスだ！」

『プウ…ププリーイイ！』

「コットンガードですべてを弾き返せ！」

『チルウウ！』

チャームボイスが大きな音盤となつて形作られ、チルタリスに当たりそうになった。だがシルバーが指示した通りに動いたチルタリスが羽毛をさらにふわふわにさせたことによつてすべてを弾き返してしまった。…というか、コットンガードつてそういう技だったわけ？また何か新技みたいなのになつてないかな!?

『プリイツ!?!』

「戸惑うなプリン！そちらが動かないのなら歌って眠らせてしまえ!!」

『プリイツ!』

「ムーンフォース！」

『チルルウ!!』

チルタリスの大きなムーンフォースが、歌おうとしていた小さなプリンの身体にぶち当たってしまった。そのせいでプリンは地面にバウンドしながら悲鳴を上げる。

『プリィィイツ?!?!』

『プリン?!?!』

「ふん…ドラゴンタイプの弱点を考慮したのは良い点だが…まだまだ成長が足りなかつたな」

『チルルウ』

「うわ…えげつな」

「フェアリータイプの技で攻撃するだなんて容赦ねえな…さすがあほシルバー」

私達が絶句するのも無理はない。それほどの屈辱とトラウマを与えようとしているんだ、あのバトルに全力なシルバーは。

気絶し、倒れてしまったプリンを抱きしめたクリスはシルバーを睨みつける。そんな光景はまさに悪党と被害者。どちらがどちらの役割なのかは言わないでおこう。

——だが

【勝者はああ!!クリスだああ!!!】

「…ん!?!」

「え…はあ!?!どういうことだよ!?!」

「何故だ!俺はちゃんとバトルに勝ったぞ!!何故負けになってしまうんだ!?!」

『チルルウ!!!』

「いやーそういわれましてもねー」

シルバーが司会進行役に向かって怒鳴り声を上げる。もちろん私たちもびっくり驚愕な声を上げる。

それでも判定は覆すことはなかった。

むしろ、それで良かったらしい。

「プリンが小さな体を使ってチャームボイスを放ったあの可愛さはとても愛らしいですね！チルタリスの強い攻撃も見事でしたが一瞬で終わってしまったのが残念です」

「いやー好きですねー」

「プリンが負けてしまったのは大きな判定になるが…それでもちやんとパフォーマンスとしての力を見せていた。むしろあの巨大なチルタリスに挑もうとする小さなプリンの姿がまるで劇団か何かに見えてしまったよ！イッツワンダフル!!」

——そう、これはパフォーマンスバトルなのだ。

バトルの勝敗だけでは勝ち負けは決まらない。ポケモンのパフォーマンスで勝負が決まるような大会。ポケモンをどう美しく…あるいは格好良く、知的に、素晴らしく見せるのがカギとなるバトルだ。それを怠り、ただバトルだけに専念してしまったシルバーは負けてしまうのは仕方ないことだといえる。

「勝った…のか？ 私は、あのシルバーに…勝ったのか!!？」

『プウリ…？』

「よくやったぞプリン！あのチルタリスに勝ってやったぞ!!！」

『プウウウ!!』

「くっ……」

『チルル……』

「……ああ、分かっているさチルタリス」

『チル』

悔しそうな顔をしているシルバーが、座り込んでプリンと抱き合っているクリスに手を伸ばした。

「なんだいきなり……」

『プウリ?』

「いや、こういう勝負もあるものだ勉強になった……それだけは礼を言う」

『チルルウ!』

「……ハッ。次は余裕で勝ってみせるからな!」

『プウリ!』

クリスが立ち上がり、真正面からシルバーを見つめる。そして二人が手を握り締め、

このバトルは終わった。良い感じで終わって良かったと思えた。

「はかいこうせんがなくてよかったな」

「まあね…いい勝負だったよ二人とも！」

「次はこうはいかない。必ず勝ってみせる」

『チル！』

「そうはいくか!!」

『プリー！』

「喧嘩すんツぐつおっ!?——おいクリス!!プリンにはたく指示すんな!!」

「ほらほら喧嘩しないの!!まったく…いつ仲良くなるんだか」

「だれがなるかつ!!」

「はあ…」

.....

『さてさて次の勝負はヒビキ対ヒナだよ！バトルフィールドにカモンっ！』

「よし！バトルだね」

「おう！次は俺の新しいポケモンで決めてやる！！」

「…新しいポケモン？」

バトルフィールドに向かって、トレーナーの位置にそれぞれ立っている私は首を傾けてヒビキを見た。ヒビキの手に持っているのは、真新しそうなモンスターボール。そのボールがガタガタと揺れて、そして一気にフィールド内に現れた。

「行くぞピジョン！！！」

『ピジョンオオオオオオオオ！！！！！！』

「……ん？あれ？」

「どうしたヒナ！はやくポケモンを出せ!!」

「え、うん…いくよピチューー！」

『ピツチュー！…ピチュ!?』

『ピジヨオ!!』

『ピチュピチュ!!』

『ピツジヨオオオ!!!』

「え、やっぱりピチューも知ってるの!？」

「…ん？なんだ？どうかしたかヒナ？」

「えつとね…うーん…これはやっぱり…」

なんか見たことのあるピジョンがいる。急かされたためすぐにモンスターボールを投げてピチューを出す。だがピチューも目の前にいてこちらを睨みつけているピジヨ

ンに何故か驚いていた。私も先ほど驚いていた。というか、絶対に会ったことがあるはず。

——見たことある顔だけど、お兄ちゃんのポケモンじゃないピジョン。

私は確信した。

「あの鋭い目つき…そしてピチューも見たことあるような顔……もしかしてトキワの森にいたポツポ!」

『ピツチュウ!!!』

「なんだよ知り合いか?じゃあなおさら頑張つて勝とうぜピジョン!」

『ピジヨオオオオ!!!』

ピジョンはうるせえ絶対に勝つてやらあ!というような勢いで両腕の翼を広げて私たちを威嚇し、咆哮をあげたのだった。

第二十二話くこれは訓練ではないよく

ホール内にて響く声は熱気に包まれていた。ある者は息を呑みこみながら。ある者は感心しつつ戦術を考えながら。

そしてまたあるポケモンは彼女たちのバトルを見つつ、食事を楽しみながら――

「さすがやなあ…あの子、あのサトシの妹なんやて」

『……ブイ』

「かわええし、ポケモンも育ってる…イーブイ。後で謝らな」

『…ブイイ』

——このバトルはまだ始まったばかりだ。

「ピジョン！つばめがえし！」

『ピジョオオオ!!』

「ピチュー！アイアンテールで受け止めてあげて！」

『ピツチュウ!』

ピジョンの閃光がかつた翼を受け止めたピチューが後ろに押し戻されつつ、電撃をバチバチと光らせて威嚇行動をとる。その電気に当たっていても、ピジョンは引くようなことはしない。鋭い眼差しに浮かぶのは勝利への貪欲な希望だ。このまま勝ちたいという、強さへの欲望だ。

それをヒビキは分かっていた。そしてもちろんヒナやピチューも負けるつもりはなかった。

「地面巻き込みながら10まんボルト！」

『ピチュー!』

「全部吹っ飛ばしつつ、たつまき！」
『ピツジョオオオ!!』

雷光と疾風が巻き起こり、爆発する。それでも二人は互いを見つめ合っていた。バトルに集中しながらも、笑いかけていた。これはただのバトルじゃない、パフォーマンスバトルなのだということもちゃんと理解できていた。

だから、すべてをぶつつつつ、審査員に良い評価が出るようにけしかけていく。

そんな中で、黒い煙幕の間から鋭い風がピチューの間を突き抜ける。それに容赦なく当たりそうになったピチューが避けつつも、ピジョンがいる方向を見つめた。

「ピチュー！ボルテッカー!!」

『ピツチュウウ!!』

「つばさでうつ！」

『ピツジョ!!』

「おお…これはすごいですね！」

「いやー好きですねー」

「こんなバトルを見られるだなんて…イツツググレイト!!」

光の刃と風の刃が再びぶつかり合う。その光景はまさしく幻想そのもの。誰もが息を呑む綺麗な光景であった。

「…ほう、あのピジョン…特性はするどいめか…?」

「ああ? どう見ても普通のピジョンだろう!」

「ふん。貴様に言っても何も分かるまい」

「分かるに決まっているだろう叩き潰すぞ!!」

「やってみろ。…チルタリス」

『チルウ』

「こいつを地面に沈めろ! プリン!」

『プリー?』

——観戦席で何かがあろうとも、二人の集中は途切れることはない。

「ピチュー！後ろに下がってわるだくみ！」

『ピツチュ！』

「へー珍しい技使ってんじゃん！んじゃあこっちはこうそくいどうだ！素早さを積み込め！」

『ピジョオ!!』

ピチューが後ろに下がって【とくこう】を強めるのならば、ピジョンは【すばやさ】を上げていく。どちらも真剣に、でもパフォームンスになるように盛大に。

ピチューが可愛らしく審査員に向かって笑いかけながらもわるだくみを発動し、ピジョンは力強さをアピールしつつ翼を大きく動かしてこうそくいどうを行った。

二人は地下通路でのバトルを忘れているわけじゃない。ただ力のごり押しでどうにかできる相手じゃないと分かっているし、そういうバトルもあるのだとちゃんと理解していた。

「これで最後よ!!」

「望むところだ!!」

それぞれが最後の技を出そうとした——瞬間だった。

「ここは我々新生ロケット団がハイジャック…いや、シージャックした!! バトルを止めろ! 全員が人質だぞ! 抵抗するなら弱いモノから殺していく!!」

その声はホール内のアナウンスから聞こえてくる。男の騒がしい声と、そして悲鳴のような恐怖に染まった声がある。ロケット団と言った声に反応し、それぞれがバトルを中断したところ、急にホール内に黒服の男たちが押し寄せてきた。それを見て唾然とするのはバトルを行っていたヒナとヒビキだ。

「…はっ?…うわ…」

「え…やばくない?」

二人はとある少年を見た。クリスは黒服の男たちを睨みつけているが、隣にいた少年の異変に気づいて目を見開いた。

チルタリスは呆れていた。プリンはクリスに抱きつき怯えていた。

「……………」

何も言わない少年の顔は、綺麗に微笑んでいた。——目が笑っていない状態で。

……………

——これやばいこれやばいこれ絶対にやばい主に船が沈没する元凶がやばい!!

「おとなしくしている！そしてポケモンたちや金目のものを出せ！ああもちろん大会の

商品であるマスターボールや進化の石もだ!!」

「おいそこー! 不要な動きをするな!」

「抵抗などをしたらアーボックの毒で殺してやるぞ!!」

ロケット団がホール内にいる。でもおそらく船のどこか他の場所にもいるのだろう。ポケモンを出しているのは順番が決まっているらしく。私達は運よく最後らへんでロケット団に渡さなければいけない。その時間に、奴を止めなければいけない!

幸いシルバーから遠い場所にいるから、私たちの焦りはわからないはず…だと思っただから、その間に何とかしなければ。

「ヒビキ…シルバーを眠らせられる?」

「馬鹿なこと言うな今のあいつに手を出したら俺がぶつ殺されちゃうだろ!!」

「じゃあどうしたらいいわけ!? あんな…お兄ちゃんが軽くキレている時のような感じで…もうあの惨状は見たくない!」

「お前だけじゃねっての! くそ…この現状がわからないようにするには…どうすれば…」

「あ、ゾロアークのイリュージョンはどう?」

「…あ」

周りを監視されているため、ボールからこつそりとゾロアークを出すのは大変だった。でも何とか隙をついてできそうな気がする。だからこのままイリユージュオンをして、ロケット団の皆を騙してしまえばいい。そうすれば惨状なんて起きずに終わってしまう。

そう、思っていた。

「おいそこ！何をやっている！」

「っ?! よしいまだゾロアーク、イリユージュオン!!」

『ガアア!』

「なっ?! くそ…おいヨルノズク! みやぶる!!」

『ホーッ!』

「え…!？」

「へへへッやつかいなことしやがって…!」

「おいあそこにいるピジョンもなかなかのレベルじゃねえか?」

「ゾロアークか!こつちじゃ珍しいポケモンになってんだ!よこせクソガキ!」

「ふざけんなこいつは俺の相棒だ!誰がよこすかよ!」

『ピジョオオ!』

『ガアアア!!』

光に包まれていたゾロアークのイリュージョンを、ヨルノズクがすべて崩壊させてしまった。私達の最後の砦が、やぶられた。ロケット団がこちらを睨みつけてアーボックをけしかけようとしているけれど、それは怖くない。ピチューが攻撃に当たらないよう警戒してくれているし、ゾロアークもヨルノズクぶつ潰せば何とかなるといふヒビキの考えを読み取って動こうとしているから問題ない。ただ欲しいのは時間だけだ。

シルバーの歩みを止める時間が欲しい。

——でも無情にも時は進む。

「おいそこ!お前だよこのガキ!動くな!!」

「おいシルバー!?!動いたら他のポケモンや人間に危害を加えられる可能性がある!やめ

ろー!」

『プウリ…』

「うわあ動いちやつてるよこれヤバいよどうしよう!」

『ピチュウ!!』

「ヒナ…サトシさんが前にやっていたあの技覚えてるか?」

「え?何の技?」

「あれだよあれ!!あれなら絶対にうまく弾くことができるはずだ!!」

「……………ああ!分かった!」

一歩一歩と歩みを止めない彼が、隣に寄り添うチルタリスにある命令を仕掛けようとする。

それは、悪しきロケット団を潰すための行為であり、笑えないほどの威力のある破壊行為でもあった。

「チルタリス、はかいこうせん」

『チルウウウウウ!!!』

第二十三話　未来への筋道

「いやあ…弁償事にならなくて良かったよねえ…」

『ピイツチユ…』

「トレーナー資格剥奪だなんていう最悪の事態も防げたし万々歳だな…」

『ピツジヨオオ』

『ガアア』

「それで何か言うことはないかな？シルバーくん？」

「ひとつも見当たらないと思うのだが…？」

『チルルウ？』

「だああ！お前らがそんなんだからはいこうせんが破壊光線になるんだよ!!」

「ちゃんと自覚すること！そしてちゃんと最悪の事態を考えておくこと！それが今回の

反省点です!!」

ホール内の天井を見上げれば見えてくるのは清々しい夕日空。カウンターシールドによつて、止めたはずのはいこうせんが天井に突き刺さり、全てを破壊しつつ空に閃光が向かった証拠のあとだ。

船の人にやりすぎだとシルバーが怒鳴られた。けれどきつかけを作ったとはいえ、犯罪者たちを捕まえてくれたことに免じて処罰の対象にはならなかった。

ヒビキは冷や汗をかき、私もひやひやして——シルバーはもつと痛めつけてやりたかったと不服だった。

つまり、反省していけないので説教が必要ということですよ。

「……チツ」

『チルウ』

「ちゃんと反省するまでバトル禁止にするぞあほシルバーめ!」

「ちよつとやり過ぎてるし周りのこと見てない部分があるからちやんと考えて行動してね?」

「……」

「…シルバー?」

「おいシルバー！」

「…分かった。つまり一点集中型を極めればいいんだな？」

「そういう問題か!!？」

この調子だと、恐らくシルバーは普通にまた何かやらすかもしれない。そこは本当に兄に似ていてかなり不安だ。だから、はかいこうせん禁止を考えておかないと後が怖くなると思う。

でも、シルバーが理解しないとこの問題は解決しないんだよね。実際に危害を加えたのは——まあ、四年前の船とニビジムとこの聖・アンヌ号なんだけれども。

…やっぱり多いか。ちゃんと反省してもらわなきゃ。

「とにかく！シルバーのチルタリスによる影響を抑える方法をちゃんと考えないと駄目だからね！」

「はかいこうせんは一撃必殺として使っているからな…無理に決まっているだろう」

「だから！そんな硬いこと言ってるからいつまで経ってもチルタリスの攻撃による壊滅的被害が起きるんだろ！自覚しろよ！」

「シルバーのお父さんが困るかもしれないよ？だからちゃんと考えてね？」

「父上が…っ…分かった」

「え、マジで!？」

「本当に？本当に考えてるのよね」

「ああ。これからチルタリスのはかいこうせんをどうするかちゃんと考えておく」

『チルウ?』

「チルタリス、これも修行だ」

『チ、チルツ!』

シルバーの父上に対する威力が半端ない。チルタリスは首を傾けて本当に我ははかいこうせんを極めなくて良いのだろうか?というような顔をしてきたけれどね。シルバーを説得できたなら大丈夫なはず。

.....

そんなこんなで、進化の石もマスターボールも大会ごとなくなってしまった。石くら

いは欲しかったからちよつと惜しいなと思いつつ、ナゾノクサと散歩にでも行こうと決心した。

船の中はあまり揺れることなく、ポケモン専用のきのみを貰ってあとでリザードンやピチユー、ナゾノクサと一緒に食べようと思いつながら歩いていく。ホールではない場所。客室の廊下から、展望デッキへ。

『ナゾナゾ』

「ナゾノクサ、気持ちいい？」

『ナツゾー!』

ナゾノクサが頭の上にある草を揺らしながら私に向かって笑いかけてくれた。私も微笑みながら、夕日を眺める。

——ふと、下を見てみた。

「——っ!」

「あれ…クリス？」

『ナツゾオ?』

展望デッキは二階部分らしく、その下に見える外のバトルフィールドで戦っているらしいクリスと知らないトレーナーの姿。クリスはチコリータで戦っていて、知らないトレーナーはストライクでやっている。

ナゾノクサもそのようすを観戦し、もつと近くで見たいとばかりにジャンプして促してきた。だから、展望デッキから階段を下って、バトルフィールドを近くで観戦する。

「チコリータ！ つるのムチ！」

『チイッコ！』

「ぐっ!? ストライク、切り裂け！」

『ストラアアイク!!』

『チッコオツ!!』

「大丈夫だチコリータ！ お前ならやれる！ もう一度つるのムチ！」

『チコ：チコリッツ!!』

『ストラアアイツ!!』

「ああ!? ストライクうう!!」

つるのムチによつて壁に叩きつけられたストライクが目を回して倒れる。そしてトレーナーがストライクの側に近寄り、そこでバトルは終了となった。

チコリータは葉っぱをぶんぶん振り回して勝利を歓び、クリスはそんなチコリータの頭を撫でる。ポケモンと人間の絆が現れているとても気分のいいバトルだ。

『ナツゾオ!』

「あ、ナゾノクサ!」

「む、ナゾノクサ?...ああ、いたのかヒナ」

『チイコ?』

「うんごめんね。なんか覗き見してて」

「いや、ポケモンバトルとはそういうものだ...だが、ちょうどいいな...」

「へ?」

「ヒナ、私とバトルしろ。それもあの色違いのリザードンとだ」

「.....何で?」

『ナゾオ?』

私が首を傾けると、近くにいたナゾノクサも同じ動作をして草を揺らす。リザードンを皆が見ているここを出して騒ぎにならなければいいのだが、それをクリスは分かっているのだろうか?

「ここでリザードンを出す意味は?この船の...私の部屋に行けばリザードンを出してあげることができるし、バトルだって無理にしなくても...」

「お前の相棒だとヒビキから聞いた。だから戦いたい」

拍子抜けした。そうだ、クリスは色違いについて何も反応しなかったではないか。ポケモンにペンキでも塗って色違いにすればいいと怒っていたじゃないか。

少しだけ、色違いについてのトレーナーの反応を怖がってしまった自分を恥じた。そんな私にナゾノクサが元気出せとばかりに足元にすり寄り、懐にある二つのボールがゆらゆらと揺れる。リザードンのボールは出てきて騒ぎになっても大丈夫よ、と言うかのように大きく揺れていた。

クリスの目は本気だ。だから、全力を出さなければならぬ。私は頷いた。

「バトルとなったら…全力を出して戦うからね」

「もちろんだ！」

私とクリスがバトルフィールドの両側に立つ。私はボールを手に取り、クリスは側にしたチコリータをフィールド内へと行くように指差す。

「行つておいで！リザードン!!」

『グオオオオッ!』

「全てを出して戦うぞ、チコリータ!」

『チッコオオオ!』

漆黒の翼と、緑の葉っぱが揺れる。ナゾノクサがりザードンの炎の尻尾を見て近づこ

うとしたから慌てて抱き上げつつ、両者が睨み合う。これから熱いバトルが始まるかもしれない。

だが、バトルの熱気を冷ますのは、それを見た観戦者が大きく騒ぎとなつて聞こえてきたせいだ。

「おい見ろよ！あのリザードン色違いだぞ！」

「うわあすつげー！格好良い！」

「交換してくれないのかな…？」

「ポケモン交換所まで連れていったら交換してくれるぜたぶん！」

「絶対に交換してもらおう！あのリザードン欲しい！」

本当に、これらの声が苛立つ。色違いだから価値があると思つてる馬鹿が多すぎてムカつく。

私とリザードンが嫌そうな顔をして、クリスとチコリータが攻撃でもするかの勢いで怒鳴ろうと——したときだった。

「ああー！あつちに色違いのギャラドスが大発生してるぜ！！」

『グアアア』

「え!? 何々!」

「本当だ! 海にギャラドスの色違いがいるぞ!」

「どいて! 私が捕まえるんだから!」

「いや俺だ!」

「こんなところにいたら捕まえられない! 早くいかないと!!」

急にドタドタと忙しい音を振り乱しながら走り去っていく観戦者のトレーナー達を見て呆気にとられる。周りを見ても色違いのギャラドスは見つからない。でも誰の作業かはすぐに分かった。だから、バトルに集中できるはずだ。

「ありがとうヒビキ!」

『グオオツ』

「ふん、礼は言わないからな!」

『チコリツ!』

「いいからさっさとバトルしろよ? ゾロアークのイリュージョンが長く持つか分からないんだからな!」

『グアアア』

「分かった…じゃあ、いくよ!」

「ああ! 望むところだ!」

二人が睨み合う姿から、お互いが口を開き、指を指すことでバトルに変わっていく。

「リザードン、かえんほうしゃ!!」

『グオオオオツ!!』

「チコリータ!かわしてからはっぱカッター!」

『チイイツコオ!!』

「リザードンっ…リザードン?」

『グオオツ!』

「そっか、分かった」

炎を素早くかわしたチコリータが葉っぱを大量に出して、リザードンを切り裂こうと動く。でもリザードンはそれを避けようとはしない。あえて受け止めようとしていることに、私は気づいた。

「なっ!?!…くそ、ダメージなしか!」

『チコリッツ！チコチコ!!』

「…ああ、そうだな！悲嘆にくれている暇はない！全力でやってやる！チコリータ、つるのムチだ！」

『チイツコオ!!』

「…リザードン、かえんほうしゃ！」

『グオオオオツ!!』

つるのムチごと、リザードンの火炎がチコリータを焼ききる。そして爆風と炎が消えたあと、見えてくるのは倒れているチコリータと、まだまだ力を温存するリザードンの姿だ。

笑えないほどの力のごり押し。このままでいてはいけないバトルスタイル。でも、ここで全力を出すのなら…今の私にはそれが一番似合っていた。

「くそ、くそっ！」

『チコ…リ…』

「ああ、すまない…私のせいだな」

「あの…クリス？」

「…私はまだまだ力が足りない。ヒナとリザードンのような強固な絆も、バトルに勝つための戦略もまだ何も見つからない。これでは、シルバーにいつまで経っても勝つこと

はできない！」

そういつてきたクリスの瞳には、強い後悔と希望があった。吐き出してくれた言葉を聞いて、私はあの時の事件でのクリスのことを思い出す。クリスは何もしていなかった。シルバーは犯罪者たちをいろんな意味で止めてしまい、私とヒビキは船の崩壊を微妙に止めた。クリスはただ見ているだけだった。見ていることしかできなかった。

彼女のポケモンであるチコリータとプリンはまだ育成途中でチルタリスより劣る部分があるから、だからまだ勝つことはできないのだと叫ぶ。

事件を見て思い知らされたのだと、そう語ってくれた。

——でも

「んなわけねーんじゃねーの？」

悲鳴のような声で叫ぶクリスに向かって話しかけたのは先程までバトルを観戦していたヒビキだ。ヒビキが私とリザードン、そして抱きしめているナゾノクサに近づい

て、ある種の境界線を主張する。

「お前はまだ弱いけど、それは俺も同じだった…弱すぎて、ヒナのリザードンに吹っ飛ばされたこともあった。でも、ヒナやりザードンも負けたことがあるんだ。誰もがみんな、強いつてわけじゃないんだよ！」

『グアアアッ！』

「ヒビキ…」

『グオオ…』

思い出すのはマサラタウンでのあの喧嘩。イツシユ地方のあと、すぐにヒビキ達に苛められつつジムバッチを求めにいったあの旅路だ。

そう、誰もが強い訳じゃない。お兄ちゃんはどうなのか知らないけれど…うん、兄は例外としても、それでもみんな最初は弱かった。弱かったんだ。

ヒビキはそれを知っていた。あの喧嘩を、あのバトルを見て心に刻んでいた。強くなるために必死になって抗ったんだ。

「クリス…私たちは四年以上も前からポケモン達と関わっているんだ。だから、まだまだ始まったばかりのクリスとチコリータなら、すぐに強くなるはずだよ」

『グオオオッ！』

「そうだぜ！ヒナの言う通りだ！だから慌てて強くなろうとすんな！慌てたら意味なん

てない。強さっていうのはポケモンと一緒に築いていくもんだぜ！」

『グアアア！』

私たちの言葉を聞いて、クリスはチコリータを見た。チコリータは力強い目で頷いていた。

「…そうだな。私たちはまだ始まったばかり……なら、やるべきことをしてみよう。まだ弱いのなら、強くなれば良い！限界を感じない今なら、もつともつと強くなれる！」

『チイツコオオ!!』

「おう！その粹だ！」

『ガアア!』

『ナゾナゾ?』

「…ナゾノクサも、もつと強くなろうね」

『ナツゾオオ!』

『グオオオオオツ!』

夕日の中、私たちは微笑みあった。笑いながら、この先の未来を夢見た。——マチスさんとの戦いで絶対に負けたくない。リーグ戦で絶対に負けたくない。

そう闘志を燃やすのは心のうち。

他の二人は何も知らず、ヒビキはゾロアークに笑いかけながら。クリスは私たちに微

笑みながら口を開いた。

「…ヒナ、ヒビキ…ありがとう」

『チコチコ!』

夕日のせいか、クリスの頬が赤く染まっていたのだった。

第二十四話　闇色に染まる

夜に紛れて、一人のトレーナーが船に降り立った。トレーナーの側には、一匹のリザードンがいた。いや、そのポケモンの背中に乗っていたのだ。

リザードンは他の人では育てきれないようなレベルの高さが感じられる。

人を翼で運べるほどの強さ、かつその強靱な尻尾の炎の強さと傷だらけな身体から見える修羅場の多さが普通の船員でも理解できた。

トレーナー：いや彼は、普通ならばこのような場所に来る人間ではなかった。でも来てくれた。だからこの騒動を終息してくれるだろう。船員たちは肩の力を抜き、密かに息をはいた。

「……」

『グウウ』

リザードンは静かにトレーナーを下ろし、トレーナーを見つめる。トレーナーはリザードンを見て頷き、ボールへ戻していった。

「お待ちしていましたよーさささ、こちらへ。案内します！」

船員の言葉に頷いた男は、再び頷き、頭にかぶる帽子を深くかぶり直した。

・・・・・・・・

深い暗闇の奥にある一室の部屋。そこは客である人間やポケモンの誰にも見つからない場所に隠されていた。何かがあつたときに必要だと考えて設計されていたのだが、まさかすぐに利用することになるとは、と船長がため息をつく。

本来なら暴走したポケモンを一時的に冷静にさせるための大きな部屋。バトル用の

部屋とは違い、ここは密閉された空間だ。窓もなく、扉はひとつしかない。そしてイワークでさえ余裕で入れる広い空間でもある。

そんなすべての騒動を闇に隠すかのような部屋に、大きな声が響く。

「だあからああ！話す気ないっていつてるだろ！」

「それよりもあの赤毛のガキ出せ！あいつぶつ殺してやる！」

「貴様ら！今の自分の立場を理解してないのか!？」

部屋の中心に設置されている机を叩いたのは船長。その船長と向かい合っているのは新生ロケット団とかいうよくわからない犯罪者たちだ。

彼らはその言葉通り捕まえることができた。赤毛の少年——名前を、シルバーと言ったか。その子に救われた。警備体制の穴を見つけることに成功した船長たちが密かに感謝したぐらいだ。

まあ密かに感謝しなければいけないほどの騒動を起こし、ホールの天井に大きな穴が開いたが、解放間が増したと考えれば許せなくもない。

とにかく、一番解せないのは彼ら犯罪者のずさんな計画だった。ずさんというと、船長たちの無能さが明らかになってしまおうが、あとから考えればこれは仕方ないことだと

言えよう。これから気をつけなければいい。一度の失敗から学べばいい。

だから、犯罪者共の話が聞きたい。

「言え！貴様らの組織はなぜこの船を狙った!?この船を乗っ取る必要があるのか！」

「んなもんねーよ！ただボスの指令だつーの!!」

「指令とはなんだ！話せ!!」

「じゃあ赤毛のガキ連れてきたら話してやるよお」

「くっ…ゲス共め」

にやにやと嘲る笑みを浮かべる黒服の男たちはただ、赤毛の少年をいたぶることしか考えていない。

少年はちゃんとしたこの船の客だ。だから、犯罪者共の言う通りには出来ない。でも話をしてくれないのなら意味はない。

この聖・アンヌ号には権力を持った客が多く存在する。もちろん強いトレーナーや珍しいポケモンを持った客もだ。だからこそ、たった一人の少年によつて捕まっただずさんな計画だとしても話を聞かなければならない。

この船が乗船するのは、盛大的ではなかった。誰にも知られずに楽しむことができる

秘密の船旅のはずだった。

でも、犯罪者共は知っていた。そして一時的にだが、この船は乗っ取られた。だから、それがどうしてなのか知りたい。でも知ることが出来ない。八方塞がりだ。

——だが、

「船長！」

「おお……やっときたか！」

船員に連れられて来てくれたのは、一人の男。六つのボールを腰につけている帽子を深くかぶった男だ。

椅子に座っている犯罪者共は彼を見て一瞬赤毛の少年か確認し、違うとわかれば舌打ちをした。

「おい、こんな弱々しいやつじゃねーよ！赤毛のガキだつて言ってるだろ！！てか誰なんだよ、こいつ」

「こいつ誰なんだよ？ ジュンサーのご家族？」

「ギャハハハ！ じゃあポケモンもよわっちーのかね！」

蔑みと下品な笑みに、船長と船員たちが舌打ちして睨み付ける。

「口を慎め貴様ら！ この人は——え？」

この男の偉大さを話してやろうとしたら、本人に手を上げられて止められた。話すなと仕草で伝えてきた。

思わず彼を見て、息を呑んだ。

帽子の奥に光る瞳には、冷たい闘志があった。いや、これは怒りかもしれない。まるで吹雪の中で見つめられているような錯覚のする極寒の瞳。赤い目なのに、とても綺麗だと思えた。

「……頼んだよ」

『ファイ』

男はボールからポケモンを取り出した。そしてそのポケモンに何かを命じ、犯罪者共の目を見つめた。

「ぐっ…!?」

「なに…しやがる…!!」

「てめえ…っ!」

『フィィィ』

ポケモンに見つめられた犯罪者共が次第に大人しくなっていく。何をしているのだろう。よくわからないが、それでもすごいと分かる。あのポケモンは見たことがあるが、こんなにもすごい力を持っているのか。船長は感心し、この異様な状況を見守り続けた。

ポケモンの瞳が大きく輝き、犯罪者共の目を曇らせる。

——やがて、男が口を開いた。

「何故この船を襲ったの？」

「…珍しいポケモンと金を取るため」

「ポケモンはブラックマーケットに売り出して、金は新生ロケット団のために使うつもりだった」

「新生ロケット団は何でできた？」

「悪を貫く人間はたくさんいる。その執念を認めてくれる組織がロケット団だった」

「サカキ様は善人に変わられてしまった。それをあの人は惜しんでいた」

「あの人って誰？」

「アポロ様だ」

「アポロ様は俺たちのことを分かってくれている」

「サカキ様がいつか戻られると願って行動している。俺らはアポロ様の助けになろうとしました」

「…ボスの名前も、アポロって言うの？」

「…そうだ」

「サカキ様がない今は、アポロ様が仮のボスとなる」

「アポロ様はサカキ様の代理だ」

「……ありがとう、エーファイ」

『ファイ』

エーファイの光っていた瞳が、輝きを失い闇に染まっていった。

その瞬間、犯罪者共は我に返ったかのような表情をする。そして目の前にいる男を睨み付けた。でも男は、何も恐れてはいなかった。

船員の誰かが、エーファイの力で喋ったんだと呟いた。でもそんな声も、男は気にしない。

男はまた、口を開いた。

「国際警察に連絡を…今喋った事実を全て話してください」

「わ、分かりました！」

船長がどこかへ行ってしまふ。おそらく連絡をしにくいのだろう。

男は別の船員を見た。

「あと、ヘリか何かを…彼らをずっとここに置いていてももう何も意味はないでしょう」
「んだとっ!!」

「てめえ…あとで覚えてろ！」

「牢屋にいたとしても絶対に脱走しててめえを痛い目にあわせてやる！」

負け犬の遠吠えだ。男の実力を見た船員たちは、犯罪者共のことが哀れに思えた。でも、もう何をいつても始まらない。全ては話させた。あとは警察に任せるだけの話だ。

だが、男は微笑んでいた。真顔ではない、普通の笑みを浮かべて、騒ぎ立ててる犯罪者共には聞こえない声で言ったのだ。

「そうだね…娘達に手を出されるよりは何倍もいいかな…」

「む、娘たち…?」

船員たちは驚愕した。何もかもが不明で謎の多い男だった。でも事実がひとつ、伝わった。

この男には子供がいるのかと、驚いている。子供はどんな偉大な子に育っているのだろうか、妄想を膨らませる。

——そんな時だった。

「てめえの名前はなんだ!!話してみろ!!!」

「絶対に見つけ出してぶっ殺してやるから名前を教えろ!!」

男が笑う。

それは、有名かつ最強と言われているポケモンマスターに似たような微笑みだった。

「…僕はレッド…君たちとの勝負が楽しみだから、その時を待っているよ」
『フイイイ』

——まあ、勝負を楽しんでいるのは僕の息子かポケモンたちなんだけどね。

そう呟いた声は誰にも届かなかった。

第二十五話くこれからのことく

その場で偶然見たのは、きつと運命だったのかもしれない。

「レッドさん!？」

「…だれ」

真夜中の船で散歩なんてしていなければ、きつと出会うことはなかったはずの、トレーナー。

ポケモンマスターになるのを拒否し、ポケモンのことだけを信じて様々な凶悪事件を解決したとされる…いまや伝説のトレーナーだ。時には暴れるポケモンや人間相手に立ち向かう彼のことを交渉人と誰かが呼んでいた。

それほどまでにも凄い人なんだと、幼い頃にテレビに出ていたのを知っていた。何も

かもが謎に包まれているけれど、ポケモンには優しいこの人の存在を知っていた。

でも、そんなトレーナーが何故船にいるのだろうか、クリスは考えていた。でも、考える必要は今は無かった。ただ、これはチャンスだとそう確信していただけのこと。

「お願いします！私を弟子にしてください!!」

——自分の望むことただひとつ。ポケモンと一緒に強くなるために【現状】を打開したいということ。

「断る」

「え……?」

「僕は強くない……強いのはポケモン……」

でも、レッドはそう考えていなかった。

弟子なんて要らないと、そう言う言葉にはなんの躊躇いもない。それでも、クリスは諦めきれないでいる。ボールのなかにいるポケモン達でさえ、クリスの気持ちに反応してぐらぐらと揺れているのだ。だから、クリスは諦めるという選択肢はない。

「お願いします……私は、このまま進みたくない!強いのはポケモンだということは知っています。友人が……ヒナたちが全てを教えてくれた!現状で満足しては駄目だと

分からせてくれた！だから私たちは強くなりたい！」

「…友人に…ヒナたちに教えられた？」

「はい！ポケモンは最初から強いわけではない…ポケモンと人間が一緒になって戦うということ。そして強さはまだ限界がないということを知りました！」

クリスは、ジョウト地方の学校にて、シルバーにポケモンの知識量と育成で負けた。全てにおいて自分が上なんだと無意識のうちに驕ったせいで負けたとあの新生ロケツト団を止めてくれた三人の行動によって気づいた。

自分はまだまだ弱いんだと、分からせてくれた。

だから、このままジムバッジを求める旅をしたとして、何が変わるのだろうかと不安があった。一時は大丈夫だと思ったけれど、それはヒナたちだからできること。クリスは、自分自身の力に自信はなかった。

「私は強くなりたい！皆に認められるのではない…ポケモンと一緒に強くなつて、皆に勝ちたい！」

「…勝つてどういう意味なのかわかってる？」

「ポケモンとの絆の強さの証です!!」

クリスが力強く断言すると、彼の帽子の奥深くから見えた瞳が笑ったように見えた。

「……ついてきて」

「え……っ！」

クリスから背を向けて歩き出すレッドの言葉が一瞬幻聴だと思えたのだが、彼はちゃんと待っていてくれた。強くしてくれる。熱い思いが込み上げてくるのを感じる。

「っ……ありがとうございます!!」

「礼はいらない……とにかく、荷物持ってデッキに来て」

「はい!!」

大きく叫んだクリスはすぐさま行動を開始した。走りだし、廊下を突き進む彼女の心はとてども晴れやかだった。

.....

デツキに向かった彼女に待っていたのは鍛えられたリザードンと、レッドの姿。

そんな彼を見て、一瞬騒ぎたい気持ちを抑えたクリスは素直にリザードンの背に乗り、船から飛び離れていく。

(…ヒナたちに別れを言っておけばよかったな…シルバーはどうでもいいが)

遠ざかる船を振り返って見ながら、あの時に笑いかけてくれたヒナたちの表情を思い出す。

でももう後戻りは出来ない。強く吹き荒れる風を身体で感じながらも、クリスは心の中で絶対に強くなろうと心に決めた。

「あの、ここは？」

「……行けば分かる」

リザードンが降り立った土地は地面がでこぼことしていて、地面タイプが気に入りそうな環境だ。

レッドが前に向かって進むため、クリスもすぐに後を追って前へ歩く。

すると、地形がゆっくりと変化していき——前へ進むごとに、環境は樹木の生えた森に変わる。これもポケモンたちの力なんだろうか。クリスは気になりつつも、前へ進んだ。

すると——

『——ツツ！』

「つ……なんだここは!?!」

見えたのは、様々なポケモンたちが整備されているバトルフィールドのような場所で戦っている光景。トレーナーと共に戦うのは見たことがあるが、ここにはそんなものはない。でも、人工的に取り付けられた明かりがあった。その照明らのおかげで、夜だというのに全てがはつきりと見えた。

これは異様だ。クリスは息を呑む。ここにこそ、自分たちの必要な強さがあるのではないかとそう思った。

ふと、レッドが草むらからバトルフィールドのような場所へ向かっていく。クリスもその後を追いかけ、立ち止まる。いや、立ち止まるを得ない光景だとクリスは思った。

ポケモンたちがこちらを見ているのだ。訝しげな表情で……たまに首を傾けたり飛行タイプのポケモンが何処かへ飛び去ったりとなかなか圧巻ある光景だ。

でも、ポケモンたちのあの微妙な行動はレッドを歓迎していないのではないか。レッド自ら鍛えているわけではないのか。様々な疑問がクリスの頭の中でぐるぐると回る。

「あの……レッドさ……」

「——何でここにいるんだ」

クリスの耳に聞こえてきたのは怒気を抑えた小さな声。声は後ろから聞こえてきた。振り向くとそこにいたのはまたもや伝説のトレーナー。なぜ彼がここに……いや、レッド

が連れてきたから、彼に会わせてくれたのか。

彼——サトシは嫌そうな表情を隠さずにレッドを見た。

「……」

「なあ、何でここに……そんな女の子を連れてきたんだ？」

「……大きくなったね」

「四年も経てば大きくなるわ！」

『ピカッチュウ？』

クリスの思考が完全に停止している間、いつのまにかやって来ていたピカチュウがサトシの肩へ飛び乗ってクリスの方を尻尾で指した。それを見たレッドはただ小さく声を出す。

「強くしてほしいらしいよ」

「……は？」

『ピカピカ？』

「ヒナの友達らしいし……それに彼女のポケモンの強さの理論が面白かったから連れてきた」

「……なんだそれ」

サトシはため息をついて奥で何うポケモン達に他のバトルフィールドを利用するよ
うに仕草で促す。するとポケモン達はすぐにサトシの言うことを理解し、動き出した。
クリスの思考が正常に働くようになるまで数十秒。その時間さえあればポケモン達の
移動は完了する。

だから今この場にいるのはクリスとレッドとサトシ、そしてピカチュウだけだ。

「あの……え？まさかポケモンマスターに強くしてもらおうってことですか!？」

「……嫌?」

「そんなことないですむしろ大歓迎!!」

「即答だな」

『ピイカア』

サトシとピカチュウが呆れているというのに、クリスは何も気づかない。というより
もこれは凄いことになるんじゃないかと驚き戦っている。冷や汗が流れ、視線はあちら
こちらに向かい、そして両手は震えている。

つまり、クリスはびびっていた。でも強くなりたい気持ちは正直ある。だからここで
引いては駄目だと覚悟を決める。

そして盛大に土下座した。

「強くしてくださいお願いします!!!」

「……おー……こんな綺麗な土下座見るのシューティー以来だな……」

『ピカアア……』

「……現実逃避してる?」

「してねえよ。むしろあんたが来たことに現実逃避しそっだよ」

「……ポケモンマスターなのに?」

「ポケモンマスターでも、俺はただのトレーナーだ。だからお前の望む強さを手に入れられるかは分からねえぞ?」

サトシはピカチュウの頭を撫でながらクリスに問いかけた。だから、クリスは土下座したまま、話し始める。

「私の欲しい強さはポケモンと人間の絆! ヒナたちのような強さが欲しい!! だから……強くなりたいのでお願いします!!!」

「絆の強さ……ねえ?」

『ピカツチュウ』

サトシとピカチュウがお互いの顔を見た。その行動こそまさしく信頼しあっている絆が深いことの現れであり、クリスの望む強さだと思えた。

気の乗らないサトシに、レッドが軽く助言をする。

「サトシ……僕とのバトルしたがっていたよね……?」

「…あんたバトルは嫌いだよ」

「それでも…必要ならやるよ。大事な息子の我が儘だからね…」

「嘘つけ。俺の我が儘じゃなくて彼女の交渉に使おうとしてるくせに…だからあんたはいつまで経ってもクソ親父なんだよ」

『ピイカア…』

「むすっ!!?おや…えっ!!?」

クリスは驚愕した。むしろ目ん玉が飛び出るかと思う衝撃だった。伝説のトレナー二人が、親子同士だと!!?確かにレッドは大人だ。でも二十代かそこらにしか見えない容姿をしているからそうは見えない。でも確かにレッドとサトシは似ていると思う。帽子を深くかぶりなおしたらそっくりだ。

「なあ、お前の名前はなんだ?」

『ピイカツチュウ?』

「えっ…あ、クリスです!」

「そうかクリス…なら、しばらくこの山で修行だな。でも期待はするなよ…俺がやらなかったら妹に叱られるのは目に見えているからな」

「い、妹に…?」

また、よく分からない単語が出てきた。妹がいるのか。ポケモンマスターの頭の上がない妹とやらが。

質問して聞きたいという表情を浮かべるクリスに、レッドが口を開く。

「サトシにとつての妹…：僕にとつての娘はヒナだよ」

「え…」

「なんだよ? ヒナから聞いてないのか?」

「聞かないのも無理はないよ…：ヒナは僕と同じで騒ぎが苦手だからね」

「ええええええツツ」

!!!?!!?

大きな声でクリスは叫んだ。そのせいで声が届く範囲にいるサトシのポケモンたちが苦笑し、野生の飛行タイプのポケモンが誤って地面に落下し、とある船の上のベッド

で寝ている女の子が小さくしゃみをしてリザードンに心配されていた。クリスの思考は素早く加速する。

ヒナが交渉人とポケモンマスターの家族ということは、強いのは当たり前だったのか。いや、彼女は最初から強い訳じゃなかった。でも、もしかしたらヒナは凄まじい人間かもしれない。

クリスは頭を働かせて——やがて諦めた。ヒナはただの友達だ。友達の家族が誰であろうとかまわさない。そう考えたことに、サトシとレッドが気づいた。

「まあ、ヒナの友達としては根性あるみたいだし…やれることは教えてやるよ。さつきもいったように、妹に叱られないように手加減はするかな？」

『ピカピカ』

「つ…はい！お願いします!!」

クリスはまた土下座をした。レッドは何も言わず、サトシは頬をかいて呆れていたが、それでも土下座しなければいけないと思った。

(ヒナ、ヒビキ…私はこれから強くなる。だから、また会おう)

心の中で呟いた声を噛み締め、サトシをまっすぐ見つめた。そしてサトシもクリスを見た。

二人の師弟としての関係は、まさしくその時に始まったと言えるだろう。

その様子を見ていたレッドは小さく首を傾けて口を開いた。

「…クリスは一**番**弟子?」

「いや、二**番**弟子」

『ピカピカツチュウ』

一番弟子はハルカだ——。

そう答えてくれたサトシの声が、森のなかに静かに響き渡った。

第二十六話く厄介なる依頼人く

それは、早朝の青空が広がるホールにて、バイキング形式の朝食をすませようとした時だった。

ヒビキが朝食用の自分たちに用意されたテーブルに様々な料理を持っていき、シルバーはポケモン用の洗練された特性フーズを選んで、私とヒビキのポケモン含めた手持ちたちにあげている。マサキさんは隣でイーブイにたくさんきのみを渡していて、眠そうにあくびしていた。ポケモンたちと共に食べているのは皆同じだ。ゾロアークがイリュージョンでリザードンの色を普通に見せているおかげか、騒がれることなく朝食を食べることができる。だから、おかしいと思う。

サンドイツチを食べつつ、私は周りを見渡して首を傾けた。

「あれ…」

『グオオオ…?』

「あ、ごめんリザードン…ちよつと気になることがあつて」

『ピツチユウ?』

『ナツゾ!』

「はいナゾノクサ」

『ナゾナゾ!!』

ナゾノクサにあげるはずのポフィンを手を取ったまま、周りを見ている私に対して首を傾ける手持ちたち。そんなリザードン達に首を横に振って大丈夫だと行動で示した。その後、また周りを探す。

でも見つからない。いるはずのトレーナーがそばにいない。いつもならシルバーに噛みついてくるあのクリスが、どこにもいない。騒ぎもなく静かすぎる空気がどこか居心地悪いと感じてしまう。

「ねえヒビキ…クリスはどこ?」

「んぐ…さつき聞いたたら、用事があるみたいだから帰りましたーって船員の人が出てたぞ」

「え、待って今海のと真ん中にいるのに帰ってったの!？」

「んーいや…夜中にへり出てたみたいだしそれに乗って帰ったんじゃね？」

「ああ…そつか…帰っちゃったんだ…」

『ピッチュウ』

「うん大丈夫。ありがとうピチュー」

『ピチュー!』

ピチューが肩に乗って慰めてくれつつ、呑気に笑うヒビキを見ながら、私は昨日のクリスのことを思い出していた。これから頑張つてやろうと決心した直後だった。これから、共に強くなろうと誓つたはずだった。だからなのだろうか。

強くなりたいたいから、船を降りたのだろうか。

「…また、会えるよね？」

「ポケモントレーナーなら会える…ってか、あのクリスはシルバーにいろいろ思うと

「ころあるみたいだし絶対に会うだろ」

「呼んだか？」

「呼んでねーよアホシルバー！」

「アリゲイツ」

『アリゲエイ！』

「ぶっほあ！やめろ噛ませるな！つてかアリゲイツの歯つてなんでも砕くだろうから止めろよな！」

「安心しろ、手加減はしているはず」

『アアリゲエイ？』

「全然手加減できてねえんだよ止めろ!!!」

「あはは…」

いつもの光景だけれども、少しだけ寂しいと思うのはたぶんクリスマスがないからだろ
う。

でも、ヒビキの言ったように、きつとまた会える。それを信じよう。

.....

その後、あと半日で船を降りる時間になるお昼頃にそれは起きた。

「…はい？ 私たちに頼みごと…ですか？」

「せやせや！ 船の騒動見ててな、きつと自分等なら出来ると思うんよ」

マサキさんの言葉に思わず私たちはお互いの顔を見る。イーブイはボールのなかにいるのか、出てきてはいないが、ちよつとだけ怪しい雰囲気が漂ってきた。あの船の騒動を見て頼みごとをするだなんて意味がわからない。

だから経験則で考えると、たぶんこれは厄介ごとの予感なのだろう。

ヒビキが訝しげな目でマサキさんを見る。

「何スカ？俺らに出来るって…？」

「ポケモンタワーにな、最近変な声が聞こえるようになったんやで」

「ポケモンタワー…ですか？」

「せや。咽び泣いてるような怨念が轟くような声…やな」

「ポケモンタワーってシオンタウンのあのポケモンのお墓がたくさんある場所だろ？幽霊とかの可能性ってないっすか？」

「なんだヒビキ、幽霊でも信じているのか貴様は」

「からかうんじゃねーよシルバー！マサキさんの話を聞いたらそう思うだけの話だろーがー」

「まあ…ポケモンタワーで聞こえる怨念って聞くと幽霊の方を想像しちゃうよね…」

「ヒナの言うとおりだ！」

「とにかく——」

私とヒビキが頷きあっている間に、シルバーが何やら納得した声をあげてマサキさんを見つめた。おそらく、ポケモンタワーで頼みごとと聞かれて想像つくことを予想したのだろう。

「…つまり、俺たちにそれを調べてきてくれ…ということですね？」

「せやせや！いやー頼むわ！ほんま普通のトレーナーやと話しにならへんから…そういう怨念をぶつ壊してくれる存在がいたら助かるって思うたんよ！」

「ぶつ壊すっていったら大概がシルバーなんですけどね…」

「破壊兵器シルバー&チルタリスだからな…」

「ふん。貴様らの力が足りないだけの話だ」

鼻で笑ったような声をあげるシルバーに私は苦笑し、ヒビキは眉をひそめた。そしてマサキさんは笑っていた。私達の会話を楽しんでいるのだろう。喧嘩さえしなければ私達の会話は、世間的に見れば微笑ましいものだと思うから。

喧嘩にさええなければ。

「お前ちよつとは謙虚つてもんを知つとけ！」

「四年も長く付き合っている貴様らに謙虚なんてものをしなくてもいいだろうが」

「おつまえ：言つとくが親しき友にも礼儀ありつて言葉わかつてるか？」

「正しくは親しき仲にも礼儀あり、だ。普段使わない言葉を無理して使うな馬鹿め」

「んだとあほシルバー!!ぶつ潰せゾロアーク！」

『グアアア？』

「返り討ちにしろ、チルタリス」

『チルルウ！』

案の定といふかなんというか：嫌そうな顔をしたヒビキがボールからゾロアークを取り出し、シルバーがチルタリスを出している。

でもゾロアークは呆れたような表情をしている。チルタリスは忠実そうに、喧嘩であろうともシルバーの指示には従うと言った顔だ。

いつも通りの喧嘩であり、いつも通りのポケモンバトル。でも今はマサキさんの話を聞いている話だと言うのに、何をやっているんだか…。

「やめなさい！喧嘩はしないの！」

「ブフオツツ!!」

拳を握りしめ、二人の頭に直接振り下ろす。その攻撃にヒビキとシルバーは耐え切れず地面に転がってしまいが私は知らない。

ゾロアークはまたもや呆れ、チルタリスは微妙そうな表情。私もため息をついて頭を抱えた。

「まったたく、いつもいつも喧嘩ばかりして…」

『グアアア…』

『チルルウ』

「おー大したもんやな！」

頭に煙を出しつつ、両手で押さえているのは二人の馬鹿。

大悲惨なバトルを行おうとしていたヒビキとシルバーに唯一、マサキさんだけ笑って

いたのが本当にすごいと思えた。

私は一度咳をしてから、口を開く。

「あの…シオンタウンってマサキさんの家がある場所じゃありませんよね？」

「おん。シオンタウンにな、知り合いのおっちゃんがおるんよ。そのおっちゃんに頼まれてな。でも自分やと無理やし…イーブイたちの世話しなあかんし…」

「ああ…」

「ちやんとポケモンタワーの問題解決してくれたらお礼もするでー！」

「はあ…」

『グアアア』

『チルウー！』

お礼って何だろう。いやそれよりも、やっぱりこれは厄介ごとだったため息をついた方がいいのだろうか。

チルタリスとゾロアークがやる気満々でそれぞれバトルの予感か！というキラキラとした目をしている。でもポケモンタワーはお墓が多い場所なんだし、派手にやるのは

よくないと思う。…とりあえず、私がしっかりしないとね。

やがて、頭を押さえているヒビキとシルバーがゆっくりと起き上がり、ふらつきながらマサキさんを見た。

「痛つつ…お礼って何スカ？」

「起き上がるなりソレかい！」

『グアアア…』

「うるっせーな！ゾロアークもそんな顔すんな！ちよつと気になったただけだよ！」

「くっ…ヒナ…お前腕をあげたな…」

「シルバー、ポケモンがレベルアップしたみたいな言い方しないでよ」

「それで、礼とは何でしょうか？」

「あんたらねえ…はあ」

礼について深く聞くのはなんだかがめついような気がしたから聞かなかつたのにある意味凄い。でもマサキさんは気を悪くした訳じゃなく、笑いながら話してくれる。

「ははは！礼っちゅーのはな…まあ、そんな時のお楽しみやで！」

「お…たのしみ？」

「せや！まあシオンタウンにいるおっちゃんに話しとくわ。ポケモンタワーの一件が終わったからおっちゃんから礼貰つといで」

「わ、分かりました」

なんか、ちよつとだけ嫌な予感がする。幼い頃に鍛えた勘がざわざわし、懐にあるボールが揺れる。

きつと、その考えは間違っていないのだろうと、私はそう思っていた。

.....

シオンタウンの一件について悩んでいると——アナウンスから大きな声が船の中

に鳴り響いてきた。

【さあさあ船旅最終日！今日は中断した大会の全てを結集した大きな鬼ごっこをしてもらおうよー！】

「鬼ごっこお？」

「また騒動起きないでしょうね……」

「ふん。あのバトルだけではつまらなかったからな。いいストレス解消になりそうだ」

【さてさて！鬼ごっこに参加するものは皆、大穴のあいたホールに来てねええ！】

どうやら、クチバシテイにてジム戦をする前にまた何か大会をやるらしい。私たちはアナウンスの指示通りの場所に向かう。

するとそこにあつたのは、バンダナを巻いたポケモンとトレーナーの姿。ポケモンは皆小さな身体をしたものが多い。

鬼ごっこをするらしいが、ポケモンも一緒に参加するのだろうか？

バンダナを手渡してくるスタッフに私は話しかけた。

「あのすいません…この鬼ごっこに参加したいんですが…詳しいルールって何でしょうか？」

「鬼ごっこに参加していただき誠にありがとうございます！ルールは簡単です！ポケモンと共に赤と青のチームに別れて、鬼ごっこをしてもらいます。バンダナは大会の参加権であり、チームの色分けとなりますので絶対にはずさないようにしててくださいね！大会が始まる頃に赤と青のどちらかが捕まえる側と捕まってしまう側に決定します！その色のルールに従って、大会を楽しんでください！」

「はい、わかりました」

「では、大会に参加しますか？」

「もちろんです！」

「参加する方のポケモンは？」

「うーん…よし、お願いナゾノクサ！」

『ナツゾ!!』

ボールから出したナゾノクサを見て、スタッフがその片足に小さなバンダナを巻いた。そして私にもナゾノクサと同じ色のバンダナを渡し、微笑んでくる。

「あなたのチームは赤色です！大会が始まるまでの間、少々お待ちくださいませ！」

「はい。ありがとうございます！」

『ナツゾナゾ！』

ナゾノクサとお揃いのバンダナを片手に巻き付け、ホールの中心に行く。するとそこにいたのは同じく他のスタッフに話したヒビキとゾロアーク。そしてシルバーとアリゲイツだ。

ヒビキが私のバンダナの色を見て笑いかけてきた。

「お！ヒナは俺と一緒にか！」

「うん。…でも、シルバーとは別れちゃったね」

「むしろその方が楽しめそうだ」

「いや暴れないでね？」

「…ふん。そろそろ青のチームの方に行くぞ」

「ちよつと待った！なあシルバー…お前アリゲイツにはかいこうせん覚えさせてないよな？」

「え…いやいやいや」

冷や汗が流れ出て、思わずシルバーを見た。シルバーは嘲笑った顔でヒビキを見ており、アリゲイツは首を傾けて歯を鳴らして笑っている。

あの、大丈夫…だよな？

「シルバー？」

「安心しろ。貴様らとの約束は必ず守る」

「安心できるか!!」

「ハッ！不安ならばさっさと俺を負かすことだな」

『アアリゲエイ！』

負けないという瞳で、シルバーが笑った。その目に、ヒビキがトレーナー心と負けず嫌いに火をつけたようだ。

「絶対に瞬殺してやる！頑張ろうぜヒナ!!」

『グアアア!』

「いやこれバトルじゃないし、どっちかのチームは鬼役になるから瞬殺できるかどうか……」

『ナアツゾ?』

【さあああー!鬼ごっこを開始するよー!】

ナゾノクサが可愛らしく首を傾けた直後————アナウンスが大きく鳴り響いたの

だ
っ
た。

第二十七話　開始までもう少し

とある事情にて、聖・アンヌ号に乗っていた少年は項垂れていた。

(厄日だ…)

何故こうなったんだらうか。ナナカマド博士に勉強になるからカントー地方に行ってみろと言われたときから厄日は続いていたのだらうか。それとも船のある大会に興味本意で出たからだらうか。少年は考える。

目の前の異様な状況を見つめ続けながらも。

「ゼニガメ部隊は船前方を、ヒトカゲ部隊は船後方！フシギダネ部隊は俺についてこい！」

「「「「「イエツサー隊長!!」」」」」

「いいか、目標は全員を捕まえることだ！それぞれ作戦通りに行動を進めろ！」

「「「「「うおおおおおー!!」」」」」

ここは何だ。何処かの軍か何かか？

赤い髪の少年がアリゲイツを後ろに従えつつ、列になって並ぶトレーナーとポケモンの士気を高めていた。

少年は遠い目で彼らを見ていた。ボーツと見ていたせいだろうか、赤い髪の少年がこちらに振り向き、俺の存在に気づく。そして、その赤い瞳でじつと見つめてきた。

その目に萎縮し、大会での相棒になるマニニューラを壁にしながら少年を見る。

『マニユウ……』

「マニユウラ、顔下げないで！」

『マニユウ……』

マニユウラが呆れたような顔をしているが無視。全然隠れきれないけど大丈夫。でも赤い髪の少年は引いている俺に容赦なく近づいてきた。

「おい貴様、そのマニユウラはなんだ？」

「え」

「技は何を覚えているのか聞いている」

「え、あ……えつと、ちようはつ、ねこだまし、ごごえるかぜ、みやぶるだけ……？」

「なら貴様はイリユージュオン対策用に俺と一緒にこい」

「は……」

言われた言葉が理解できていない。何故、一緒に行かなければいけないのだろうか。

でも周りは赤い髪の少年についていけとばかりの圧力とプレッシャーをかけてくる。様々なトレーナーから向けられる視線がまるでバトルしているときの好戦的なものが含まれた。何だここはバトルフィールドか？

いや、それよりも聞かなければいけない話が出来た。

「な、なあ…【みやぶる】はゴーストタイプとかに対してノーマル技なんかを通りやすくするようなものだぞ？イリユージョンって…えっと、ゾロアやゾロアークの特性だろ？いくらなんでもみやぶることなんて出来ないはずじゃ…」

「それはゾロアークが通常のイリユージョンをしていたららの話だ」

「え？」

「奴のゾロアークは、通常の幻影よりもはるかに高難易度のイリユージョンを行う。別のポケモンに見せかけるのではない…バトルフィールドごとすべてを変えてしまう力を持っているんだ」

「…え？」

—— すまん。奴つて誰だ？

そう聞けるような状況ではない。ナナカマド博士から教えられたことがある。イリユージョンとは人間やポケモンたちの視界を奪い取り、頭ごとその現実を塗り替える特性を持つのだと。だがその高等なイリユージョンを使うポケモンは少ない。というか、貴重種にもなり得る存在だろう。

人間やポケモンたちの現実を塗り替えるという力は、あまりにも無謀なことだからだ。

だからこそ、通常のイリユージョンではゾロアやゾロアーク自身の姿を別のポケモンに見せかける。それぐらいしか、イリユージョンとしての力は成功しないから。

赤い髪の少年が言うゾロアークは、そんな通常のイリユージョンではないと言うこと。そして貴重種たるゾロアークになるかもしれないと言うこと。

少年は唾をぐくりと飲み込んだ。

「…本当に、みやぶるは効果ある…のか？」

「ある。奴のゾロアークのイリユージョンはあまりにも力強いからこそ、少し叩けばすぐに使えなくなるんだ。最強である幻想だからこそ、不意をつかれれば弱い。まあ貴様のみやぶるは言わば…ゾロアークにとって見ればねこだましと同じだろうな」

「そ、そっか…」

ちよつとだけ、興味をもった。例外でしかない力強いゾロアークのイリユージョンを見れるだけじゃなく、直接その特性を回避できるかもしれないのだから。

「そうだ、貴様の名前は？」

「え、今更？」

少年は苦笑しながら赤い髪の少年——シルバーを見て、口を開いた。

「僕はコウキ。フタバタウンから来たトレーナーだよ」

.....

「ええつと…：現状を軽くまとめると…つまり、私たち赤チームは逃げる方で、青チームには無線が与えられている。見つかったら青チーム全員がその情報を共有して、逃げられない状況になった時点で捕まる…ってこと」

『ナゾナゾ』

「まあそうなるなあ…」

『グアアア』

ヒナたち赤チームの皆はそれぞれ自由勝手に動き回りかくれんぼのような感覚でいくトレーナー、ヒナたちと一致団結して戦おうと言っているトレーナーの二つに分かれて行動している。

これが吉と出るか凶と出るかはまだ分からないため、誰もが不安になっていた。不安と言うより、勝つかどうかは分からず、負けても仕方ないかと思っっているのが大半だろう。

だが、ヒナとヒビキは違っていたようだ。彼女たちは何かを考えて、そして小さく相談事をしていた。

「シルバーだったらどんなことをすると思う？」

「破天荒なこと」

「なら、ルールギリギリのこと狙って捕まえに来そうよね…こつちもそれぐらいのことした方がいいのかな…」

「じゃあシルバーが予想できないグレーゾーンな。ちよつと聞いてくる。すいませーん！！」

え、何言ってるの君たち？グレーゾーン？これただの鬼ごっこだよね？

そんな一般人の視線を気にしないヒナとヒビキは困惑するスタッフから話を聞き取り、また相談し始めた。その声に注意して聞き取っているのは周りにいる赤チームの全員。

「鬼ごっこというより、群れバトルだと思った方がやりやすいかもしれないわね…」

「シルバーなら青チームの全員をまとめて利用してくる可能性も高いからな。群れと言うより組織バトルって感じだと思うぜ」

「ええそうね。あのシルバーならやりかねないわね…」

ちよつと待つて。君たちの言うてるシルバーってトレーナーどんだけ凄いの？もしかして相手である青チームって統率がとれたチームになってるの？赤チームはまとまりがないからかなり不安になるんだけど。

胸のうちでぐるぐると渦巻く不穩の影。このまま逃げるだけでいいとは思えなくなる彼女らの言葉。気軽に参加できる大会だからやったというのが大半だった。負けても思い出に残るからいいかなと樂觀的に思っていた。

——でも、どうやら青チームは俺たちを瞬殺しに来るらしい。

一時間くらい逃げて遊べるのなら良い方だろう。だが、すぐに負けるといふのはいくら樂觀的に考えているトレーナーであつても嫌だった。プライドが犠牲になるようなことはしたくない。だから、負けたくない。

「な、なあ…君たち、俺も何かできることはないかな？」

「あ、僕も！どうせなら勝ちたい」

「そうそう。負けるより勝った方が気持ちいいし、自慢にもなるし」

「私もやるわ！」

「よっしゃ！ここにいる赤チームだけでも勝とうぜ！」

「え？あの…」

「うわマジっすか！あざーっす!!」

「ちよつと、ヒビキ！」

「いいじゃねえかヒナ！戦う人数が多い方が有利になれるだろ！」

「ま、まあ…そうだけど…」

ヒナがちらりと周りにいるトレーナーたちを見つめる。ヒナは彼らがシルバーの犠牲にならないか心配になっていたのだが、周りにいるヒビキ以外のトレーナーたちはそうは思わない。

普通に人見知りしているのかと納得し、勝負するための作戦を立て始めた。

「本当に大丈夫なのかな…」

「大丈夫だって！あ、そうだヒナ…お前はここの作戦に参加しなくて良いからな！」

「え？」

『ナゾオ？』

どういふことなのだろうか。ヒナは首を傾けた。でも

ヒビキは変わらず、不敵の笑みを浮かべながらヒナを見つめた。

「俺たちがお前の囿になるってことだ！」

.....

時間は進む。大会の始まりが近づき、それぞれが身構え始めた。

【さあさあ！大会参加者の準備はいいかなー!?】

聞こえてくるのはアナウンスで鳴り響く大きな声。その声を聞いた参加者たちがそれぞれ緊張し、合図を待つ。

一人は大きく鳴り響く鼓動を押さええながら、一人は抑えきれない闘争心をかきたてながら。そしてもう一人は、冷静に状況を把握しながら。

始まりの合図が鳴り響く。

【さあ聖・アンヌ号の鬼ごっこ大会の開始だあああ!!!】

「「「テレポート!!!」」」

『『『ツツ——』』』

!!!!!!

——アナウンスが鳴り響いたと同時に、大きな慟哭が響き渡った。

第二十八話く押しはいけないスイッチく

【さあ聖・アンヌ号の鬼ごっこ大会の開始だあああ!!!】

「「「テレポート!!!」」」
『『『ツツ——』』』
!!!!!!

大きな声が頭上から聞こえてきたため、ヒビキ達赤チームが即座に上を見上げる。そして見えてきたのはシルバーを含めた数人のトレーナーがエスパークタイプのポケモンを

連れてテレポートし、奇襲してきたという事実。

開始同時に攻めてこられたせいとか、動揺してしまいまともに動けずにいた数人の赤チームがシルバーらの青チームによってバンダナを奪われてしまう。

シルバーが不敵な笑みを浮かべた。ヒビキは歯軋りをして周りにいる赤チームに目配せをした。目配せに気づいた赤チームは、皆が頷く。

「瞬殺するのはこちらだ！ヒビキ！」

「つつ——負けてたまるか！赤チーム、作戦B決行！」

「！！！！おう！！！！」

シルバー達に降りかかってきた閃光。それがフラッシュだと気づいたときは、もうバ
ンダナの取られていない赤チームが全員逃げていた頃だった。

.....

(うっわあ…えげつな)

コウキは先程までの戦いに戦慄し、これから怪我をしないようにアルセウスに祈っていた。

だがそんな祈りがアルセウスに届くわけもなく、先程から不気味に笑っているシルバーの隣で立ち止まっていた。シルバーは胸元に設置している無線で、仲間に連絡をとろうとする。

「あの…」

「ククク。ヒナはいなかったが…まあ、これから楽しめばいい。おいゼニガメ部隊！船内の近道となる部分を全て凍らせて防いでおけ！」

「いやあ凍らせちゃったら船の人に迷惑になるんじゃない？」

「「はっ！了解しました!!」」

「それからヒトカゲ部隊！フラッシュしてくるポケモンにはすべて炎で応戦しろ！それからで眠らせてしまえ！」

「いやそれ大事じゃね!?!」

「「「「サーイエツサー!!!」」」」

シルバーも仲間である青チームもみんな、コウキの声なんて聞いていない。コウキはマニユーラの背で泣いた。マニユーラは嫌そうな顔で逃げようとしてくる。その顔にも泣いた。

(逃げたい…)

もちろん逃げられるはずもない。コウキはマニユーラとともに引きずられながらも、シルバーの隣にいたのだった。

.....

「くそつ……ここにも氷の壁か…」

ヒビキが船の通路を塞いでいる氷の壁を叩き、舌打ちを溢す。それを聞いたのはヒビキと共に逃げてきた赤チーム数名。そのうちの一人がヒビキに話しかけてくる。

「な、なあ…今からでも遅くないし、迂回してみるか？」

「いや、駄目だ」

ヒビキが首を横に振って、壁の向こう側を見た。眉をひそめて思い悩む姿は断言した言葉と正反対だと赤チームの皆は思っているが、ヒビキの言っている言葉が正しいことも分かつていた。

「この通路は逃げ道に最適で、俺たちにとって必ず必要になる！迂回なんて出来ない：強行突破だ！」

『ガウウウウ！』

氷の壁に向けて指差したヒビキを見たゾロアークが、あくのはどうを放つ。氷はそれに耐えきれず、粉々になり、道が開けた。その先へ、ヒビキは歩き始める。

赤チームも戸惑いながら、ヒビキの後ろへ歩きだした。

ヒビキは歩きながら無線をつけ、話し始める。

「皆、位置についたか？」

「もちろん！」

「こっちはまだだ！少し待っていてくれ」

「わかった。でも早めに頼むぜ！」

「ヒビキ…やっぱり私も出た方が…」

「言っただろヒナ。俺たちが囿になるってな。だから気にせずお前は自由に逃げていてくれ」

ヒビキが無線から離し、歩くのに集中する。周りはとても静かだ。それはこれからの嵐の前兆なのだろうか。

斜め後ろを歩く赤チームの一人がヒビキに話しかける。

「ね、ねえ…もしも待ち伏せしてたらどうするの？」

「その時は受けて立つ!!」

そう言った瞳には、強い意思が秘められていた。

——その瞬間、だった。

「見つけたぞ赤チーム!!」

複数の青色のバンダナをつけた青チームが曲がり角から現れた。

人数は5人。前に3人と、後ろに2人だ。見つけたと言っではいるが、おそらく待ち伏せをしていたのだろう。

彼らの足元にいるポケモンは全員が水タイプであった。
彼らが一斉にヒビキ達へ向けて指示を出す。

「「「みずでつぼう!!」」」

『ツツ——!!!』

「ゾロアーク!」

『グアアア!!!』

ゾロアークが赤紫色の閃光を走らせる。イリユージュンの前兆だと気づいたのは青チームの3人。

だが、ヒビキはそれだけに留まらない。

「全員、攻撃体制!!」

「「「おう!!」」」

「ゾロアーク、あくのはどう!」

『グアアア!!!』

「はっばカッター！」

『キュウウ！』

「みずでっぼう！」

『ゼニイイ！』

「たいあたり！」

『ラッタア！』

「なっ!？」

みずでっぼうを噴射した勢いを吹き飛ばし、赤チームがまとめて前後の青チームに攻撃を返す。逃げるのではなく攻撃をするという指示に戸惑った青チームが、動揺から復活したのは彼らのポケモンが赤チームによって戦闘不能になっただけから。

そして、負けたくはないと奮闘する彼らが赤チームのバンダナに手を伸ばすのを防いだのはゴースを手持ちに行っている赤チームのポケモン。

「さいみんじゆつ！」

『ゴオオオ！』

「よし！」

『グアアア！』

さいみんじゅつによつて青チーム5人が眠りについた。そのすべては赤チームの作戦通りの結果であつた。

.....

「あーあー…聞こえてますかあシルバー君よお」

「っ!？」

無線から聞こえてきたのは馴染みのあるもの。たまに苛立つこともあるヒビキの声だ。

赤チームと青チームの無線は別に分けられており、交じることはないはず。だということに、その声が聞こえてきたと言うことは――

「そうか。逃げなかつたのか貴様は」

「正解だぜシルバー!」

「ふん…ルール破りめ」

「ルールは破つてねえぜ? つか、ルールの中には追いかける方の青チームを戦闘不能

にしては駄目だつてこと言われてねえしな！」

「なるほど…グレーを突つ走つたか、ヒナと共に考えたんだな？」

「おう！それだけ俺たちが全力だつてことだぜ？なあシルバー、お前ら青チームには負けたくないつてな！」

「…ふん」

「じゃあな！俺たちは絶対に勝つてやる！」

ぶつり、と切れた無線の音に、シルバーはにやりと笑つた。その顔に反応したのは近くにあったフシギダネ部隊と、隣にいるコウキだけ。無線からヒトカゲ部隊の声が聞こえてくる。ゼニガメ部隊は何も言っていないため、おそらくヒビキが取つた無線はゼニガメ部隊からだろうと分かつた。

いや、そんなことよりもシルバーの様子がおかしい。笑っている笑みをみて、足元にいるアリゲイツがつめとぎのようなことをして爪を研いでいる。

アリゲイツがつめとぎ覚えてないよな？え、覚えられたっけ？とは、コウキの呟き声。

「ふふふ…クツ…おい、聞こえているかヒトカゲ部隊」

「「さ、サー！」」

「ホールへ向かえ。おそらくそこにいる可能性が高い」

「「サーイエツサー!!」」

「フシギダネ部隊! 貴様らは俺と共に展望デッキへ行くぞ!」

「「サーイエツサー!!!」」

「あ、え?…ぼ、僕は?」

『マニユウウ?』

「貴様らも俺についてこい!」

『アリゲエイ!』

「うえええ?!」

『マニユウウ!』

引きずられていくコウキは冷や汗を流しつつ、このあとに待ち構えている衝突が少なくて済むことを祈った。アルセウスではなく、自分自身に。

.....

「…見つけたぞ！」

『アリゲエイ！』

「ええ…本当にいた…」

『マアニューウ』

「待つてたぜ！青チーム!!」

シルバー達の前にいるのは赤色のバンダナをつけたヒビキら赤チーム。

見つけることができたのは、ただの勘。幼馴染みが勝負を挑んでいるのだから、広い空間を選ぶことは勘で分かった。そしてそれは見事に成功した。

でも、ヒナの姿は見えていない。もしかしたらホールにいるのだろうかとシルバーは思考の片隅で考えつつヒビキを睨み付けた。

「ここですべてを終わらせる！」

『アリゲエイ！』

「はっ！んなことさせるかよ！逃げるぞゾロアーク！」

『ガウウウウ！』

「ツツおい待て…クソ！フシギダネ部隊はここにいる赤チームを捕まえろ！」

「「サーイエツサー!!!」」

「うえっ!?ちよつと!!!」

『マ、マニユウウ!!!』

シルバーがコウキの手を引つ張りながらヒビキのもとへ急ぐ。シルバーの進む先を塞ぐ赤チームには、シルバーの仲間である青チームが捕らえようと動き、展望デッキは混沌と化していった。

でも、そのままシルバーは先へ進む。コウキの手を引つ張りながら、足元には彼らを追いかけるアリゲイツとマニユーラがいながら。

——そしてようやくヒビキが止まったのは、船の通路のど真ん中。様々な曲がり角がある、先程まで氷で覆われたはずの通路であった。

「逃がすか！」

『アリゲエイ！』

「うるせえ！俺は逃げる！ゾロアーク!!!」
『ガウウウウ!!!』

赤紫色の閃光をゾロアークの両手から放たれようとしてくる。その閃光に、シルバー
がいち早く反応しコウキに向かって叫んだ。

「みやぶるだ！やれ!!」

「えっあ、おう！みやぶる！」

『マニユウウ!!!』

みやぶるによって白色の光が輝きだし、全てを見通す。光が消えた瞬間、見えてきた
のはヒビキとゾロアークが曲がり角から逃げる姿。

「んなっ!?!くっそ!!」

『ガウウウウ?!』

「はっはっは！逃がすかああ!!」

『アリゲエイ!』

シルバーがコウキから手を離し、アリゲイツと共に走り出す。それはまさしくコウキの役目を終えた証し。コウキは苦笑しつつ、マニユーラに労りを込めて頭を撫でた。

これで行く解放されると、そう思ったのだ。

「はああ…疲れた…」

『マニユウ…ツツ!?!』

「ん? どうしたマニユーラ?」

マニユーラが廊下の先を見つめている。じつと先を見て、何かをコウキに訴えている。

「まさか…?」

『マニユウ!』

「へへへ、そのまさかだぜ!」

『グアアア!』

「おいおいマジ!?!」

『マニユマニユ…』

廊下の先にいたのは、先程まで逃げていたはずのヒビキとゾロアーク。何故ここにいるんだ。シルバーとアリゲイツが追いかけていったあの2人はまさか…。

「幻覚…だったの？みやぶるをしたのに？」

「あつたりまえだろ！ゾロアークは日々成長してるんだぜ？あのロケツト団の連中にみやぶるをされて以降、ゾロアークは絶対にやぶられないように鍛えたんだ！」

『グアアア!!』

そう、ヒビキはあのあと半日かけて鍛え上げていた。みやぶるに怯んでイリユージョンが消えるような事態にならないように。ゾロアークは何度も練習し、まだまだ未完成ではあるものの、鬼ごっこにてみやぶるが前提で来ると分かっているからこそ先程のマニユラの攻撃に耐えられた。

耐えた上で、わざと破られた幻覚を見せてシルバーから離れた。こうすれば、奴はこちらに来ることはないと分かっているから。

コウキは頭を抱えて嫌そうな声を出す。

「結局意味なかったし!!」

『マニユウウ!!』

「つてことで、あんたには気絶してもらおうぜ！」

『ガウウウウ!!』

『マ、マニユウウ!!?』

「うわ、マニユウウ!!?」

ゾロアークのあくのはどうがマニユウウに放たれる。それを見たコウキが目を見開いた。

ヒビキとゾロアークはコウキとマニユウウを敵として見ている。だからコウキは叫んだ。

「ま、待ってくれ！僕とマニユウウはもうこの大会を棄権するよ！だから倒さなくても大丈夫だ！」

「そんなの信用できねーっすよ！俺らはトレーナーだ！目と目があつたらバトルは確実！そしてトレーナー同士のバトルは逃げることを許さない！ゾロアーク、あくのはどうだ！」

『ガウウウウ!!』

『マニユウウ!!!?』

『マニユーラ!』

「逃げるなら、戦略立ててから逃げないとな! 鬼ごっこつてーのはそういうもんだ! でもあんたは俺らを捕まえる側。なら、俺を捕まえないと駄目だぜ!!」

「な…あつ…そ、それはそうだけど…でも、でも…」

トレーナーとしての暗黙の了解はある。それは、逃げてはいけないこと。

逃げることは、鬼ごっこで逃げる側になったヒビキにしかできない。

でもコウキは疲れていた。シルバーに振り回され、ヒビキにバトルを仕掛けられ、疲労が身体に回っていた。だから、逃げたいと思っていたのだ。

「ゾロアーク! マニユーラを倒せ!」

『グアアア!!』

『マニユウウ!!!?』

目の前で、マニユーラが吹っ飛んでいく。まだ気絶するほどのダメージは負ってはい

ない。でも確実に痛みを蓄積していく。

コウキの命令を待っていたから、反撃はしなかったマニユウラが、何度もあくのはど
うを打たれ、傷ついていく。

『マニユウウ…：ラアア！』

「マニユウラっ！」

疲れたと言っている場合ではなかった。このままでは負けてしまうのだ。

でも、僕は、

僕は

——
カチリッ

嫌な音が、コウキの脳内で鳴り響いた。

.....

「…あれ?」

『グアアア?』

ヒビキは妙な雰囲気を感じ取ってゾロアークの攻撃を止めた。今目前にいるのは青チームであるコウキと、マニユーラ。

棄権すると言っている言葉は、信用できなかつた。だから、攻撃した。それも全力で。トレーナーとして当たり前だった。だからマニユーラに向かつて攻撃した。

ヒビキにとって予想外なのは、コウキのマニユーラがあくのはどうを何度も耐えられるほど鍛えられていること。そして、コウキの様子が一変したのに気づいて攻撃を止めてしまったこと。

「…まあ、いいか。ゾロアーク！」

『グアアア！』

ゾロアークがあくのはどうを放つ。そして、マニユーラに向かって、攻撃しようとする。

だが、あくのはどうをマニユーラが足で蹴り飛ばした。呆気ないほど、簡単に。

「はああツツ!?」

『ガアウウ!?』

よく見ると、コウキがマニユーラと同じようにふらふらと身体を揺らしていた。それほとても奇妙で気味の悪いもの。まるでシンクロしているかのような動きを見せて、2人がヒビキとゾロアークに向かって顔を上げた。

その顔に、ヒビキは驚いていた。もちろんゾロアークもだ。

コウキとマニユーラの瞳は、獣のように瞳孔が開ききっていた。ふらふらと揺れる身体は、まるで糸に吊られたマリオネットのよう。

「なんで…え、はあ!?」

『グアアウ…!』

「…ふひっ」

『マニユっ』

——ところで、シンオウ地方には「シンオウ三大悪」というのがあるのをご存じだろうか。

これらは、カントー地方の問題児と同じように、とある押してはいけないスイッチが隠されている。

一人は「シンオウの災害」として、よくバトルフィールドその他もろもろを破壊するシンジというトレーナー。

そしてもう一人は「シンオウの騒音」として、よく騒ぎを起こしつつトラブルメーカーであるジュンというトレーナー。

そして最後の一人が、「シンオウの変人」として知られている研究者かつトレーナーであるコウキ。

「ふひい…ふっひやつひやつひやつひや!!!痛みなんて快楽に変えれば誰でも極上の道具になるんだよ!!!ひゃひゃひゃつあーひやつひやつひやつひやつひやつひやつひや殺してやるあああ!!!」
『マーニユウウウ!!!』

——
ドオオオオオツツツ!!!

「うわあああああつ
グアアアアアアツ
!!!?!?!?」

これは、コウキの押しではいけないスイッチをヒビキがその手で押した瞬間でもあつた。

とあるタロー日記

○月×日

明日から新米トレーナーだ!!!

相棒はゼニガメにする!そして目指すはリーグ戦優勝だ!!!

○月○日

相棒となったゼニガメは戦闘狂らしく、よくバトルをする。これなら強くなるのも早
いだろう

トキワの森で不思議なポケモンを見た。白くてふわふわしてそんなポケモンと、真っ

黒のポケモンだった。凄まじいスピードでどこかへ行ってしまった。凶鑑を開く余裕さえなかった。

ふわふわしたポケモンから「フザケンナア」という鳴き声を上げていた。もしかしたら新種のポケモンかもしれない！

トキワの森でしばらくもつてよう。新種に会えるかも！

○月□日

新種のポケモンには会えなかったけど、ポツポを捕まえることに成功した！

そのあと、面白いポケモン連れてる黄色い模様の帽子とゴーグルをつけたトレーナーとバトルした。負けたのに納得するぐらい強かった。たぶんベテラントレーナーだ。

面白いポケモンについて聞いたら、「ゾロアーク」というポケモンらしい。カントー地方にはいないとのこと、何処から来たのか聞いてみた。そしたらマサラタウン生まれだけどしばらくジョウト地方にいたとのこと。

ゾロアークはジョウト地方にいるかもしれないから捕まえてやる!!

○月□日

トキワシティに着いた！でもトキワジムは休業らしい。どうやらジムリーダーは会社の社長で、忙しいからしばらく休むんだと。しかも予約もできないみたいだ。だからニビジムに行く！

○月△日

ニビシティに着いた。町に着いたのは夕方だったから明日からジムに挑戦する。でもなんだかトレーナー達が騒がしい。何があったんだろうか？

○月×日

ニビジムが閉鎖されてた!!!チクシヨウ!!!だから騒がしかったのか!!!!!!!
だいぶ前にバトルフィールドを破壊したジム挑戦者であるトレーナーがいたって聞

いたぞ

…くそ、そいつのせいでバトルできないじゃないか!!

○月○日

ニビジムは諦めてハナダジムに行くことにした。

おつきみやまを登っていくと、なんだか大きな集団が何かやっていた。聞いてみると、つきのいしを手に入れるために岩を削っているみたいだ。だから俺も参加した。

一緒にやっていたら、なんか変な服着た奴に話しかけられた。「ポケモンよこせ」とか「金儲けに興味ないか?」とか変なこと聞かれたので周りにいるトレーナーに助けてもらうことにした。するとバトルになったりジュンサーさんが来たりと大問題になった。なんですよ。

ハナダシティにはジュンサーさんに送ってもらったからまあ良しとする。

バトルには勝ったぞ!

○月□日

ハナダジムがハナダ水中ショーに変わっていたチクショウ!!!

明日までショーをやるからジムはできないとロングヘアの綺麗なお姉さんが言っていた。なのでゼニガメとポツポを休ませることにする。

明日は絶対にジム戦だ!!そして勝つ!!!

○月△日

まけた

だめだった

一撃で吹っ飛ばされた

なんで？

○月×日

ゼニガメとポツポを特訓したらカスミさんに話しかけられた。なんでも、「強さは悪くないけど、戦い方はできてない」らしい。

戦い方ってなんだ？

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

(3日間の手記が抜けている)

○月○日

ハナダシテイにずっといるのは駄目だ。ここにおいても俺は何も変わらない。

だからもう一度旅に出る。

○月□日

トレーナーとのバトルでゼニガメが勝った。でもこれはゼニガメの強さだ。カスミさんの言った戦い方は今でも分からない。

ポツポも頑張ってくれてるし、俺も頑張らないとな

○月△日

クチバジムもニビジムと同じ状況だったチクシヨウ!!!また閉鎖されてたよ!!!ジム
ぶっ壊されてたよ!!!

どんな奴がバトルフィールドを壊したのか聞いてみたら、赤髪でゴーグルをつけた女
らしい。はかいこうせんで一刀両断だと。ふざけんな。マジふざけんな!

今日のバトルは負けた。

【赤髪でゴーグルをつけた女を許すな!!】

○月×日

クチバで特訓する。

よく分からないけど、ポケモンの強くする団体に入会してみないかと勧誘された。すごく怪しいが、戦い方を学べて、格段に強くなれるらしい。たくさんのトレーナーも入会しているのが分かった。

無料でできるみたいだからやってみよう。

今日のバトルも負けた。くそが

○月○日

ゼニガメがカメールに進化できた!!しかもバトル連勝した!!入会して正解だった!!

詳しく聞いてみたら、戦う方法を学ぶための知恵を授けてくれる女神様が強くしてくれたらしい。アレがそんな力を持ってたんだなって思った。

個別の部屋もくれたし、すげえ最高!!

カメールがなんだか不安そうで、ポツポも震えてるけど何でだろうか?でも戦いに強くなるためだから我慢してもらおう。

○月□日

明日、皆の前でアポイント様が来るみたいだ。

どうやら女神様の力を強くするとか。強くなるなら大歓迎だぜ！明日が楽しみだ！

今日のバトルも3連勝できた！4戦目で負けたけど、今までとは違ってやりがいがあるからスツキリする！さすが女神様！

○月△日

訂正、アポロ様だった。

力が強くなった女神様が凄い。ポツポがピジョンに進化したし、頭が軽くなった感じがした。いろんなバトルに勝てるって思えたんだ！

これなら俺もジムに勝てるし、リーグ戦も優勝できる!!

・
・
・
・
・

...

(2日間の手記がない)

○月×日

頭がふわふわして常にバトルの状況が分かるようになった。
カメールがカメックスに進化できた

○月○日

ピジョンがピジョットになった

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

(3ヶ月間の手記がない)

月 日

記憶がぼっかり消えてる。いつの間にか知らない部屋にいることも増えた。カメツ

クスとピジョットの表情がなくなってる。まるで人形だ。俺が話しかけても無反応。一体何があつた。

今は何時なんだ？

．．．．．

．．．

(××
××間の手記がない)

月 日

おれが馬鹿だった。あんなの女神様じゃない。最大限の悪意が詰まった悪魔だ

このままだとカントー地方だけじゃない

皆がヤバイことになる

誰かに助けを呼ばないと

・
・
・
・
・
・

・
・
・

(以上の手記にメモが貼り付けられている)

【行方不明者タローの重要証拠となるもの。しかるべき場所に送り、処置を待て】

第二十九話　決着？

——
やけに静かだ。

「アリゲイツ」

『アアリゲエイ！』

ホールのような大きな部屋。いや、部屋というより大広間に似ているだろう。ここから先は行き止まりだ。だからここに必ず奴らはいるはず。

大宴会などに使われそうな場所だと思いつつ、アリゲイツにみずでっぽうで周りを噴射して威嚇行動をとる。だが何の変化もない。それに思わず舌打ちをする。アリゲイツも不満そうに周りを睨みつけ、ガチガチと歯を鳴らしていた。ふむ、奴らに一杯喰わされたか。

通常のゾロアークならばこの程度の攻撃でイリユージョンを解くだろう。でもあいつのイリユージョンは「みずでっぼう」ごときでは無理だ。だから「みやぶる」などの力が必要だと言うのに。

「やはり、コウキを置いてくるのは失敗だったか…」

『アリゲエイ…!』

追いかけていく途中で消えてしまったヒビキとゾロアークのことを考えると、やはり背中が見えている間に手を打っておいた方が良かっただろうか。いや、あれはチルタリスのはかいこうせん程ではないが、船を破壊させる行為だ。また何か大事故を起こせば今度はこちらが責任を負う羽目になってしまう。

「仕方ない…アリゲイツ、戻るぞ」

『アリゲ……?』

「どうしたアリゲイツ?…ああ」

———なんだ、そこにいたのか。

「みずでつぼう」

『アアリゲエイ!!!』

真つ直ぐ前を見た状態のまま、アリゲイツに技を指示する。指示した通りに動き、アリゲイツは天井に向かって水を放った。その攻撃によつて、奴らは素直に降りてくる。

ヒビキやゾロアークでないのが少々残念だが、まあ裏ボスを相手にしているような気になれば問題はないだろう。

「さて、観念しろヒナ」

「無理に決まつてるでしょシルバー」

天井から降りてきたのは無傷のヒナと少々嫌そうな顔をしているナゾノクサ。天井に隠れていたとはもはや普通の人間やめてるようなものだな……まあ、ヒナはそれを否定するだろうが。

それにナゾノクサは水が好きだというのに、この目の前にいるポケモンは炎タイプの
ような反応をして水を振り払おうとしている。通常の個体とは違っていると分かる行為だ。
興味はあるが、今は勝敗を決める時。

口を開閉させ、歯を鳴らし続けるアリゲイツに、不機嫌な顔で足をじたばたさせて床
に亀裂を生じさせているナゾノクサ。怪力のナゾノクサといったところだろうか。見
ただけで判断してはこちらがやられるな。

「アリゲイツ、みずでっぼうだ！」

『アアリゲエイ!!』

「ナゾノクサ、右に移動しつつ接近！」

『ナ、ナゾ!』

軽く避けるナゾノクサの移動速度は通常よりも上と見た。なのでこちらも攻撃パ
ターンを切り替えよう。遠距離攻撃なら遠距離で、近距離攻撃ならこちらも近距離で攻
撃する。

「かみつく」

『アリゲエイ!』

『ナツゾ…!』

「大丈夫よナツゾノクサ!そのまま何度も足蹴り!」

『ナ、ナゾオ!』

アリゲイツに噛みつかれたナゾノクサが口付近を何度も蹴り、反撃しようとしてくる。噛み千切る勢いで攻撃していたはずのアリゲイツだったが、ナゾノクサの蹴る威力が強すぎて口を離してしまった。離してもなお、両手で口元を押さえ、痛みに涙するレベルの威力か…。

「足蹴りとは、ポケモン技からかけ離れてないか?」

「ポケモンの可能性は無限大だよシルバー。お兄ちゃんの言葉を忘れたわけじゃないでしょ?」

ああそうだ。ヒナの兄であるサトシさんがよく言っていた言葉だ。

ポケモンとは常に成長する生き物であり、人よりも強くてたくましい。育てる人によつては土地を開拓してしまうほどの強さを持ち、マスターたる人間の考えによつては

悪にも正義にもなる。何色にも染まる面白いポケモン。

いつもヒナは兄のような人外になりたくないと言っていたが、技という型に当てはめず自由に育てるのはまさしく兄の血が入っている証拠か。俺も強くならねばな。

「ナゾノクサ、すいとる!」

『ナツゾオ!』

「アリゲイツ、こわいかおでスピードを落としてやれ!」

『アリゲエイ!』

『ナ、ナゾ…!』

こわいかおで若干涙目になるナゾノクサ。怯えているようで、スピードも少しは落ちたようだ。すいとる攻撃も何故かかみつきに行こうとしていたからアリゲイツにダメージはない。これは勝てるか?

「大丈夫よナゾノクサ。アリゲイツをリザードンだと思ってみて!」

『ナゾお…』

「ほら、アリゲイツを炎だと思ってみて!炎がゆらゆらしてるのをイメージしてみるの

よー！」

『ナゾナゾ！』

「ゆらゆら飛んでる温かそうな炎が綺麗でしょう？欲しいでしょう？」

『ナツゾ!!!』

ナゾノクサが目を閉じて必死に想像している。ヒナの言った言葉を頼りに、奴にとつて「こうかいまひとつ」な炎をイメージさせようとしている。そんなのできるわけないだろう。いや、ヒナのことだからやるときはやってみせるか？

「…ふん、まあいい。これで最後だ！アリゲイツ、みずでつぼうー！」

『アリゲエイ！』

「ナゾノクサ！炎がどっかに行っちゃわよ！」

『ナアツゾオオオオオ!!!』

———
ほのおくれですよおおおお
!!!!!!

そんな言葉がナゾノクサから聞こえてきたような気がする。

目玉や舌が飛び出そうなほどの形相でアリゲイツをロックオンし、歯をガチガチと鳴らしながらかみつく。その強さや威力、そしてその形相を見たアリゲイツはみずでっぼうを中断させ、大パニックを起こしてしまう。

本当にやってくれるな。

「アリゲイツ、ナゾノクサを地面に叩きつけろ！」

『ア、アリゲエエエイ!!!』

頭に噛みついていいるナゾノクサごと地面に何度も衝撃を与える。それでもナゾノクサが離れない。むしろアリゲイツ側にダメージがいつているような感覚だ。

炎を求める執念が強いからダメージを与えられても揺るがないのか…？

「ならば…アリゲイツ！天井に向かってみずでっぼうだ！水のシャワーを奴に浴びせろ
！」

「させないわ！ナゾノクサ、アリゲイツの顔に向かってじたばた!!」

「ふん。甘い！スピードが落ちたのを忘れたか!!」

アリゲイツの怖い顔の威力、そしてその追加効果によってナゾノクサの速さは下がっている。だからスピードはこちらの方が上だ！

「アリゲイツ！みずでっぽう！」

『アアリゲエイ!!』

『ナツゾオオオ!!?』

「ナゾノクサ！」

【じたばた】ではなく、かかと落としをしようとしたナゾノクサがそれよりも前に放ったみずでっぽうを嫌がり、ヒナのもとへ逃げていく。

「このまま逃がすわけではない！」

「バンダナを取るぞアリゲイツ！」

『アアリゲエイ!』

「っ！させないわよ！」

『ナアツゾ…』

「大丈夫。私がいるわナゾノクサ。さあ一緒に頑張りましょう!」

『…ナ、ナゾ!』

攻撃しようとしてくるポケモンに対してファイニングポーズをするヒナ。その横で必死に足をバタバタ動かすナゾノクサ。

普通の人間ならポケモンが戦意不能になった時点で逃げ出すだろうに——むしろ奴はポケモンだけでなく自分でも戦おうとしているようだ。無自覚にもほどがあるだろう。これでヒナ自身が普通のマサラ人だと主張するとは本当に笑わせてくれるな。

「怪我はさせない程度に勝たせてもらおう!アリゲイツ!」

『アリゲエイ!』

「行くよナゾノクサ!」

『ナツゾオ!』

激突する——そんな瞬間だった。

船をぐらつかせるほどの轟音。廊下まで続く扉が吹っ飛び、黒煙が撒き散らされる。その後に続くのは爆発音。炎が揺らめき、二つの大きな塊が廊下から飛び出してきた。どこかで見たような帽子が、黒煙から飛んできて、アリゲイツの近くに落とされる。

「…え、ヒビキ?」

「お、おうヒナ! 悪いけどここは逃げるぞ!」

「いやどういふこと!?!」

「あいつ相手にしてたら酷いことになるってことだよ!」

「あいつだと…?」

思わず後ろを見て納得。いたのは異様な姿をしたコウキとマニユーラの姿。だがその行動は変人にも劣らないもの。

こちらを射殺すかのような視線。舌なめずりをして、どう食ってやろうかと考えている行為。変人というより、変態か?

「おい何をしている」

「ふいつひひひつ!!」

『マアニュツニュツニュツ!!』

言葉が通じていないのか？最初に出会ったコウキとは違って気持ち悪いな。

「…どういふことだヒビキ」

「いやだから——ってか鬼のお前に言うつもりねえ！」

思わず奴の頭に殴り掛かりそうになったが、ヒナがそれを止めて地面に落ちたヒビキの帽子を奴に渡す。

「ほら、私になら話せるでしょ！何があつたのヒビキ！なんかあの人の目イっちゃつてるんだけど……！」

「マニニューラ攻撃したらこうなつたんだよ俺にも何が何だかわかんねーっての!!! つか逃げ道は!!」

「ないわよ！今あの人がいる廊下が逃げ道！」

「なんてこった!!!」

マニニューラを攻撃したら？

意味の分からない言葉だ。ポケモンバトルでこうなるトレーナーがいると言うことか？まあ、トレーナーの中には個性的な奴が山ほどいるが…。

——目を離したのがいけなかったのだろう。

「うひひひい…マニニューラア！」

『マアニニューウ!!!』

マニニューラが最大火力の「つじぎり」を俺たちに向けて近づいてくるのが見えた。地面に何度も切った跡をつけていき、こちらに近づいてくる。その光景は、前にテレビで見たサトシさんのジュカインがリーフブレードで攻撃してきた跡のようなもの。スピードはないが、迫力がある。それに船の切られた痕跡を見る限り、奴の攻撃能力は高いだろう。

「ここで鬼が仲間割れを起こしても意味はないと言うのに……あの野郎。」

「くそ……アリゲイツ！」

『アアリゲエイ！』

「ああもう。シルバーに協力するわよナゾノクサ！」

『ナツゾオ！』

「うえマジかよ！」

「マジです！ほら、あの人たち倒さないと逃げられないから仕方ないでしょ」

どっちみち逃がすつもりはない！だがこのまま自滅するよりマシだ！

「くっそ……ゾロアーク！」

『グアアア！』

3体V S 1体。一見すればこちらが有利に見えるが、マニユーラの動きが不規則なせいで攻撃が当たらない。そういつている間に奴が近づいてくる――。

【ピンポンパンポーン!!鬼ごっこはこれにて終了です!さあバンダナ持っている逃走者はホールに来てねええ!!】

「ウイっヒツヒツヒ!!!」

『マアニュウウ!!!』

アナウンスが鳴り響けど、奴は止まらない。奴は止まらない。というかこっちが負けかふざけるな。ヒナとヒビキを捕まえず負けになっただど?さすがに不完全燃焼だ。ふざけるな。本当に、ふざけるな。

「アリゲイツ、りゆうのまい」

『アアリゲイ!』

「もう一度りゆうのまい」

『アリゲイ!』

「もう一度だ」

『アリゲイイ!』

「え、ちよつとシルバー?」

『ナ、ナゾ?』

「おい落ち着けてシルバー…ってかおい!お前ももう終わったぞ!」

『グアア!』

「うっひゃっひゃ!!」

『マニユ!』

怒りなんてない。胸にあるのは込み上げてくる冷たい衝動のみ。

「もう一度だアリゲイツ。りゆうのまい」

『アアリゲイ!』

「ねえ、ちよつと…シルバーってば!もう終わったんだよ!」

『ナゾオ?』

「おいお前! うっひゃっひゃじゃねえよ終わったっつーの!」

『グアウ!!』

近づいてくるコウキに、恨みはない。負けたのは事実だろう。だから、これはただの八つ当たりだ。

「力を込めろアリゲイツ!! じたばた!!!」

『アリゲエエエイ!!!』

ヒナのナゾノクサよりも威力の高い「じたばた」が船を大きく揺らし、廊下から押し出すようにコウキとマニユーラのもとに放たれる。攻撃範囲が広く、床に亀裂が生じ、壁に大きな穴が開くほどのもの。

聞こえてくるのは悲鳴、罵声。それ以外は知らん。

後のことなんてどうでもいい。今あるのはこの気持ちを抑えることそれだけだ。

第三十話～腐れ縁は酷なもの～

クチバ湾の小さなカフェテリア。かなりお洒落な外観が人気の店にて——ポケモン達が一瞬飛び上がるほどの叫び声が響く。

「誠に申し訳ありませんでしたあああ!!!」

『マアニューウウウウ!!!』

「大丈夫つすよ本当!」

「いやでも…ほ、本当にごめんなさい!俺、ストレスが爆発すると完全にぶっ飛んじやうみたいで…」

『マニューマニュー…』

ダイナミック土下座をしているのはあの奇妙な行動をしていたはずの人とマニューラ。冷や汗をだらだらと流し、今にも死んでしまいそうなほど顔が白い。

マニニューラなんて爪で自害しそうなほどだ。

「いや、あなたはまだマシな方ですよ…問題なのはこいつなので」

「…ふん」

「おいシルバー!!今回は船の人が笑って許してくれたけどなあ…また次なんてことあつたら容赦しねえからな!!」

そう、船の人は笑って許してくれた。いや、笑つてと言うより引きつった笑いだった。あの新品だった船が今にも沈没しそうな中古品になってしまったんだから当たり前だよ。よね。

というか、新生ロケット団なんて奴らを捕まえて一応の借りを作ってなかったら酷いことになってたはずだろう。私達の方がよく捕まらなかったと安堵するぐらいやらかしたんだシルバーは。

「シルバーもちゃんと反省しなさい!」

「そうだぜシルバー!!土下座しろ土下座!!」

「ポケモンの技で船が壊れる程度の強度が悪いだけの話だ。俺はただバトルをしたのみ

だからな」

「ドヤ顔するな馬鹿！」

「ええつと…」

マニユーラと一緒に土下座している人が苦笑して困っている。目の前で喧嘩されたら困るものよね…よし。

「あの、私ヒナつて言います！あなたの名前聞いても良いですか？」

「ああうん。俺はコウキ…シンオウ地方から来たんだ」

コウキさんは土下座をやめ、私たちと対面している椅子に座って話してくれた。マニユーラも近くにある椅子によじ登り、話に耳を傾ける。

「シンオウ地方からつすか!!何で？」

「休暇でこつちに…」

ヒビキがシルバーに嘯みつくのをやめてコウキに興味をもつ。

シルバーはカフェテリアから出されたココアを飲んで優雅に過ごしているんだけど……あとで拳骨だからね。

「休暇っていうと、トレーナーじゃないとか？」

「俺はこれでも研究員なんだ」

「へえー！じゃあオーキド博士とか……シンオウ地方だと、ナナカマド博士と同じなんです
ねー」

「いや、あの人たちのような凄い研究をしているわけじゃないけど……まあね」

『マアニユウ』

コウキさんは少し誇らしげな顔で笑っていた。マニユウも似たような顔で照れている。やっぱり手持ちだから同じような反応になるのね。

「……ほう」

シルバーが研究員という言葉に興味をもったのか、ココアを飲んでいたカップを机に

置き、コウキさんを見る。

なんか嫌な予感がするけど大丈夫かな？

「休暇というと、何かの研究が一区切りついたとかか？」

「いや、まだまだやるべきことはたくさんあるよ…なんせ、今のシンオウ地方は大騒ぎだからね」

「大騒ぎ？」

「ああうん。あ、そっか違った…大騒ぎといっても一部の人間たちだから気にしないで」

何かをはぐらかすようにコウキさんはコーヒーを口にした。マニユーラでさえ視線をそっぽ向けているけど、何があつたんだらう？

思わずヒビキやシルバーを見ると、彼らも興味津々といった顔で私を見た。

「あの…話しちやいけないほどのことなんですか？」

「ああ、いや…その…」

「ヒナは、あのポケモンマスターであるサトシさんの妹だ。だから話してはいけないこ

となどないはずだが？」

「え、サトシさんの妹!!!」

『マニユツ!?!』

「ちよつとシルバー!!」

反射的にシルバーのほうを見た。シルバーはコウキさんに見られないよう親指を上げてニヤリと笑う。本当にその顔面殴りたいんだけど。

あとヒビキ、あんたもよくやったって顔でシルバーの背中叩かないでよねまったく…。

「そつか…サトシさんの妹か…なら話しても大丈夫かな」

『マニユラアア』

コウキさんはマニユラを見て独り言のように呟いていた。

これで責任を問われたとしても私は知りませんからね？いや、確かに興味はあるから…もしもの時はなるべく弁護するけどさ…。

「分かった話そう。だが、ここで話した内容は他言無用にしてくれ」
 「わ、分かりました…」

神妙な顔で頷き、続きを話そうとする口をじっと見つめた。数秒ほど、戸惑っているのか何も喋らずにいたが、やがて話し始める。

「シンオウ地方には今——というか、現段階でアルセウスが統括しているような状態なんだ」

「アルセウス!?!」

何故ここでその名前を聞くことになるのだろうか。アルセウスは、兄が唯一手を出すことのなかった存在だ。

どんな伝説であろうとも、神であろうとも殴りつけO H A N A S I (物理)をするのが当たり前の伝説のトレーナー。そんな兄を知るみんなの中であり得ないほど対等である、とても珍しい創造神。そのアルセウスがシンオウ地方統括とは一体どんな物騒なことになっているのだろうか。

ヒビキやシルバーも名前は知っているのか、ごくりと生唾を飲み込む。

「実はギラティナが世界から忽然と消えてしまつてね。代打で反転世界を収めるついでにと、シロナさん…つまり、シンオウチャンピオンと交流してこうなつたつてわけ」

「いや、意味が分かりませんというか、ギラティナは!?」

「アルセウスは何も話してくれなかつたみたいだけど、どうやら彼の頼みで何処かへ行つてしまつたらしい。おそらく別世界にいるだろうと、ナナカマド博士は考えている」

『マニユ』

「なんか規模が大きすぎるんですけど!!!」

ギラティナといえば、兄から聞いた私たちと同じ転生者だ。

そんなギラティナが世界から消えてしまったことを聞いて一瞬焦つたが、アルセウスが頼んだということは、何かしらの用事で何処かへ行つてるのだろう。世界は数多くあることを私はイツシュ地方で学んだから知ってるし…。

それで、ヒビキとシルバーは真剣な顔で何してるのかな？

「なあシルバー…：ギラティナって確か」

「ああ。ジョウト地方で会ったな…：本では伝説と呼ばれるポケモンだったが。なるほど、アレがそうか」

「あんなのが伝説で大丈夫かシンオウ地方！」

「いや、ギラティナは世界の裏側を管理するポケモンと言われている…：つまり、全ての地方で関係するということだろうな」

「それヤバイなマジで」

「つつて！ちよつと待つて！ヒビキとシルバーは何でギラティナのこと知ってるの？」

ポケモンではなく人間の姿に擬態してヒカリさんやアーロンさんと共に旅に行くことが多いギラティナ。

人間の姿だから彼から話さなければ普通は気づかないはずなんだけど。

ところがヒビキとシルバーは微妙な顔で話してくれた。

「前にジョウト地方でポケモンが盗まれる事件が続出してさ…：そんなときに俺のゾロアー

クとシルバーのチルタリスも盗まれたんだ」

「あの頃はまだ育成途中だったからな。チルタリスがチルツトの時にボールごと盗まれた」

「そ、そんなことあったのね…」

呆気に取られてしまった。

ポケモンが盗まれる事件なんてことに巻き込まれるヒビキもそうだが、シルバーも意外と兄と同じでトラブルメーカーよねえ。

「それで？何でギラティナと出会ったの？」

「いや、俺もゾロアーク…というより、ゾロアを助けに行こうとしたら青い服を着たお兄さんと綺麗なお姉さんに出会ってさあ」

「ヒナは知ってるか？ルカリオを連れていて、ギラティナをよく殴りつける人とポツチャマを連れてよく呆れていた人なんだが…」

「…うん、お兄さんの方は私の師匠だから分かる」

——師匠何やってるんですかああああ!!!

心の奥底で叫んでしまいたいほどの衝撃だった。アールンさんとギラティナがその事件に関わってるのかあ…なら、もう心配はなくなつたも同じよね。ヒカリさんがいれば騒動の少しは収まつたかもしれないから、うん大丈夫なはず。

というか、師匠つて兄と同類の人だし…性格が似通ってるのかな。

「えと、つまり、ギラティナがポケモンに変化してしまうほどのことが起きたけど、アールンさんのお陰でゾロアとチルットは助かったということね」

「おおそうだぜ！よく分かつたなヒナ！」

「いやまあ…うん」

何も言えず乾いた笑みを無理やり浮かべて視線をコウキさんに戻した。コウキさんは何故か唾然として私たちを見つめているけど、何で？

「あの、どうしたんですかコウキさん？」

「い、いや…流石はサトシさんの妹だなんて思っただけだよ」

『マニユウウ』

兄の妹だからって理由がいるようなことなのだろうか？

思わず首を傾けて考えるけど意味が分からない。というか、私は驚くようなことなにもしてないよね？ヒビキとシルバーを見たけれど、彼らは諦めるというかのような顔で私を見た。

いや、本当に意味が分からないから！

.....

カフェテリアでコウキさんに別れを告げ、来たのはポケモンジム。

…何故かジムの天井に見覚えがある穴があるんだけど気のせいよね。

「さて、誰から始める？」

「やっぱり俺からだろ！」

ヒビキが扉を開けて、「たのもー！」と声を出す。結構大きな声だから、ジム内にいたトレーナーやクチバジムリーダーは私達の方を見た。

クチバジムリーダーであるマチスさんは、声を出したヒビキを通り越して、私の方を見る。その顔は満面の笑みを浮かべていた。

「Oh！久しぶりだなリトルガール！」

「お久しぶりですマチスさん。えっと…今日はジム戦に来ました！」

「そうかそうか！ついに約束の時か！リトルガールもトレーナーになったんだな!!」

マチスさんはこちらに近づき、私の帽子越しに頭を撫でる。

なんというか、覚えててくれてとてもうれしい気持ちはある。でもヒビキの方をちら

りと見ると、少々複雑そうな顔だ。

その顔を見たシルバーが問いかけてくる。

「どうしたヒビキ。いつもの憎たらしい顔はどうした？」

「憎たらしいってなんだよこの野郎。いや、まあ…いろいろあつたことを思い出しただけ」

「いろいろ？何だ、何かやらかしたのか？」

「…聞くんじゃねえよ阿呆シルバー」

ヒビキの声にいつもの力強さはない。仕方ないことだとは思う。というか、こつちも複雑だ。終わったことだから何も言うつもりはないのだけれども…。

だつてクチバジムに挑んだ理由って、ヒビキが私達を挑発したことがあつたから。あの頃はヒビキも含めて私に対して反発しまくってたよね。うわあすごく懐かしい気がする。リザードンやピチューの入ってるボールがゆらゆらと揺れているのも私と同じ心境だからなのかな。

当の本人は黒歴史ですと言いたいぐらい、マトマのみを食べたような変な顔してるけど。

「えつと…とにかく、最初はこのヒビキがジム戦するので、その後でいいでしょうか？」
「Oh！リトルガールのboyfriend？そこにいるRed hairの子は前にジムに挑戦してきたよな！」

「ボ、ボーイフレンドなんかじゃないっすよ!!」

「ヒビキ、からかってるだけだから真に受けないの」

HAHAHAと笑い声をあげるマチスさんに対して、微妙な顔のヒビキ。「赤い髪の子」と言われたシルバーは普通な対応してるのに、ヒビキってばなんか戦う前からテンション下がりがまくってるけど大丈夫なのかな？

——だが、マチスさんは不敵な笑みを浮かべてヒビキを直接見た。その視線はすべての生き物を硬直させるような、殺気に満ちたもの。

「俺は強いぞ。来るなら全力でかかってくることだな」

第三十一話 く影響力は劣らないく

少々暗く、殺伐としているバトルフィールド。そこにいたのは気合いを入れなおすヒビキと、不敵な笑みを浮かべるマチス。

「えーでは！挑戦者ヒビキ対ジムリーダーマチスによるポケモンバトルを開始いたします！使用ポケモンは2体です！」

帽子を深くかぶるヒビキは深呼吸をし、ボールを見つめた。ボールはヒビキが手に持つ前からゆらゆらと揺れていて、『早く出せこの野郎！』と伝えようとしてくる。そんな元気な反応にヒビキは笑った。

勝つということは、このボールの中に入っているポケモンは使うことはできない。で

もやる気十分勝つ気満々なポケモンを出さない意味はないのだと、テレビでよく見たサトシから教わったとヒビキは考えていたのだ。

だからこそ、緊張感がビシビシと伝わるこのバトルフィールドで、ヒビキは勝つことだけじゃなく楽しむことを胸に決める。

「行くぞピジョン!!」

『ピジョンオオ!!』

翼を大きく広げ、咆哮を上げるピジョンにマチスは笑った。

「へえ…ピジョンか。でんきタイプには弱いポケモンを出すとは、やけに自信があるようだな？」

「自信なんていくらでも出てくるっすよ!だってこいつの根性信じてますから!」

「ふっ!その根性いつまで続くのか楽しみだぜ!!——行くぞ、エレブー!!」

『エレエエイ!!』

エレブーの身体から電撃を放ち、地面を軽く焦がしていく。その様子を見たピジョンは『なめんじゃねえぞゴラア!』とでも言うかのように通常の個体よりも鋭い目で睨みつけた。

気合十分な二体の様子を見た審判は息を吸い、大きな声を上げる。

「それでは!エレブー対ピジョンの試合を始めます!試合開始!!」

「10まんボルト!」

『エレエイ!』

「でんこうせつかで躲しつつ反撃!」

『ピジヨオオ!!』

雷撃を回避しつつピジョンがエレブーを嘲笑う。それほどまでもスピードが段違いで違っていたのだ。10まんボルトでさえギリギリの距離でも躲せるんだぜ、とでも言うかのようにピジョンはバトルを楽しんでいる。もちろんそれはヒビキも同じだ。

だが、でんこうせつかの直撃を受けたエレブーはピジョンの挑発を軽く流しつつ、マ

チスを見た。マチスは誰もが怯える凶悪な笑みを浮かべつつ、小さく頷く。

「Heyリトルボーイ！お前はでんきタイプの恐ろしさというものを分かっちゃいねえな！」

「へ？」

「行くぞエレブー、でんげきは！」

『エレエエエイ!!』

「ちよっ!？」

『ピ、ピジョオオオ!!!』

.....

「あっちゃー…バトルで遊んじやいけないっていうのに…ヒビキの馬鹿」

「ニビジムと同じようにやらかしてるな。さすがは馬鹿だ」

ヒビキの焦りようを観戦席から見ていたヒナとシルバーはため息をつく。

ピジョンは戦いに夢中になっていて、ヒビキはそれを楽しんでいる。そういうのはトレーナーによくあることだ。あのサトシでさえ、勝つためにバトルをするのではなく、楽しむためにバトルをすることが多かったのだから。でも、今はそういう時ではない。

バッチを貰うため、勝つために行うバトルなのだから。

ニビジムでもゾロアークと遊んでいたヒビキに二人は呆れていたのだ。

「ピジョンはやる気十分といったところだが、慢心があるな」

「スピードも速いし、エレブーがエレキブルに進化していないからとかなかな？」

「まあそれもあるだろうが…だが、唯一の違いは遊び過ぎというところだろう」

「遊びすぎ…」

ヒナがピジョンを見た。ピジョンは焦りながらもそのギリギリの電撃を避けるという駆け引きを楽しんでいるように見える。身体にダメージがたまっていく【でんげきは】の余波が来たとしても変わらない。ホーミングされ狙われていたとしても、楽しむのを止めない。むしろヒビキの指示によって、エレブーにそのでんげきはを直接当てる

ように仕向けているほどだ。

避けきれなかったエレブーは自らのでんげきは当たってしまい、ダメージが与えられた。

楽しみつつ、バトルに勝とうとするその根性はある意味感心するレベルだろうと、ヒナは心底思った。

「まあ、あれもある意味才能よね」

「俺ならキレて『はかいこうせん』を撃つ場面だな」

「それもそれで大問題だからやめてよね!!」

ヒナの大きな叫び声がシルバーに向かって放たれたのと同時に、ピジョンのでんこうせつかとエレブーのでんげきは衝突し、爆発した。爆炎と共に吹き飛ばされたピジョンとエレブーは左右の壁にぶち当たり、地面に倒れ込む。

両者とも近い位置にいたせいかな、与えられたダメージはほぼ同じ。それ故に立ち上がることはなかった。

「え、エレブーとピジョン戦闘不能！よって引き分け!!」

.....

「ハツハツハ!!」

マチスの笑い声が響き渡るバトルフィールドにて、ヒビキは内心冷や汗をかきながら動くことのないボールを見た。中にいるのは傷つき気絶したピジョン。

他の二体であるマグマラシとゾロアークは元気づけるようにゆらゆらと懐の中で揺れていたが、ヒビキはそれどころではなかった。

(やつべー…引き分けになったのはグツジョブだけどここの後のこと考えてなかった!!)

でんきタイプならマグマラシやゾロアークでも対応できる。でも、どちらもでんきタイプに対しての有力な技はないに等しい。

もはや特攻あるのみだ。そうヒビキは決意し、あるボールを手に取った。

「ええい成せば成る!!行くぞゾロアーク!!」

『グアアア!!』

「ほう?ゾロアークか…そりやあなんともRareなポケモンだな!」

「レアと言ってくれてうれしいっすね!でもこいつレア以上の希少価値あるみたいなん
で油断大敵っすよ!!」

『グアアアウ!!』

「そうかそうか!ならこっちはサンダースだ!」

『ギアアアア!!』

どんなに珍しくても、勝つ気で戦おうとするのがマチスのやり方だ。それはヒビキとは少々異なっている。

でも、ヒビキもここまでくれば本気で勝とうという気持ちが強くなる。たとえばバトルで楽しんでいようとも、勝たなければ意味がないのだから。

「これより、サンダース対ゾロアークのバトルを開始いたします！試合開始!!」

開戦の合図が放たれた直後、ゾロアークの瞳が怪しく揺らめく。

バトルフィールドの照明はもともと暗い。天井に小さな穴が開いても同じだ。でもそれをより暗く見せ、霧のような白い煙によつてフィールド内の状態が分かりにくくなる。

これがどういう意味なのか、マチスはよく知っていた。

「Oh! そういう意味での希少価値か…だが、俺やサンダースにソレがばれてもいいのかりトルボーイ!」

『ギヤアス!』

「良いんすよ…それだけじゃないんだから!」

『グアアア!!』

——言った瞬間、だった。

「ッ！ 避ける!!」

『ギャウウッ!!』

霧の中からもものすごい勢いで鉤爪のような何かサンダースの身体に襲いかかってきた。その鉤爪は幾多もの刃となって切り刻んで行こうとする。

それらを避けようと、先程のピジョンよりはるかに速いスピードで動くサンダースはまさにどこにも当たらない雷鳴のようだ。

また、ゾロアークが竜巻を発生させてもそれは変わらない。

「くっそ…ゾロアーク！あくのはどう!!」

『ガアア!!!』

「Okさせないぜ！サンダース、かげぶんしん！」

『ギャアアウ!!』

数十ものサンダースの影が現れ、紫色に輝く波動をすべて避ける。それに舌打ちした

ヒビキがゾロアークを見て笑った。

ゾロアークも同じように笑い、サンダースを睨む。

「ゾロアーク、幻影攻撃！」

『ガアア！』

ゾロアークの姿が揺らめいて消える。まるで空気に溶け込んだ霧のように、白く濃く見えなくなる。マチスがサンダースに電撃を指示するが、手ごたえは何もない。

途端に巻き起こったのは白い霧から発生した棘付きのイバラがサンダースに向かって巻きつく光景。棘がサンダースの身体に食い込み、肉を引きちぎろうとする。その痛みにサンダースは惑わされた。

『ギャアアアツ!!!』

「Oh サンダース！ワイルドボルトで回避だ！」

身体中に電気を纏い、イバラごと破壊していくサンダースだったが、イバラがすべて破壊されることはない。幻影により、イバラがサンダースの周りを囲っていく。ワイル

ドボルトの効力が消えても、イバラはなおも増殖する。その光景はまさに、サンダースにとって強固な檻となっていた。

ダメージは幻影によりゼロも同然だが、惑わされている最中はそれに気づくことはない。むしろダメージを深く負っているのだと「錯覚」する。

「これがイリユージョンの力ってわけか：excellent!」

『ギャウウ!』

「それだけじゃないっすよ!行くぞゾロアーク!」

『グアアア!!』

薄く霧が立ち込め、イバラで満ちていたバトルフィールド内の様子が一変する。白煙はふわりと消え去り、イバラは陽炎のごとく消えていく。そうして残ったのは小さく灯した照明と天井に開いた穴のみ。

何をするのだろうか。マチスは心を躍らせた。

「警戒しろサンダース!」

『ギャアアス!!』

「警戒なんてしても無駄つすよ!これは四年も前からずっと食らつてたあいつの技!戦闘不能になつても立ち上がりめげないゾロアークの力だ!!」

『グアアアア!!』

「What?どういう意味だ!」

マチスが警戒し、サンダースのかげぶんしんをそのまま維持させている。だがヒビキとゾロアークの勢いは止まらない。

大きく口を開けているゾロアークから、何か光を吸収するように動きだし——光の波動で打ち抜いた。

「はかいこうせん!!!」

『グアアアアア!!!』

見えたのは閃光。一瞬でフィールド内を爆発させ、何もかもを吹き飛ばす力に変え

る。それは「かげぶんしん」でもって回避率を上げていても変わらず、すべての対象を攻撃していったのだ。

平たいフィールド内がでこぼこのものに変わっていく。地形が少しだけ変形する。

そんな攻撃でも、シルバーのチルタリスよりは攻撃力が不足していると、ヒビキとゾロアークは分かっていた。

だが、建物を破壊するほどの力がなくても、ポケモンを倒すぐらいはできる。

「へっ！俺たちの力思い知ったか！」

『ガアアア!!』

「ふっ…：そうだなリトルボーイ。お前たちの力にサンダースと俺が及ばなかったと言うわけだな」

サングラスをかけなおしたマチスを見た審判は、高らかに判定の声を上げた。

.....

山道かと思えるほどでこぼこしているバトルフィールド。それらすべては焼き焦げでいて、黒煙でさえ発生させている。チカチカと動いていたはずの照明はものの見事にぶっ壊れ、唯一の明かりとなっているのは天井に開いた穴のみ。

——さて、これはどういう事態なのだろうか。

「ねえヒビキ。なんでゾロアークがはかいこうせん覚えてるの?」

「攻撃食らってるうちに覚えたんだ」

「フンツ：俺のチルタリスよりは劣っているがな」

「お前のチルタリスはいろんな意味で領域外なんだよ!!!」

ヒビキとシルバーが喧嘩しそうなので止めつつ、マチスさんを見た。マチスさんは普通に豪快に笑っている。バトルフィールドが半分破壊されたとしても気にしてないのかな。

「次はリトルガールの番だぜ？わかってるな」

「はい…わかってます」

これは再戦だ。だから全力で行かなければいけない。でもあの時とは違ってリザー
ドンもピチユーも強くなった。だから大丈夫なはず。

——ああ、そうだ。

「ナゾノクサ！」

『ナツゾ！…ナゾ？』

「ねえヒビキにシルバー。ちよつとナゾノクサ預かっててくれないかな？」

「ああ」

「んーまあいいけど」

ボールから元気よく飛び出したナゾノクサをヒビキが抱き上げる。シルバーは何故かナゾノクサの草部分を観察しているけど…あんまりナゾノクサの不安になるようなことさせないですよ？

『ナゾオ…』

バトルに出れないと理解したようで、落ち込んだ顔をしているナゾノクサ。その頭を撫でつつ、私は安心させるように笑いかけた。

「私たちのバトルを見て、ナゾノクサに勉強してほしいんだ。だからヒビキ達と一緒に見ていて。そしていっぱい学んでね！ナゾノクサにはこれから活躍してもらわなくちゃいけないんだから！」

『ナゾ…ナツゾオ!!』

「ほう…ポケモンにバトルを見させて学ばせる…か。それもある意味ポケモンの為になることか？」

「はいはいシルバー、そんなところで考え事すんな。お前は俺と一緒に観戦席な」

「フンツ言われなくてもわかっている」

『ナゾオ』

少々不安だけど、まあバトルが始まれば喧嘩はしないよね？

——そう考えながら、バトルフィールドに立った。

「使用ポケモンは二対二！交換はあります！それでは、挑戦者ヒナとジムリーダーマチスによるバトルを開始いたします！」

「Hey！俺の最初のポケモンはこのライチュウだぜリトルガール！！」

『ライライツチュウウ！！』

ライチュウが出てきた瞬間、ものすごい勢いでボールがぐらぐら揺れ始める。リザードンもピチューも再戦したい思いは同じなんだ。ちゃんとバトルで勝ちたい思いは一緒なんだ。

その思いを糧に、このバトルに挑もう。

「行くわよ、ピチューー！！」

『ピイツチュ!!』

「あの時と同じポケモンで挑むその心意気…気に入ったぜリトルガール！」
『ラアアアアイ!!』

二人と二体が同時に睨み合う。ライチュウは尻尾をバシバシと地面に当てて、衝撃を与えている。その尻尾の威力は地面をさらに焦がし、放電しそうなほどの強さだ。ピチュウは足を何度も踏みしめ、ほつぺに溜めている電気を無駄に放出しないよう心掛けている。

はやく、早く始めろ！そんな声が聞こえてきそうだ。

「そ、それでは…試合開始!!」

とたんに鳴り響いたのは雷鳴。指示をしていないのに両者は攻撃し合う。

そして黒煙と炎。電撃と電撃がぶつかり合い、爆発を引き起こしたのが見て分かった。

「ピチューー！アイアンテール！」

『ピイツチュー！』

「ライチュウ、メガトンパンチだ！」

『ライライ!!』

淡く光り輝く尻尾の先と、炎に揺れ動く拳が激突する。両者ともその攻撃の余波で二歩ほど後ろに吹っ飛んでしまったが、それでも戦闘意欲は高いままだ。

だからこそ、このままで良いとは思わない！

「ピチューーてんしのキッス！」

『ピイツチュー!!』

『ラアイ…ツチュウ』

混乱したライチュウが目をくるくる回しながら地面に倒れる。気絶したわけではないので、これでライチュウが戦闘不能になるわけではない。でも、これでいい。

「ほう！やるなりトルガール！」

マチスさんは不敵に笑い、懐から二つのボールを取り出した。

.....

「ニビジムと同じ戦略で戦うつもりか？」

『ナツゾオ？』

シルバーが首を傾けると同時に、ナゾノクサも身体を小さく傾ける。その意味合いは似ているようで違うもの。シルバーにとってヒナの戦略はどうなるのか、バトルでどう有利に行動するのかわいてみたいのに対し、ナゾノクサは『なんであいつたおれてるですか？』と、技の解釈がよくわからずにいる。

ヒビキは両腕を頭の後ろで組み、笑った。

「混乱させたとしてもポケモンを交代されたら終わりだと思っぜ？ほら、現にマチスさんがライチュウからマルマインに代えて戦ってるし」

観戦席から見えてきたのはライチュウの代わりにマルマインが出てくる光景。マルマインはその巨体を生かし、転がりつつピチューにぶつかろうとする。

ピチューはマルマインの攻撃を何度か避け、地面が盛り上がりつつある部分にわざと衝突させていた。そして小さく笑ったのだ。

「交代…まさか、それを読んでいたのか？」

「どういう意味だ？」

「…それはヒナが教えてくれるはずだ」

シルバーが顎に手を当てて、バトルをすべて見逃さないようにじつと見つめる。騒ぎもせず、何も言おうとしなくなったシルバーに呆れたような顔をしたヒビキだが、こちらもヒナのバトルの行方が気になるのか観戦に集中する。

『ナツゾオオ』

唯一、ナゾノクサだけはヒナとピチューを応援するかのようには、頭の上に生えている草をゆらゆらと揺らしてバトルを見ていたのだった。

.....

「ピチューいい？一点集中よ！」

『ピイツチュ！』

ピチューはでこぼこのフィールドを利用してでんこうせつかで駆け巡る。その素早さは以前戦った時とはわけが違う。そう、マチスは実感していた。

次第に姿が見えなくなり、一つの線になりつつあるピチューの激しい動き。それに翻弄されるマルマインを落ち着かせつつ、声を荒げる。

「G o マルマイン！エレキボールだ!!」

『マアルウウウ!!!』

「地面利用して防いでから急接近!!」

『ピチュー!』

凹凸の激しい地面を利用して放たれたエレキボールを躲す。そしてでんこうせっかのスピードのまま、マルマインの顔面へ接近していった。

目を見開き驚愕をあらわにするマルマイン。その目の前に向けてピチューは放つ。

「どくどく!!」

紫色の液体がマルマインに降りかかった。それは地面を少々溶かし、マルマインに激臭と鈍痛を引き起こすもの。時々マルマインの身体から嫌な臭いがしてくることによって、【もうどく】になったのだと思いつた。マチスは舌打ちを鳴らす。

「特攻だけじゃなくなったということかリトルガール!」

「そうですね!バトルの仕方は十人十色ですから!———というわけでボルテッカー!!」

『ピイチュユ！』

『マアルウウウ…!!』

「マルマイン！」

ボルテッカーによつてマルマインは数センチだけ後退し、深い傷を負った。しかも毒状態のせいで体力は減る一方。その容赦ない攻撃の仕方にマチスはただ、感心する。

「これで最後よ！ピチュユもう一度ボルテッカー！」

『ピチュユ！』

「おっとそうはさせねえ！マルマインだいはくはつだ！」

『マアルウウウウウ!!!』

「ちよつ！ピチュユ攻撃解除してそのままジャンプ!!」

『ピ、ピチュツ!!!』

先ほどのゾロアークのはかいこうせんに似た大きな爆発と閃光が巻き起こされた。バトルフィールド内で激しい雷鳴が鳴り響き、発生した黒煙から吹っ飛ばされるかのようピチュユが宙を飛ぶ。

そのまま地面を数回バウンドし、仰向けに倒れるピチュユ。ヒナは急いでピチュユの

もとへ駆け寄り、状態を見た。

ピチューは目を回し、身体のあちこちに焦げ目を残しつつ気絶していた。もちろんマルマインも同じだった。

「ピチュー、マルマインともに戦闘不能！」

.....

——自爆覚悟で【だいばくはつ】やるかな普通!?

そう叫びたい気持ちをこらえて、ピチューの入ったボールを撫でた。でもピチューからの反応はない。それは相当ダメージを負っているという証拠だろう。

「本当は…ピチューとりザードンの両方ともライチュウと戦わせたかっただけなんだけどね…」

交代させたのはライチュウとのバトルを皆でやるためのこと。でも、予想外なことが起きたためピチューは倒れてしまった。だからこれで最後の一手だ。

「行くよりザードン！あなたの本気を見せてみて！」

『グオオオオツツ!!』

大きな地響きとともに漆黒の塊がボールから出現する。そして天井に向かって放つのはリザードンの気合十分な炎だ。そしてこちらを見つめ、しっかりと頷いた。

うんごめんね、最近バトルに全然出せてなかったもんね…。

「ハッハ！あのヒトカゲが進化したのか！」

『ライツチュウ!!』

すでにライチュウをボールから出していたマチスさんは豪快に笑っていた。もちろんライチュウも同じように笑っている。

その表情は、決して私たちを油断しているわけじゃない。警戒はされているけど、楽

しんでいるようにも思えた。

「それでは！ライチュウ対リザードンの試合を開始いたします！…試合開始！」

「かえんほうしゃ！」

「でんげきは！」

炎と雷撃が衝突し、四散した。やっぱりライチュウは強い。リザードンの炎と互角に見えて、ライチュウは本気を出していないのが手に取るように分かる。

「リザードン！ほのおのうずで閉じ込めちゃって！」

『グオオオ!!』

「でんこうせっかで避ける！」

『ライツチュウ!』

回避なんて絶対にさせない!!

「多重ほのおのうず!!」

『グオオオオオ!!!』

いくつもの炎の竜巻が地面を抉りつつ、ライチュウのもとへ接近する。大きくて強い炎の竜巻をでんこうせつかでよけきれなかったライチュウが、竜巻の中に閉じ込められた。

煙や焦げ臭いにおいが発生するけど、バトルフィールドではそんなのお構いなしでしよ?!

「本気を見せてもらったぜリトルガール!だがそれでも俺たちを舐めるな!ライチュウ、ほうでんだ!!!」

『ライツチュウウウ!!!』

耳をつんざくような大きな雷鳴が鳴り響く。目の前で明滅したかと思いきや、竜巻をすべて吹き飛ばすほどの衝撃ある雷撃を繰り返していった。

流れ弾のように、小さな電気をリザードンが浴びてしまうほどの勢いあるもの。まるでライチュウ自身が雷そのもののように見えてしまった。

竜巻から無事に解放されたライチュウは、拳を打ち鳴らし来いよというかのように挑発する。その表情は嘲りなど一切ない、純粋な闘争心だった。

「…うん。やっぱりすごいね…ね、リザードン」

『グオオオオ！』

本当ならここから【えんまく】で防ぎつつ、細かく攻撃していく方がダメージが当たり、勝つ可能性が高いかもしれない。

でも、それは試合に勝ってバトルに負けたも同じようなもの。

本気でぶつかってくるなら、私たちもぶつかってみよう。そう思ってしまった。

「一撃に全てを込めようリザードン！」

『グオオオオツ！』

「リトルガールがその気なら、俺たちも本気で挑まなくちゃだなライチュウ！」

『ライライツチュ！』

私のリザードンとマチスさんのライチュウが激突しようとしている。ピリピリとし

た空気に胸が切り裂かれるように痛い。早くなる鼓動が熱く、血の流れを直に感じ取れているようだ。

負けない。負けたくない。そんな気持ちがあつかり合う――。

「かえんほうしゃ!!」

「かみなり!!」

重々しい地響きがバトルフィールド内で炸裂した。黒い煙だけじゃない。本気で放った雷と炎が衝突し、竜が天に登るがごとく辛うじて残っていた天井を突き破り大きな噴火を巻き起こす。壁を破壊させ、暴風を起こし、何もかもを消滅させようとする技、同士の衝突。

なんだか災害のようだと感じるけど、ここでバトルが中断させられたらたまつたもんじゃないほどの威力だ。

もはや立つことも難しい状況の中、吹き飛ばされないように注意しながら踏ん張り、フィールド内の状況を見た。

『グオオオオオオツツ!!』

——激しい暴風が吹き荒れる中でリザードンが拳を突き上げ、勝利への咆哮と炎を空に放った。

それだけでもう、充分伝わった。あの時の思いが報われたのだと、私たちは笑いあつた。

.....

ヒナの持っていたバッチを新しいものと交換する。再戦する約束は果たされ、見事勝利したからこそ与えられた名誉だった。

「マチスさん。本当にありがとうございます!」

「いや、こっちの台詞だぜリトルガール。それとバッチの交換に協力してくれてThank you」

「い、いえ!こちらこそ新しいバッチをありがとうございます!それと本当にごめんなさい!!」

思わずマチスに頭を下げるヒナに比べ、ヒビキは複雑そうな顔でそれを見ていた。

「おいヒビキ。ヒナは何故バッチを手にしたというのに再挑戦したんだ?」

『ナゾナゾ?』

「さ、さあ…」

「…おいヒビキ。貴様何か知っているんじゃないのか?」

『ナゾ!?!』

「俺に聞かないでくれよ頼むから!」

「どういう意味だそれは?何かやましいことでもあるのか?」

『ナゾゾオ!』

「あーあー!!!うるせえ!!」

「貴様の方が喧しい!!!」

『ナゾオ』

「ああもう!ちよつとあんたたち止めなさい!!」

「リトルガール」

「へ?」

相変わらず喧嘩する彼らを止めようと動くヒナに向かって、マチスが話しかけた。

その顔はバトル前とは違い、「穴ぼこだらけ」になり崩壊しきったクチバジムのようにとっても清々しいものだった。

「これからのジムにchallengeする気だ?」

「挑戦…ですか」

視線を斜め上に向け、考え事をするヒナ。だが、すぐに考えは決まったのか、につこ

りと笑って答えてくれた。

「ジム挑戦の前に行かなきゃいけないところがあるので、そこ行ってから考えます！」

第三十二話～奇妙なきっかけ～

「……ここが、ポケモンタワー？」

私達が来た場所はシオンタウンと言われる小さな町より外れにある高いタワー。

塔のように大きな建物は、薄暗くて不気味な雰囲気醸し出しているみたいな感じ。リザードンとチルタリスに乗って一気に来たからまだ昼間だというのに、夕暮れのようにも見えてしまう。

「……なあ、マジでここに入るのか？」

「入るに決まってるでしょ。何がいるのか分からないけど……マサキさんの頼みはちゃんと聞かなきゃ」

「嫌ならさっさとシオンタウンに戻れ」

「うるせえ戻るかよ阿呆シルバー!!ほら、さっさと行くぞ!!」

「あ、ちよつと待つてヒビキ！」

ずんずん先を行こうとするヒビキ。扉さえ豪快に開けて、小走りのような状態で中に入っていく。

全く、もう少し慎重に行くっていう気持ちはないのかな？というか、ポケモンタワーは、ポケモン達のお墓なんだから騒いだら駄目だつて…ああもう。

「シルバー。ヒビキを止めに行くよ！」

「…仕方ないな」

呆れたような顔でシルバーが歩き出してるけど…シルバーがヒビキを挑発したからああなつたんだからね!!

「はああ…」

前途多難とはこの事かもしれない。とにかく、ヒビキとシルバーが何かやらかさないうちに行かなきゃ。

.....

ポケモンタワーの中に入ると、そこにあつたのは並ばれたお墓と広い廊下。そして階段だった。お墓に手を合わせて泣いているトレーナー。花を添えてお墓に何かを喋りかけているトレーナー。たくさんの人たちが集まっていた。

でも、ヒビキは何処？あのちよつとの時間でどっかに行っちゃったのかな？

「おや、参拝客かい？」

「あ、ええと…はい」

話しかけてきたのは優しげな顔で笑いかけてくるおばさん。足元には鳴き声をあげず、静かに付き添っているカラカラの姿がいた。

「ん？もしかしてゴースかゴーストでも捕まえに来たのかい！それなら先に奥の間で手

を合わせてから行きなさい。変なものに憑かれたくなかったらね」
「わ、分かりました」

捕まえに来たわけじゃないんだけど……でも、似たようなものかもしれないし、迷惑になるようなことをするかもしれないから必要かな。

そう思っていたら、横で話を聞いていたシルバーがおばさんに話しかける。

「手を合わせるだけでいいのでしょうか？」

「もちろんだよ。でも、心を込めてだね」

「そうですか、ありがとうございます……行くぞヒナ」

「あ、うん。あの、ありがとうございます！」

「いやいや、気にしなくていいんだよ。気を付けて行ってくるんだね」

「はっ」

優しいおばさんに礼をして、廊下から先にある部屋に進む。扉を開けると、大きなステンドグラスが飾られていた。その手前には礼拝堂のような、立派な聖餐桌が置かれ、扉から聖餐桌までの間に椅子が綺麗に並ばれていた。

この聖餐桌で手を合わせれば良いのだろう。それも、これから何が起きるのか分からないから迷惑をかけてしまうかもしれないからすいません！と心を込めて。

「……」

横をちらりと見れば、シルバーが真剣に手を合わせていた。もちろん私も手を合わせて、謝罪込みで心を込めよう。

「…さあ、あの馬鹿を探しに行くか」

「うんそうだね」

先に突っ走ったヒビキを見つけて…それから変な悲鳴が聞こえると言う場所まで向かうでしょう。

・
・
・
・
・

——向かおうと思つてただけどなあ。

『ヒナ！久しぶりだな！』

「あーうん。久しぶり」

『フシユウウウ…旅に出て少し頼もしくなつたようだな』

「そう…かな？」

『ミュウウ！』

現在、階段の天辺にある大きくて暗い部屋の奥に私とシルバーがいる。ヒビキを探し回っていたというのに見つからず、何故か目の前にいるのはミュウツとミュウとダークライという異色のトリオ。

というか何でダークライここにいるの？

あと、シルバーの視線がとてつもなく痛いです。

「四年前と同じような状況だな…おいヒナ」

「ゴメン後で説明します」

「全部だぞ分かってるだろうな？」

「ハイ」

たぶん説教込みで話されそうな予感がする。リザードン達が励ますようにボールを揺らしてくれているけど、うん…大丈夫、ダイジョーブ。

「…ねえ、何で皆ここにいるの？」

『ああ。セレビィがジュプトル探して溜まった鬱憤を晴らすために、悪戯し放題で皆を困らせていたゴースやゴースト達をぶっ飛ばしている真っ最中だ』

「どういうこと!!？」

『ミュツ！』

ミュウがあれを見て！と、指を指したのは部屋の一番禺。

黒いもやが霧のようにかかかっていて見えにくいんだけど…え、待って…

「ねえシルバー。私の目は腐ってないよね？」

「ああ、正常だ」

「…ダーククライ、あれって全部ゴースやゴーストなの？」

『…そうだ』

「ミュウツーは馬鹿かな？」

『おいどういいう意味だヒナ！』

「うるさいミュウツーちよつと黙って」

『ツ！ ヒナ!!』

「あーあー聞こえなーい！つとつかあの状況作つたのつてセレビィだけ!？」

『ミュウウ』

『レッビィィィィ!!!』

セレビィは何故か身体の色がピンク色。そして技を駆使して無双している。逃げよ
うとするゴースやゴースト達が技をまともに食らつて、倒れ行く。

そして出来上がったのは黒いもやのような大きな山

なんだか可哀想な光景をみた気がする。

——あとこれ、マサキさんの言つてた悩み事つてセレビイのせいで出来たんじゃないのかな？

『フシユウウウ：見よ、ゴースとゴーストがゴミのようだ！』

「無理して言わなくていいからね、ダーククライ」

「…ピンク色のセレビイか。色違いの伝説は初めて見るが、なかなか能力も高そうだな。色違いとは個体値が高いポケモンが多いのか？」

「落ち着いてシルバー。そしてそのモンスターボールを離すのよ」

『怒りで力が勝っているんだろう。普段の奴なら俺よりも弱いな』

「黙つてミュウツー」

『ヒナ!?』

『ミュミュウウ!』

『っ！ 貴様笑うな!!』

何だろう收拾がつかないや。というかツツコミが足りない。
ああもう、ヒビキ何処にいるのよ!!

.....

気がついたらここにいた。

いや、【何か】に引つ張られてから、ここへ来てしまったんだ。

「小部屋？」

目の前にあるのは小さな机と窓のみ。横を見ても壁しかない。まるで誰もいない部屋かと思えるほど、閑散としている。

周りを見て気づいた。

明かりから避けるように影となった場所にいる、一人の女の子——というか、幼馴染

み。

何であいつ白い服着てんだ？白い服というか、小綺麗なワンピース？

「なあヒナ。もしかして俺を驚かすつもりだったか？その手はくわねえぞ！」

「……」

「ところでシルバーはどうしたんだ？もしかしてあいつ、お化けが怖くて逃げたのか？」

「……」

「…ヒナ？」

何も喋らず、こちらをじっと見ているヒナが異様に気味が悪い。じつとこちらを見つめて、人形のように動かない。

——あれ？

「ヒナ、髪が長い…？」

「あら、やああつと気づいたの？」

ようやく出した声はヒナと同じ。そして見た目もそっくり。

でも別人だ。

ヒナの髪の毛は肩までしかないというのに、目の前にいる女は腰まで伸ばしたロングヘアー。

まだヒナのリザードンが「ヒトカゲ」だった頃にしていた髪型にそっくりなんだ。髪型が違わなければ分からないほど、そのままの姿をしているんだ。

「…誰だ。ヒナの親戚か？」

「あいつのことなんてどうでもいいでしょう。あんなのと親戚なんて気持ち悪い」

蔑んだように笑う女。

その笑みを見て警戒心がぐんつと上がった。

ヒナを馬鹿にしている目が気にくわない。ヒナそっくりの姿でその笑みをしていることが気にくわない。

「てめえ、何で俺をここに連れてきた」

「一応の警告と、面白い話をするためかしらね？」

「はあ？」

女は影のあつた場所から抜けて、白いワンピースをひらひらと舞わせながら俺のもとへ近づく。

「それは駄目」

「っ……」

懐からゾロアークの入っているボールを取り出そうとしたのに、女が俺の腕を押さええ
て笑った。

くそ、こいつ力が強い……！

「これから面白い革命が起きるわ。あなた達に誤解されて巻き込まれたくないから、私
達は関与してないってこと、ちゃあーんと、伝えてね？」

「あなた達つて誰だ。伝えるって…ヒナにか？」

「さあ、それはあなたが決めることよ」

うふふつ、と妖艶に笑う女。

片腕はボールを取り出そうとした手を押さえ、もう片方は、俺の頬を優しく撫でる。ヒナと同じ顔で変な表情をしているからか、何故か顔が熱いと感じた。

「おい頬を撫でんかってか、近い!!!」

鼻がぶつかり合うぐらい接近した奴から必死に抵抗しているのに、女は面白そうに笑うだけ。

懐のボールがガタガタ揺れているのが伝わるけどどうしようもない。女の息が肌に伝わった。くそっ…本当に近い、近すぎるだろ!!

「もう一つ、世界は交わろうとしている」

「はあ？」

世界が変わるって何だよ！意味わかんねえよ！ってか近い!!!

「ふふっ」

「っ」

女は笑った。

でも、変な表情ではない。妖艶に笑うわけでもない。

まるでヒナ自身だと一瞬錯覚してしまうほどの微笑み。

あいつは、ヒナのように純粹に笑ったんだ。

「んなっ…っっっ??
!!!」

ヒナそつくりの顔がさらに近づいて、睫毛がはつきりと見える位置にいた。ことに気づいた。

柔らかくて暖かく——唇が何かに当たっているのに、気づいた。

ガタガタと揺れていたはずのボールが、啞然としたかのように、動きを止めた。

「ちやあーんと、伝えてね？」

小首を傾け、窓から外へ抜け出したヒナそつくりの女を追えなかった。

何も、出来なかった。

「あんにやろ…っ」

何でキスしやがったんだ、
ふざけんな…!!!

第三十三話　変異と改変

ゴースやゴーストたちの治療を終え、彼らに礼を言われつつ、どうやらセレビィを恐れているようで必死に逃げ去っていった暗い部屋。

「え、セレビィって異世界から来たの!？」

『ビィ』

『そうだと言ってるぞ』

ミュウツー翻訳のもと、頷いたセレビィに目を瞬かせる。

異世界と言ってもモンスターボールがない世界。都会という存在は全くなく、豊かな自然の中で人間とポケモンが共存し、まさしくNさんが望んでいた世界から来たそう
だ。

それに、セレビイの性別がピンク色の身体に似合う女の子だそうで、かなり気が強く何度かミュウツーたちに怒っている様子が見てとれた。

ミュウツーやダークライは暇だから仕方なく付き合っていると行っていただけ——
——ポケモンって気楽でいいねと思ったのは内緒にしておこう。

だからミュウ、こつち見てクスクス笑わないでね？

横で話を聞いていたシルバーが顎に手を当てて、真剣に考えている。

「別の世界というのは本当に存在するものなのか？」

「う、うん。一応はあるみたいだよ…ね、ミュウツー」

『泣き虫サトシの話は止めろ』

『ミュツミュツミュツ！』

『笑うなキサマアア!!!』

「ヒナ、泣き虫…サトシさんと是一体…」

「前にミュウツーがディアルガたちとの喧嘩に巻き込まれて別世界に行っちゃったことがあってね…そこでいろいろと世界が破滅しそうなお兄ちゃんを見た…というわけ。私も前に一度イツシュ地方にいた時、別世界から来たお兄ちゃんたちを見たことあるか

ら嘘じゃないって分かるよ」

…ん？あれ、なんで唾然としてるのシルバー？

「お前…本当に一般人じゃなくなったな」

「それどういう意味よ!？」

『フシユウウ……諦めろ』

「いやシルバーの援護しないでよダークライー!」

私はただのマサラ人だって何度も言ってるのに、シルバーは悟ったような顔で聞き流すし、ダークライも同じ感じだし。

というか、なんかシルバーとダークライ仲良くなってない？

『ビィー!』

——ちゃんと私の話聞きなさいよ!

というかのように、セレビイが私たちの頭を軽く叩いた。ミュウツーは叩かれてやるものかと手で振り払ってたけど、ミュウが援護して何度も力強く叩かれている。そんな光景に同情しつつ、私は満足げに微笑むセレビイに話しかけた。

「えつと…なんで異世界からセレビイがこっちに來たの？」

『ビィビィ』

『ふむ。どうやらジユプトルが関係しているらしいとのことだ』

「ジユプトル？」

『ビィィ！』

『【私の世界では彼は英雄よ！】…そういう意味で聞いたわけじゃないと思うぞ』

「英雄？」

シルバーが首を傾ける。

『レッビィィ』

『【ジユプトルさんは世界を変えたのよ。崩壊していく世界を動かしてくれたの】と言っ

ている』

「えつと…つまり、そのジユプトルのおかげで世界が救われたから英雄ってこと？」

『ビー！』

「ほう。ジユカインに進化できないレベルで世界を変えた英雄と言うことか。いや、進化できるが進化しようとしなかったのか？だとしたら技構成は一体…」

「シルバー、ジユプトル育成論についてここで考え込むのやめてね」

「……ああそうだな。考えるなら直接会ってからだ」

「それもそれでどうなの？」

『レビー！』

『【ジユプトルさんに会ったら教えてね！】だと』

「ええ分かったわ。でもなんでセレビイはジユプトルを探しにこっちに来てるの？」

何となく気になっていた。異世界のセレビイがジユプトルを探していると言うこと。英雄と呼ばれているらしいジユプトルに何があったのか、何故セレビイは探しているのか。

セレビイは私たちの周りをくるっと回って、話しかけてくる。

『ビィイ』

『世界に突然穴が開いたの』だと？おい、それは俺たちも知らない話だぞ』

「ん？穴が開いた？それは物理的な穴なのか、それとも何かヤバイものなのか？」

『…詳しく説明してくれ』

ミュウツーがセレビィを睨みつけた。もちろんダーククライもだ。

その後説明していくセレビィの話し声は長く、言葉が分かるミュウツーたちは険しい顔で聞いていた。ミュウは相変わらず楽しそうだけれども。

『…世界と世界に穴が開いて道が作り出されたのよ。異世界への道がね。まだどうなってるのか分からないけど、ジュプトルさんはそれを調べるためにこっちに来たわ』
と知っているが…だからシンオウ地方が騒がしかったのか？』

『ビィ』

「え、シンオウ地方？」

『フシユウウ…ああ、何故かポケモンたちがパニック状態になっていた』

「なるほど。ヒナ、コウキが言っていただろう？あのアルセウス統括のことだ」

「ああ、あれね!!」

シルバーに言われて思い出したのはコウキさんの言葉。

ギラティナがどこかへ行き、アルセウスが反転世界を代わりに管理して、シンオウ地方を統括しているらしいこと。もしかして世界に穴が開いたのがギラティナ失踪の原因だったりするのだろうか？

というか世界に穴が開くってヤバくないのかな？いや、アルセウス達が動き出しているから大丈夫な気もするけど…。

「それで…なんでセレビィがジユプトルを探しに来たの？」

『ビ、ビィィ！レツビィィ！』

『……………』

『レビレビィィ！』

「え、何言ってるのミュウツー？」

突然頬を赤く染めたセレビィが何かを叫んでいる。でもミュウツーは微妙そうな顔で何も言わず、ダークライは呆れている。そしてミュウは笑って…どういふことなの？

「ねえミュウツ、セレビイは何を言ってるの？」

『…いや、ツンデレ口調でジュプトルを心配しているだけ——ブフォツ！』

『レッビイ!!!』

「…ああ、今のは分かった。【誰がツンデレよ!!!】…でしょ？」

『フシウウウ…ああ、ちゃんと合っているぞ、ヒナ』

小さな頬を膨らませ、顔を赤く染めているセレビイはなんだか恋する乙女のような気がする。たぶんジュプトルが心配で追いかけてきたんだろう。可愛い。

頬を赤くした状態でミュウツをぶん殴った力は少々恐ろしいけれど、それでも照れ隠しにやったならかわいい。ミュウツが殴られるだなんていつものことだし。

「…で？」

「え、どうしたのシルバー？」

「結局のところ、マサキさんが頼み込んできた原因である変な声はセレビイ達の作業でいいの？」

『なんだそれは』

『ビイ』

『ミュウウ?』

「あーつと…ここで咽び泣いているような声って聞こえてきたことある?」

『フシユウウウ…今はもう聞こえないな』

『ああ、ゴースやゴーストたちはいなくなつたからな。聞こえなくなつたぞ』

「…ああ」

納得したような顔をするシルバー。思わずため息が出るのは仕方ないことだと思っ
けど。

うん。これで決定したね!

やっぱりセレビイ達の仕事だつた!というかマサキさんこれ放っておいても大丈夫
だつたんじやないのかな!?

.....

セレビイ達はそのまま一度シロガネ山にいるお兄ちゃんのもとへ行くと言って飛ん

で行ってしまった。その姿を見送ってから、ポケモンタワーの出入り口に戻る。

そこで見つけたのは見覚えのある後ろ姿。

「…あ！ヒビキ！」

「なんだあの馬鹿。怖くて逃げだしたんじゃないのか」

「こらシルバーそんなこと言わないの！ねえヒビキ、どこへ行ってたの？…ヒビキ？」

「……………別に、なんでもない」

こちらを決して見ようとせず、顔を俯かせているヒビキの様子がおかしい。シルバーの挑発にも乗らないのにおかしいし、いつもの元気な様子でさえもないのも変。

気のせいだろうか？顔色が信号のように赤と青と行き来してるとみたいんだけど…え、大丈夫なの？

「どうしたのヒビキ？具合でも悪いの？」

「…清めの塩でも買ってくるか？」

「え、呪われたの!?大丈夫ヒビキ？」

顔を覗き込もうとしたら避けられる。手を伸ばして肩に触れようとしたら拒まれる。ヒビキがここまで拒絶したのって小さい頃以来なんだけど。本当に何があったの？

「……………悪い。俺、もう行くから」

「は？」

「え、ちよつと…ヒビキ?!」

駆け出して行ったヒビキを追いかける私とシルバー。でもヒビキがゾロアークをボールから取り出して、イリユージュンで姿を消されてしまったことで見失ってしまった。た。

ボールから出た時のゾロアークの表情が、ニヤニヤした悪そうな笑みだったんだけど…何だったの？

「チツ…逃げたか」

「ヒビキ…どうしたのかな？」

「奴のことだ。腹が痛いだのゴーストたちに悪戯されて怖い目に遭っただの何かわけがあるに決まってる」

「…うん。それにしても表現がやけに辛辣だねシルバー」

「そうか？」

何かあったのは確定だろう。

でも当の本人には逃げられてしまったから聞くことはできない。

「…旅してたらいつか会えるよね？」

「だろうな。現に俺たちもニビシティで別れたというのにまた会えた。だから必ずどこかで会えるさ」

「ええそうよね」

「その時ははかいこうせんで逃げ道を防いでから直接話をきいてやるがな」

「そういう物理的な行動は控えなさい！」

ため息をついた私に、シルバーは何も言わず肩をすくめる。そして私が歩き出そうとしていた方向とは違い、真逆の道に身体を向けた。

「ヒナ、ここでいったん別れよう」

「え？」

「俺はもう一度あのポケモンタワーへ行つてゴーストを捕まえてくる」

「あー……分かった。でも無茶はしないでよ！あとはかいこうせんは駄目だからね！」

「……………ああ」

「その一瞬の間が怖いからやめて！」

「分かっている」

何度も頷いたシルバーを見てちよつとだけ安堵。やらかさなないようにしてほしいから気を付けてほしいな本当に。

「じゃあまたな」

「うん。またねシルバー」

ひらひらと手を振るシルバーの後姿に、こちらも手を振って応える。

シルバーはポケモンタワーの中に入っていった。ゴーストを捕まえるために。

「…さて、バッチ集めに戻りますか！」

あとナゾノクサ育成よね！

そう思いつつ、歩き出した私——の背中をひっかけるように何かが通ってきた。
いや、飛んできた？

「っ?!」

真下を見るとシオンタウンが遠ざかるのが見える。帽子を斜めにし、真上を見れば大きなポケモンがいるのが見える。

突風のように吹く風が寒いと感じるのはなんで？なんで私は空を飛んでるの？

『ギャオオオオオオツツツ
!!!!!!』

「なっ?!」

なんで私、オニドリルに運ばれてるのよ
!!!!????

.....

「キヒヒヒヒヒっ」

部屋の中で気味の悪い笑い声が響いてくる。その声はポケモンの鳴き声のように聞こえてくるが、実はそうじゃない。

「もうすぐ…もうすぐで完成だ…ヒヒッ」

何かを忙しく動かす手は人間の手。目をぎよろりと動かし、目の前にあるソレを見つめている。

「あとは、これを作動させるカナメが必要だなあ…」

下卑た笑いを浮かべていた奴は、小さなテレビを見て興奮しだした。

映しだされている映像には、傷つき倒れている少女の姿がそこにあつた。

服の上から斬り刻まれたかのような傷跡が酷く残っている少女。火傷や注射器の痕も残っているようでかなり酷い状態だ。

少女は必死に何かを見て、手を伸ばしていた。歩くことさえできないほどの傷を負っている、諦めようとしな。

そんな少女が手を伸ばす先を見て、奴は笑っていた。

「もうすぐ…もうすぐだ ヒイツヒヒヒヒツ!!」

伸ばした先には——ジュプトルの石像があつた。

.....

突然すぎた。というか、急になんだいきなり。

「どうもこんにちは」

「はあ。こんにちは?」

こんにちはというか、こんばんはの時間帯じゃねえのか?

「あの…何の用でしょうか？」

「いえ実はですね…あなたの脳をいただきたいのですよ」

「は？—— ツツツツ
!!!???

ハメられたのはよくわからない形状の物。

奇妙な音と共に、明滅しだす視界と動かなくなる頭の中。

「これで、この町の殲滅は終わりましたかね？」

聞こえてきたのは奴の声。

「おやおや…あなたは天候を有利に動かすポケモン使いですか。これは良い頭脳が手に入りそうだ」

ニヤニヤ笑いだす声のあと

——何もわからなくなつた。

第三十四話　暗躍とフラグと

部屋の中はやけに静かだ。周りには机と柔らかなソファのみ。机には香りが良い紅茶が置かれていたが、男はそれを口にしない。

ただじつと、目の前にいるアポロを見つめているだけだ。

「世界は…今まさに改変されようとしていることを知っていますか？」

アポロは目の前の男に問いかける。

「この四年の間、世界のいたるところで亀裂が入りました。数十年もの間に伝説が暴れたのですから仕方ないことでしょう」

肩をすくめるアポロが思い出すのは、あのポケモンマスターであるサトシが解決していったトラブルの数々。

伝説であろうとも殴り飛ばすその威力は、どうやら世界を歪ませてしまったのだろうと嘲笑った。

「亀裂は別世界への道を開き、新たな文化が舞い込もうとしているようですよ。昔々の…数百年前の歴史と似たようにね」

「歴史か」

「ええそうですよ。数百年前、世界は裏側を管理するギラティナと呼ばれるポケモンを自由にさせていた。遺跡によると、そのせいで一度、世界は崩壊しかけたとか」

「その話なら知っている…わたしはその出身だからな」

「ええ、そうでしょうね。あなたほどの男ならもしかするとギラティナに会っているかもしれない」

皮肉げに言われた言葉を男は静かに流した。否、どうでもいいとばかりに自嘲したのだ。

そして、アポロの目をじつと見て、何が言いたいのか視線で問いかけようとしてくる。

アポロは目の前に置かれた紅茶を飲み、ゆっくりと話し始める。

「亀裂は世界に新たな混乱を生みます。その混乱に乗じて私たちは動くのですよ」

「何故？」

「世界の改変を、私たちが操りたいからです」

操りたいと言った言葉に嘘はない。

今行おうとしていることも、トレーナーやポケモン達にとって予想外なこと。

新生ロケット団は脳を集めていた。トレーナーや手持ちであるポケモン達の脳。戦うための知識とその才能を奪い取り、手中にしている真つ最中。

それはまさに世界が変わろうとする革命だと、アポロは考えていた。

「私たちはあの憎いポケモンマスターを潰すために動いている。あなたも私たちと同じ被害者なのですから、一緒に協力しませんか？」

目の前の男はアポロの考えが分かったのか、頷いてから口を開く。

「…何をすればいい?」

「フーパと呼ばれるポケモンを捕まえてきてください。あのポケモンは様々な伝説を取り出すことのできる興味深いポケモン——そのフーパの脳を取り出すには：外ではまだ難しいことです。捕まえるだけでいいですよ」

アポロが内心で舌打ちをして思い浮かべたのは眼鏡をかけた奇妙な髪型をするアクロマという男。あいつは機械を軽量化することに興味はなかった。

軽量化すればどんな場所においても脳を取り出すことが可能になるのにやつは拒否した。

だから、別の手段を考えているのだが、思ったようにいかない。

それが唯一、アポロの心を苛立たせた。

「フーパは今どこにいる?」

「シロガネ山…あのポケモンマスターがいる聖地です」

男は顔を歪ませた。それを見たアポロは軽やかに笑う。

「まともにポケモンマスターにぶつかつてもらつてもらうつもりはありませんよ。今はまだ準備だけでいいです。合図を送つたらすぐに行動を開始してください」

「…合図とは何だ？」

ニヤリと笑つたアポロに、男は寒気がしたように錯覚する。

「大きな歯車をぶつ壊すだけの話ですよ」

.....

「何なのよもう！」

オニドリルがギヤアギヤア喚き、ヒナの背中を食い込ませようとしてくる。その勢い

は止まらない。

もしかしたらヒナのことを餌だと思って狙ったのかと思えるほど、口から涎を出して鳴いているのだ。

『ギャオオオアアア!!!』

「くっ…リザードン！」

『っグオオ!!!』

懐のボールからリザードンが飛び出してきてヒナの身体を優しく掴み、オニドリルの身体に向けて強力な炎を放つ。

オニドリルが嫌そうな声を出してヒナを離れた。リザードンがヒナを背中に乗せ、奴を睨み付けるが、オニドリルは諦めてないらしい。

「っ　リザードン！かえんほうしや！」

『グオオ!!!』

勢いよく出てきた炎に半分もの翼が燃やされるが、オニドリルは怒りでリザードン達

の方へ突っ込もうとする。

それを見たヒナが笑った。

「えんまく！」

『グオオウ!!』

勢いよく放たれた黒煙に顔を突っ込ませたオニドリル。そんな奴から猛スピードで離れていったヒナのリユックサツクはボロボロになっていたのだった。

.....

——これは仕方ないことだろうとヒナは決意する。

「ヤマブキシテイに行こう」

『グオオ』

『ピチユウウ…』

『ナゾオ?』

リュックサックがボロボロになってしまったから、ここから近いヤマブキシテイになら何かあるだろうとの判断だ。

もちろん、旅に出るトレーナーが多いこの世界では、どんな町にもリュックサックを売る店は多い。

マサラタウンのような田舎であっても、町の人間に事情を説明すれば譲ってくれるくらい、必要不可欠なものとなっているからだ。

旅の必需品は全てなくなっていないけど、傷薬が数個消えていることにヒナは気づき、それだけで良かったと安堵した。

「これは裁縫道具が必要になるかなあ」

『グオオ?』

「もしも山道とかで破けたとしても一時的になら大丈夫になるかなって思ってたさ」

『ピチュウウ!!』

「うん。今度はちゃんと買うよ」

『グオオ』

『ナゾ!』

リュックサックに入っていた物を、何故か入っていた風呂敷に並べていった。

「バッチや凶鑑がなくなったら大変なことになってたよね…はあ」

『グオオ…』

『ピチュピチュ』

『ナツゾオ!』

もしも、バッチや凶鑑がなくなつたとしても、申請すれば問題はない。でも手続きが面倒だからやりたくない。

そう思いながら、ヒナは中身をもう一度確認していく。

「えっと、傷薬は2個、毒消しと麻痺直しは5個…凶鑑とバッチはオツケー…あと、」
『グオオ』

リザードンに手渡された服に笑顔で受けとる。

「うんありがとうリザードン。服と下着と…えっと、モンスターボール——ん？」

何かいる。

並べてあったモンスターボールは何も入っていないものばかりだ。
なのに、1つだけ、何故かゆらゆら揺れている。

「…んんん？」

『ナゾオ?』

ヒナとナゾノクサが同時に首を傾けた。

いつの間にボールにポケモンが入っていたのか…捕まえた覚えはないのに何でだろうか。

「開けてみようか…」

『グオオ』

『ピ、ピチュ』

『ナゾ』

ゆらゆら揺れているボールを小さく投げる。

開かれたボールから出てきたのは――

・
・
・
・
・

今はここにいないヒナにヒビキ。元気にしているか？

あ、シルバーはどうでもいい。

私はいつものように、元気に怯えているぞ。

ん？何で怯えているのかだって？

だって目の前で伝説と呼ばれるポケモン達を、師匠であるサトシさんが拳だけで地に伏せさせているのだから。

「んで？夜中、急に来て騒いだあげく、ゴローニヤのいわなだれ連発によつて野生のポケモンが半分埋まったことに対しての謝罪は？」

『ビィィ…』

『フシユウウ…すまなかつた』

『ミュウ』

『…ふん』

ああ、これは死ぬな。

「ミュウツうてめえは反省してないってことでいいんだな？俺のポケモンによる阿鼻叫喚行きで良いんだな？あ、あ？」

『っ！ す、すまなかつた』

ああ、さすがに師匠のポケモン達による連続攻撃な【阿鼻叫喚】行きはミュウツうであらうとも辛いかな。

まあ、私もあれは伝説でも死ぬようなものだって分かってるから素直に謝って良かったと思うけど…。

でも夜中に起こされたことに関しての八つ当たりはミュウツで決定したも同じだな。

師匠って意外と横暴だから。

「ふふ。サトシってば楽しそうね」

「…そう見えますか？」

「ええ。だって私はサトシの妻だもの」

セレナさんは左手の薬指にある指輪を撫でて、幸せそうに笑った。

ユウキ君とアチャモたん

映像の中に映されているのは、純白のシーツを頭にかぶり、小さな幽霊ごっこをするアチャモたんの姿。でもそのシーツからふわふわで温かそうなお腹が見えているし、パーフェクトな魅力が隠れきれていない。

それが良い！

「はああ…アチャモたん今日もきやわゆい」

『チャモオ？』

「ああ！その小首傾けた姿もいい！そのまま止まって！写真撮ってネットに投稿するか

らー！」

『アチャア!!』

「ふおお。アチャモたん今日も輝いてるよ!!!」

『チャツモオ!』

——ふふん。私ってばかわいいでしょ？ネットにいっぱい見せて皆に私の素晴らしさを教えてあげなさい！

まるでそう言われているかのようだ。この小悪魔め！でもそれがアチャモたんの魅力なんだから断然いい！

「アチャモたん。視線お願いしまーす！」

『チャモ』

小首を四十五度傾け、目をキラキラさせながら羽をぶわりと膨らませる。さすが相棒！俺の心にグサツつと来るね！

そんな可愛らしいアチャモたんの魅力のせいで、カメラの連射が止まらなくなった。むしろ撮った写真すべてパソコンに送ってネットに俺のアチャモたんの素晴らしさを

全部投稿してやろう！だからたくさん写真撮る！！見てろよネット住人ども！

『チャモオ！』

アチャモたんつてば、くるりと一回転してウインクしたあああああ!!!

「ふおおお！その顔可愛いよアチャモたん！天使か君は!?!」

ああああああああアチャモたん！小悪魔なんて言っつてごめんね！君は天使だよ!!
そのドヤ顔もかわいくて天使だ!!むしろ女神さま!!!

———
ドタドタドタドタツ

「あ、くそ…来やがった」

大きな足音のせいで良い気分が台無しだ。

ここで籠城したとしても、奴は己の手持ちを使つて部屋の中に入つてくるだろう。アチャモたんが怪我しないように奴が来ることを想定し、鍵は開けっ放しだけれど、なるべく来てほしくはない。

でも来やがった。ドアを盛大に開けて俺のテンション急降下させやがった。

「ユウキくん！いい加減にするかもー！」

「うるせーよハルカさん」

肩を怒らせ、ぶんぶんしているのは近所に住んでるハルカさん。

カチューシャのような大きなリボンを頭に着け、頬を膨らませているハルカさんは一般人から見れば10人が10人、可愛いと思える容姿をしているらしい。

16歳という若さなのに胸がかなり大きいし、スタイル良いし、性格も人懐っこくて明るい。それに誰もが憧れるプロのコーディネーターだから、たくさんのファンがつくのは仕方ないことだろう。

まあ俺はアチャモたんがいればそれだけでテンション上がるから全然魅力に感じないがな。

とうか年上は論外なので俺の心に響かない。アチャモたんのようになってから出直せ。

「とうわけで俺の聖域から出て行ってくれない？」

「何が聖域よ！自宅の部屋に引き籠っているだけでしょう!？」

「引き籠ってない！アチャモたんがバトル嫌いだからバトルできないように匿ってるだけだー！」

「それが引き籠ってるっていうのよ！」

『チャモオ』

「ふわあ！アチャモたんその顔良いね！」

「こら！私の話聞きなさい!!」

ハルカさんうるせー！

アチャモたんが珍しく呆れたような顔でこっち見てるんだから写真一枚ぐらい撮らせろよ！

「もう！私の後輩なら外で活躍したらどうなの！」

「嫌だ！俺はここで一番を目指すんだ!!!」

「パソコンでアチャモたん日記を投稿してるだけでしよう!?!」

「日記じゃない！アチャモたんの魅力を全世界に投稿しているだけだ!!」

「そういうのはコーディネーターとしてプロ活躍してから言いなさい!!」

コーディネーターになりたいという思いはあった。でもそれはポケモンの魅力そのものを最大限に引き出せる場だからこそ思えた夢なだけ。

夢とは淡く消え去る小さな願いのことだと俺は考えている。それに頑固コーディネーターになりたいって言っても、今は自宅からでもコーディネーターもどきのことはできるし。

ハルカさんに頭を叩かれたけど、俺は諦めないぞ！

だつて——。

「アチャモたんはバトル嫌いなんだから仕方ないだろ!!」

そう、アチャモたんは「バトルが大っ嫌いなアチャモ」なのである。走った勢いで頑丈な本棚を壊しちゃうぐらい【やんちゃな性格】なのに、何故かポケモンバトルが苦手。いや、苦手というより大っ嫌い。

そういう厄介な部分があるポケモンを、俺はオダマキ博士からいただくことに成功した。

だから俺は外に出る意味はない。それでオツケー。

「ユウキくんが外に出たくないだけでしょう？嘘つかない方がいいかも！」

「う、嘘なんてついてないし…」

「はいダウト!!!」

ハルカさんが俺の頭を拳でぐりぐり抉ろうとしてくるんだけど、でも俺は諦めないから！

「アチャモたんの魅力がここから世界に広まるなら俺はこれでもいい！自宅で夢を掴んでやるんだから!!」

『チャモオ?』

「ああアチャモたんマジアチャモたん!!俺の嫁になってええ!!!」

『チャツモオ?』

「ふおおおお!!!」

アチャモたん可愛い!マジ俺の嫁可愛い!!

俺の顔を覗き込もうとして上目遣いをする仕草がアチャモたんに似合ってる!可愛い!もう可愛いの代名詞はアチャモたんで決まりだ!

「ああもう…楽に夢を掴めるならそれでいいかも…でも、あなたの夢がただのトレーナーならの話よ!コーデイナーターになりたい夢なら私が先輩として全部教えて上げなきゃなんだから家から出なきゃ絶対駄目!!」

「楽に夢を掴めるならそれでいいっていったじゃんか!!」

「トレーナーだったらの話よ!」

「じゃあ俺トレーナーになる!!」

「ふざけたこと言わないで！あなたはコーディネーターとしての才能があるのに……自宅からコーディネーターになるなんてことは絶対にできないわ!!それにバトル嫌いに關してもトレーナーの腕次第で克服することは可能よ!だから外に出なさい!」

大きな胸を揺らし、それを強調するかのように胸を張ったハルカさんにつこりと笑う。

…けど、それってただ俺を外に出したいだけの話なんじゃないかな
!!!!?

「俺はここから外には一步も出ないからな!自宅でアチャモたんとおごしていくんだ
!」

「…そっつ?」

ボールを掴んだハルカさんが、笑った。

「こういう時は…そうね。サトシのように お は な し しなきやよね？」

ああああ俺の肩掴むなよ！

アチャモたんとここで天国築くんだから俺はここで過ごしたいんだ!!バシャーモ出して脅かすな!ポケモンマスターの名前出すな!!!

「俺は旅になんて出ないぞ!!ここでアチャモたんと一緒に過ごすんだあああ!!!!」

「そういう生意気発言はマサト達のように旅に出てから言う言葉かも!!」

『バツシヤアア!!!』

『チャモオ』

アチャモたんの可愛い声が聞こえたというのに、ハルカさんのせいで台無しだ!!!

第三十五話　謎は謎を呼ぶ

「これから俺とセレナは山を降りる」

「は、はい」

「だからクリス、お前は一人で修行をしている」

「はい………はい？」

クリスが首を傾けたことにニヤリと口角を上げた。それなりに驚かせるであろう計画は成功したと思えたからだ。

チコリータやプリンを両端に座らせ、クリス自身は正座した状態の前に仁王立ちするサトシ。

彼は一つのナイフを彼女の目前にある地面に突き刺した。

「…これからシロガネ山の下降まで一緒に向かう。その後クリスはこのナイフ一本で【ここ】まで帰ってこい」

「え、待つてください。もしかして一人でやらないと駄目なんですか!？」

「そうだ。ポケモンの力を借りずに一人でここまで帰ってこい。そしてチコリータにプリン、お前達はフシギダネ達と特訓な」

『チコオ!』

『プリー』

「無茶ですよ師匠! だってこのシロガネ山にポケモンなしで登るだなんて…」

いくらなんでも無謀だとクリスはぼやく。シロガネ山のポケモンは山の過酷さゆえに力が強く、保護区として人が滅多に来ることの出来ない様々な難所が待ち受ける。

ポケモンの絆がなければ出来ないことを、ナイフだけで成功させると言うサトシの言葉は無謀そのものだとクリスは考えていた。

「じゃあやめるか?」

「っ…それは」

「お前に足りないのはポケモンの絆だけじゃない。その事を学ぶためにこの修行をやるうと思っただが…やりたくないならここで何もせず待つしかないな」

「……」

「やる気がないなら旅に戻るといふ手もあるが。俺としてはここまで頑張ってきたんだから最後まで頑張つてほしいと思つてるぜ」

ふう…と、わざとらしくため息をつくサトシにクリスの頬が引きつる。

もちろんチコリータやプリンも立ち上がつて『大丈夫っすよ!クリスなら出来る!』や『ここで気合いを見せなきゃ女として廃るわよお!』と、応援を見せた。

「…その修行は、私にとつて必要…なんですよね?」

「そうだな。強くなりたいなら必要なことだ」

「…つてやる」

「なんだ?」

「やってやりますよ!!そしてシルバーよりも強くなる!あの野郎をボコボコにするまで私は諦めない!」

『チッコ!』

『プリー!』

拳を振り上げ、高らかに叫ぶクリス達。

その表情に満足げなサトシは、後ろで見物していたゼニガメを呼び寄せ、共にニヤリと悪どい笑みを浮かべる。

ゼニガメがサングラスをかけて笑っているから、犯罪者のようにも見える笑みだろう。

「もしも俺よりも先にゴールしたなら、一つだけ褒美をやるよ」

『ゼニイ』

「褒美を…?」

「ま、それは帰ってからののお楽しみだな!クリスが俺より先に帰れる保証もねえことだし」

『ゼエニ』

「むっ…絶対に帰ってやる！」

『チコリ！』

『プリ！』

頬を膨らませたクリスに内心で笑いながらも、サトシは外へ行く準備を始める。

「…サトシ」

「おう」

「ねえ…この子も連れてく？」

「あぶあく」

『…ニヤ』

近づいてきたセレナの傍には、二つの小さな生き物がいた。一つはセレナの肩に乗っている黒猫のような姿をしたポケモン。そしてもう一つはセレナが愛しそうに抱く赤

ん坊。

その赤ん坊の頬を触り、笑いかけたサトシは首を横に振った。

「帰ってくるまでの間だけ母さんに預かってもらおう…留守番できるよな？」

「あうう」

『ニウ』

.....

「ヤマブキシティは山吹色に染まる大都会ってうちの知ってたか？」

「そうなの？…私は山吹色っていうより、キラキラと夜景が綺麗で光り輝く大都会って印象があったわ」

「ま、確かに光り輝いてはいるな」

「ええ、でも…ミアレと似た感じ…なのかな？」

「シトロンの作ったタワーには負けると思うぜ」

「ふふっ…そうね」

『ピカピカアア』

二人と一匹がいる場所はヤマブキシテイの中心地にあるシルフカンパニー本社入り口近くの路地。

その端っこにて、周りの人の様子を確認しながらセレナと会話をするサトシの様子にピカチュウは居心地悪く肩から降りて地面で伸びをしていた。

「…夜景といえばミアレタワーが一番…なのか？」

「あれは人の手によって作られているから…自然なら、ホウエン地方が一番かな」

「ああ。確かに…前に千年彗星が流れたときもあつたんだが、星の量が半端なくて実際に落ちてきそうだったぞ」

「へえ…じゃあ絶対に見なきや後悔するレベルの景色よね。サトシと一緒に見てみた

かったな」

「じゃ、来世に期待だな」

「…その時は、一緒に見てくれる？」

「夜更かししないならな」

「もちろんよ！」

『ピカピカピカア』

猫のように両手で顔を洗ったピカチュウは、ピクリと尻尾を動かさず、サトシの肩に乗った。

ピカチュウの重さが肩に加わった後、反射的にサトシがシルフカンパニーの入り口から入ろうとする男を見た。

奴の手には銀色に輝くアタッシュケースがあるのも確認。

「…さして」

先程とは違ってピリピリとした緊張感のある空気が二人と一匹にまとわりつく。サトシが帽子を目深にかぶり、ピカチュウの頭を撫でた。

「…準備はいいか？」

「もちろんよ。旦那様」

アタツシユケースを持つ男の後を追うように、サトシとセレナ、そしてピカチュウはシルフカンパニーの中へ入って行ったのだった。

.....

「…ナゾノクサ、とりあえず飛び蹴り」

『ナツゾオ!』

『キュウウ!!?』

全力で飛び蹴りをかましたナゾノクサに、またあちらも全力で避けている。

そして、『何をする!?』とばかりにこちらを涙目で睨みつけ、通常よりもはるかに身体の小さなポケモンにため息をつくヒナ。

涙目で睨みつけても可愛いだけで怖くなんてない。これを見た親ポケモンには怖いけど、きっと大丈夫なはずだとヒナは若干の楽観視をしていた。

まあ、ナゾノクサの飛び蹴りが当たってしまったとしても、ダメージはほぼないだろうからという予想も入ってはいる。

普通ならそんな行動はしないが、若干の戸惑いと混乱があったから仕方ないことだ。

「君、一体どうやってボールに入ったのよ…」

『キュウウ?』

ヒナの身体で抱きしめたらすっぽりと覆い隠せそうなサイズの小さなポケモン。

図鑑で確認しても、やはり通常よりもあり得ないサイズのポケモン。

——本当に、こういうことなのだろうか。

「ルギアが手持ちなんて何があってもおかしくないと思うの……」

そんな言葉を呟いた瞬間、ここよりも遠くにある何処かの島の通常サイズなルギアが小さくしやみを放ったのだった。

カントー地方攻防戦く味方は敵に敵は味方にく
第三十六話くプロローグの終わりく

説明しよう。ルギアというポケモンは伝説の部類に属する珍しいポケモンである。サイズはとても大きく、人を数人余裕で乗せられるぐらいには巨大。

『キュウウウ』

だが、今現在いるこのルギアは本当に小さい。まだ親元から離れきれていない子供ルギアに違いないとヒナは考えていた。

「ううん……この場合ルギアがいるかどうか探した方がいい……よね？」

『グオオ』

『ピッチュ！』

「…空の上から探してみようか」

『ナゾ！』

『キュウウ！』

「もう…君がちやんと帰れるようにしなきゃなんだからね？」

何故かヒナのかぶっている帽子の上に乗ったルギアは、偉そうな顔で『あっち行きたいから行け！』とばかりにヒナたちを誘導し始めたのだった。

「よし、リザードンお願い！」

『グオオオオ！』

——— 少しでも冷たい風が吹いている上空。

ピチューやナゾノクサがりザードンの背中から森の真下を見つめる。

リザードンも飛びながら確認。もちろん私も。

ルギアは：なんかパタパタはしゃいでるからそのまま放っておこうかな。お母さんルギアがいればすぐ分かるだろうし。

というか

「ルギアどころかポケモンの一匹さえ見えないってどういうことなの？」

さつきはオニドリルいたよね？

全員が全員首を傾けている。ルギアは『知らないぞそんなもの！』というかのよう
にふんぞり返っていたけれど、今は偉そうにしている意味はないよ。

『キユウ』

「やっぱり何かがあつた？」

波動での感知も不可能。隠れているというより、何もいないと言った方がいいかも
しれない。

オニドリルが急に襲いかかってくるのも、テリトリーに入ってきたから攻撃したと言
うのなら分かるのに、そのテリトリー内かもしれない場所にオニドリルがいなのはお
かしい。そもそも何故襲いかかってきたのだろう。

『グオオオ！』

リザードンの声に反応し、見えたのは何かの大群。まるで鳥が複数重なってできている生き物のようだと感じる。リザードンに指示をして傍に近寄ってもらい、見てみるとそれはポツポツの群れが形を成して動いているのだと分かった。

ポツポの群れによって起きた風が轟き、小さなルギアが吹き飛ばされそうになるのを抑えるために頭から降ろして抱きかかえる。

「皆、何か違和感があるところがあつたら言つて」

『ツ——』

私の言葉で小さく鳴き声を上げた三体と『仕方ないな』と言うような顔で頷くミニルギアに意識を逸らし、上空を見つめた。

空中を滑空したりザードンが現在いる場所はポツポの群れのだ真ん中だ。上下左右すべてにポツポの姿が見える。所々に数体のピジョンやピジョットの姿も見えていた。

これは絶対に何かある。

「…トラブルが起きてる場所には何かある…よし、ポツポ達と一緒に行ってみよう」
『グオオ』

ここにいってもルギアのお母さんはいないし、探しても見つからない。というか本当に迷子かどうかさえ分からない状況かつボールの中にいつの間にかいたと言う違和感にフラグしか見えないのは仕方ないことだろう。

こんな小さくて偉そうなルギアに会ったことはない。ルギアもなんでボールに入っていたのか分かっていない。だから、何か別の意思によってボールに入ったと考えた方がいい。

私の知らないところで起きた意思だとすると、その先には絶対にトラブルが待ち受けているはず。

何かが起きると言うのは、小さいころから慣れている。…だったら、どうせならトラブルに自ら突っ込めばいいだけの話だ。

.....

とある町にある一軒の飲み屋。

ゴリーキーによって運ばれてくる様々な酒と、ニヤース達の踊りを肴に飲んでいた真つ最中。

俺が頼んだのはキャタピーの絵と〔Reality〕の変なロゴマークが描かれたビールジョッキ。友人が飲んでいるのはニヤースの絵と〔Fake〕のロゴマークが描かれている。

天井の照明は蛍光灯で薄暗く、部屋の奥にあるステージのライトが眩しいくらい明るい。だが高低差があるステージ上のニヤース達の踊りがとても綺麗に見えるため、文句はない。客も皆が「いいぞもつとやれー!」とばかりに野次を飛ばし、調子に乗ったニヤース達からの「ネコにこぼん」が舞い上がった。

「急にぶつ叩かれて襲われたあ?」

「違う!急に家に入り込んできて眠らされたんだよ!!」

「うわそれは……愁傷様」

「うるせークソ野郎!!!」

飲み屋に来た友人の顔は青ざめていた。まるで未確認生命体に遭遇したような顔だ。未確認生命体がポケモンの可能性もあるが、だとしたら友が上機嫌に話していたはずだから、幽霊か何かと出会ったような顔と言った方がいいだろう。

「眠らされたって…もしかしてポケモンを盗まれたり、金をとられたりしたのか?」

「いや、全然何も盗まれていなかった。キュウコンも無事だったし…」

「ああお前の相棒な…確か特性がひでりのキュウコンだったっけ?」

「そう、俺の自慢の相棒だ」

酒を飲み、木の実で作った浅漬けを食べながら話す。周りのざわめきが喧しいが、友人の声もなかなかうるさいので聞き取れない言葉はない。

「何も盗まれてないのに、なんで家で襲われたのかよくわからねーんだよなあ…」

「んー、襲撃受けたんだし…引越したらどうだ？」

「もうとつくにしたつつーの！」

ガシャンツ！、とビールの入ったジョッキを机に置く友人の顔はとても疲れているようだった。

「どうやらあのちよつぱり豪華なマンションからちよつぱりランクが下の家へ移り住んだらしい。かなりお金が必要だったろうに…一応、同情しておく。」

「襲つてきた犯人の特徴とかは？」

「あーつと…確か、真つ黒だったのは覚えてるぞ」

「真つ黒？」

「なんか影みたいな…いや、影というより、闇色の…そう、ゲンガーみたいな色？」

「それ黒じゃなくて紫色じゃねー？」

「いや、黒だったよ」

「んー…」

ゲンガーの色違いか何かだろうか？いや、それならば先ほど考えたように友人が顔を

青ざめるわけではないはず。

「ポケモンの仕業って可能性は？」

「いや、人の声が聞こえてきたような気がするから、多分人間の仕業だと思う……たぶん」

「はつきりと断言できないんだな……」

「急に眠らされたんだぞ！記憶だつてあまりないし……！」

「それ絶対サイコキネシスか何か使われてるって」

「だよな！お前もそう思うよな！」

「おー」

ビールジョッキをおかわりするため、ゴーリキーを呼び出して頼んでおく。その間にも、友人はものすごい勢いでつまみとビールを口に運ぶ。

「……んで、ジュンサーさんに伝えたか？」

「言っただけど、被害はないから事件にはならないって……」

「もう一度言っておく。ご愁傷様」

『リツキー』

「お、サンキュ」

ゴーリキーが運んできたビールジョッキの中身を口に運んだ。冷たいビールが喉を通って胃へと運ばれる快感はたまらない。

その様子をものぐさげに見ていた友人が、ふと思いついたかのように声をかけた。

「そういえば、そのロゴマーク…の、頭文字を見たような気がする」

「んーつと…Realityだから…Rか？でもRのロゴって言ったらロケット団だろ。あの大企業の」

「そう！でも…ちよつとだけ違ったような…んん？」

「お前かなり酔ってんじゃねーの？」

「かもしれない…くつそお！ニヤースたちよ俺に小判をくれ！引越したせいで金が足らないんだよおお！！」

『『ニヤー!!!』』

三匹のニヤースが友人の声を聞いて飛び上がり、『まっかせてー!!』とばかりに小判の雨を降らしていった。

というか、ネコにこぼんの小判つて飲み物代が払えるかどうかの金にしかならなかつたような…まあ、友人が喜んで集めてるからいいか。

.....

「あの女まじむかつく…!!」

『グアア』

「ゾロアークお前そんな顔すんじゃねー!!」

口を^ごごし^ごしと乱暴にふき取りつつ、先程あつたあの出来事を忘れようと努力する。

ゾロアークがニマニマ笑っているのが憎い。あの女がしでかしたことが憎い。初めてだったのにとか、ヒナと同じ顔ですんじやねーとか——乙女が抱くような気持ちになる。

「くそ…くそ…今度会ったら容赦しない…絶対…!!!」

『グアアアツ』

「笑うなゾロアーク!!!」

奴のふさふさした胸部分に一発殴りつける。でもゾロアークは痛みを感じていないらしく、俺の手を掴んで怒るなよと慰めてきた。そんな笑ってる顔してなけりや怒んねーよ馬鹿!

「バトルするぞバトル!それでジム戦な!!」

『グア』

あの真つ白な女に託された話はあったけど、あんなことしなけりやヒナたちに話していたと思う。というか、革命とか関与していないとか意味わかんねえこと言いやがって…あの女本当にむかつく!

「今度会つたらイリユージョンで容赦なく……ん？」

『グアアウ？』

「こんばんは。君のようなトレーナーを待っていたよ」

「は？」

『グアア？』

言われた言葉のあと、奴の目がギラギラ光り輝いて見えた。

「世の中にはノーマルエンドからハッピーエンド……はたまたバッドエンドやメリーバツ

トエンドなどが存在するが——君はどんな終わりが好きなのかな？」

第三十七話　開戦の狼煙は上がらない

それは、突然だった。

建物内にて聞こえてくるのは、赤く点滅するサイレンと緊急事態発生のアナウンス。何かが起きたのかは分からない。気づいたらサイレンが鳴っていた。監視カメラにはなにも写っていないかったというのだ。

「何が起きている!?!」

「侵入者がいること以外分かりません!」

「馬鹿者! それぐらい今起きている警報で分かる! それよりも肝心の侵入者を捕らえることを考えろ!!!」

「は…ハッ！了解しました!!」

男の言葉に駆け出ししていく部下の一人。慌てたように動き出す不甲斐なさに思わず舌打ちを一つ溢した。

監視カメラを写し出すはずのテレビ画面にはノイズしかない。それはつまり、侵入した奴が何処の誰なのか分からないという事実。何が目的なのだろうか。もしも目的が金ならばいくらでも出してやろう。それぐらいの儲けはあるのだから。

だが――

「あれだけはなんとしても守らないと駄目だ!」

拳を握りしめ、カメラの復旧を急がせる男の顔には焦りが浮かんでいた。

彼が見つめる視線の先にある机の上にはばらまかれた書類には、世界で今起きている異常事態が記されていた。その紙の上には一枚の写真がある。

「くそ！……こんなものがなければっ……」

写真に写し出されているものは、色とりどりに光り輝く、宝石のように綺麗で大きな石の塔であった。

その造形や色彩は、ヒナがサトシに連れられてハナダシテイの近くで一度見た物に酷似していることを、唇を噛む男は知らない。

.....

「ピカチュウ、10まんボルト」

『ピッカ!!』

目の前にある閉ざされたシャッターが雷鳴によって叩き壊され、道が開く。

やるべきことはさっさと終えて次にいかなければいけない。そうしないと彼女だけじゃなく、皆を守れないことぐらいわかっているつもりなのだから。

「シルフカンパニーを襲っているのがポケモンマスターだなんて大ニュースになるよな、ピカチュウ」

『ピイカツチュウ…』

いや、ニュースどころか歴史に刻まれるかもしれない大事件だろうとサトシは考えた。なんせポケモンマスターはトレーナーの象徴。皆の代表として選ばれる存在が事件を起こしたなんて世間に知られれば大混乱に陥るかもしれない。

でもシルフカンパニーに襲撃者が来るかもしれないと言ったというのに、奴らが頑なに受け入れ拒否したのが悪い。最後の最後まで見守っていたが結局は襲撃を受けた。だから守らなければいけない機械のために、犯罪まがいのことをしても仕方ないとサト

シは諦めている。もちろんピカチュウも、セキュリティは万全だから大丈夫だと嘲笑った社員たちに怒りを覚えつつ、反対する気にはならなかった。

「さて、そろそろか？」

『ピカア？』

警報が鳴り止むことはない。シルフカンパニーが侵入者を阻もうとしても、内部に入ればこちらのもの。奥への行き方くらいは分かっている。だから最奥のこの場所へ難なく来れた。恐らく奴らもそうだろう。

「新たな発明は次なる最悪を呼び起こす。それはつまり、世界崩壊の幕開けでもある」
『ピツカ』

「それに比べて、俺達が巻き込まれたトラブルなんてまだまだ軽いもんだよなあ？ 拳一つで解決できるんだからさ」

『ピイカ？』

それはどうなんだろう？、と言うかのようにピカチュウの顔が引きつったけど、実際そんなのだから仕方ない。なお、アクロマの件は世界崩壊の危機とは別物として処理しているため、何の問題もないはず。

とりあえずアクロマはうっかり電気を浴びてコイキングの【はねる】で死ねばいい。そう、サトシは心から考えていた。

『つ…ピカピ』

「ああ。分かってる」

タツタツタ——と、足音が何重も聞こえてくる。おそらく複数の人間がここへ来ようとしているのだろう。

サトシがいる部屋のなかには閉ざされた扉が一つと、奥に置いてある大きな機械が一つ。カメラもあるが、どうやら機能していないようだ。おそらく奴らの攻撃によつて壊されたか何か異変が起きたのか。

扉前にて足音が消える。そして数秒のち。

ボタンッ

「よお、待ってたぜ悪党ども」

『ピイカア』

どちらかと言うとサトシの顔の方が悪人面になっていたのだけれど、誰かがそれを言う空気にはならなかった。

サトシとピカチュウの目の前にいる男達は、部屋の中にポケモンマスターがいる現実に驚いていた。一瞬逃げ道を確認するため視線が別の方向を向いたことを理解し、口を開く。

「何で俺がここにいるのか、お前らは分かっているか？」

「……いや」

「なら一つ聞こう。何でこの機械を狙ったんだ？」

サトシとピカチュウが守るようにして立っている機械は、シトロンの発明品の一つであった。否、シトロンの発想とどう使うのかをシルフカンパニー等の会社が共同で開発した試作品にすぎないもの。

試作品だとしても、巨大な力になることをサトシ達は知っていた。

「ポケモン技の増幅装置……下手をすれば関係のない人間やポケモンにまで影響を受ける恐ろしい機械だ。てめえらはこれが狙いなんだろう？」

「……」

「沈黙は肯定と見ておくぜ」

『ピカピカ』

この機械が悪人の手に渡り、自由に使えたとしたら。

例えば、機械が発動中に「さいみんじゅつ」で眠らされたポケモンは、眠気覚ましを飲まされても起きることがない。ポケモンセンターにいつて、専用の薬を飲まされ、一週間で起きることが可能となる。普通なら一日で回復するはずの技だと言うのに。

例えば、機械が発動中に「みらいよち」をしたとしたらどうなるのだろうか。もう結果は決まったも同じだ。技を避けることなんてあり得ない。必ず当たるように攻撃をするその行為はもはや予知を越えた何かになる。

そして、例えば、機械が発動中に「ほろびのうた」を歌われたら——もう分かるだろう、最悪の結末と言うものが。

それらを避けるためにサトシはここにいる。人やポケモンを救うために使う機械が悪用されないよう、守っている。

「お前らを捕まえるのは確定だ。逃げようとすんなよ。痛い目には遭いたくないだろう？」

『ピイカア』

「…チツ。いいだろう。降参するよ」

「リーダー!？」

「アポロ様が言っていただろう。何かに阻まれ、逃げられないと分かれば諦めるしかないとな」

「そうですね…」

「まあそれにしてもだ。よく俺達がここを襲うと分かったな？」

新生ロケット団のリーダーと呼ばれた男が探るようにサトシを見る。サトシはその視線を真正面から受けとめ、につこりと笑った。

「お前らなら分かっているんだろ？」

「ああクソ…分かっているよ…やっぱあれか」

ロケット団の男は何かを思い出すかのように苦い顔で天井を見上げる。

アレはサトシ達に密かに送ってくれた内容。新生ロケット団がこれから何をするのかが書かれた密書。彼女が一人でやってくれたから、サトシは新生ロケット団がこの機械を狙うことを知り、事前に動くことが出来た。

「知っているなら答えろ。彼女は何処だ？」

「…さあな、捕まってるんじゃないのか」

床にあぐらをかいて座る男は不貞腐れた顔で答える。捕まったのなら、助けなければいけない。

世界に異常を起こすかもしれないと考えた彼女の独断で行動したことは自業自得と捉えても良いけれど、潜入捜査としては充分に活動してくれた。だから説教はしない。普通に救い出してやるだけの話だ。

電話を使い、アタツシユケースを追うセレナへかける。数コールの後、聞こえてきたのはセレナの元気な声だ。

「セレナ、アタツシユケースを奪ったら次の準備を頼む。カガリを救い出すぞ」
「分かったわ!」

「ああそれと…あの頑固眼鏡を動かさなきゃな…」

——お気に入りの部下であるカガリが捕まったんなら、あのマツブサの野郎も行動を開始するだろうよ。

.....

誰もいない静かなカフェにて、コーヒーを飲む一人の青年と、ジュースを飲む訝しげな少年がいた。

「いくつか、あなたの魅力をお教えしましょう」

「はあ……」

少年——ヒビキは目の前にいる男に警戒をしていた。いきなり呼び止められて近くのカフェで話でもしようか、ああこちらの奢りだから好きなものを選ぶといい。そう言

われるほどの何かをした覚えはヒビキにはなかった。

もしかしたら、奢る代わりに何か高いものを売ろうとする悪いやつなのだろうか。前に金色のペンキで塗られたコイキングが500円で売られていたという話を聞いたことがあるが、それに似た話をするつもりか。もしものことがあればジュンサーさんにも話をしよう。そうヒビキは考えていたのだ。

目の前にいる男はヒビキに警戒されていることを気にせず、ニコニコと笑顔を絶やさず声を出す。

「まだまだ新人トレーナーであるあなたのことを私たちは気にしていました。もちろんあなたの友人であるヒナさんやシルバーさんもですよ」

「はあ…」

知られていることに驚きはしない。トレーナーとなつて旅をし、バトルをすれば有名になることが当たり前だからだ。

でも一番解せないのは、自分のことを詳しく知りすぎている男。ファンなら分かる

が、ヒビキ自身はまだ新人。何の戦歴もないひよつ子にすぎない。

だから、トレーナーとしてバトルするわけでもなく話をする意味はあるのか？

「あなたの一番の魅力は、そのゾロアークにあります」

「それは、どういう意味だ？」

「あなたのゾロアークは通常の個体よりもイリユージュョンの質が高い。ちよつとしたシヨックでその幻影が解かれるのは欠点ですが、磨けば強くなる」

「はあ…」

つまりはなんだ。ゾロアークを交換してほしいということか？

「あの俺…ゾロアークを手放す気はないっすよ」

「ああいや、ゾロアークを譲り渡して欲しいわけではありませんよ」

「えっと」

「もちろん、交換してほしいわけでもありません」

微笑む彼は言った。

「あなたに少々協力をしてほしいだけの話ですよ。あなたのゾロアークの偉大なイリュージョンを使つてね」

「はい？ええつと…協力つて何すか」

「なあに、ちよつとしたサプライズの話です」

パチンつと指をならした男の背後から、複数の影が飛び出してきた。

.....

ポツポの群れが移動した先に、何やら大きな建物がありました。

「天空の…城みたいなの？」

『ガウウ』

『ピチュウ？』

『ナゾナゾ！』

『キュウウ!!』

「いたたたたつ…落ち着いてミニルギア！」

興奮して私の耳を引つ張るルギアを制止し、ポツポの行く先を見た。

そこに広がるのは、古代の城かと思えるものが雲に隠れつつ浮かんでいる光景。ポツポの群れは違和感のありすぎる城の中庭に入っていく、土の上に降りて羽を休め始めた。

ポツポの群れにつられながら、私はリザードンに指示をして中庭へ向かう。

ポツポたちは私達が来ても何の反応もなく驚くこともない。むしろ来るのが当たり前というかのように、こちらをじつと見つめていた。でも、マサラタウンでよく見ているポツポ達とは違って何の反応もないのだ。人形かと思えるような表情で見つめてくれるだけのポツポたちに何故か寒気がした。

庭は花や草木が生い茂って、よく整えられている。まるでマサラタウンのポケモン研究所にある花畑のようにも見えた。

「何だろぅこゝこゝ…よし皆、ボールに戻って。リザードンはお疲れ様！」

『グオオ！』

『ピチュウウ！』

『ナゾナ！』

『キュウウ』

「君は…ああうん、そのまま外にいるんだね分かったわ」

まあ、ルギアはボールに入っていたからといって自分の手持ちとは呼べないし、命令もできないためここが危険かどうかさえ分からないから念のためにボールに入つてと言つても意味はない。

とりあえず、今はこの場所が何なのか調べてみようかな。

「カントー地方の上空にこんな城が浮いているだなんてお兄ちゃんが知ったらどんな顔するんだろ…」

『キュウウ？』

「ううん、何でもないよミニルギア」

中庭の左通路に大きな扉がある。中に入ることが出来るみたいなので、遠慮なく建物内部へ。

ドスツ——。

「いったあ…！」

誰かに押し倒されたような鈍痛が身体に衝撃を与え、思わず目を閉じてしまう。

「……誰」

「いや、あなたこそ誰!？」

ゆつくりと目を開けて見えたのは、美少女だった。

「…アハハ…まあいいや」

「へ？」

「…手伝え」

「はいい!？」

何を言っているのだろうか目の前にいる美少女は。何故か傷だらけの身体を隠すように、赤ずきんかと思えるフードをかぶって、アハハ、ウフフと笑っている。

小さいし可愛いから、私を押しさえつけているつもりでも、逃げようと思えば逃げれる

程度には力がない。だから警戒するほどの人間には見えないけど、普通の少女かと問われたら疑問に思う。ちよつとだけ、個性的な美少女というべきか。

彼女はこの城の関係者なのだろうか？

「はあはあ……んふふ……」

彼女が私の手を掴んで、口を開いた。

「……ボクには使命がある……やらないと……んっ……はあ」

「使命があるって何？」

「……黙って、手伝え……拒否権はア……ないよ！」

「う、うん……？」

『キュウウ？』

現状を理解していない小さなルギアが押し倒される私と美少女の胸に挟まれつつ、首

を傾けたのだった。

第三十八話く集団に勝るものはないく

「僕はカガリ…ただのカガリだよ…」

「カガリ…さん？」

「うふふ…それより、早く行こう」

「いやどこへ!？」

「あはっ!城の中に決まってるじゃないか!」

カガリがヒナの手を引っ張り、城の中へ行こうとする。ミニルギアはヒナの頭の上で落とされぬよう掴んでおり、『ギャウギャウ』と小さな文句を口にしていた。

そしてカガリは時折傷だらけの身体が痛いのか、うめき声を上げて立ち止まり、何故か恍惚の表情を浮かべて「これは…仕方ないのお…大切なあの人のため…」と頬を赤くしている。その様子にヒナは若干引いていた。

一応怪我の手当てをするかどうかヒナがカガリに向かって聞いていたのだが、カガリは何も言わずに「これは必要な傷：僕の愛なの：」とよく分からないことを言っていたため、手当てをしないという言葉だけを受け取っておいたのだった。

「ええつと…あの、ここつてどこなの？」

「ロケット団のアジトの一つ」

「ロケット団つて…普通の企業の方のロケット団？」

「うふつ…そんなわけないから…」

「じゃあ悪い方のロケット団のアジトつてこと!?でも…じゃああなたは…」

引つ張られていた手を逆に引つ張り、無理やり立ち止まる。

ヒナが警戒しているのは、彼女が悪い方の——新生ロケット団とか言う連中のことだ。彼らの仲間だとしたら、これは罠になるかもしれないと考えていた。もちろん頭の上にいる小さな伝説のこともあるからこそ、ヒナの警戒心は高まる。まああの小さな伝説であるミニルギアは『キュツ』と鳴き声を上げて落ち着いていたが——それでも、懐にあるボールがぐらぐらと揺れ、何かあつたら無理にでも出てやると意気込んでいた。

そんなヒナ達に対して、カガリはただただ微笑んでいる。

「言ったよ。僕は…ただの、カガリだって」

「え？」

「僕はどこにも属していない…僕は、一人…」

「あの…」

「あああ！これは、僕がやらなきゃいけないことつ！あははつ…僕は、一人だけど…それは仕方ないことだから…！」

「ごめんなさいちよつと怖いからやめて。私が悪かったしもう警戒しないからその恍惚の表情止めてよ！」

下手をすればぶっ飛んだアクロマ並みの笑みを浮かべているようにも見える。そして何か闇を抱えているようにも感じたヒナは、とりあえずロケット団の一員じゃないということだけ信じることにした。何かあればその時に考えよう。そう決意し、再び歩き出す。

「……………ここは…ロケット団のアジト…だけど、あはつ？私とあなた以外人はいないから

…放棄されちゃったのかな」

「うえ?!このどでかい城を捨てたの!!?」

「じゃないと見張りか誰か…うん、いるはずだよね…うふ」

「…じゃあなんでこの城は動いてるの?」

「知りたい?」

突然立ち止まったカガリが、ヒナに急接近する。近づいてきたカガリの顔に驚いたミ
ニルギアが飛び上がって翼を何度か広げ、すぐにヒナの頭に落ち着く。

そんなミニルギアのことなど気にしていないのか、カガリがにつこりと笑ってヒナに
向かって大きく口を開いた。

「ねえ、知りたい?何でこの城が動いているのか、知りたい?」

.....

厄日だとシルバーは心から思う。

面白そうな個性を持つゴースを捕まえることに成功はしたが、ヤマブキシテイから外れた場所で開かれているよく分からない集団に巻き込まれたことで機嫌が急降下していたのだ。しかもその集団は宗教にでもものめり込んでいるのかと言うほど、統一した動きを見せている。

ロボットのようにな列で行儀よく動き、止まるときは止まる動きのせいで何度か前や後ろに並んでいる人間にぶつかっても、文句を言われないし、シルバーをいないように扱っているようにも見えた。

それがシルバーの機嫌を損ねる原因となっていたのだ。

その集団から離れようと動いても、前後左右の人間がそれを阻んで逃がそうとしない。まるでディグダの特性であるありじごくに嵌ったヒトカゲのようだ。この場合チルタリスで吹っ飛ばした方がいいのだろうかと一瞬考えはしたが、こいつらはあの新生ロケット団とかいう連中とは違うのだと考えを改める。

そう考えているうちに、集団が急に四散した。というか、何かの集会を開くような形で人々が四方に散っていったのだ。周りを見れば、ヤマブキシテイの中心より少し左の位置にある、道路の中心地であった。突然現れ道を塞ぐ形で立ち止まっている集団に訝しげな表情を浮かべているヤマブキシテイの人間がいることにシルバーは安堵する。

これで行く離れられると思い、後ろを振り向いた。だが、そこにいたのは「やまおとこ」とも言うべき大きな体系をしたおっさん共。そいつらが「どこへ行くんだい？ 集会はまだ始まってもないんだよ？」と言いながらシルバーの肩を掴んでくる。そもそも集会に参加していないと言うのに何を言っているのだろうかこいつらは。

——そう考えていた時だった。

「ああっ！来たぞ!!」

「我らの新たな力！強さの秘訣となるお人！」

周りにいる人間たちがテンションを上げて声高々に叫んだ。誰もが前の方に視線を向けている。そして見えてきたのは、見覚えのある閃光だった。

「ぐっ……！」

シルバーは咄嗟に頬を強く叩き目を塞いで身体を小さく伏せた。直感であの光を見てはいけないと分かっていた。ずっと昔から、学校に通っていた頃からたまに巻き込まれる形で悪戯の対象としてされていた頃の光に酷似していたからこそ、シルバーは絶対に目を開けようとはしなかった。

「強さとは一体何なのか、理解できるか？」

聞こえてきたのは、聞き覚えのある声だった。

「バトルで勝つのは強いモノだけ。そう決めたのは何処のどいつだ？そもそも、弱肉強食とはよく言うが…ポケモンマスターが絶対的な強者とは限らないだろう！俺達だってちゃんとした強さを手に入れることが可能だ！だからこそ、強さには限りがあるとは限らない！俺たちのポケモンにちゃんとした強さが存在しているのなら、俺達の手で育

て上げてみせればいいだろ！バトルで勝つんじゃない、勝負で勝つのみだ！なあ皆、そうは思わないか!!？」

「ああそう思うぜ！」

「私たちのポケモンはちゃんと強くなれるもの！」

集団が少年の声に興奮したかのように賛同するのが聞こえてくる。何処から来たのか、野生のポケモンたちの鳴き声も聞こえてくる。

「強さには定義なんて存在しない！何をやったとしても、勝てば官軍負ければ賊軍だ!!
どんな手を使ったとしても、ポケモンマスターに勝てるのならつまりそいつこそが最強だ!!!」

「そうだぜ！強さなんて制限はねえ！勝てばいいんだよ勝てば！」

「ポケモンマスターに集団で挑んだとしても、俺達が勝てばあの男は最強じゃなくなるってことだ！つまり俺達の勝ちになるんだ！それこそ、俺達是最強になる!!」

ゆつくりと目を開ければ、予想していた悪夢が広がっていた。

少年が両手を広げて、上機嫌な顔で笑って叫ぶのだ。

「皆！俺たちのやるべきことは何だ!？」

《俺達は皆平等に最強なんだってことをポケモンマスターに知らしめる!!》

「そのためには何をすればいい!!？」

《ポケモンを強くする!!》

「そうだ。だからこそ、俺達は俺たちのやるべきことをやろう!!」

《オオ————ツツツツ!!!!!!》

興奮冷めやらぬこの光景は、もはや大パニックと言ってもいいほど異常だった。だからこそ、シルバーは心の底で熱を帯びたかのように怒りが湧き上がっていた。

最初の頃、訝しげに見つめていたはずのヤマブキシテイの人間たちは集団の一人と化している。まるで何かに取りつかれたかのように、奴を見て雄叫びを上げている。野生のポケモンたちも皆、強くなりたいたいとも言おうかのように叫んでいた。咆哮を上げていた。その姿に怒りしかない。

怒りとある種の失望を抱いて、シルバーはモンスターボールを一つ放った。放たれたチルタリスが警戒の声を上げ、奴を睨む。いや、奴というより、奴の後ろにいるポケモンを睨んでいる。

あいつは今、何を言った？

何でここに居るんだ？

「ヒビキ!!」

「んー？何だよシルバー。お前もこっちに來てたのか。あ、違うか。俺たちが呼んだん

だったな」

「っ…おい貴様、何をやったのか分かっているのか!？」

「普通に強さについて皆に話していただけだぞ?なあ皆!」

ヒビキの声に賛同し、拍手を送る者がいる。ポケモンたちがそれぞれヒビキを味方だ
というかのような仕草をとり、鳴き声を上げる者がいる。

これは何だ。イリユージョンというのは、ただ幻影をみせるだけのはずだろう。こん
なのがイリユージョンなはずはない。

もしかしてこれは、イリユージョンがもたらした悪夢か?

いや、イリユージョンに慣れているチルタリスならばこれが幻影だとしたらすぐさま
反応し、何かしらの抵抗をするはずだ。それに幻影の中にいるような直感は働かない。
だからこれは、現実なんだろう。

現実でヒビキは皆に何かを仕掛けた。だから、皆が変になっている。おかしくなっ
ている。

ヒビキ自身もおかしいと思ったが、それならば奴の態度か何かが変わるはずだ。だが
変わらない。学校時代から共に過ごしてきたシルバーだからこそ、奴が本心からこの所
業をやっているように感じたのだ。

「そういえば貴様はポケモンタワーの時から様子がおかしかったな。もしやその時から【こう】なりたいたいと心に決めていたのか?…ヒビキ、お前は悪に染まる気か?」

「はあ? 何言ってるんだよシルバー! 俺は悪になんか染まらねーっての!」

「じゃあ今やってるこれは何だ。貴様の後ろにいる連中は、誰なんだ」

ヒビキの後ろにいるのは、黒一色の服を着ている男達。そいつらは何も表情が変わらない。だがこちらが敵対するのならすぐ抵抗しようとするのだろう。その証拠に彼らの手にはモンスターボールが握られていた。

そいつらの服は見覚えがあった。

主に船で見た、抹殺すべき対象だ。

「……ヒビキ、お前…悪しきロケット団に入るつもりか? 悪に染まらないと言うのなら、今お前がやっていることは何だ!!?」

「……なあシルバー。悪って何を定義すれば悪になるんだろうな」

急に何かを言い始めたヒビキにシルバーが眉をひそめる。

「悪は悪だろう」

「違う。悪なんて皆がそう思えば悪に染まるだろ？野生のポケモンが物を盗んで捕まったりとして、腹が空いていたから仕方なく物を盗んだという事情で皆が可哀そうだと言いい、悪じゃないと言えば悪じゃなくなる。逆に、皆が悪だと言えば悪になる！——
なあシルバー、今俺がやっていることは悪か？」

ヒビキだけじゃなく、黒服の男たちや周りに集まっている観客たちがシルバーを見つめている。

じつと見つめている目が並ぶ。目だけじゃない、その雰囲気も、シルバーだけを排除するような空気へ変わっていった。これは悪なんかじゃないと、皆がそう言い出そうと

している。この集団の中で唯一の敵はシルバーなのだ、皆がそう沈黙の中言っている。

チルタリスが集団の庄に押されて少々後ろに引き下がるが、シルバーは止まらない。むしろ怒りで燃え上がっていた。

「貴様が堕ちる気なら、こちらは容赦しない。たとえ世界で俺以外の連中がこの場を悪じゃないと叫んだとしても、俺はこれを悪だと叫ぶ!!ヒビキ、お前には失望したぞ!!だからこそ、敵として貴様をぶっ潰す!!」

「ははっ!やれるもんならやってみろよ!なあ、みんな!!」

観客や黒服の男達、そしてヒビキの手に持っていたモンスターボールが、次々と投げられた。

第三十九話　愛に勝るものはない

カガリの手によつて連れてこられた場所は、大聖堂のような大きい一室であつた。高い天井には透明なステンドグラスが使われているのか、青空がはつきりと映つており、時折ポツポが空を飛んでいる様子が見える。

両脇の壁には本棚が置かれており、天井付近の本が届くようにと梯子が設置されていた。

ヒナは部屋の中心にある大きな機械を目にした。機械は歯車や大きなネジが丸見えで、かなり大がかりな作りとなつているのがよく分かる。そのてっぺんには、コイルのような形をしているものがホエルオーほどの大ききさで取り付けられていた。

その何なのかよく分からない機械に、ヒナは困惑する。

「……これは？」

「これこそが強さの証。強さの証明となる…原点…うふふ…」

「強さの原点？どうということなの？」

「やってみれば分かる…あはっ！」

そう言ったカガリが機械のスイッチを押す。すると、コイルのような形をした部分から大きな音が鳴り響きだした。ポケモン技にある「いやなおと」のように、酷く不快かつ不協和音にも似た、耳障りな音がヒナと頭の上に乗っているミニルギアに襲いかかった。

「ぐっ…なに…っう…」

「大丈夫う！あはは…すぐに、気持ちよくなるから…ね？」

あははっ、と笑うカガリが機械の出力をフルパワーにし出す。耳を塞いだヒナと両腕の翼で顔を埋めたミニルギアだったが、音は止まらない。

膝を地面につけ、息を大きく荒げているヒナがやがて両手を耳から離れた。その振動によつてミニルギアが地面に転がり落ちてしまうが、ヒナは何も反応しない。

その瞬間をカガリは待っていた。

「あはっ！これで君は…あの人の物…うふふ…」

恍惚の表情を浮かべたカガリが機械のスイッチを切り、顔を俯けているヒナの頭を撫でた。だが、ヒナは撫でられても何も反応をしない。

その反応こそ、機械がちゃんと動き、成功した証だとカガリは分かっていた。

「これで…あの人の…あは…褒めてもらえる…！」

『ギヤウウ!!』

「ああ、そういうえば…君はポケモンだから…この機械は通用しない…んだね」

『キュツ…』

「うふふっ…何が起きたって顔してるう…君のご主人様はねえ、この機械で…絶対君主となるべき大切なお方のために働けるよう導いてくれるの！」

『ギャっ!』

ミニルギアは先ほどまでの不快な音に物理的に嫌がっていたが、ヒナがこの音のせいで精神的に何かが起きたことを理解した。導くと言う言葉と、あの人の物という言葉により——カガリが敵なのだと理解する。

身体をぶわりと大きく見せて、歯をギリリと鳴らし、精一杯の威嚇行為をするミニルギアにカガリは何の抵抗もなく近づく。

「珍しいポケモン…なら、あの人のために…あはははっ」

『ギャウ…!!』

ミニルギアが後ずさりをするが、カガリは一步一步前へ出て捕まえようとする。恍惚の表情を浮かべて、頬を赤らめ機嫌のいい顔でミニルギアに手を伸ばした——

「悪いけど、それは駄目だよ」

伸ばされた手を振り払い、ミニルギアを優しく抱える人影があった。

それは、先程機械に洗脳されたと思われたヒナであった。ヒナはカガリのことを睨みつけ、大きく一步後ろに下がりがり体勢を整える。

「っ!?!…何で…機械はちゃんと動いていたはずなのに…!」

「私は前に一度洗脳にかかったことがあるの!だからもう二度と洗脳にかからないし、リザードン達を悲しませないって誓ってるから絶対に精神を乗っ取らせたりはしない!!」

『ギャウ!』

ヒナが手にしたボールの中から、鋭い殺気がカガリに伝わる。熱と電気が入り混じったかのような殺気だ。それ以外にも暴れたそうなポケモンも感じ取れたが、それでも彼女は笑っていた。

「あははっ…これで失敗…うん失敗なんかじゃない…これは偶然起きたことだから…だからあの人に叱られるはしない。大丈夫…」

「あの人って誰!?!あなたはやっぱりロケット団の仲間なの!?!」

「僕はロケット団なんかの一員じゃないよ。あの方は…あれ?」

カガリが不意に無表情になり、首を傾けた。

「あの人って誰だっけ？一番大切で、守らなくちゃいけないくて…それで、夢を叶えるために支えていた大切なあの人…誰？ねえ、誰だっけ…だれ？」

「お、覚えてないの？なら、何でこんな場所にいるのよ！」

「…この場所にいるのは、守らなくちゃいけないから。ここを守って、侵入者は導くか—

——排除するかのどちらか」

「っ！」

「だから、さようなら」

カガリが取り出した胸元のポケットから出てきたのは、小さなスイッチ。それをポチッと押しした瞬間、ヒナとミニルギアのいた真下の床が開いて空へ落下していった。

「んなあああああああああッ」

!!!!!!???

るため、電撃か物理攻撃を加えていき全て倒してから向かっているため非常に時間がかかっている。そのせいでサトシの背後には屍が点々と倒れている少々悲惨な光景があった。

「サトシ!!」

先を進んでいるサトシとピカチュウの目の前に現れたのは、セレナであった。

セレナがサトシに抱きつき、怪我がないかどうか無事を確認している。

「セレナ、平気だったか?」

『ピツカア?』

「ええ、私は大丈夫よ。それよりもこれ!」

「ああ、良かった」

目前まで持ち上げたアタッシュケースを受け取ろうとした瞬間だった。

急にセレナが後ろに二歩ほど下がりがり、そのアタッシュケースを背に隠してしまったのだ。

「セレナ……？」

「サトシ、これはあの人にあげないと駄目なものなんだよ。だから私は、これをサトシにあげられない」

「……………」

「ごめんねサトシ。でもあの人ならサトシのことも受け入れてくれるはずだから」

「そうか」

『ピカ』

セレナの様子がおかしい。

それだけじゃない、サトシにアタツシユケースを渡さず、あの人にあげないといけな
いと言うセレナの言動に不可思議な点が見られた。サトシが「あの人」とやらを知って
いるかのように話すセレナはまるでゾロアークのイリユージョンに引っかけたかと思
えるほど偽物のように感じられるというのに、その姿も感情も——そしてサトシ
とピカチュウ自身の直感から、これは全部本当の事なのだと理解する。

「…一つ聞くんが、俺達の娘の名前は何だ？」

「ミヅキでしよう?」

「ミヅキは何処からやってきた?」

「シロガネ山に捨てられていたところを私たちが拾って養子として育ててるでしょ?…大丈夫よ、あの子もまだ幼いけれど、いつかはあの人のために強く支えることのできる人間になってくれるはず」

「はあ…なるほどつまりはアクロマの野郎の仕業ってことか」

『ピカチュウ?』

アクロマの奴がセレナに何かしたとは限らないんじゃないかとピカチュウは疑問に思ったが、人を———というか、サトシの妹であるヒナを洗脳させたことがあるアクロマならば間接的にサトシに関わろうとしてくるかもという疑問もあった。

とにかく、セレナの様子がおかしいことは分かった。毎日見ている笑みを浮かべて頬を上気させつつも、「あの人のためだよ?」というのはおかしい。ピカチュウだけでなくサトシの手持ちたちもボールの内側から見て全員同じことを思った。サトシを第一優先しないセレナなんてセレナじゃないと。

「セレナ。あの人ってどこにいるんだ?何処に行けば会える?」

「大丈夫。すぐに来るよ」

「へえ。そっか」

「うん…ほら、友達も皆来たからね？」

セレナがどこかを指差しサトシに見せたのは、手を広げて元気いっぱい走ってやってくるカスミたちの姿であった。

「やつほーサトシ！やつぱりこんなところにいたのね！しかもあの人の邪魔をして!!」

「……一応憶測だか…あの人ってアポロのことか？」

「会えば分かるよ。そして理解できる」

「新手の宗教の勧誘かよてめえら。ってかシゲルお前里帰りしてきてるって聞いたけど何やってんだゴラ」

『ピッカー!!』

「ははっ、何をやってるかって?…君が素直にあの人のことを受け入れるとは限らないからね。だからこそ、僕たちがここに来たんだ」

「そうかよ」

「大丈夫よサトシ。私も最初は嫌な奴だつて思つてたけど、全然そうじゃなかつたんだからね！」

「…カスミ、ジムはどうしたんだ？」

「ジムなら今は閉鎖中よ。一度水中ショーをあの人が見て気に入ってくれてね。私達全員であの人のためにショーをしてる最中なの」

「へええ？」

『ピ、ピカ…』

言動の節々から感じられる事の重大さにピカチュウは絶句した。もちろんボールの中に入っている手持ちのポケモンたちもだ。

そして、以前ハナダシティに行ったときはカスミは普通だったはずだとサトシは眉をひそめた。

カスミ以外にも、現役のジムリーダーが何人かいて、彼らに手を出した連中の犯罪の規模を察した。セレナだけでなくこいつらまでもが洗脳されていると言うことは、町中の人間たちもやられている可能性が高い。下手をすればヒナも何か巻き込まれている可能性があるだろう。

数年前に起きたあのアクロマの洗脳によつて機械人形のように動いたヒナの光景が目には浮かぶようだと言つたサトシはため息をつく。その状況よりもこれは圧倒的に酷いだろう。なんせ表情も感情もすべてがいつもと変わらないからだ。言動は全然違うけど、接している雰囲気だけでまるで同じだと錯覚する。

———そんな時だった。

不意に皆が両端に移動し、誰かが中心からこちらへやって来る。その姿は黒服を着て少々猫背のおつさんであつた。

「やあ、久しぶりだな。ポケモンマスター」

「……お前は……誰だ？」

「ぐっ！俺はラムダだ！これでも新生ロケット団の幹部なんだぞ！」

「いや雑魚っぽいだろ。しかもご丁寧に俺に殴られるために来てくれたんだな？まあいいけど、さしてピカチュウ」

『ピッカー！』

「いやいや待って待って！人質の数をしろ！ポケモンマスターがうかつに攻撃なんてできるはずないだろ!!」

人質という物騒な言葉をラムダが叫んだとしても、セレナたちは何も反応しない。むしろ当然だと言うかのように、ラムダと並んで手助けをしようとボールを掴んでいる。その姿はまさしく【重症】であつた。

「なあ知ってるか？叩いたら大体の物は直るんだぜ？」

「はい？」

「なら、生き物に対しても——殴れば復活するんじゃないかあ、あ？」

『ピツカツチュ！』

「ヒツ……！」

冷や汗をかき慌てはじめるラムダの姿は小悪党そのもの。セレナたちを洗脳し操っているようには見えない。むしろそのセレナたちに「大丈夫ですよ！私たちが支えます

「いや俺達がサトシを食い止めるからあわてないでくれ！」と慰められている様子はまさにシニールそのものだ。

「お、おお前には嫁がいるだろう!!ほらここに、お前の嫁がいるぞ!!こいつがどうなってもいいのか!？」

「ああ?」

「あーんなことやそーんなことを目の前でさせちゃうぞ!今の俺なら何でも可能だぞ!それでもいいのか!？」

「……………チツ」

握りしめていた拳を降ろしたサトシにラムダが安堵をついた時だった。

「セレナ!!!俺のことを愛してるならそのおっさんなんかより俺を優先しろ!!!」

「サトシ…」

「優先しないなら俺のことが嫌いなんだと判断するぞ——」

「そんなわけないじゃないサトシ愛してるツツツ

!!!!!!!」

両腕を広げたサトシに突進し、思いっきり抱きしめたセレナ。サトシを精一杯抱きしめてもらいたかったのか、手に持っていたアタッシュケースを先程までセレナの隣にいたカツラの顔面にぶつけてしまう勢いで投げたのはただけなかったが、まあ良しとしよう。

そう思いつつ、セレナの頭を撫でるサトシにピカチュウがため息をついた。

「サトシ……」

「大丈夫かセレナ」

「え、あれ……私なにやって……」

「セレナ、お前が第一優先するのは誰だ？」

「もちろんサトシに決まってるでしょう！」

「じゃあその次は？」

「私たちの娘よ！」

「よし、戻ったな」

「え？何の話…？」

『ピカチュウ…』

愛の力って怖い。

ピカチュウは寒気で鳥肌ならぬ鼠肌を立てたが、それを押さえるかのように小さく電気を放った。

「なっ…無理やり洗脳を断ち切っただと…そんな馬鹿なことがあるか!!!」

「馬鹿なことをやり遂げるのが絆の力だ。どんな形でもな」

ニヤリと笑ったサトシの表情は、まさしく恐怖そのもの。

ラムダは焦り、サトシとピカチュウ、そして何が何だかよく分かっていないセレナに

向かって指差した。

「あいつらを捕まえろ!! 我らの祈願の為にも!!!」

《ああッ!!!》

「え? 何? どういうことなの?」

「あいつらはただの敵だよセレナ。…そんなもって、捻じ曲がった精神をぶん殴って治さなきゃいけない奴らでもあるんだ」

『ピイカツチュ』

「敵…分かったわ」

「ああ。さて、暴れるとするか!」

『ピッカー!』

サトシが一度拳を鳴らした瞬間、彼の背後の——ヤマブキシテイより町はずれの方で破壊光線の閃光が空高く打ちあがった。

第四十話～現状確認をしようか～

電撃と雷光が宙を舞い、激突し黒煙を発生させていく。熱が地面や木々を焦がし、雲を突き抜ける大きな閃光が舞い上がる。時折地面が揺れ動き、野生の鳥ポケモンたちが恐怖のあまり逃げていくハイレベルなバトルの数々。

それらすべてをラムダは見ていたのだ。

「ハッ……これが最強ということか」

ぞくりと震える身体に鞭打つように、今起きている光景を全て目に刻もうと瞬きを少なくする。

カスミたちは全員こちらの洗脳により、都合のいい駒として働いてくれているため、どんな言動をしたとしても絶対的味方として活躍してくれる。ちゃんとこちらを守つ

てくれる。

あのポケモンマスターの嫁に関しては計算外にも洗脳から解放されてしまったが、それでも熟練のトレーナーやジムリーダー、そしてポケモンマスターの幼馴染でありライバルだと明言するシゲルがいる。それとは対照的に、サトシだけですべてのポケモンに対応し、多数V S I になったとしても差はない状況。これこそが最強であるポケモンマスターの証明なのだと言うかのように、カスミたちに電撃一つで対応しているのだ。しかもピカチュウが劣勢になるか何かが起きればすぐさま懐にあるボールで対応するだろう。つまり、まだまだサトシにはいくつか戦うための手が残されていると言うことだ。そして、セレナのニンフィアによるサポートもあるせいで戦いは均衡していた。

圧倒的な数の戦力がこちらにはあると言うのに、やはりポケモンマスターは別格か。

「くっ……ここでポケモンマスターをこちらの手に収めればカントーとジョウトを全てこちらの物にできるといふのに……！」

先程、ある特殊な洗脳をヤマブキシテイ内で行ったという連絡を貰っていたため、ラムダはそれに引つかからなかったサトシに戸惑いと苛立ちを持っていたのだ。もしかしたら、あの洗脳の光を見ていなかったからかもしれない。それともやはりポケモンマ

スターだから洗脳が効かないと言うことなのか…!?

そう思っていた瞬間、ピカチュウの雷撃がラムダの頬を掠り、後ろの大木を焼け焦がす。ピカチュウとサトシがこちらをじっと見ていることに気づいた。お前さえ倒せばこいつらの洗脳をどうにかできるはずだろ？、と言われているように感じ、冷や汗が流れ出た。

このままでは、やられてしまう…!!!

「すみません遅れました!!」

「ぐっ…いや、いいタイミングだ!!」

背後から飛び出してきたのは黒と黄色がアクセントの帽子をかぶった少年とゾロアーク。そいつはロケット団の洗脳の枢となる少年であった。これでポケモンマスターを洗脳することができるかと一瞬高揚したラムダであったが、それよりも背後から「ヒビキイイイイイツツ!!!」や『チルウウウウウツ!!!』という鬼をも殺しそうな鋭い殺気を放つ少年とチルタリスが来たことよって計画を瞬時に切り替えた。

ポケモンマスターの嫁が先程洗脳から無理やり解放された件もある。無理やりやることはないだろう。まだ他にやるべきことがあるのだから。

そう考え、大きく口を開いた。

「おいポケモンマスター！ここはいつたん引いてやる！！だが今度会った時はお前を必ず洗脳し、俺達の部下にさせてこき使ってやるから覚悟しとけよ！！」

「そういうのを負け犬の遠吠えっていうんじゃないのかよおい」

『ピツカ』

「サトシの言う通りね」

『ファイア』

「う、うるせえ!!よし行くぞ!!」

「ウイツス！やるぞゾロアーク!!!」

『ガアア!!!』

瞬間、ゾロアークの目が光り、大きな闇が広がり始めた。

.....

町で襲いかかってきた人間やポケモンたちは無理やり倒した。邪魔してくる連中は皆ぶつ潰して、ようやくヒビキの目を覚まさせるために動くことができる。

どこかへ向かって行くヒビキを追って、チルタリスと共に走り出したと言うのに、なんだこの闇は!! またあいつのイリユージョンか!!

「くそがッ! チルタリス、はかいこうせん!!」

『チルルウ!!』

はかいこうせんを放ったチルタリスの姿が見えないほどの暗闇が広がっていたが、聞こえてきた大きな騒音と破壊音によって何かにぶち当たったことに気が付く。ヒビキに当たっていればなお良し。他の連中に当たっていたとしたら、運が悪いと言うだけにしておこう。俺の邪魔をした連中が悪いんだ。

だが、見えてきたのは鋭くて大きな雷光であった。

「なっ?! チルタリス!!!」
『チルツ!』

どうやらイリユージョンが解除されたらしい。見えたのはなぎ倒された大木と少々破壊されている家。そしてチルタリスのはかいこうせんを防御するためだけに使われた10まんボルトがチルタリスに掠った光景が広がっていた。

ただ10まんボルトに掠ったただけだというのに、ビリビリと身体に痺れを受けたチルタリスが地面に伏せる。相棒として強く育成し、共に育ってきたチルタリスに対して、ただ掠っただけの電撃にこんなにもダメージを受けるだなんてと呆然としたが、その10まんボルトを放ったポケモンと、そのマスターである人間を見て納得した。

「むしろまひ状態と重傷になっただけで済んで良かったと思えるほどだろう。そう思い、クラブの実とオボンの実をチルタリスに渡しつつ、話しかけた。

「…お久しぶりですサトシさん」

「ああ、お前は確かロケット団の…」

「はい。シルバーです。父上がお世話になっております」

「いや、気にすんな。それよりも大丈夫か? そのチルタリスの様子…俺のせいだよな、悪

「い

「いえ、俺もはかいこうせんを全力で撃ちましたし……それより、あのヒビキの野郎は何処に行つたのか分かりますか？ 帽子とゴーグルをつけた男なんです……」

そう質問すると、サトシさんは隣にいた女性を見てからこちらへ向き、首を横に振つた。

くつ、やはりあの時のイリユージュオンで逃げやがったか。

「あの……ポケモンマスターが何故ここに？ やはりあの新生ロケット団とか言う連中を追うためですか？」

「ああ。そうだけど。そう言うつてことは……お前は大丈夫な方なんだな」

「大丈夫な方とは？」

「それは——」

「——お兄ちゃん！」

『ガウウ！』

「あ、ヒナちゃん！」

『フィア！』

サトシさんの声を遮るように聞こえてきた大きな声。上空に大きな影が生まれたため、よく見ればそこにはリザードンの背に乗っているヒナの姿があった。

そんなヒナを笑顔で迎えたのがサトシさんの隣にいた女性であり、サトシさんは少しだけ安堵しているように見えた。

「良かった…シルバーもいるんだね…」

「ああそうだがおい待てその帽子の上にいるポケモンはまさかのルギアか!? どうやって捕まえた!!」

「うわ気づいた!? ごめん私もよく分からないうちにボールの中にいたからわかんない!!」

『ギャウ!』

「伝説ポケモン捕まえたのか。今日はお祝いだな」

『ピッカー!』

「ふふっ。じゃあ赤飯炊いておかないとね！」

『ファイアア!』

「ねえ待って分かんないうちに捕まったって言うてるでしょ!?!だから赤飯とかいらねーしミニルギアが私のポケモンとは限らないからね!!」

『ギャウウ!?!』

「おいそのルギアものすごくショック受けてるぞ」

『チル』

「うわ傷つけるようなこと言っでごめんなさいルギア!…つというかさっきのあの大き
なはいこうせんってシルバーだったんだよね?そっちこそ何かあったの?」

「何だ、見ていたのか?」

「ちよつといろいろとあつて飛んでいた時に急に見えたからね…だから何かあったのか
と思つて気になつて…」

「いろいろあつたつてどういうことだ?そのルギアが関わつてるのか?」

サトシさんがヒナの言葉に食いかかる。それに乾いた笑みを浮かべたヒナがリザードンと顔を見合わせた。リザードンはクラボの実とオボンの実を食べているチルタリスの横に立ち、先程まで広げていた翼をしまいながらも困った顔をしている。何を言え
ばいいのか分からないようだ。

「……ねえ、話が長くなるようなら落ち着いた場所で話さない？ ポケモンたちも傷ついていることだし……ね？」

『フィア』

.....

「おい、今なんて言った？」

『ピイカッチュ？』

ヒナ達が向かった先はヤマブキシテイのポケモンセンターだったのだが、その様子はおかしかった。

こちらを見る目は排他的であり、妙な威圧感が存在していた。通常のポケモンセンターの中はリラックスでできるようにと常に音楽が流れているはずだったが、今ここに居るポケモンセンターは無音。

優しく出迎えてくれるはずのジョーイとラッキーは真顔で、その中にいるトレーナー

たちもこちらを観察しているような顔でじっと見つめていた。

そんな中、サトシとピカチュウは額に小さな青筋を浮かべながらも口を開く。どうやら相当怒っているらしく、ピカチュウの赤い頬から電気がバチバチと放たれ、それを見たヒナがミニルギアを抱きしめながらもそつと後ろへ後退した。

「もう一度聞くぞ。今、何て言ったんだ？」

『ピイカ』

「お帰りくださいと言いました。あのお方の邪魔をすると言うのなら、私たちは容赦しません」

『ラツキー』

「ほおお？それはそれは面白えな。この俺に対して、宣戦布告をするということか」

『ピイカツチュ』

「お帰りください。ここはポケモンを回復させる場所。ですがあなたたちのようなトレーナーと、そのポケモンを回復する意味はありません。ですので、何を言われようとも…何をされようとも私たちはあなた達を助ける意味はありませんよ」

『ラツキー』

こちらが邪魔をすれば必ず攻撃を仕掛けてやると言う意気込みを感じた。ポケモンセンターにいる全員が、公共機関としてのトレーナーが使用できるはずのもの全てを利用するなど言っているのだ。シルバーはそれに眉をひそめて舌打ちをし、ヒナはミニルギアに何かされないようギュツと胸に抱きしめた。

物理的に目を覚まさせようと思っていたサトシだったが、ポケモンセンターには何体かの重傷ポケモンが必ずいるはずだと思い直し、セレナの手を掴み建物内から出ることに決めた。無理やり連中の洗脳を解くことならできると思うが、それによってポケモンセンターの中にいる重傷のポケモンに何かあつてはまずいだらう。

「…とにかく、話せる場所を探そう」

『ピッカ』

「それなら、このヤマブキシティはまずいと思います。先ほどヒビキの奴が新生ロケット団の奴らと一緒に何かをしているのを見ましたから」

「え、どういうことなの!? ヒビキが…新生ロケット団と一緒に…」

「あの野郎は裏切ったんだ。新生ロケット団と仲良くして…チツ!!」

「いや、そのヒビキも…おそらく洗脳されてるんだらう」

「洗脳って…もしかして私がさつき記憶を失ってたあれのこと?」

「ああそうだセレナ。お前も洗脳にかかって新生ロケット団の奴らと仲間になってたんだ」

その言葉にヒナとシルバーが愕然とし、やがて何か納得できたような表情になる。

「じゃあ…あのカガリって子も…」

「は？おいヒナ今なんて——」

——瞬間、大きな閃光が襲いかかってきた。

第四十一話　現状は悪化中

シロガネ山の頂上付近。傷だらけになり、太い木の枝を使って杖代わりにして山を登りきった少女がそこにいた。

「や、やっと…着い…たっ!!」

『ダネツ』

『チコオオ!!』

『プリッ!』

少女が倒れたまさにその時、フシギダネがつるのムチでチコリータとプリンが吹き飛ばされ、少女の腹に落ちていく。ぶつかかった衝撃でうめき声を上げた少女であったが、チコリータとプリンが己のポケモンだと気づき、優しく撫でていった。

「お疲れさま…チコリータ、プリン…私は頑張ったぞ。お前たちも頑張ったんだろう…？」

『チ、チコリ…』

『プウリ…』

ナイフ一本だけでここまで来るのに、少女——クリスはため息をついて先程までの苦行を思い出していた。

野生のポケモンたちには追われるわ、崖に落ちそうになるわで本当に死ぬかと思つた。だが、確実にヤバいと言う局面では必ずファイアローやムクホークなどといった鳥ポケモンたちが助けてくれたため、自分一人でできること以外は手を貸そうとはしないのだろうとクリスは理解していた。この山を登りきるのは自分自身の力のみ。命に係わる事故などが起きないように見張りはしていたけれど、大体は見守っていてくれたのだ。

だからクリスは必ずやりきつてやろうと気合を入れて登りきつた。

ナイフに関しては、きのみを取り食べる際に使っていたが、それ以外は使用しなかつた。ナイフは食事だけにしか使わない。ポケモンを傷つけるために使うようなものな

んじゃないと登っている時に分かったのだ。まあ最初は走ってくるケンタロスの群れに対して恐怖でナイフを装備しかけたけれど、そのせいで余計に興奮したケンタロスによって吹き飛ばされたのは今となってはいい思い出であろう。

クリスは苦笑し、遠い目をしてながら青空を見上げた。

「強くなる。強くなって見返してやる!!」

『チッコ!』

『プリ!』

『ダネダネ…』

一人と二匹が意気込みを口に出しているのを見て、フシギダネは小さく苦笑し…そして柔らかく微笑んだ。

———そんな時だった。

「お、久しぶりだなフシギダネ！…サトシは来てないのか？」

『ダネ!?!』

手を上げて爽やかに笑う青年にフシギダネは驚き近づいて行つた。もちろんフシギダネだけでなく、クリス達を見守っていたはずのサトシのポケモンたちもだ。

「…誰だ貴様は」

「ああ、俺はタケシ！これでもポケモンドクターなんだ！」

「はあ。そのポケモンドクターが何故こちらに…？」

『チコリ?!』

「いやいや、ちょっとしたサプライズだよ」

——そう言った瞬間、大きな機械が上空から出現し、眩しくて目を開けてもらえないほどの閃光が襲いかかってきた。

.....

あはははは、私何をやらなきゃいけないんだっけ？

あーそうだよねりザードン。私はあの人のために戦わなくちゃいけないんだー

あの人って誰だっけ？やらなきゃいけないこと…

あ、そうだ。私はあの人を支えられるようなトレーナーになって強くななきゃいけないんだよね

どんなバトルにも対応できるような強さを持ったトレーナーにならないとねー

だから、強くないと

強くなってポケモンを皆進化させていっぱいいっぱい勝っていったくさんのポケモンを集めてあの人のために戦わないといけないんだよ

私はあの人のために

あれ、あの人って誰だっけ？

「ピカチュウ、10まんボルト！」
『ピイカツチュウウウウツツ』
!!!!!!

「いだだだだだっつっつ！！！！」

大きな雷撃とともに頭がはつきりと目覚める。

少々髪が焦げて身体中が痺れてしまったが、おかげではつきりと視界がクリアになった。

私は今何を考えていた？何をしようとしていたの？

「お、お兄ちゃん…?」

周りを見ると、私と同じように地面に座り込んでいるシルバーとセレナさん。そしてちよつとだけダメージを負ったりザードンとチルタリスとミニルギア、そしてニンフィアがいた。どうやらピカチュウが相当な手加減をしていたらしい。

そのピカチュウも何故か頭に大きなたんこぶがあるんだけど…何やったのお兄ちゃん…。

というか、兄だけが仁王立ちしているんだけど何で無傷なの？

「頭は大丈夫かお前ら」

『ピイカ』

「え、ええ…大丈夫よサトシ」

『ファイア』

「電撃でちよつと痛い思いしたけど…一応大丈夫」

『ガウウ』

『…ギヤウ』

「……………くつ…今のは…」

『チル…』

「洗脳だよ。俺以外の皆が、『あの人のため』とか口走ってたんだよ。だからまず先にピカチュウの目を覚まさせるために拳骨落としてから電撃を放ってシヨックを受けさせたんだ」

洗脳と言われてゾツとした。

カガリと一緒にいた城で洗脳をされた時には、頭がボーっとした程度で済んだと言うのに、今の洗脳の強制力はものすごく強かった。何も考えられなくなるほど…いや、新生ロケット団のために働かなければならないということしか考えられなくなるほど強い洗脳の力が働いていた。

耐性なんてあっても意味はないと思えるほどの力だったのに…

「待って…何でお兄ちゃんだけ洗脳受けてないの!？」

「ああ。あの人のためーとかそういうのは頭に直接叩き込まれたけどな…でも俺は誰か

の下に付くつもりないから意味なかったってことなんじゃねえのか？無理やり俺を従わせるくらいなら、まず俺を倒して敗北を刻ませてからじゃねーとな」

「ああうんそうだねお兄ちゃんなら余裕で下剋上とかしそうだね」

「さすがサトシね大好きよ!!」

『ファイア!』

「セレナさんはいつも通りだね!」

「ああ…流石ですサトシさん!」

『チル!』

「シルバーまでボケなくていいから!」

『グオオ…』

まあつまり、ピカチュウはお兄ちゃんに従ってるようなものだから洗脳を受けちゃったけど、お兄ちゃんを洗脳するにはまずバトルでちゃんと勝ってお兄ちゃんより実力が上だつてことを刻ませなきゃいけないってことかな。そうしないと…もしもお兄ちゃんが洗脳されても余裕でボスとか直接殴り込みに行きそうな感じがする。

強いトレーナーと戦ってバトルして勝ちたいって思うほどバトル狂だもんねお兄ちゃんは…。

「とにかく、今の光は洗脳の光ってことだよな？」

「ああ：しかもその方角がシロガネ山からだった」

「待ってサトシ。ということは…」

「ピカチュウが洗脳にかかったんだから：あいつらも：フシギダネ達もかかっている可能性が高い」

言われた言葉にギョツとした。

「いやいやそれヤバいを通り越してまずい!!だってお兄ちゃんのポケモンだよ!?!しかも絶対ミュウツーとかラティ兄妹とかレックウザもいるよね!?!そうなると伝説も洗脳を受けてるってことになるだろうし：それにお兄ちゃんのリザードンとかジユカインとかもいるってこと?!それ絶対にまずいから!!」

「いやジユカインならボールの中にあるぞ。あとピジョットとルチャブルとガブリアスとワルビアルな」

『ピイカツチュ』

「あ、でもリザードンはいないのね…うう…これ本当にヤバい状況だなあ…」
『グオオ』

「そうか？むしろリザードンが反抗期になった時のような状況だと思えば楽しいだろ。
また教育のし甲斐がある」

『ピ、ピカピカチュ…』

「それもそれでどうなのよ！」

『グオオオ…』

『ギャウ？』

「格好良いわサトシ！大好きよ！」

『ファイア！』

「セレナさん…」

『グオオ』

ため息をついた私に対して、リザードンが肩をポンツと叩いて励ましてくれることにちよつとだけ涙が出た。セレナさんとシルバーってなんか似てるどころがあるから、お兄ちゃんに対してのツツコミを期待するならヒビキしかいない。だから私が頑張らないと…。

そう思っていると、お兄ちゃんが楽しそうに笑いながらも、ジャケットの内側にいるモンスターボールを見せてきた。確かに6つ（一つはピカチュウ用だけど）あるのが確認できる。懐の一番左にある、小さくなっているボールから微かにジユカインがこちらをじつと見つめている様子がみれたため、洗脳もなく正常だということが分かった。それを見て、シルバーが首を傾げる。

「…ボールの中にいるポケモンは洗脳を受けないのでしょうか？」

「その可能性はあるな。だが、トレーナーが洗脳を受けている以上、無事な方のポケモンがそのまま正常でいる可能性は低い」

「私達みたいに、トレーナーが異常だと察知してポケモンが攻撃をしたとしても？」

「セレナ、洗脳を受けた連中は皆ただ一心に新生ロケット団の支えになるために働こうとするが、それ以外の感情や言動は変わらないんだ。素のままだと錯覚するぐらいにな」

『ピイカツチュウ！』

ピカチュウがうんうんとお兄ちゃんの肩で何度も頷いている。

もしもそうだとしたら、ボールの中に入っているポケモンはただトレーナーの夢が

ちよつと変わっただけで、いつも通りだと思ひ込み、そして普通に付き従つていくかも知れない。言動も表情も……そして性格でさえ同じなのだから。

でも、攻撃でどうにか洗脳から解放されるなら、こちら一帯に電撃か何かの攻撃をすれば皆もとに戻るかもしれないっていうのはやばいかな。

まあそれをするなら、まず新生ロケット団をどうにかすることが先かな。

「だから……ヒビキはあんなつたのか……」

「……大丈夫、シルバー？」

「ああ、大丈夫だヒナ。むしろあの脳内に花畑でも咲かせている馬鹿の目を覚まさせるためにも、余計に新生ロケット団をぶつ壊さなければと思ひ直したところだ」

『チルルウ』

「う、うん……そうだね。これは本気でどうにかしなきゃだよね……」

『グオオ……』

やる気満々なリザードンを見て、そしてちよつとだけ眠そうなミニルギアの頭を撫でる。ミニルギアはひんやりとしていてすべすべな肌のせいで、撫で心地が良い。目を閉じて何も言わずに撫でられているミニルギアの表情と。その感触に少しだけ心が落ち

着いた。

「…ねえサトシ、私マサラタウンに戻ってもいいかな？」

『フィア？』

「ああ、そうだな。母さんなら問題ないように思うが…ミツキが心配だ」

『ピイカ』

ボールからピジヨットを取り出したお兄ちゃんが、セレナさんをピジヨットの背に乗せるために手を掴み支える。ピジヨットに乗ったセレナさんの後ろに乗る形でお兄ちゃんとピカチュウも座り、こちらを見た。

「ヒナにシルバー。お前たちも来てくれ。今ここで別々に行動するのは危険だから」

『ピツカ！』

『ピジヨオ！』

「うんわかった。リザードンお願い！」

『グオオ！』

お兄ちゃんに賛同する形でリザードンの背に乗り、シルバーを見た。だがシルバーはチルタリスに乗らず、何故か首を傾けている。

「…ミツキとは誰だ？」

「あとで説明するよシルバー。私もミツキちゃんのことを心配だし…ほら、早くチルタリスの背に乗って行こう！」

「あ、ああ…」

『チル！』

ユウキ君とワカシャモちゃん

ホウエン地方のとある町のとある家。

その家のキッチンにて、炎が飛び交っていた。

ただし家に燃え移らないようちやんと調節されており、かつモモンケーキの表面を焼け焦がすように熱していく姿はまさしく新妻。アチャモたんだった時は可愛らしくて小悪魔だったけど、今は最上級の天使。たまに炎が壁を焦がすだなんてことあるけど、アチャモたんを貰った時に家の壁紙を全部炎ポケモン専用の防火材入りになったから炎上することはない。

むしろ俺にとつて壁をちよつとだけ焦がして『あ、やつちやつた…』というちよつびり反省した顔がまさしくキュート過ぎて心にくるね！ドジっ子可愛いよワカシャモちゃんまじワカシャモちゃん！！！！

『シャモ！』

「あああワカシャモちゃんマジ俺の嫁！いつもありがとうワカシャモちゃん!!」

『シャモシャモ！』

「うわあその笑顔良いね！さっそくネットに投稿しておくよ!!!」

写真を連打する俺の姿を慣れたように斜め四十五度で可愛らしく笑ってくれるワカシャモちゃんが本当に天使だ!!

しかもワカシャモちゃんが焼いてくれたモモンのケーキは本当に美味しい!!どうやら現在このハウエン地方のカイナシティのカイナ市場——つまり、シヨツピングモールにある場所で一時的にやっていたルカリオカフェの特番を見て、ポケモンでもお菓子を作れるんだとイメージーションが湧いたらしい。

ワカシャモちゃんも進化して手足が動かせるので、自分で好きなお菓子を作って食べたいという願いを叶えるためたくさん練習して作ったもんな。最初は失敗ばかりで黒焦げが多かったけど、今はおかわりしちゃうほど美味すぎるもんな。

流石はワカシャモちゃん！本当に俺の嫁になつてほしいぐらいだ！！

「ワカシャモちゃん。炎のジャグリングお願いしまーす！」
『シャモ！』

カメラを構え、動画を撮影する俺に対して自信満々にフツと笑つたワカシャモちゃんが、片手に大きな炎の玉を発生させる。そしてそれを二〜三個増やしていき、天井スレスレまで投げてはキャッチを繰り返す。まるで小さな炎の踊り子だ。

このジャグリングもお菓子の時と同じように失敗して天井に穴を開けるばかりか二階の床までぶち空けたことがあつたよな。それでしょぼくれてしばらく布団に引き籠つて本当に可愛かつた。精一杯慰めたけど、俺としてはどんなに失敗してもワカシャモちゃんと別れない限り絶望なんてないし、怒ることだつてしないんだから気にしなくてもいいのに……。でも、ちゃんと何度も練習してジャグリングを成功させたときは最上級の笑顔を見せて俺に抱きついてきたから一瞬へブンが見えた。俺本当にワカシャモちゃんを幸せにするつて覚悟を決めたぐらいだ。

「はああ…ワカシヤモちゃんマジ愛おしいよ…」

首に水玉模様の青色スカーフを巻いているから、とてもキュートで可愛い。フリフリがたっぷりはいったレースのエプロンも付けてジャグリングしてるから本当に可愛い。もう俺だけのワカシヤモちゃんだからネットに投稿したくないけど、全世界に自慢したい気持ちもあるから仕方ない。

たまにネットで「お前何でコーディネーターじゃねーの？」とか、「パフォーマンス力あるんだからデビューしちやいなYO!」とか意味わかんねえこと言われるけど、俺はこのままで十分だ!!!

———
ドタドタドタドタツツ

「いい加減にするかもユウキ君!!!!!!
!!!!!!」

『バシヤ!!!』

キツチンの机で先程撮っていた動画をパソコンで投稿していた時に来た邪魔者師匠。
俺はため息をついてハルカさんを見た。

「うるせーよハルカさん。つてか何がいい加減にするわけ？ちゃんとハルカさんの言った課題は完璧にこなしたんだから…逆に褒められてもいいはずだろ？」

「何が完璧にこなしたのよ！あなたのアチャモは進化したくないって願望がなかったから進化させてつて言ったけど…：…一歩も外に出ないで進化させるとは言つてないかも!!…：…というか、どうやって進化させたのよ？」

「別に進化する方法ならいっばいあるもんな。な、ワカシャモちゃん」
『シャモ』

ワカシャモがにつこりと笑つて冷蔵庫から取り出されたあのお菓子をさせる。

それを見た瞬間ハルカさんの顔が面白いほど変わった。この顔はたぶんハルカさん

のファンに見せたら「貴重な一面いただきました！」って言われるか、「ハルカさんがそんな顔するだなんて!? 僕もうファンやめます!!」って絶望するかのどちらかだな。

そう呑気に思っていたら、ハルカさんが肩を振るわせつつ少々低い声で言ってくる。

「ちよつと待つかも…何であなたの家にこんなに大量のふしぎなアメがあるの!? 私でもこんなに持ったことないかも!!!」

『バツシヤア!!』

「ネットって偉大ですよ。アチャモたんファンの皆さんにふしぎなアメの提供を呼び掛けたらもの見事にいっぱい集まりました。ちなみにバシヤーモに進化できるレベルであります」

『シヤモオ!』

「ネットなんてクソ食らえだわ!」

「ハルカさん今の言動絶対にファンの人に聞かせちゃ駄目ですよファンがいなくなりま
す」

「コーディネーターになろうとしないユウキ君に言われたくないかも!!!」

ネット文化万歳。何か困っていることがあったらすぐに助けてくれるフレンドに万歳。助け合い精神って本当に重要だよね!!

というか、貴重なメガストーンとかならまだしも…ふしぎなアメならばバトルリゾー
トのバトルハウスにて連戦連勝してるフレンドのトレーナーがいるらしく、そいつから
「そうかい…バトル嫌いなアチャモたんを進化させなければならぬんだね。正直、ア
チャモたんの成長のためにはならないが…分かったよ、手を貸そう」と言ってくれたこ
とによつて大量のふしぎなアメをゲットすることができたのだ。だから細かく言
えばバトル大好きなフレンドに万歳なのだ。

あ、今ワカシヤモちゃんが『フツツ、進化するならバトルしない方法を選んでくれた
マスターが大好きよ!それにこれが一番いいの!』と笑って言っているように感じて、
ちよつぴりドヤ顔したワカシヤモちゃんのことをカメラで何度も激写した。さつそく
カメラで投稿しなければ…!!

———と思っていたら、ハルカさんが俺の頭をギョツと掴んで真顔で言ってくる。

ワカシヤモちゃんは一声、面倒そうにため息をついた音が聞こえてきたと言うのに――
――貴重な一面を写真に撮ることができないだなんて全部ハルカさんのせいだ!!!

第四十二話く反撃への第一歩く

マサラタウンという町は、本当に自然が町を飲み込んでいるかと思えるような大自然が広がっている。だからこそ、常時何かのポケモンの鳴き声か気配を感じる事ができる賑やかな町でもあるのだ。

それに通常の町ならば、人に慣れていているポツポツ達が子供たちと触れ合い、たまに現れるニョロモたちと一緒に遊んだり、森の中で探検し迷って大自然の怖さを知ることができるのが当たり前かもしれない。

そして、ポケモンと触れ合えると言っても、子供たちはまず親が持っているポケモンとふれあい、どう接すればいいのかを学んでから野生のポケモンたちと関わるようになるのだが——このマサラタウンでは、自然と共存して生きているために、野生のポケモンと関われるのはトレーナーとしての資格を貰ったものか、オーキド博士によってポケモンに触れてもいいと許可を貰った時しかありえないと、ここ数年のうちにそう

考えられルールが定まってきた。だからこそ、幼い子供が野生のポケモンと一緒に遊べること自体本当に珍しいのだ。

なんせ自然が広すぎるからこそ、外に出て野生のポケモンたちと遊んで——下手したら一週間か二週間ほど行方不明になるといことはあり得るのだから。オーキド博士なんて自身の研究所にフィールドワークに行こうとして一か月間いなくなるとうことだってあるくらいである。そのためオーキド研究所の助手であるケンジさんがよく愚痴つたりしてシゲルさんをマサラタウンに連れ戻せないかと画策していたりするが、まあそれは割愛しよう。

だからこそ、幼い子供のうちに野生のポケモンと遭遇した時にどうやって対処していけばいいのかをちゃんと学ばないと、アーボックやスピアーに襲われて死ぬことになる。それほどまでもにも野生のポケモンと近くて、たくさんのポケモンと共に生きる街だと言うのに……。

何でこんなに静かなのだろうか。

「ああつそんな！」

マサラタウンの私達の実家の扉を開けて広がっていたのは、誰もいないもぬけの空な家であつた。

それにセレナさんが泣きそうな声を上げ、二階や部屋の奥を探し回っている。

ピカチュウも何度か鳴き声を上げながら庭の方を探し、お兄ちゃんも周りを見て——
——そして一度息をついてからセレナさん呼びかけた。

「セレナ」

「ねえ、いないよサトシ。あの子がどこにも…お義母さまもない。何で…」

「セレナ」

「お義母さまなら大丈夫だつて思つてたけど…でも、今ここに居ないつてことは…やっぱり…」

「セレナ！」

兄がセレナさんの両肩を掴み、額をコツンとぶつけて至近距離で言う。

「母さんが洗脳なんかには負けるような人じゃないだろ。それにミツキの傍にはちゃんとニャビーがいる。あの子ならミツキのことを必ず守ってくれる」

「…………でも、もしも洗脳を受けていたとしたら」

「洗脳を受けていたとしても…あのニャビーがミツキのことを放っておくわけないだろ。ずっとずっとあの子の傍で見守って来てたんだから」

「…うん」

「大丈夫だ。ミツキとニャビーを信じろ。それに母さんはこの俺を産んでくれた母親だぞ？母さんも…ミツキのことを守ってくれる」

「うん」

セレナさんを抱きしめ、慰めるように——いや、元気づけるようにいう兄の言葉に何も言えなくなる。

大丈夫。兄は母親似なのだから、洗脳の効果が効かない兄と同じように母も絶対に洗脳を受けてはいないはず。それにあのニャビーもいるんだから大丈夫。

兄の言葉に勇気づけられたセレナさんは、浮かべていた涙を拭って「分かった。私も

娘とニャビーを信じる。お義母さまのことも、ちゃんと信じるわ！」と自分に言い聞かせているかのように、宣言している。兄に言われても、やっぱり不安なんだろう。そして兄もそれを分かっているのだろう。セレナさんの頭を撫でて、大丈夫だと励ましていた。

そんな兄夫婦の会話に入れない私とシルバーは、とりあえずその場を離れて玄関で待つことにした。

「…ヒナ、ミヅキというのは誰なんだ？」

「私の姪っ子だよ」

「姪…はっ?! 姪だと!!」

「うん。まあ…いろいろと事情があるんだけどね。…私から見れば可愛い姪っ子だよ。ニャビー含めてね」

『ギャウ?』

首を傾けているミニルギアの頭を撫でながらも、空を見上げて思い出す。

何故そこにいたのか、何があつたのかはわからないが…シロガネ山にて段ボールに入られ、ニヤビーと一緒に捨てられていた子供がミツキであつた。それをヨーギラスの子供たちを連れていたバンギラスが見つ、兄の元へ連れて帰つたのがきっかけだつたのだ。

まあその後ニヤビーがミツキの傍から決して離れなかつたり、ニヤビーの出身地であるアローラ地方に連絡をとつて、ワケありの子供たちを守り育成する機関に預けようとしたらセレナさんの手を離そうとしないミツキとアローラ地方から来た職員に向かつて威嚇をし炎を放つニヤビーがいたりといろいろと大変な騒動があつたけれど——

——それらがきつかけで、今こうして私たちと家族になつたんだ。

大丈夫。ミツキはお兄ちゃんのだイケンキに全力の高い高いをやられて雲の上まで空を飛んでも泣かずにむしろ笑っているぐらい肝が据わつてる赤ちゃんだから大丈夫。その後、ブチギレたニヤビーとフシギダネによつて制裁を下されたダイケンキなバトルがあつても、うたた寝をするような赤ちゃんだから大丈夫。

うん、大丈夫だよね…？

「…俺にはよく分からないが、あのサトシさんの娘ということならば…何も問題はない

だろう。それにヒビキから聞いたが…お前の母親であるハナコさんも、かなり凄い人だと言おうじゃないか。なら洗脳なんかには負けず、反撃すると思うぞ。だからそんな泣きそうな顔をするな」

「…うん、そうだね。そうだよね…大丈夫」

「ああそうだ。むしろ不安になるよりも、あの馬鹿なことをしでかしたヒビキをぶん殴る方法でも考えておけ」

「あははっ…分かったよ」

『ギャウ！』

無表情で愛想のない顔だけど、ちゃんと気遣ってくれているというのは伝わった。だから、もう不安になるのは止めよう。お兄ちゃんだって大丈夫だって言ってるんだから、大丈夫。

むしろこれからのことを考えないと。

.....

いろいろと落ち着いたセレナさんが私とシルバーを玄関まで迎えに来てくれて、ダイニングの方で椅子に座り、話し合う。

「この分だと…マサラタウンもやられてると見ていいよね…」

「ああ。野生のポケモンの音も、オーキド研究所から聞こえてくるはずのケンジのマリリのハイドロポンプでさえないんだから…全部やられたと見ていい」

「そっか…ん？ねえ、新生ロケット団ってことは、本来の…つまり、シルバーのお父さんが経営してるロケット団は大丈夫なの？」

「父上ならばイツシュ地方に向いているから、洗脳の件は平気だと見ていいだろう。ロケット団の運営は父上とサトシさんがあってこそだからな…まあ、不安な部分はないとは言い難いが…」

複雑そうな顔で舌打ちをしたシルバーに対して、兄が小さく頷く。

「そうだな。それもあるが……ヒナ、お前ヤマブキシテイでカガリつて名前を出したよな？」

「え？う、うん。そうだけど……」

「何処で会った？」

「上空にある大きな城で会ったよ。でも、洗脳されてるみたいな感じで、ずっと《あの人のため》って眩いてた」

「ヒナちゃん。上空にある大きな城って……？」

私はずっと抱きしめ、半分眠った状態になっているミニルギアに会った経緯と、大きな城に行つてからカガリによつて城から落下し、リザードンによつて無事に済んだ事情を全て説明する。

その話によつて、セレナさんが真剣な顔で頷き、兄は難しそうな表情を浮かべ、そしてシルバーはちよつとだけ驚いたような顔をしてから苛立ちの舌打ちをまた一つ零した。

「大きな城？洗脳の効果がある機械が置いてある？何を考えてるんだあのコソ泥の新生ロケツト団は…!!」

「お、落ち着いてシルバー！」

「ああそうだ、落ち着け。…でもまあこれでようやくシロガネ山からの洗脳の光が何で来たのが理解できたな」

「ええ、そうね」

「へ？どういうこと？」

兄とセレナさんがお互いの顔を見合わせて頷いた様子に顔を傾けた。すると兄は簡単に説明をしてくれる。

「俺とセレナが山から下りてヤマブキシテイにいた理由は——ぶつちやけカガリが関わっているんだよ」

「何で!？」

「カガリちゃんかね。マツブサさんの大事なキーストーンを新生ロケット団に奪われたからって理由で私たちと手を組んでくれたの。わざわざ新生ロケット団のアジトにまで乗り込んでくれて…それで、何かを盗み出そうとしてくれるって情報を教えてくれたんだけど…」

「カガリが既に洗脳されていて、かつその情報自体が囷だったと言うのなら、シロガネ山に連中が来たことに納得がいくな」

「それはつまり、サトシさん達を山から下ろすという名目が必要だったからですか?」

「そうだ。…シロガネ山はポケモンたちにとつての安息の場でもあり、優れたトレナーが鍛えるための場所でもあり…そして、カントー地方とジョウト地方を結ぶ山なんだよ。そこを一気に奴らに奪われたとしたら?」

「……まさか」

「ああ。カントー地方だけじゃなく、ジョウト地方もヤバいってことになるな……まったく、ある意味してやられたとでも言うべきか…」

「サトシ…何か、楽しそうな顔してる?」

セレナさんの言葉を聞いて私とシルバーは兄の顔を見た。確かに兄はちよつとだけ
楽しそうに笑っていたのだ。

「不謹慎で悪いが…新生ロケット団をどうぶつ潰すのか考えるのが楽しいんだ。新生ロ
ケット団がやってきた所業には目を瞑っていられない状況だけど…今まで強くなつて
きた友達や俺の仲間、そしてたくさんの人間たちが敵になるんだから。正直、バトルだ
けでも楽しめるんじゃないかねーかなって思ってたな」

「はあああツ!!?!」

戦闘狂かこの兄は!?

ううん訂正しよわずつと前から戦闘狂だった!!

それにしても不謹慎だよ!

大丈夫だと信じたいけどミツキちゃんの件もあるんだからさ!!!

「あのねお兄ちゃん…皆だよ！みんな洗脳されたんだよ！？カスミさん達も、フシギダネ達も…それに、伝説のポケモンであるミュウツーたちも！…お兄ちゃんは、皆が…新生ロケット団で何か嫌なことされたり…傷ついてたりするんじゃないかって思わないの!？」

「知ってるか、ヒナ」

「え？」

「俺の友達も、俺のポケモンも…皆、癖が強いんだぜ？癖というか、全員ちゃんとした信念を持って生きてるんだ。だからこそ、例え洗脳を受けていたとしても——プライドがボロボロになるような指令を受けたとして、素直に頷くとは限らない」

「でも…あのカスミさんがジムを休業中にしてるって時点でヤバいんじゃない？もしもいろいろとやりたくないことでもやらされるような強い洗脳を受けたりしたら…」

「そんなことになる前に、俺達が助けに行くんだよ。な？ピカチュウ」

『ピイカツチュウ！』

何故こんなにも兄が自信満々に言うのかが理解できなかつた。もちろんそれはシルバーもだ。

でも、セレナさんはちょっとだけ苦笑して、それでも兄の言葉にしっかりと頷いているのを見て——私達にはない大きな経験を持つ兄だからこそ、根拠のない自信だとしても、大丈夫だと思いきることのできるのかなと思えた。

ポケモンとの絆を深く持っている兄だからこそ、いろんな地方を旅して様々なトラブルに立ち向かってきた兄だからこそ——この世界で最強と言われているポケモンマスターな兄だからこそ、根拠がなくなつたって信じ切ることができるんだと思う。ちよつと不安だけど、この兄がいるなら大丈夫なのかな。

だからこそ、これからぶつ潰しに行くであろう新生ロケット団に軽く同情してしまつた。それはシルバーも同じなのだろう。しっかりと兄の方を見て頷いてから、口を開いて言う。

「……では、これからどうしますか？ シロガネ山の拠点を奪われたと言うことでしたら、まずはシロガネ山へ向かいますか？」

「いや、それよりもまずはハナダシティに向かうぞ」

「ハナダシティ？」

「洗脳は機械でできてるだろ？ だから、機械には機械で対抗してやろうぜ」

兄はピカチュウを小さく撫でてから、親指を下に向けてニヤリと笑った。

第四十三話く別に嫌いなんかじゃないんだからね!く

ハナダシティより少々町から外れた場所にある一軒の家。野生が出やすそうな場所だが、その家に住む人間は野生のポケモンとも何とか友好的に関わってきたため、今までトラブルなんかは起きずにいた。

遅刻したり忘れ物をしてわざわざ戻る羽目になったりといろいろとその人間のせいでトラブルが起きると言うことはあったが、野生のポケモンとのトラブルなんて起こしたことはなかったのだ。

だからこそ、イーブイは目を白黒させていた。ボールの中で眠っていたところ、人間がイーブイをボールから出して、なんとみずのいしをイーブイに使おうとしているのが見えたのだ。

『ブ、ブイ…!?!』

イーブイはまだ進化をするつもりはない。というか、何に進化をするのか選ぶ段階だからゆっくりと考えようと思っていたのだ。

その人間————マサキがイーブイの願う進化をさせてくれるかどうかはわからないが。それでも、進化を強要するということは今までしなかつたはずなのに。

『ブイ…ブイ!!』

「大丈夫やでイーブイ。身体の花抜いて…すぐ終わらせたるから…」

『ブイ!!?』

イーブイは部屋の奥の机の下に潜り込み、隠れる。身体の花を大きく見せ、威嚇をして『こつち来んな!』とばかりに何度も鳴き声上げる。

対するマサキは右手にみずのいしを持ち、左手はイーブイを狙って手を伸ばす。イーブイが思いつきり噛みついたとしても、右手にみずのいしがある限り何かのきつかけで石が当たって進化をしてしまうかもしれないとイーブイは攻撃できずにいた。

伸ばされた手が目の前に広がる。

もう駄目だと、イーブイが目を閉じたその時だった。

「10まんボルト」

『ピイカツチユウウ!!!』

「うぎやああああアツツ!!!」

マサキの悲鳴と、見知らぬ男とピカチユウの声。目を開けて見ると、マサキが黒焦げになっている様子が見える。そしてこちらを心配そうに見つめている少女がいる。前に助けてくれたあの女が、こちらに手を伸ばして頭を撫でてきた。

「イーブイ、大丈夫?」

『……………ブイイイイツ!!!』

——助けに来るのがおっそいんだよこの馬鹿!!!

イーブイは頭を撫でてきたヒナの手に向かって、八つ当たり気味に噛みついた。当然その結果ヒナから痛みによる悲鳴を上げられたのが聞こえてきたけれど、イーブイは膨らんでいた毛がもとに戻るぐらいには安堵していたのも気付いていた。

.....

マサキさんがいるため、伝説のポケモンと言われているミノルギアにはモンスターボールに入ってももらい、マサキさん家を訪問した私達。

まあやつぱりマサキさんは洗脳にかかっていて、ものすごく大変な状況にあったのは理解できたけど、お兄ちゃんたちがいるから何も問題はなかった。

うん、一応…。

「ヒナちゃんがポケモンに懐かれないなんて珍しいね？」

「あはは…なんか私との出会いがイーブイにとって最悪らしくて…」

セレナさんが驚いたような声を上げたことに對して乾いた笑みを浮かべた。

でも、いまだにガジガジと嘯まれている手は最初に頭に嘯みつかれた時と違って血が滲みそうになるほどの力強いものではない。

このイーブイに嫌われるのはなんでなんだろうかとちよつと疑問に思うけど、嘯みつきが手加減されているイーブイに苦笑するだけで済んだ。

その間にも、兄がマサキさんの胸ぐらを掴んでぶんぶんと揺さぶっており、シルバーがさつきと目覚めるとばかりにマサキさんにだけアリゲイツによるみずでつぼう発射が行われているのが見えた。マサキさん大丈夫なのかな…？

「ブッフオ!ぐっ…何やねん!!!」

「何やねんじゃねーよ」

「いった!!!」

「それで?洗脳は解けたみたいだな」

「…洗脳?」

マサキさんがパチパチと目を瞬き、周りを確認する。そして地面に転がっているみずのいしを見て、引き攣った笑みを兄に向けた。

「ど、どういう…」

「マサキさん。あなたは新生ロケット団に洗脳されていたんですよ」

兄とシルバーの説明により、自分が何をしたのかを察したらしいマサキさんが、顔を青くしながらも私の手を噛んでいるイーブイに近づいてその頭を撫で、「すまんイーブイ…」と言った。その言葉にイーブイがようやく噛んでいた手から離し、顔をフィツと逸らしつつ『ブイ…』と許してくれたようだった。

「そんで？俺に何をさせるつもりや？」

「よく分かったな」

「当たり前や。一体何年の付き合いがあると思つとるん？」

「そうだな…とりあえず、機械を作ってくれないか？」

「機械い？」

「ああ。洗脳を洗脳で上書きできるようなやつ」

ニヤリと笑った兄の顔をじっと見て、やがてマサキさんもニヤリと悪い笑みを浮かべる。何が伝わったのかはわからないが、マサキさんとセレナさんはちゃんと理解しているらしい。

「なるほどな…そら、俺にしかできんつちゅーわけや」

「そうだ。頼んだぞ」

「任せときー!」

早速とばかりに機械の方へ向かうマサキさんに対して、セレナさんが話しかける。

「モンスターボールに入れているポケモンは洗脳が効かないわ。だからボールの中にポケモンを入れて…何かあつたらすぐに攻撃して洗脳を解除してもらえるようにね?」

「おお! せやつたらブラッキーに任せとくわ」

棚の上にあるモンスターボールの中にあるダークボールを取り出したマサキさん。その中には自信満々な顔で頷いたブラッキーの姿が微かに映っており、とりあえずまた洗脳の効果が出たとしても大丈夫だと悟った。

それを見て笑った兄が、隣にいたシルバーの頭を撫でつつも口を開いて言う。

「おし。んじやあさつさと乗り込むか——」

『———ブイ!!』

玄関を防ぐように、イーブイが立ちはだかった。

「どうしたのイーブイ?」

『ブイブイブイ!!ブイ!!』

「…協力したいんやろ?この子は負けず嫌いやから…助けられた恩を返したいんや」

『ブイイ!』

「いだだだッ!!な、何?!」

「あはは。気に入られた見たいやな。ならそのイーブイはヒナちゃんに預けたるわ。大事に育ててくれへんか?」

「え?……えええ!!!」

いや急に何でそんな話になってるの!?

というかこんなにも腕を噛みつかれてるのに気に入ってるって意味が分からないし、全然気に入られたような顔してないよ!イーブイにあるまじき物凄い顔して噛みついて来てるよ!!

「普通はお兄ちゃんとかなんじゃ——」

「あ、せや!ヒナちゃんがイーブイ貰うんやったら、君もやらなあかんわな!」

「はっ?」

「ああ、マサキ。それだったらお前が持つてるあれも渡してやってくれ」

「おお!ほんならこれとこれ、貰ってくれ。シルバー君やったら、ちゃんと大事に育ててくれるやろうし…」

シルバーが渡されたのは、二つの丸いモノ。一つはモンスターボールであり、その中には小さなイーブイが眠るように目をパチパチさせているのが見えた。

「良いんですか…?」

「ええで！どっちみちヒナちゃんも君と…あとヒビキ君には渡すつもりやったからな！」

なんとというか…こんなにもイーブイを渡して大丈夫なのかと言いたい。

でも、マサキさんもイーブイも何も問題はないように見えた。私の腕に噛みついているイーブイはともかく、シルバーがモンスターボールから取り出したイーブイは眠そうに目を前足でこすりながらも、シルバーに近づいて『ぶいっきゅ』と鳴き声を上げ、足にすり寄ってきたのだから。

それを見てシルバーはフツと笑い、「宜しくな、イーブイ」とその頭を撫でた。頭を撫でられたイーブイは気持ちよさそうに『ぶいっ』と鳴き声を上げて、大きなあくびを溢していた。

「とうかか、お前…まだイーブイをいろんなトレーナーにばらまいてんのかよ」

『ピカピカ?』

「ちやうわ! 変なトレーナーには渡さへんよう選んでるんやから、ばらまいてないで!!
可愛いイーブイには旅させる言うやろ!」

「いや言わねーよ」

『ピイカツチュ…』

「でも良かったね。ヒナちゃんにシルバー君」

「はい。ちゃんと大事に育てます」

『ぶい〜』

「わ、私も…:とりあえずこれ以上嫌われないように頑張ります」

『ブイ!!』

腕をガシガシと噛んできているイーブイの頭を撫でたら、イーブイの力がちよつとだけなくなり、仕方ないなとばかりに噛むのを止めてくれた。その様子を見て苦笑し、このイーブイは素直じゃないのかなと思う。最初に出会った時からずっと不機嫌だったし、反抗期だった頃の兄のリザードンみたいな感じなのだろうか。でも、一応私の手持

ちになるといふ言葉には頷いているみたいだし、兄もセレナさんも険しい顔で否定なんかせず、大丈夫だと頷いてくれたから信じよう。

手持ちになったからには、イーブイがちゃんと望むような強さを身に付けて育てていけないとね。

「よろしくね。イーブイ」

『……………ブイ』

「……………それで？この石は何ですか？」

シルバーの問いかける言葉に私は思わず顔を見上げた。シルバーが持っている石は、何か見たことのあるもので…。

「シルバー。それはチルタリスナイトっていうメガシンカ用の石なんだ」

「メガシンカ…前に文献で読んだことがあります」

「ああ。…だが、メガシンカするにはちゃんとしたキーストーンが必要だし、ある程度の

修行だつて必要だ」

『ピイカツチュ』

「……はい」

シルバーが力強く頷いた光景にため息をついた。これでヒビキかクリスが持つことになつたらなんか大変なことになる気がする。

マサキさんが何で持っているのかはわからないけれど、兄がその石を見て驚いたようには見えなかつたため、マサキさんが所持しているのは知っていたのだろう。セレナさんも納得したような顔をしていることだし。そもそもさつき兄が言った「あれも渡してくれ」って言葉はつまり、メガストーンを渡してくれってことなのかな。

「トレーナーとして旅に出ている以上、いつかはメガシンカできるようになるかもしれないから、持っていて損はないぞ。な、ヒナ?」

「あのね…私はキーストーンを貰ったとしてもまだ使うつもりないからね!お兄ちゃんから貰ったものは返そうと思つても返せないって諦めてたし!」

「何だヒナ。お前は持っていたのか?」

「う、うん…リザードナイトをね…」

最初にハナダシティに行こうとした時に兄によってプレゼントされたもの。それがリザードナイトYであった。たぶんもう片方のはリザードナイトXの方かなと思う。でも、ポケモンマスターである兄から貰ったものだからこそ、周りでメガシンカするよいうなトレーナーに会うまでは絶対に使わないと決めていた。メガシンカなんてまだまだ貴重なものなのだから、使う人間は限りあるというのに…ポケモンマスターの妹だから貰えるんだという反応を周りから貰いたくはなかった。これ以上の特別は必要なかった。私は私として旅に出ているからこそ、シルバーやヒビキがメガシンカの道具を手に入れたらって考えていたんだ。

一応貰ったものだけれど、今は持たされたとしても使うつもりがなかったからこそ、リュックの奥底に入れておいたと言うのに…。

だが、シルバーが呆れたような顔で私に向かって言う。

「何故もらったものを使おうとしないんだ？」

「え?」

「バトルをして、必要ならば使うのが戦略というものだろう。ヒナ、お前はバトル相手に対して侮辱をする気か?」

「う、ううん…侮辱なんてしない。でも、私なんかが持つていいもんじゃないから…」
「だが、メガシンカの石を貰ってもなお、使わないと言うことはそういうことだ。ヒナ、相手に対して同情するな。ポケモンマスターの妹だからと、謙遜するな。貴様は、他の人間が持つていない物だからと言ってひけらかすような性格じゃないだろう? 貰ったものはバトルに勝つために最大限に使ってこそ、トレーナーというものだ。それをちゃんと理解しろ、ヒナ」

シルバーの言葉が心の中に浸透する。

私はポケモンマスターの妹だから、メガシンカの石を貰ってもあまり嬉しくはなかった。リュックの奥底にしまつて、絶対に使わないって思っていた。

でもシルバーはそれは違うと私に教えてくれる。そんなのはバトル相手に対して侮辱しているのだと言ってくれる。

強くなるためにたくさんの知識を持つているシルバーだからこそ、その説教は何より

も重いものだった。

ふと、兄の方を見てみた。兄は真剣な顔で私を見ていて、シルバーの言葉に沈黙で返していた。だからこそ、リザードナイトをあげた意味がちよつとだけ分かったような気がする。

リザードナイトを使おうとしない私は：バトル相手だけでなく、兄に対しても侮辱をしていたのだろう。貰ったものを使わない理由が、ただポケモンマスターの妹だからという理由だったのだから…。

私の懐のボールがカタカタと揺れている。そのモンスターボールを全て撫でてから、シルバーに正面から向き合った。

「……………うん。ごめんシルバー…：それにお兄ちゃんも、ごめんなさい」

「フンっ。分かればいいんだ分かれば」

「いや。気にしてねーよ。どのみちまだ石は使えねーし…：それに、いつか使う時が来るだろうからな」

『ピイカツチュ』

た。
シルバーが顔を背け、兄とピカチュウが笑った。セレナさんが私の背中を叩いてくれ

私はまだ、トレーナーにちゃんとなれていないような気がする。

「もつともつと…頑張らないと…」

『……ブイ』

珍しくイーブイが励ますかのように、私の腕を小さく舐めた。

第四十四話くその頃、ある悪党たちはく

カツンカツン、と音が鳴り響く。

その音は、奇妙なほど静かな廊下から部屋に入ってきたために鳴り止んだ。

「おやおや。生氣のない顔をして今にも死にそうですねえ」

「……誰だ」

「ああ、失敬……私はただの研究者ですよ。そしてしがたい評論家でもあります」

「……で、俺はその助手ってわけだ」

助手には見覚えがあつた。見覚えというよりも、自身の夢を叩き潰し、あの伝説ポケモンと呼ばれたギラティナによつて作り上げようとしていた宇宙をかき消されたのだから。

そんな憎つくきポケモンマスターに似た顔でこちらに手を振る姿に思わず眉がひそ

められる。だが研究者と名乗った男が口を開いた。

「ああ、彼はあのサトシくんに似ていますが、ただの助手でありそっくりさんなだけですから気にしないでください。まあ、置物と思えば結構ですよ」

「うわ、ひつでえ！」

「……それで、何の用だ」

見覚えのない姿と、あの新生ロケット団が本来着ていなければならぬ服を着ていない様子から、彼らは連中の客か、不法侵入かのどちらかだと推測した。

だが、廊下からこちらの部屋に入って来る際に見えた廊下の光景は、ロケット団の下っ端たちが眠らされ倒れている光景だったため、彼らは不法侵入で間違いないだろうとも思う。そんな連中がわざわざこちらに来たんだ。何が目的だ。

そう思っていると、眼鏡をかけた男がにこりと愛想笑いを浮かべた。

「あなたは宇宙を創りだしたかったんでしょう？ それも、新世界を」

「……………」

「ですが、このシロガネ山にはあなたが望んでいた伝説ポケモンであるディアルガとパールキアはいなかった。もちろん、ギラティナとアルセウスも…ですが…」

確かに望んではいた。

一応はやるべき目的は果たしたが、何も新生ロケット団の連中に良いように使われるつもりはなかったのだ。だからこそ、虎視眈々と狙ってはいたが、目的のポケモンを捕まえ、もう一度自身の夢に挑戦すると言う目的は果たされることがなかった。その理由を、この男は知っていた。それに警戒の色を示す。

「私たちと手を組みませんか？」

「何…？」

急な問いかけに驚くが、男は想定通りだと眼鏡をかけ直した。

「カントー地方を制圧し、次にジョウト地方を全てこの手に収めてやろうという底深い欲望はとて心地が良い。ですが、そのやり方は優れませんね。たかが洗脳でポケモン

と人間との絆が失われるわけではないと言うのに……」

「……」

「洗脳というのは、欲望だけで成功させるものじゃないですよ。ちゃんとその者がなりたいたいと思える自我を解放させて、私たちのやりたいことと洗脳される側のやりたいこと
の方向を一致させないとね」

「んー？それって難しくねーか？」

「君は黙ってなさい」

「うえー……はいはい……」

サトシに似た少年が嫌そうな顔で舌を出して、男からプイツと顔を背ける。そして男は再び問いかけた。

「私は、サトシ君の限界というものを知りたい。彼に負けがあるのかどうかをちゃんと見てみたい。調べてみたいんですよ。あなたは……新世界を望むのでしょうか？」

「……ああ」

「ならば、手を組みましょうか。あなたが望むのは新世界……ならば、新世界を作り出す可能性の高いサトシ君に関わりたい私と共に————新生ロケット団に新しい脚本を

書き換えてやりましょう」

その言葉は虚言に等しいものだと思えたが。男は本当にそれを叶えてやろうという意思があつた。

それに、確かにあのサトシを使つて新世界が開けると言う可能性は十分あると納得できた。伝説ポケモンであるディアルガやパルキアに対して拳ひとつで黙らせたあの男なら——あのサトシを使つて、新世界が築けるといふのなら。

「……夢が、叶うのなら……手を貸そう」

新生ロケット団への信頼というのは元からない。もちろん、この男に対してもない。だが、目の前にいる男もこちらに対して同じ思いを抱いているのだろう。利用し利用される関係だが、野望が叶うのなら悪くはない。だが、素直に利用されるつもりはない。男は微笑み、そして優雅に口を開く。

「ああ、ちゃんとした自己紹介がまだでしたね。私はアクロマ……そしてこっちの助手は

クロですよ」

「…そうか。私はアカギだ」

.....

「お久しぶりです。ロケット団…いえ、ロケット・コンツェルンの会長、サカキ様」

イツシユ地方のとある場所にて、黒服軍団に囲まれている一人の男がいた。本来ならば男…つまり、サカキには数人の部下と共にイツシユ地方で商談をし終え、カントー地方へ戻るはずだった。だが戻る途中車を走らせていたのだが、その車にぶつかるところでゴローニヤが複数襲いかかり、また車を止めて何があったのかと部下たちが出て行けば、突如現れた黒服の男たちによって昏倒され、ゴルバットやラッタで逃げようとしたら襲うとでも言いたげにこちらを脅していたのだ。野次馬もいない静かな道に車を走らせたのが悪かったのか、それともそれらも全て連中の計算通りなのか。

サカキは連中に向かって静かに威嚇している自身の手持ちであるペルシアンを落
着かせながらも、帽子を脱いで目の前にいる以前の部下——アポロを見た。

「何の用だ」

『ニヤツ』

「つれないですね。これでも…あなたのことをまだ、尊敬していると言うのに…」

アポロが指をパチンツと鳴らすと、どこからともなく出てきたポケモンが両手にある
大きなリングを解放し、扉を作り上げた。

そのポケモンをよく見れば、ある種の珍しいポケモンと呼ばれているフーパだと理解
する。

アポロが解放された扉を指差し、にっこりと笑った。

「さあ、行きましようか」

こちらには拒否権なんて何もない。それを理解したサカキがペルシアンを従えて扉

の先へ潜り抜けた。

——そこにあつたのは、ある意味想像していない光景だった。

「どうですか？いい光景でしょう!？」

「……………」

『ニヤア…』

伝説と呼ばれているポケモンたちが、何かの大きなカプセルに入れられ眠りについている。その頭には機械がつけられており、近くにあるパソコンからデータが記載されていく。

その中央には、以前あのサトシと出会う前に行った実験で出会った、ミュウツーがいた。

「ふふふ…ここには、あなたが築いた悪しき遺産が眠っている！ですが、あなたが従えきれなかったミュウツーを私が洗脳することに成功をした！他の伝説ポケモンも、そして熟練たるトレーナーやポケモンたちでさえ、操ることに成功しましたよ！」

あははははっ！、と両腕を広げて笑い声を上げるアポロに、ペルシアン髪の毛が逆立つ。これが、私の残してしまった悪しき遺産。アポロを含めて、自分が築き上げた悪を取り払い、なかったことにした結果がこれなのか。

サカキは心の中で苛立ちと自己嫌悪をもってアポロを見つめていた。表面は無表情かつ何も感情を見せようとしないほど冷静であつたが、心の中は燃え上がっていた。

「どうですか？あなたが出来なかつた悪を、私たちはやり遂げた。これを全て、あなたに見せたかつた」

「…ほお」

「カントー地方は、もはやこの手にあると言つていい！どんな悪事しても、もう許されるよう洗脳を施したんですよ!?!…だから、もう一度一緒にやり直しませんか、ボス」

手を伸ばし、まるで迷子の子供かというかのようにこちらを泣きそうな目でじつと見つめるアポロ。

サカキはその手を振り払った。

「断る」

「なっ……何故ですか!?今や新生ロケット団には…カントー地方を制圧したと言っているほどこちらの手の内にあります。そして伝説のポケモンでさえ、私たちのものだというのに…!!」

「サトシはどうした?」

「え」

「あのポケモンマスターを洗脳下に置かなければ、私は動くことはない。…いや、ポケモンマスターが洗脳されたとしても、今の私は動くことなんてするわけないだろうな」

「な、何故っ!!?」

ギョツとし、目を向いたアポロに対して、サカキは冷静に話し始める。

「あのポケモンマスターを甘く見るな。例え世界の全てを洗脳下に置いたとしても、ポケモンマスターがいる限りお前たちに牙を向き、襲いかかって来るに違いない。もし洗脳に成功したとしても…奴の上に立つ限り、攻撃をするだろう。あいつはそういう奴だ」

「……ふん。ですが!こつちにはもうシロガネ山という拠点を洗脳下に置いたんです

よ!?あのポケモンマスターの…手持ちのポケモンたちでさえ、洗脳することに成功した！あのポケモンたちとポケモンマスターをぶつけ合えば…」

「そういうことをほざいている時点で、もはや貴様らは敗北に等しいと言うものだ」
「なっ?!」

「それほどまでに、あのサトシに勝つことは難しい。あいつは、常に上に立ち続けるか…上にいる奴らに挑戦し、勝つてみせようとするチャレンジャーな性格をしているからな」

サカキはため息をついて、そして自身の思いを打ち明けた。

「私はポケモンを金儲けの道具として扱ってきた過去がある。貴重なポケモン。貴重な物…すべてを金に換えてきた。だがそれだけならば誰にでもできるつまらないモノだろう?それを全てあのポケモンマスターが…サトシが変えてくれた」

「……ど、どういこう…?」

「型に当てはめられるのがポケモンというわけでない。そして、洗脳ですべてを押し付けるものでもない。世界というのはまさしく幅広く、無限大に可能性が広がっているも

のだ。たかが貴重なポケモン、たかが貴重な物…そんなもの、別地方に行けば普通のポケモンや物と変わらない。だからこそ、今までの常識を塗り替えてできたものこそ新しい価値がある。ポケモンに可能性があると証明されている今、金儲けというのは、やり方次第で工夫できるものだ」

サカキの言っている言葉はまさしく今までと変わらないもの。だが、その方向性を別に変えて行動していると言うもの。サトシに出会って、世界の広さを知った。

もはや人の親という立場に立つてなお、世界にはまだまだ可能性があるのでということを知った。

だからこそ、サカキは狭く苦しい世の中で生きていくつもりはなかった。型のはまらないトレーナーであるサトシに出会ったからこそ、可能性の幅を見出し、新しいものの価値というものを知ることができた。その上で、今のサカキがいる。

それを、アポロは苦い顔で見つめていた。

「……ふん。やはり…変わりましたねあなたは…本当に、失望しました」

「何とでも言うがいい。私は世界の広さをこの目で見てきた。だからこそ、変わったのだ」

『ニヤウ!』

ペルシアンが誇らしげな顔でサカキの足もとにすり寄ってきた。そんなペルシアンの頭を撫でながらも、アポロを見つめる。

「…サトシがいる限り、貴様らが負けることは確実だろう。以前の私の部下として忠告しておくぞ。…これ以上の悪事は、やめておけ」

「……無駄ですよ。私達に何を言っても止まれない!もう、取り返しのつかない位置まできているんですからね……!」

両手を広げたアポロが、泣きそうな顔で微笑んだ。

「サカキ様……いえ、サカキ。あなたには我々の野望を見届けてもらいます。私と同じ視線で、すべてを見てもらう!!」

反論は聞かないとばかりに、サカキとペルシアンが黒服の男たちに取り押さえられる。

ペルシアンはその襲撃に何度か抵抗するが————対してサカキはただ流れるがままに目を瞑り、自身の息子の身を案じた。